

と珠は云へり。
 ①非活路。「又死路に非ず、なんぢや」と珠はいへり。
 ②霜空月窟。珠云く、「汝よく合點したか、是の如く脱體見成、向上の行李の端的底ぢや。」
 ③文質彬彬。名を打す、彬々はなほ班々の如し、物相雜つて、適ひ均しき貌、生死の大事を明めたる人。
 ④特行獨立。前語底の君子は依倚する所なし。
 ⑤一大詮註。此の兩句は碧岩第二則の垂示の語、今藏主の縁を取る、言ふは特行底の道理、たとひ藏教も詮註し及さずとなり。
 ⑥火就燥水就濕。火の縁を取る、今言ふ意は物各歸就する所なり、その理強ふべからず、故に死に歸するも亦此の如きなり。珠云く、「その端的はどうかや。」
 ⑦管側、野外。珠云く、「文彬の火葬ぢや、ちらり頭をてんずれば、外は春風が刀の如しぢや、這の温

拵門中に入り来れば、天眞任運の境界で、別の道理なきなり。」
 ①跛脚。跛上座。跛脚は表號なり、百丈清規に「思慮頓盡、起骨入塔の佛事は、頭首の首座を請はして之よ爲す。」
 ②碓斗、行履。碓は特立のこと斗は峻立のこと、又碓斗といふ。負載なり、禪和とは禪和尚を略して云ふ、行履は平生の動作を云ふ、尋常人と別格なり、各は格のあやまり乎。
 ③高脚。此れは跛脚の號を述ぶ東管、轉處。東に見西に見、しかしながら向上の行李を合點してをるに依りて、法に於て脱洒自在。興難過。歸興とめにくい、ねはん路上出喪。
 ④雲山。歎は徐なり、そろそろと、雲山は靈隱なり、師、靈隱の立僧寮に在るときなり、興難過より以下は、起靈の端的なり、路滑は靈隱山は、路がすべつてわる

いほどにと云ふ。
 ①起骨。入塔の佛事なり。
 ②萬里見雲山。時に東谷冷泉に至たり、行狀に見ゆ、雲上座、遠方より來つて參見するなり。
 ③靈成遺一喝。よくきたとも云はず、百丈再參の語を見せしむゆゑ。
 ④生死、一交。言ふ意は一回交參の端的、生死の關を打破遺透するなり、今生死を脱して涅槃に歸する故に。交は、忠曰くけつまづきこける」なり。
 ⑤火冷雲寒、云云。火冷は起骨故に秋のことなれば桂子香の火も自ら冷なり、脚頭到るところ天地寬しと、今送りて塔所に至る故に。
 ⑥蝦過了也。珠云く、「蝦は蝦に作るべし、活火に入れてやきぬいたなり、火浴なり。」
 ⑦鏗然有聲。舍利をいふ。今は靈骨入塔の故なり、七度やきたひぬいてきはればかんくになる、金石有聲ぢや。

集、何須九變而成。收拾歸何處、數峯雲外青。

善牧上座起龜

① 善牧上座起龜。善牧上座の起龜の事なり。
 ② 牧得純。難拘束。拽脱鼻繩。東觸西觸。倒拈蘆管逆風吹。雨過湖山春艸綠。有本上座起骨。有來由。無本據。脚瘦艸鞋寬。蟻蟻鋒骨露。本禪人何處去。寶處在近。更進一步。永嘉住上座起龜。住則不寺。寺則不住。鐵壁银山。丹霄獨步。野猿啼處月三更。人在鴈峯看瀑布。芝上座起龜。

① 彩鳳自然。珠云く、「名譽あり、世に鳴る、簫韶の如し、彩鳳來儀。」
 ② 何須、九變。此の兩句は諺の韶の字を表す。簫韶九成、鳳凰來儀の事縁なり、その平昔頓脱をほめる。
 ③ 收拾、數峰。この兩句、賢は入塔の本意をむすぶ。珠云く「汝が歸家穩坐の處。」
 ④ 牧得純。名を打す、事は前の塔塔に見ゆ。全篇牧牛の事に託す、珠云く、「よくくやしなひをほせた。」
 ⑤ 難拘束。已下皆性行自在の機を述ぶ、今出喪起龜の故に。珠云く、「佛界にも魔界にも拘束しがたし。」
 ⑥ 拽脱、東觸。珠云く、「收し得て純ならば則ちはなつらを用ひす、東も西も他の苗稼を犯さず。」
 ⑦ 倒拈蘆管。珠云く、「此れ尋

常の事に非らず、牧童の事。」
 ① 雨過湖山。湖山は西湖をいふこれ又虛堂が靈隱にありし時なり、珠云く、「是れ眞箇牧牛の處、如是端的底は汝が面目。」
 ② 有來由無本據。名を打す、直に法性の事を形模す、珠云く、「一手擔一手擲。」
 ③ 脚瘦、蟻蟻。此上句は本禪人の生前、平實の旨を得ること述べ、蟻蟻は險なり、此の下句は平昔の機鋒險峻にして、脊骨常に露はるゝことを述ぶ、合して之を看れば只だ起骨を表す。珠云く、「有本が來由あつて、本據なき全身はこの二句にある。」
 ④ 寶所在近。これは法華の化城喻品にある文なり、橋果を以て寶所となす。
 ⑤ 更進一步。今起骨して塔處に進むるなり、兼ねて橋果に通

丘壑靈襟、紫芝眉宇、抹過死生關、
點頭還自許、出門隄柳正依依、黃
鶯枝上分明語、

質知庫鎖籠、
無矯僞、多質直、堅百橫千、對本收
息、質知庫、日暮也、收取鑰匙、
禮上座乘炬

稍僧歸元處、三尺火把子、無明性燥、
咸栗鉢喇、無出乎此、禮上座、久貧乍
富、看看得入手去也、擲下火把、大
衆不要眼熱、

道興上座乘炬
道無所據、山深水寒、一念未興、
死門路活、要知兩處收功、
誦取丙丁童子、丙丁童子、諾、擲下

火把、好好服事著、
嘉禾使君請行端平新橋、
天巧神工不日成、萬年勳業建端平、行
行闊步青霄外、回首方知是化城、
大衆還知麼、昔日舟橫斷岸、常懷
病涉之憂、旅逆窮途、每發未歸之歎、
是以、邦侯垂濟川之手、居士奮截流
之機、從險處築起根基、就虛空做成
世界、月籠煙樹、依稀方廣勝游、日落
江城、勢馳洛陽佳處、說甚連山貫海
望越通吳、南來北往等是到家、者裡
那邊無非活路、且最初一步如何履踐、
以手打一圓相、脚頭自此乾坤闊、
願力還同劫石堅、

國譯虛堂和尚語錄 卷六

惠するを示す。
永嘉住上座。永嘉は温州府永
嘉郡と名づく。
住則、寺則。これは住といふ
名を打す。珠云く、「名は住
といへども、本来の上座はさ
うであるまい。」不住は起齋の
語。
鐵壁、丹青。「ゆきももどり
もならぬ處、襖子かたしかた
しはいて」と珠は云ふ。この
兩句は上の本分安住の意を承
けて、轉處の些子を示す。
野猿啼處。起齋の時節、好箇
の端的。
人在鳳峰。蓋し鳳高山に葬る
のみ、温州府の龍湫はその山
にありと。珠云く、「此の二句
いづくより取りてきた、見成
とみたらば大ちがひ。能仁寺
は鳳高山にあり瀑布もある。
丘壑、紫芝。令上座の胸襟の
高麗を羨む。珠云く、「塵俗を

離れ切つて、神靈なる胸襟を
云ふ。紫芝とは芝の字を打す、
名利の心の盡きたる仙相を以
て、上座の面目秀異を褒む。」
抹過、點頭。自悟自證の謂な
り珠云く、「あゝひまがはい
たとうなづく。」
出門隄柳。這亡起齋の端的な
り、隄柳は西湖の名木、これ又
虛堂靈隱にありしときなり、
依々は「やはらか」あゝなつか
しいとなり。
黃鶯枝上。箇の其塵をか語る
此の物に即して他の物に非ら
ず、珠云く、「これはあはれた
ことか面白いことか。色もか
はらぬ。」
質知庫。知庫は今の開寺なり
幻住清規にいへり、惟だ庫頭
と稱し、一切の支收出納を掌
るの職なりと。
無矯僞多質直。矯は詐なり、
とんとおごりなく、質直多し

は名を打す、質村正直なもの
ぢやそれで此の人を知庫の職
に充つ。
堅百橫千。算用なり、算本を
布置するの法なり、忠曰く、
「その意旨は縱横自在に探算
するの意、清規の副寺の部に
委し。」
對本收息。金錢の貸借にかゝ
はらず、米麥に對して元利を
常住に爲め方をはかるを云ふ
息は利子なり、初の兩句は質
公の適職を述ぶ。
日暮、收取。日暮なりは入寂
をいふ。汝が願心を大事にせ
よ。鑰匙は知庫の用處の鍵じ
や。知庫にことよせて鎖籠の
儀をのぶるなり。
稍僧歸元處。珠云く、「人々本
命元辰下落の處、稍僧も凡僧
も本命の眞を徵す、問の意。」
三尺火把子。答への意、禮は
煙ともじりて、名に據りて佛

事を作す。火把子は「たいま
つ」珠云く、「稍僧畢竟歸元
の處、但だ此の三尺の火把子
にあり。」
無明性燥。愚者も智者も。
咸栗鉢喇。唐音にて「びり
べら」火烈の聲にたとへる、
正字通には美人の馬を驚すに
吹く「しちりき」なり、之を
ひつりつと云ふ。
無出乎此。上の句を結ぶ。
久貧乍富。無明等を云ふ、無
明業障を一時に燒却す、火把
入手のときはと。
看看得入。大衆にかけて云ふ
今日行解相應を得たり。
大衆不要。上座已に作佛し去
る。大衆久立して煙火の中に
向つて看るはいらぬ。眼熱は、
珠云く、「物をうらやむを云
ふ、眼中出火など云ふ、又
驚いて取りのぼせたことも云
ふ。」

①道無所據。上の字を打す。珠云く「大道の眞體は指したところはな

い。」

②山深水寒。此の語を着けて上の句を設す。これ天眞自然の境界なり

③一念未興。下の字を打す。死に如同す。

④死門路活。上と一鉢、言ふ意ば一念未だ興らざるの時節、死門則活路なり。遷化の處を云ふ、道興なればなり。

⑤要知兩處。兩處は上の道無等一念等の兩節を指す。道と興となり、全體手に入れたことを知りたくば。

⑥議取丙丁童子。たいまつに能く問ふて見よと、焼きつくして餘りなし。

⑦丙丁童子。これはまた喚起して、諸と童子に代りて應語す。

⑧好好服事者。著は助語なり。忠曰く、「須らく道興に服事すべし、歸服承事せよ」と丙丁童子、汝は

らくの河の流をたちきりて、こ

れは二句とも造橋の人を擧ぐ。

⑨從險處築。水の波のはげしきところに、橋柱の根を築くことに、斷岸の大工事、石をつきだし土をうづめ。

⑩就虛空做。地水を離れて空に就いての別世界、天巧神工を形容するの妙文なり、虹の空に横ふが如しぢや、此の二句一對は、橋を造るの模様を述ぶ。

⑪月滿燈前。橋の上より眺望すれば、ちやうど天台山の石橋に月影の照すを望むと、月が煙る樹々と相交り、えもいはれぬ渡口の景物が兩透じや、方廣は天台の石橋の北にあり、小石橋といふあり、兩峰の間に架す、恰もあすこに遊ぶに似て、日本の石山の秋月もものは。

やくめじやほどによくやきぬいてやれと。

⑫嘉禾使君。嘉興府の知事、新に此の橋を造りて、師をして剃渡(わたりぞめ)を請ふの佛事なり、端平は宋の理宗の年號なり、曆號を橋に名づく、瑞虹橋のへんに七十ほど著名の橋あり、其の一なりと。

⑬天巧神工。これは工匠の美を述ぶ天といひ神といひ、みな人に過ぎたるなれは故、日ならずしてできあがる。

⑭萬年勳業。これは端平の聖曆を祝し、兼ねてこの橋の萬年を祝福す建は「はじまる」なり。

⑮行行潤歩。これは橋のひろく且つ高遠にして、行歩の自在をのぶ、橋は空に架す、故に青雲の外といふ。

⑯回首方知。これは橋の壯麗を以て結ぶ、法華の化城喻を以てたとふ、佛の神通で、大城舎宅を云々の意、已上の一頌は大鑿を賀し、後面の

四六は委曲を擧ぐ。化城は今までなきにひよつとできたが故にいふ。

⑰大家還知麼。漫句。化城といふことを知るかと。

⑱昔日。傍句下を兼ねぬ。

⑲舟橋斷岸。昔しは渡舟でありしが渉るを病(うれふ)でわたりかねたが。

⑳旅逆窮途。この一聯はむかしの不便を述ぶ。旅逆は客舎、客を遣へ迎ふなり、こゝへ行きかゝつてなきする、旅はうらみのつらいものぢやとの歎けありし。

㉑是以。傍句なり。

㉒邦侯垂濟。邦侯は使君、則ち知事公が川わたりの仁慈の心を以てすくふ。

㉓居士奮裁。居士とは使君の下役人が橋の寄附を募り、截流とは故事あり、臨濟録にも「瀛和争か截流の機を負はん」などあり。今日の言でいへば超越といふ。衆流はい

①日落江城。いり日が江城の朱翠にうつりて、みやこの瀟瀟紅欄に似たり、日本の瀨田の唐橋、唐銅ぎぼろし水にうつるは勝所の城といひたいところ。此の一對は橋の勝景を引く。

②說甚連山。嘉興府郡、は吳越の境なり、此の一對は橋を架するの功を擧ぐ、甚のと説くは、此の功能のみではないとの謂なり。珠云く「先づ下の本分の事を言はんが爲に、連山貫海望吳越等の迂濶を述ぶ。

③南來北往。今此の端平橋は自由自在、未歸の歎なし。

④看裡那邊。病涉の憂を忘る。珠云く、「あなたのももこなたのもも、迷者も悟者もと橋に託して説く。此の一對は物に託して眞を

示す。

①且最初。本意を結歸す。珠云く「今虛堂を請じて最初のわたりぞめ、おれにわたれと云ふことか。」

②以手打一。融通法界を表示して、脚頭自此。又これ物に託して眞を示す。珠云く、「つゞけやものども、菩薩行の渡り初めじや、地獄も此の橋よりし、天堂も此の橋よりし、十方世界ひろし。」

③願方還同。劫石圓相はさきの寶林錄に見ゆ。この落句は初歩を試むるの次で、且つこの橋の延長を祝福す。珠云く、「施主の願力、又衆生利濟の意は、劫石は萬年も盡きまじ、橋もつきまじと、嘉禾の知事公の願力は。」

國譯虛堂和尚語錄 卷六 終

國譯虛堂和尚語錄 卷七

偈頌

雪竇革轍二門を釋す、
 迦葉聆^カ箏起舞、^カ淵明聞^カ鐘皺^カ眉、^カ息
 耕斗室危坐、^カ半意凍日熙熙。

大巧不宰、
 碧玉溪頭黃葉村、^カ不聞^カ花鳥到^カ籬門、
 憨眠似^カ覺底時節、^カ山月半規新吐^カ痕、
 善應無方、

雨脚蹣跚林葉稀、^カ去來初不^カ涉^カ離微、
 靈機未^カ轉已先照、^カ蹤跡擬^カ從^カ何處^カ歸、

①偈頌。名義集に伽陀、此には孤起といふ、重頌せざるものを孤起と名づく、重頌ば修多羅を説くものをいふ、亦諷頌といふ、偈といふは梵本の略なり、或は偈他、伽陀、唐に頌といふ、然らば則ち偈頌は梵漢合稱す、今此の編する所は一百七十七首なり、然れども編者の名を記せず、是れ上と同じく無隱の手に出づる乎。

釋雪竇革。雪竇の祖英集に、革轍の二門四首の頌あり。古鈔に云く、「革轍の二門は掃蕩建立なり」と、義或は近し、或抄に「革はあらためるの意轍はひつたかつた事。鶴林大師も革轍の二門、古來註解紛然、一箇も的中せず」と。雲門宗の子細なりと。二門は蓋し二字の義門なり。或抄に云へり、「孤峰頂上の途轍を守る者、則ち之を革めて十字街頭に向はしむ、是一門十字街頭の途轍に泥む者、則ち之を改めて孤峰頂上に轉ず、是れ一門」と。

問ふて、なにゆゑに餘習があると
世尊の玉はく、實に修習なし、法
そ誘ふことなかれと是れ亦支梵扶
桑千萬人、甄別し難き因縁なり、
珠云く、「迦葉起舞は舊轍を存す、
放行なり、迦明は鐘を聞いては革
轍大把住なりといふ、是れ不可な
り」と。

① 迦明開鐘。これは惠遠法師、白蓮
社を結び、嘗て書を以て陶淵明を
召す、陶曰く、「弟子性、酒を嗜
む、法師若し飲むことを許さば即
ち往かん」と、陶之を許す、遂に
造る、酒因つて飲めて社に入らし
む、陶眉を擡めて去る。又廬山に
戒酒鐘あり、それゆゑ眉を皺む。

② 息耕斗室。息耕は師の別稱なり、
此の巻に自ら息耕を賦するの頌あ
り、斗室は方丈の室なり、斗は方
の器なる故なり、危は高し、ひざ
まづき坐して居るとなり、尻を以
て跏、あとあしの掌を著けて坐す
るなり。

③ 半意理目。照々は和業の貌、連日
は多の日意の半まじいる、ひなた
北向するまでと。この四句で迦葉
や迦明の途轍には落ちぬとなり。

④ 大功不宰。これも雪竇の祖英集に
ある大功不宰を釋す。漢云く、「不
宰は功に居らずの謂なり、ほどよ
くと、のふるを宰制するといふよ
り轉じてなり。」又云く、「本分無
功用の境界、謂つべし大功不宰な
り」と。球長老云く、「大功を立し
て其功をつかさどらず、おれこそ
と主宰にはならぬ」又云く、「慈
悲喜捨の中、慈悲喜は大功の義な
り、捨の一字は不宰の義なり、天
地は覆載するとも、四時を行ひ萬
物を生ずるとも思ふので無し、大
功不宰なり、喫茶喫飯、眼見耳聞
背觸になり得ると、背觸を究め得
たとも思はぬ、名師にもあれ、難
透の語頭を以て百煉千鍛すると天
然不宰になる。」

⑤ 碧玉溪頭。碧玉は水色の潔きをい

ふ、或は云ふ、そのときの所居を
擧ぐるのみと。珠云く、「頃しも
秋の時節、流はちんつゝ、木の
葉がばらゝ、嵐は膚にしみつゝ」
① 不聞花鳥。百鳥花を嘲み來る時節
にあらず、此の兩句は雪竇の頌の
大旨を釋す。珠云く、「とんと寂
々寂として、花鳥陽和の時分でな
い況んや訪ふ人をや。」

② 慈眼似覺。慈は愚なり、無知解の
義を取る。珠云く、「無心にぐつ
さり寐て、似覺はうつらゝ」と。

③ 山月半規。規は正圓の器、半規は
半月の義なり。

④ 善應無方。これも雪竇の祖英集に
ある善而善應の頌あり。方は邊な
り、無方は無邊なり、普門品の偈
に「汝聽觀音行、善應諸方所」と
あるの意を明す、觀音の妙智行は
善く無邊の應に應ずとなり。珠
云く、「入レ佛緣、入レ花紅、寂而
常照。」

⑤ 雨脚躡躡。脚の字は全篇に連続す

縁對

① 石牀偃月夢魂冷、
② 溪水寫眞癩影清、

③ 平生砧砧自忘我、
④ 世外不知誰可

盟、

君子所思有

① 孤舟十萬里、
② 委命在危流、

③ 神州法己秋、
④ 五葉芬芳後、

宗鏡錄を閲す

① 百卷非文字、
② 精探海藏深、

③ 老胡三寸舌、
④ 鏡主幾生心、

⑤ 力破塵勞網、
⑥ 能銷曠劫金、

印を鑄る

① 袍着金花勒、
② 小聰揚鞭幾度月明中、

③ 黃河界上空來往、
④ 直至如今未樹功、

印を銷す

躡躡は行いて進まざるの貌、
言ふ意は晩秋霖雨躡躡として
晴を行はず。先づ時節任運の
風物を述ぶるなり。珠云く、

① 「善應的の端的、作麼生、よ
ろしなげにはらゝ」とある雨
に、四方の林もおほかたちり
はて、はだかになつた。」
② 去來初不。離微の二字は道の
妙なり。愆慶の時節、往復出
來、曾て佛法の道妙に涉らず
珠云く、歸らば我れを我と爲
すことなかれ、離は出息、微
は入息、此れ善應の去來出沒、
どうと云ふ沙汰はない、此の
端的は德雲比丘と相談せねば
いけん」と。

③ 靈機未轉。善應を頌す。珠云
く、「向上の靈機、如來もし
りはせぬ、我れ若し未だ家に
歸らざれば、此の靈機とは善
應どのは、まだちよいとも首
を回らさぬのに、こりや僧

じや、こりや僧じや、男女凡
聖、方圓長短、それゝに濟
度する。」

④ 蹤跡擬從。無方を頌す。蓋し
心機未だ轉ぜざる已前、早く
照破す、所謂擊石火閃電光に
似たり、箇の裡甚の蹤跡方所
かあらん。珠云く、「先照する
善應の蹤跡どこからどこへか
へるのがあるか、朕迹を留め
ず、無孔の破綻、前とも後と
もわかたぬ、須らく我を以て
我と爲すべし。」

⑤ 縁對。能所の縁、對合一如。
忠曰く、「縁は所縁の境なり
對は我に對する宛なり。珠云
く、「差別幻境の縁に隨つて
一切に應對するの義。」

⑥ 石牀偃月。所縁の石牀冷き故
能縁の夢魂も亦冷なり。珠云
く、「尸障子もなく、月影に
ぶつたふれて。」ものすごくさ
むいゆゑ、夢魂冷といふ。

② 溪水寬真。上に准じて知るべし、
對合の義、自ら分明。珠云く、「起
き來りて面を洗はんと溪水に向へ
ば、委はうつらう、皮骨連立する
のみ、身形をば。」これは境界底じ
や。
③ 平生乾乾。乾々は、くるしみきは
まる、勞極なり。能緣の我、已に
寂なればなり。珠云く、「二六時
中力行して、虚空と項引き、化他
三昧じゃ。」

④ 世外不知。世外は世上の外の人。
所縁の人も亦寂なり。珠云く、「六
塵の諸法を離れて伴侶と成る、交
盟を結ぶべきものなし。」隨居士の
偈に「心如境亦如」といふ。

⑤ 君子有所思。李白の詩の樂府に「君
子有所思。」言ふ意は離室麗色の
久しきは懼と爲るに足らぬ、寔安
滿盈は敬んで忌むべきところと註
せり。珠云く、「君子とは出格過量
の大宗匠なり、有所思とは佛圓經
卷多業餘熱、一食卵膏等のことで

なし、只だ我が禪門見性が衰ふる
ことが、なまけなげなと思念するば
かり。」

⑥ 孤舟、委命。祖師が震旦行化の所
思あり。故に南印度を離れ、孤舟
に駕し、十萬里程を渡いで、身命
を委棄して危殆の海流に放在すと
なり。傳燈等に詳なり、西來意を
思ふての句じゃ。

⑦ 五葉、神州。五家の繁を表す、赤
縣神州と中國の支那を云ふ、江西
湖南五家七宗と、百花芳を争ふ如
く、直指の法が盛になつた、法已
に秋なりとは單傳の正法にとつく
の昔に、秋の最中、寂寥のけしき
見るに忍びんと嘆息す。珠云く、
「此の註が所思已に満つると、大
師は那伽定中、歡喜の眉を開いて
ござらふとか。は、結果自然成
るの謂なり。」

⑧ 閉宗鏡錄。永明覺智禪師は一代時
教此土に流傳して大全を見ず、而
して天台、華嚴、法相、性相の三

宗、又相互に矛盾するところあり
以て乃ち重閣を爲つて、三宗知法
の比丘を館して、彼の險所に至つ
て、心宗の旨要を以て折中す、因
之方等の秘經六十部、西天此土、
聖賢の語三百家を集めて、以て三
宗の義を依け、一百卷と爲して宗
鏡錄と號す。閱は暇なり、歴なり、
實を簡擇するなり、吟味して見る
の意なり。

⑨ 百卷、精探。宗鏡の六十一天王殿
若經の偈に云く、「慧持無文字、文
字顯慧持。大悲方便力、離言文
字說」と、言ふ意は此の錄は文字
の相に非ず、夫れ精しく大海藏の
深旨を探る故、珠云く、「唯佛與
佛の語言、大陀羅尼じゃ、微細に一
代時教の蘊奥を究め盡された。」海
藏は一大藏教を云ふ。

⑩ 老胡、鏡主。古佛の説を探る、鏡
主は永明をいふ。珠云く、「如來
の舌を以て五時八教、三世古今、
一切の衆の爲に塵に入り細に入り

説きのべおかせられた、この永明
も如來の懷をさがしぬかれては、
一生兩生の薰習力ではあるまい、
六祖は八十度の善知識と云ふが、
此の永明も如是。」

⑪ 力破、能銷。網は羅籠して通ぜざ
らしむ、故に金は無明の堅牢を表
す。此の兩句は宗鏡の功を嘆ず。
珠云く、「八識は水に入りて鎖せず
火に入りて焼けず、なれども此の
宗鏡録ではとろ／＼にとく、三紙
劫に薰習しぬいたる無明の堅牢な
るを、ぐわら／＼ととかす。」

⑫ 歸原、花底。原は又源に作る、根
本なり、今は畢竟の義なり、宗鏡
録の根本、なにかつまんで見せや
うか、聞かせやうかはなきものか
と擧げておいて、花底と眞箇文字
に非ざる底の説を指出す。珠云く、
「東山の狐涎を舐り來つたる一句
子じゃ、是れ文字に即して文字に
非ざる底の大總持門なり、現成底、
直下に是れこれじゃ。」

⑬ 鑄印。漢の高祖、韓信を得て壇を
築いて印を鑄ると、是なり、印は
執政の持する所の信なり、文を刻
んで信に合すなり、今印を鑄て將
に拜するなり、吾が宗の修行功勳
邊の大事を表す。此の頌と次の銷
印の頌とは江湖集に載す。有功用
なり、修行の體、又建立門にも合
はす。

⑭ 袍着金花。袍は今の朝服、金花は
蓋し服の飾、隨は馬の青白の色、
勒はをもがい、馬具をつくを勒馬
といふ。珠云く、「大志大憤の錦
のよろひを着して、惡毒難解の話
頭の飛龍馬に乗じて出陣す。」これ
は行脚の體を云ふ。

⑮ 揚鞭幾度。日本でならば、「鞭聲
霜々夜渡河」じゃ、元の伯顔將軍
が時に、「幾回敲磬月中歸」と、
皆軍中に在つて夜を侵して往來す
其の苦辛を極むるなり、珠云く、
「法戰一場、參禪辨道じゃ。」胡を
防ぐなり。

⑯ 黃河、直至。黃河は胡漢相拒くの
地。珠云く、「到處の敵軍を打ち
破り、今立ち歸り見れば、はてさ
てむだ骨じゃ。」又云く、「祖師の
眞風、奪命の神符、差別關鎖を手
に入れずんばおくまいと戰終せて
見れば、天下太平ばかり、これぞ
と云ふものは見えぬ、天堂もなく
地獄もなしと云ふ處恐るべし。」か
な以て吾が門の學地に喩ふ。

⑰ 銷印。天子へ無用なれば返したを
云ふ、上の題と相表裏す、又信り
て以て吾が宗の休歇無功用邊の事
に喩ふ。珠云く、「鑄印底の人は
間にはあるが、銷印底は萬人に一
人ありにくい」と。掃蕩と無功用
とに引合す。

⑱ 鐵鞋、歲晚。鐵鞋は將軍の著くる
所の故に、珠云く、「風雨雪霜を歴
て、東行西詢、千辛萬苦すること
許蒲團上の事じゃ、あらゆる葛藤
ふみやぶり、石牀に臥して世界あ
ることも、節季も正月も知らず。

鐵鞋無底飽風霜 歲晚歸來臥石牀

一對眼睛鳥律律 半隨雲影挂寒堂

回鷹峰の眺望

孤筇影落清湘外 看盡歸雲斂復翔

身世悠悠心自許 幾回到此立斜陽

衡陽の龐居士が庵

居士當年錯用心 渾家不睦到如今

推籬柄短無人買 空自蕭蕭風滿林

祝融峯に登る

南嶽諸峯七十二 惟有祝融峯最高

九千七百三十丈 下際寰海如秋豪

岷峨華頂遠俯伏 九華五老來相朝

上封老僧日無事 興來以手摩雲霄

方廣寺

雲中玉磬無時響 木末金燈永夜明

一對半圓。鳥律々は只だ眼の

黒き貌をいふ。眼の玉のくる

ぐるきよろりと。「半明半暗、

偏正三昧が手に入らねば知れ

ぬこと、雲影の風に任せて東

西するが如く、佛界に入り魔

界に入りて、けろりつと寒堂

のものすごき處に居る」と珠

長老はいへり。又律々烈々は

詩經に「南山律々」と、廣大の

ことにもいふ。つまり無事行

履の體なり。

回鷹峰眺望。回鷹峰は衡陽の

南にあり、雁此に至りて過ぎ

ず、春に遇ふて回る、故に名

づく。按ずるに師の行狀に、

「師南嶽に在つて歳を興る修

首座と古今を商略す。」今此の

頌並に祝融頌に至る、共に三

首は此の時の作なり、南嶽は

衡州府にあり。

孤筇、看盡。衡州府の湘水は

府城東にあり、珠云く、「つ

五ついてひとり頂上へ上つた

れば、影ぼうしは湘水のあな

たに、よこりんと高し、暮れ

方誰にあふでもなし、只だひ

とり雲のあしが無くなつたと

思へ、又、ぐらぐらと出る。」

身世、幾回。皆自得逍遙の意、

珠云く求めても求めてもあき

なき世の中、早やこれで家は

足つた、毎度々々のぞみはな

い、此に到るより外はない。

景象を受するが爲めに。」

衡陽龐居士。衡陽郡は衡山の

陽にあり、襄州居士龐蘊は、

衡州衡陽縣の人なり。

居士、渾家。珠云く、「馬祖

石頭を師とし、丹書を友とす

いらざる心得違ひ、家中睡じ

くない、靈照女の末後も父を

欺き、父の座に登り坐亡しぬ

是に於て父更に十日を延べて

化す、如今に到つて破家敗宅

すと。」

② 聽鐘、空自。世人、居士の意を知

うざるを表す。寒涼寂寥として、

人の踵を繼いで住するなし。珠云

く、「さて商はる、境離はとらへ

どころもなく、用にたぬ故、買

手がない、是れをみよ、居士がや

しきはさびびく成つてをる。居士

の了簡がわるい故。」

③ 登祝融峰。衡州府にあり、衡山縣

の西北三十里なり、位離宮に直る

以て火徳に配す。乃ち祝融君遊息

の所。

④ 南嶽、惟有。潭州の南嶽、一名衡

山といふ、七十二峰の中、最大の

者五つありといふ。これは南面天

子の勢。

⑤ 九千、下際。海拔九千餘丈なる故

四方の海をみわたして、秋豪の如

しと、豪ば毫なり、すこしといふ

こと。

⑥ 岷峨、九華。蜀の峨眉、亦峨眉

といふ、華頂峰は台州府天台縣の

東北六十里にあり、俯伏はうつぶ

すこと。

し、これは北面臣下のかたち。九

華は池州府青陽縣の南にあり、五

老峰は廬山にあり、相來朝は皆々

首を下る。

③ 上封、興來。上封寺は祝融峰の絶

頂にあり、興來つては不圓氣にむ

くと、明眼の衲僧でも來合すと、

向上の大事、佛祖でも目の及ばぬ

處を以て接得す。自得高閑、當に

斯の如し。

④ 方廣寺。前の端平橋の佛事に見ゆ

石橋は台州にあり、五百羅漢の境、

方廣寺にあり、石梁あり、兩崖の

間に架す。

⑤ 雲中、木末。羅漢の境なる故に、

はるか大そらにけん／＼といつと

なくひびく、木ずゑにかすかに見

える金燈、よもすがら明かなり。

⑥ 勝地、古今。人倫の所在に非ず、

故に「人通はざれば盜賊のおそれ

なし」と中將姫もいへり。

⑦ 道野雲不值。姓は趙、名は野雲未

詳なり。

⑧ 久思、欲話。老居士の故に維摩と

稱す、問疾品の意を用ふ。珠云く

「數年來、此の老にじつとりと對

面したしと思ふてゐた、外のこと

はない、有道の人士は家裏の大事

をはなし申し度く思ふて、病痛と

は無明、塵勞、三毒、五欲。

⑨ 丈室、未應。丈室のことは前に見

ゆ、鐵門限はかんぬきを入れて、

びつしやりと戸閉め、唐の智永、

書を工にす、人多く書を求むるも

の市の如し、鐵門限を作りて以て

拒之に始ると。珠云く、「今來て

見れば、なんのわけともしれず、

びつしやりととじめ。常人の來過

を拒ぐなり。今信ぜざるに因つて

其の守るところの堅固にして近傍

すべからず。

⑩ 回書記。唐は舊名錢塘。

⑪ 誰管鮎魚。梅聖俞の故事なり、俞

詩名三十年、終に一館職を得ず初

めて勤して唐書を修することを授

けらる、妻の刀に語けて曰く、「吾

勝地正縁人罕到、古今門戸未嘗扃。

趙野雲を訪ふに値はず

久思閑對老維摩、欲話衆生病痛多。

丈室無端鐵門限、未應容易野人過。

圓書記錢唐に之く

誰管鮎魚上竹竿、拚身捱得

獨體乾、者回歸去西湖上、頓艸鷗波不

亂看。

彌藏主潮陽に歸る

穆穆叢林見老成、江湖約我復同盟。

鰲鄉未話腥風起、春雪初消好問程。

斷橋

瞎驢一踏兩頭空、便與尋常路不同。

寸步却成千里隔、紛紛多在半途申。

南湖晦岳講主を訪ふ

珠云く「やくたいもなう見はずまい。」

彌藏主歸潮陽、頑極行彌乎。

擬絕沖下、潮州府、唐には潮陽といふ。

穆々、江湖。穆々は深遠の意又威儀の多きこと、此の言は彌公威儀深遠、叢林中の老成なりと。珠云く、「穆々は人がらのよいなきけぶかい、老成は萬事に行きわたり、約我は再來を期す、皆朋友の體を以てして、その他に重んぜらるゝこと知るべし。」

鰲鄉、春雪。鰲郷は潮陽なりわにのたくさん居るところ、此の句は潮陽の事に託して、藏主の活機用を嘆す。鰲を彌公の活機にたとふなり、春雪初消すとは送行の時節を述ぶ言ふ意は暖氣漸く回復す、宜しく途程に趣くべしとなり。珠云く、「隨分道中無難で行

の修書謂つべし胡孫布袋に入ると「刀が曰く、「君の仕官何ぞ鮎魚の竹竿に上るに異ならん」と、蓋し希有の謂なり、今書記の故に修書の事實を用ふ。

拚身捱得。拚は延べ及す。及極の義、獨體乾とは道眼分明の義なり、此の兩句は回公平昔修行功を成すことを述ぶ、言ろは希有にして身命を顧みず、道明分明なることを究め得と、珠云く、「獨體乾くとは此のからだでありながら、識がつききると之を知る」

者回、鰲郷。杭州西湖は府城の西にあり。周圍三十里。此の兩句は送行の意を述ぶ、言ふ意は回公修行、功成つて還回郷里に歸る、想像するに、西湖の邊に所有の黃鰲の舄、白鷗の波、又昔日散亂の心を以て看ざるなり。不亂看は、

不思議を論ずるときは、諸天花を捧ぐるに路なし。」

絶處、定應。言うは南湖の道場法智の後、音響久しく絶ゆ、今七世に到りて此の如く盛大なり、恰も氣息絶する處、生機路の活するに逢ふが如し、定んで法智尊者、これ晦岳の前身なるべしとなり。

謝戴悟菴。戴は姓、菴は蓋し居士號なり、謝すとは菜園を捨し、又僧に齋するを謝す。

深荷。菜園衆僧のために菜園を寄捨し、その上に設齋す。珠云く、「けしからぬ、奇特のお志し實に城東佛法の外護の老居士。」

磨刀、居士。凡そ他の施を受けて、他の生を利すること、なほ磨刀石の人の磨を受けて人の器を利するが如し、今言ふ意は我が受心は消し盡すべし、君が施心は鐵の堅きが如しと。珠云く、「磨刀は行施のもの、石子は受施のもの」調菜の具に託す。

きやれ。雪は消ゆる鳥はさへづる時節はよし、路をとくと案内してゆきめせ。」

斷橋。淨慈の妙倫禪師の號を賦す偈なり、無準に嗣ぐ。

密菴成傑。松源一運菴一虛堂

瞎驢一踏。斷橋和尚、人となり峻硬にして順せず、叢林倫驢と稱す、興聖錄に徑山の倫藏主至上堂あり、今は圓に託して頌述す、兩頭空とは橋の兩頭斷ゆるをいふ。珠云く、「臨濟門下の瞎驢が手に入らねば、首山の竹篲がじや、今時那邊兩頭に共に截斷。」

便與尋常。斷橋に約して本分の活頭を表示す。珠云く、「此の向上宗乘の一路は、兩頭を空じ切つて行けば、衆人のあるくとはちがふ」

寸步却成。橋斷ゆる故に、寸歩を進むることを得ず、その本咫尺の差と雖も、その末千里の隔礙を成す。珠云く、「命根截斷の處で知

らば時あかね。」

紛紛多在。前程橋斷の故に、心紛亂して進むことを得ず、多く皆牛途に在つて止むと。一二の句は倫公の大悟頓脫、常流と迥に別なることを述ぶ、三四の句は世の學佛の徒、倫公の地位に到らざること述ぶ。珠云く、「粉々は、やくたいもないじや、千人萬人一代時教を請んじても、此の一踏の場を知らねば、皆多くは半途にありじや。」

訪南湖晦。南湖の延慶寺は智證法師の開法の道場なり、大中祥符三年四月の事なり、晦岳は即ち法照法師の號なり、日本の泉涌寺開山俊仍と法兄弟なり、北峯印の下の佛光法照法師なり。

講堂、百萬。言うは講堂は聚會散花の人天此の如く衆多の故に、茫茫として迷惑して、徒に各苦辛すとなり、痛く法席の盛を稱嘆するなり。珠云く、「拂子を執り三諦

講堂迷却散花人、百萬茫茫徒苦辛、
絶處逢生機路活、定應尊者是前身、

戴悟庵を謝す

深荷城東老淨名、榮園捨了又齋僧、
磨刀石子看盡、居士肝心鐵打成、

山水の圖を觀せしめて休禪者を留む

近遠何多趣、難將尺寸一求、向來披

嶽頂、今已徧神州、水肅蒼林晚

寒生王井秋、圓蒲冷相對、時與話

峯頭

猫子を求む

堂上新生虎面狸、千金許我不應移、

家寒故は無偷鼠、要見翻身上樹

時

通禪客の進納

●山水圖。著し休禪者、遊方の意あり、近遊尺寸、多方の味の圖を觀せしめて之を留む。

●近遊、難將。言ふ意は近遊の山水、如何ぞ嘉趣多き、實に尺寸の幅を將て求めがたしとなり。破題は圖畫の巧妙を述ぶ、珠云く、「をちこち山々の景色、よくも聞きこめた掛物の圖は少し開いたやうなれども必ず尺寸の小とは云はれぬ。」

●向來、今己。此の兩句は蓋し古句、徑山後錄にも解夏夜參にも亦出づ、今此に拈じ來つて、圖中の近遊を明す。言ふ意は先に嶽頂を披き、今天下を見るなり。珠云く、「最初の見るときは孤峰頂上を見る空諸門、後に差別智に入つて假諸門から見れば、天地我が手に入る、その編的どうじや大唐一まき残らず。」

●水肅、寒生。肅は清明の貌、蒼林は蓋し圓中水邊に蒼林あり。珠云く、「肅はぞつとする、蒼林は夏のけしき寒生すとは身の毛もよだつて、さてすべし。」領聯は山を述べ、腰聯は水を述ぶ。

●圓蒲、時與。言ふ意は休禪者と共に圓蒲相對して、此の圖を觀て、時々ともに孤峰頂上の事を論語せんと。結句は休禪者を留るの意を述ぶ。山水の景色に對していふ。

●求猫子。猫をもらはれ、畜養せられた。

●堂上、千金。珠云く、「瑠璃殿上八識田より飛び出した。」虎面はとらねこが千金にも換られぬ、寵愛の猫なれども、おれにはくれたからは。」

●家寒、要見。珠云く、「虛堂が處は貧乏な故、煩惱の偷鼠はをらぬ、佛界に入り魔界に

●稍僧肘後箇靈符、誰管從前有與無、

●片板不能擔到底、又來依樣畫葫蘆、

僧の龍泉の不應に見ゆるを送る

●太阿橫按血淋漓、鐵作心肝也皺眉、入得

●門來翻死歎、不應未必肯饒伊、

觀音を圖して水陸幀を背す

●吉祥大十捨全身、要使迷途脫苦輪、

●無奈衆生難教化、天堂地獄又

●重新

霞谷の清夜

●執畫蘊丘壑、冥機未策動、瓦

●消古冢、石榻伴歸雲、勝事知如許、

●餘生無所聞、燈花冷相笑、何可補

●毫分

先侍者を送る

入り、自在神變に衲子を精鍊するに喩ふ。」又云く、「却來底差別智、向上宗乘人天を利濟するが見たい。」

●通禪客進納。忠云く、「錢を納れて度牒を求むるなり。龍溪の免丁錢の説は非なり。」

●納僧、誰管。肘後は第一機をいふと、爪牙の一著子、面目とも云ふ、本具護身の靈符を指出す、誰は「なんぞ」じや本來具足のものじやの、修行して傳はるものじやのとなんのかのにとり合ふことでない、と、珠はいへり。

●片板、又來。片俗に板不能は打成一片、僧にも成りたり俗にも成りたり、徹底はできぬ又來つてとは再び僧となり、またしても、手本の上をなでるよるな馬鹿なことばかり、依例で進納すとたり、以上も珠の説なり。

●送僧見龍。龍泉寺は餘姚にあり、不應は未詳と溪抄にあれども、忠曰く、「不卷は南明山に住す、南明は處州なれば龍泉は縣名なり、不應は悟は松源に嗣ぐ、佛祖贊の處に出づ」と。

●太阿、鐵作。劍に龍泉、太阿の名あり、今此の名を借りて不應の機鋒を表す、いかなるつたない衲僧でもちぎせにやならぬ。

●入得、不應。一たび不應の門へ入得したら、生かしてかへさぬ。忠曰く、「死歎は死力を出す、死郎當の類、歎は前乘の妄言を翻改して再び誠實の語を科列するなり、伊は僧を指す。」

●圖觀音背。忠曰く、「圓機幅限りありて施主は數多し、故に圖を定めて亦是諍を止むるの法なり。」背はうらうちする

畫幀を終補するなり、水陸幀は亦
畫幀に作る、水陸幀は梁の武帝に
始る。蓋し舊る表具がやぶれたの
で、之をくじ引いて表具を仕直す
なり。

④吉祥、要使。吉祥は神座の名、大
士の坐するところ。忠曰く、「此
の經語に依つて虛堂が觀音を吉祥
大士と爲すは、數片の紙に尊號を
書して、施主をして之を取らしむ
故に捨全身と云ふ。」珠云く、「果
滿地を捨て、度生の爲めにするな
り、觀音苦界に入りて救度するの
像なるべし。」

⑤無奈、天堂。三四の句は幀を設く
るの意を述ぶ、言は衆生、無始
より惡業習氣の故に教化し難し、
是に由つて水陸所依、一切六道、
苦樂の像軸を設けて、衆生をして
惡を捨て善に趣かしむ、天堂と地
獄とを擧げて、餘趣を該ぬ。又重
新とは修補の故なり。
⑥霞谷清夜。啓蒙なり、前に見ゆ、

師瑞慶を退いて關を啓蒙に掩ふ、
清夜閑暇、自如の意を述ぶ。

⑦執書、具機。晝は明に屬す、晝は
當に輻に作るべし、包藏なり、明
を啓蒙の丘巖に輻識して、以て靜
退するなり、清夜の題なれば、或
抄に「よそも月夜があらうがさ
て、我れ獨り澁茶を飲んで見る
が、此のやうな嗜れわたつたこと
はない。冥機は度生の機を息めて
無功用の處にをる。」

⑧瓦區、石榻。區は音「だ」莫器、
今は香爐を云ふ、古冢家は即ち香
の圓なり、石牀に臥坐して洞雲の
歸るのを伴として、この領聯は閑
居清夜の勝樂を述ぶ。
⑨勝事、餘生。勝聯は世縁を杜絶す
ることを述ぶ、言は世間多般勝
妙の事なり、我れ都べて聞くとこ
ろなし。如許はかくの如しなり。
⑩燈花、何可。結局は無爲閑坐の意
を述ぶ。言ふ意は燈花相對して我
れを冷笑するなり、餘味あり、夫

れ世事に參預して好みを貴人に結
ぶことは、先佛の呵するところな
り、又豈に補あらんや。燈花も清
夜の題に合するなり。

⑪半法、出門。懸は懸なり、言は
病平復せざることは、老いて寒に
堪へざる故なり、珠云く、「出で
て送らぬ意はなけれども、半は法
で、下地の病もすぐれず、門を
出づるは送行の端なり、三呼は
忠國師の一日三喚侍者よりいふ。

⑫諸方、晚秋。靈驗は第一句に應ず、
言ふ意は此去て諸方惡辣の宗師の
靈驗あるに遇はく。秋晚は霜露果
熟の時を指す、持「虎鬚」とは虛堂
が處へ來て、再米の縁を云ふ。

⑬送文瘦牛。文は名、瘦牛は號なり。
⑭一味、且無。全篇瘦牛の字に託し
て述ぶ、餘の熱鬧豐滿の工夫なし
一向に身形を鍊り得て、骨柱皮な
り、此れは瘦をいふ。珠云く、「自
已本來の面目ばかりを修めぬる故
餘の方には心よせぬ。」まあとこへ

①半法春寒病未甦 出門無力
爲三呼、諸方辣手如靈驗 秋晚應歸
持虎鬚

②文瘦牛を送る
一味清寒骨柱皮 且無心力去扶犁
江湖儘儘有閑地 況是春風艸長時

③玄黃眞ならず
萬物自全璧 蒙莊安可齊 月
高松影細 風急鷹行低 誰把丹
青入 難將竹帛題 寒山應笑我 携
手隔雲泥

④黑白何の咎かあらん
世事亂如麻 情人未到家 連延深院
雨 滴碎後庭花 舊話幾時別 音書
未有涯 瞑煙將四合 何處起胡笳

行つて苗代すかうと心にせい
がない、瘦牛力なきが故に此
れは牛をいふ。

①江湖、況是。儘は盡の字と同
じ心、昔々じや、閑地は牧養
の處なり。珠云く、「江湖、
どこへゆかうともむだ地はな
いどこもかも牧養の處じや、
まして春草あまねき時、悟後
の修練要の時じやほどに。」

②玄黃不眞。この本義は叢書の
二の林間錄の下の八六頁に出
づ、委し。黑白未分、彼此を
爲し難し、玄黃の後、方に自
他を位すと、丹霞淳五位の序
にあり。玄黃は黑白共に色法
俱に互レ文のみと、曰く、眞な
らずとは色法を奪ふ、實際理
地是れ法住法位、なんの衆生
の度すべきかあらん、何の昔
があらんと曰ふ、則ち無法を
立す、佛事門中世間相常住、
なんの衆生の度せざるかあら

ん、珠云く、「色前物にあらず
色即是空じや。」

③萬物自全璧。璧は瑞玉、圓な
り、今は衣珠を表す、これは
莊子が齊物論を書いた蘭州如
が全壁して歸つたとく、ど
つこいならんと云つて軍をす
る。

④蒙莊安可齊。莊子は宋人なり
名は周、字は子休、睡陽の蒙
縣に生る、安可齊は莊子の語
なり。珠云く、「萬物をこね
まぜて、一つにしたがつて書
いたは知見が足らぬ。」

⑤月高、風急。物物全眞の故に
一法の談すべきなく、衆生の
度すべきなし。珠云く、「そ
の圓明不思議の端的、風がひ
どくて驚は高くとばぬもの。」
⑥誰把、難將。丹青は畫を謂ふ
竹帛は書、言ふ意は夫の本來
自全の性徳不可得、將三書畫
而描貌注述かかれぬ畫で、

作られぬ詩歌じゃ。

寒山、携子。寒山子は物外に逍遙して自全の徳を諷詠す。今其の詩に擬して句を製す、手を携へて同じく行くといへども、其の優劣天地を隔つ、其必ずしも笑我であらうとなり。珠云く、「是れが五祖下の風裁を見とほした左邊底が手に入つて吐き出した句じゃ、未到は意に參じ、已到は句に參ぜよ靈妙の偏じゃ、如許の工夫あり。」

黑白何苦。此の頃は全篇閑を守る婦の征夫を思ふに擬すとなり。黒いがにくいと誰が云ふた」と珠長老の説なり。

世事、情人。世事意に稱はず、故に心緒亂れて麻の如しと、情人は妾が夫を稱するなり、未到家とは未だ家に歸らざるの謂なり。珠云く、「とりみだした世中、こちらの殿子は待てどくらせど、半恨れ君、半思れ君じゃ。」

連延、滴碎。深院後庭、皆妾の所

居をいふ、連延は久雨で、庭花を雨の一つぶ／＼散る、春閑凄凉として夫を望むの情太だ切なり。

舊話、音書。何時か相對して分辯すべきとなり。珠云く、「うちらみつらさを、いつかはらさん、書信を望むにあてどもない。」

厭煩、何處。將合とは薄暮をいふ日のくれに及んだと思ふとき、胡人蘆葉を捲いて之を吹く。珠云く「さなきだに思ひ惹へのをりから閑情の益々堪へがたきことを述ぶ魂飛び魄散す。」

附芝味交。芝味は瑞巖、交承は蓋し交代承席の義、師、瑞巖を退いて後、其の次席の人、茶を恵む耳。

揀芽、眞味。揀芽嫩茶は「新芽の茶」と云ふこと、芳字は芳は美稱字はなほ名のごとし、是れは茶の「レツアル」じゃ、銘茶のしるし

は「しどろもどろ」茶味に寄せて道味を嘆ず、ざつと味ふか。

曾向、至今。曾は「すなはち」なり。松の根下で瀑の水と雪とを烹て、今でもまだ口の中があまいと茶味風味同一甘味じゃ。

棘林。名柁、曹洞宗の杖錫和尚なり、佛事、又曹王錄に出づ、その號を頌するなり。

海風、舊條。古句に鸞鳳は荆棘に棲まずと。珠云く、「遙に德氣を見て下したが、此の棘林が手本は中々よりつかぬ、そのはず全身毒爪牙ゆゑ。」

茫茫、只許。平地上に死人無数と雲門もいへり。「方量もなき茫茫と出得もあきれはて、そらむくより外はない」と珠の説なり。全篇其の號の棘林に託して、門風の峻峻なるが故、愚者濤泊し難きを述ぶ。

趙開府訪。趙は姓、開府は官の名、行狀に開府存時趙公とあり、これ

芝峯の交承茶を恵むを謝す

① 揀芽芳字出 ② 山南 ③ 眞味 ④ 那容 ⑤ 取次 ⑥ 參

⑦ 曾向 ⑧ 松根 ⑨ 烹瀑雪 ⑩ 至今 ⑪ 齒頰 ⑫ 尙餘 ⑬ 甘

棘林

⑭ 海風 ⑮ 飛來 ⑯ 不敢 ⑰ 樓 ⑱ 舊條 ⑲ 新刺 ⑳ 如 ㉑ 錐 ㉒ 茫

⑳ 茫出 ㉓ 得 ㉔ 不得 ㉕ 只許 ㉖ 拚身 ㉗ 到者 ㉘ 知

⑲ 趙開府霞谷を訪ふ韻を次いで之を謝す

⑳ 旌幟 ㉙ 天外 ㉚ 見 ㉛ 縹緲 ㉜ 谷中 ㉝ 來 ㉞ 望重 ㉟ 艸

㊱ 先假 ㊲ 山靈 ㊳ 雲自開 ㊴ 禪衣坐 ㊵ 幽石 ㊶ 櫻

㊷ 柄拂 ㊸ 清埃 ㊹ 勳業 ㊺ 凌煙 ㊻ 上 ㊼ 難教 ㊽ 隱釣

臺

⑳ 茶をもつて樓司令に寄す

㊿ 暖風 ㊽ 雀舌 ㊾ 關芳叢 ㊿ 出焙 ㊽ 封題 ㊾ 獻至 ㊿ 公

㊽ 梅麓 ㊾ 自來 ㊿ 調鼎 ㊽ 手 ㊾ 暫時 ㊿ 勻水 ㊽ 聽松 ㊾ 風

㊽ 鑿座 ㊾ 主を送る

は席上に詩を作り呈するとこ

① 旌幟、縹緲。従者の行列の盛を述ぶ、「旌幟ははた」九重の雲のあなたにひらめき渡るを云ふ縹緲は「はるる」この霞

谷の中へ御來訪あり。」

② 望重、山靈。言ふ意は開府の德望厚重にして君子の風あり故に其化の行はるること如

此なり、神木までなびくことこの山も靈にして能く開府の徳を知る故にくもきりも自然に開いて以て容接す山靈は山の神もじや。

③ 禪衣、櫻柄。自序なりたにがなと存ずれど心にまかせぬことばかりきれたるしゆる帯把つて庭はく如く、此の兩句は霞谷靜勝の中開府と清談を打

すを述ぶ。

④ 勳業、難教。趙公の勳業、宜しく凌煙閣の功臣の上位に登

らしむべし、殿子陵の釣臺に隠れたようにしたからうが、そうはならぬ、天下國家のためじやほどに。

⑤ 茶寄樓司令。樓は姓、司令は官、未だ審ならず。

⑥ 暖風、出焙。珠云く、「三月の末、四月の初、ほや／＼する時節。」雀舌は「わかき芽」芳叢は茶園の中にさわぐ、御茶もみじや、ほいろを出してつゝみ封印をして、君王に献上する。

⑦ 梅麓、暫時。梅麓は樓公の號なり、此の公自來、補袞調羹王佐の才なり、今茶に便する故に、調鼎と云ふ、安排し加減しこゝろむること、暫時は閑暇の時、一服づゝこゝろみ精神をおやしなひあれと、進上申すなり。調鼎は鹽梅なり。

⑧ 紙燈、直至。徳山の龍潭に到つて、紙燭吹滅の下に於て大

紙燈吹滅尙迂回 直至如今心未灰
臺石蘇花將半蝕 不知焚鈔復誰來

僧補陀を禮す

孤蹤抹過海門東

吳越溪山幾萬重

一拜起來還一拜

不知何處見圓通

騰禪者を送る

別我芝蘭舊主情

松堂月冷露華清

古桐高佩知何處

會聽百灘流水聲

棲霞觀に遊ぶ

海上多幽蹟

尋碑始得名 仙成丹

窺冷霞暖地花生

有鶴久不死

見久長欲鳴

壇西羽衣子 知我不

虛行

僧金陵に之く

悟する、平昔の疏抄等の講本を焚くの故事による、鑿と云ふ字を打す、尙ほ迂回はよう合點せぬじや、今日に至りても、よう大死一番かせぬなり。

臺石、不知。臺石は講臺石なり、坐禪石の類なり、苔むして石をむしばむ、蘇花は講經鈔を焚いて、虛堂が門に入るものもあるかあるまいかといふ。

僧補陀。補陀のことは前に見ゆ、寧波府定海縣に在り。

孤蹤、吳越。孤蹤はつれもなひとり、風雨雲霧拂ひ凌ぎて、海門の東とは寧波は支那の東部にして、定海縣、又寧波の東部なり、日本の商船往來す、故に海門の東とも云ふ。

吳越とは寧波府は秦には會稽郡に屬す、隋には吳州に隸す、後に越州に隸す、故に云ふ。

海上多幽蹟。昔向上一曲に「必ず」なり、百灘は「たにだに」皆向上一曲。

遊棲霞觀。道宮之を觀といふ寧波府の棲霞觀は象山縣の治の西南に在り、虛堂の郷里の邊。

海上、尋碑。言ふ意は古より天下道士修煉の地多し、皆幽冥の處なる故に、碑を尋ねて始めて知つた。

仙成、霞暖。言ふ意は仙術功成上昇し去る、此の地只た丹崖冷きのみ、地花は蓋し紅苔をいふ、色よく見えるをいふ地もこえあたかなれば。

有鶴、見人。鶴は千年、鶴は道觀の養ふところ、人を見て恐れず、却つて喜び鳴く。

壇西、知我。蓋し棲霞壇を觀中の西に構ふ、故に壇西といふ、羽衣子は飛仙なり、壇上

一拜、不知。言ふ意は只管に拜し來り、拜し去つて、何れの處にか圓通の理體を見んとなり、端的を指示す、いつ面目を見る事ができるぞ。

送騰禪者。此の頌を見るに、蓋し琴僧乎。

別我、松堂。忠曰く、芝蘭は瑞岩なり、蓋し此の僧師が舊瑞岩に住する時より隨侍して、今に到る、一旦外に遊ぶ故、芝蘭の事を引くなり。言ふ意は汝今我に別れて、我を以て芝蘭の舊主の情を爲す者は、芝蘭に居る時の主人の恩情を忘れざるなり、松堂月冷にしてやたゞさへ憐を催す時節、月影はひかへ、露は月影に移りていとゞものすこい秋の比。

古桐、會聽。古桐は琴をいふ、流水は琴の曲、知音に遇ふこ

の神仙當に我が釋種にして虚空飛行の徒にあらざることを知るべしと、此虛堂、よのつねの遊山翫水の輩とちがふ。

僧之金陵。宋には江寧といふ南京應天府にあり、金陵といふ、この頌は江湖集に載す。

良宵、蛩在。良宵はさえずりした夜、庭の面ををてらしぬく蛩は光なり、蛩は「こほろぎ」はたはたをりなどと鳴くが如く訴ふるが如く、人の心をいたましむ。師をはなれて他に之くなり。

別我、不知。三四の句は我が叮嚀の明誨を拵ふて他に之く其の心鐵鑿の如し、故に道と白雲萬里なり、南國は江南の故に幾多程は道のりはいくら程あるか、苦勞なることじやと益つてやるなり。

寄幽當佛。前に見たり、佛光は宋理宗の陽た所の號なり

良霄桂月耿中庭 蛩在青莎葉底鳴

別我寸心如寸鐵 不知南國幾多程

對文箋釋通人到 破句分科

作者難 不見灑陽焚鈔者 棒頭拈出

尚寒酸

昌老竹谿と號す

疎疎綠影釀寒清 高節虛心久得名

不 見月明流水處 好風時引鳳雛聲

潭老古函と號す

蛟龍窟宅初無底 神禹難窮淺與深

好把凝流消息子 沛然爲雨活叢林

溥禪者西に還る

梅影稀疎蘭葉香 吳中水艸越中行 荒

後錄の偶頌に見ゆ。

③對文箋釋。箋は註の義、詩の註を箋といふ。珠云く、「經文を箋註することは、通途の人、尋常の人も到りうるなり。」

④破句分科。珠云く、「知見を立すれば、即ち無明の本と打破して、經意の起りくまりを分つことは、吾が宗の作家でもありにくいとなり。」

⑤不易、棒頭。邊陽は徳山は本是れ講付なり、澄州の龍潭に到つて旨に契ふ、遂に從前實悟するところの諸鈔を焚く、後凡そ其の門に入るものは便ち棒すとなり。寒酸はおちぶれた體を云ふ。

⑥蹊跡、高節。一の句は路を、二の句は竹を云ふ。珠云く、「まばらにはえた縁竹、寒清の溪水にうちしづみである、上下程々と操を守り、中心虚空にして物を容る、年來人の知る處じや。」

⑦不見、好風。三の句は路を、四句

は竹を謂ふ、風は竹實に非ざれば食ます、全篇其の風韻を羨む、珠云く、「昔人見たか見ぬか、良夜の月明は琴を調ぶる如く、ちんつんく、そのみならず、そよよく風の吹く時、鳳鳴のおともするときは、才智道徳兼備の衲子出て来らんと、昌老は實に人天の眼目じや、人の目を驚さんとなり。」

⑧潭老號古因。因は回水なり、古文なり、音は淵と同じ。

⑨蛟龍、神禹。珠云く、「龍のすみか久遠劫より古い淵神を自在にせられた、神禹でや此の古因の淺深は量り知ることならぬ、此れは古因の道體測るべからざるを嘆す。」

⑩好把、沛然。珠云く、「凝は把住流は放行、一本泉流に作る。消息は種子の義、只だ淵の水をいふ、沛然は雨盛にふるごと、此れは古因の施用が、濟ふところあることを羨む。」

⑪溈溈者。西は越州をいふ。

①梅影、吳中。送行の時を序す、溈溈牧牛年久し、已に吳中の水榭に飽いて、今越中に行き、これ飽參の故に道香比倫なし、吳は東國の故に。珠云く、「梅の花は散りまばらに残り、蘭はそろそろ香を吐く時節じや。」

②荒田、款款。これば牧牛飽參底、宜しく郷に歸りて住巻すべしとなり。珠云く、「一切衆生の荒田、一切處觸目みな好草なれども、牧人は挿ぶことをせぬ、心せくことはない、ゆるゆる故郷に歸りて、悟後の修行に骨を折れと。」

③僧字止中。忠曰く、「身を處するに而も過不及なき、道を見て邊郊に居らず、是れ止中なり、蓋し五方の鳥、鳳凰を中央となす、故に之に託して止中の號を授す。」

④鍊實、擇木。鍊は當に煉に作るべし、此れは中を述ぶ、凡そ實は穀中に居る故に、木は止を述ぶ、全篇鳳凰を以て比況して製す、鳳は

田觸日無人揀 款款歸來帶月耕

① 僧止中と字す

② 鍊實而食、擇木而棲、靈靈自晦

③ 物物難齊、秋斂巢虛睡穩、夢

破月印清溪

④ 閱侍者鏡潭

⑤ 雨過天風靜、波光似鑄成、不須頻

鑑照、妍醜自分明

⑥ 牧童

⑦ 煙暖谿頭艸正肥、儘教牛飽臥晴

曦、捲桐又入深深塢、吹盡春風不自知

⑧ 漁父

⑨ 菰蒲葉冷暮天低、斷峯舟橫水四圍

⑩ 祗有一竿浙楚竹、未嘗容易下漁磯

⑪ 曾禪人唯之

の鶴的、無一物の境界になり得て、心安く日がさめて見たりや、月は中心に在り、溪水にきつかり浮んでみえるを云ふ、これ兼中到の場じやぞ。」

⑤ 閱侍者鏡潭。閱は即ち師の門人、瑞巖録を集む、今その號を試す。

⑥ 雨過、波光。宜しく鏡潭を看るべし、正に鏡潭を述ぶ。珠云く、「雨過ぎ雲散じて、そら吹く風もおだやかに、風もなければ波平に、げに明鏡の如くじや」と。

⑦ 不須、妍醜。其の智識自然に圓成することを嘆す。珠云く「此方より彼れこれと心を加へるには及ばぬとなり、水月共に心なくてわかる。」

⑧ 牧童。此の題は次の漁父と相對す。

④ 當頭一語未爲親 大道難將語默分

⑤ 不聽晚風江上笛 一聲吹破碧天雲

⑥ 拈禪人太白に之く

⑦ 明明不可銷 斷續復誰聽 海上有癡

⑧ 山中無白丁 天風生寂籟 霜月下

⑨ 寒汀 子去忘幽討 重岳猶未局

⑩ 萬松山にして張省元に贈る

⑪ 鐵 仰 無門 靡不通 靜 如古井

⑫ 鑑 秋 容 樂天自得道中術 時引

⑬ 清風一吹萬松

⑭ 僧台鷹に遊ぶ

⑮ 音旨雙消不可聞 捲衣南去與誰論

⑯ 龍湫水溢石橋滑 得路應敲尊者

⑰ 門 牀屏の怪松

① 菴有、未嘗湘楚は好竹を産す、今は派脈所出の高きを表す、三四の句は黄蘗の所謂自ら一雙無事の手あり、曾て等閑の人を掛せず意のなり、碧岩十一則の評に見ゆ。珠云く、「たゞ宗乘向上の一著子を提持して居る故、三根機に應じて引接する手段はあれど、まだん、釣らうとせぬ、波上をにらんで吞舟の魚をえんと。」

② 曾禪人唯之。唯之は號なり曾子曰く、「唯」と、「吾道一以貫之」との語に出づ。

③ 當頭、大道。當頭は打頭端的の義、一二の句は曾子曰、唯之、一絡索を述べ。言ふ意は如此端的、應諾未親證爲ず、大道は本語黙を離るゝが故なり。珠云く、「伊でも呂でも幻影裏を行く如し、しかとわかぬ、語でも黙でもほつこり

うが、おきやうが、彼が本色に任す、ぶちもたゞきやせぬ」

④ 捲樹、吹盡。捲樹は忠曰く、「未だ據を見ず、蓋し桃の皮を巻いて之を吹くの類なり、牧童好んで吹くところ、之を吹いて山阿に入るなり、桃訛して桐と作す乎」と。或は桐木の皮を以て巻いて角となすと。珠云く、「向上の秘曲を弄す、世間なみ、の音律とちがうである、花が散らうがわれもしらざる人もしらす、大無名故に。」

⑤ 漁父。珠云く、「了事の納僧機を収めて亂り二人を接せざるを頌す。」

⑥ 菴浦、斷岸。菴浦は水草、秋江清冷の春、釣魚の時に宜し、珠云く、「なにはのあしは秋風ぞふくちやう釣を垂れてよきをりから、斷岸舟楫と彼此通路なし。」

⑦ 白山中皆英靈の漢のみ。珠云く、「今時二利の妙を得たる人は外にないが、只た癡絶一人のみ」つき

落をものは、よたものとは一人もない、強將下に弱兵なしじや。」

⑧ 天風、霜月。言うは天癡絶の道眼を助生すとなり、此の句は第二句に應ず、霜月はその道徳の光にたとふ、此の句は第一句に應ず、珠云く、「其の道音は目にも見られず、手にも取られず、道光さへぎつてもものすごい、汀は平沙、すさきなり。」

⑨ 子去、重岳。幽討は重岳幽遠の勝處を尋討するなり、太白たとひ重岳の關あるも、子が幽討を忘れずして、必ず當に容接開展すべしとなり。珠云く、「拈禪人、今行き去つてもおれがところのひだるささむさを忘れてはすまいぞ、再び思ひ出して来るであらう、おれも待つてをるほどに、戸ざしをせずにおく。」

⑩ 萬松山贈。萬松山は延福寺の山號なり、張は姓、省元は官名なり。

⑪ 鐵仰、靜如。これは論語の子罕篇の「仰之彌高、鑽之彌堅の句に出づ、仰は及ぶべからず、鑽は入るべからずじや、此の道鑽れば堅く、仰げば高し、故に都へて入路なし、然れども畢竟通ぜざんばあるべからず、唯だ鐵仰の心、敬得して、徹底寂靜なるときは、則ち自然に洞然明白なること、譬へば古井の清冷の秋色を鑑るが如きなり。珠云く、「さすがの顔回もあぐみぬかれた、此の大道一心に信得及すれば通ぜずといふことなし、此の張氏は己に得道底の人、世間を離れて靜なり、すみ上りたち上りすみわたりたること古井の如し。」

⑫ 樂天、時引。言うは天眞の理を樂んで、道中眞術を自得す、故に能く時時に清風を引いて、萬松を吹かしむとなり、清風は張公の惠風に喩ふ、一二の句は大道の入門を

分らぬ。」

② 不聽、一聲。三四の句は唯だ但だ餘行なきの意を述べ。珠云く、「きいたかきかぬか、いづくともなく誰れ吹くとも知れぬ、眞箇語黙に涉らぬ底の端的、びいの一聲、煩惱菩提、一時に吹き滅す。」

③ 拈禪人之。太白は天童なり、此の時、癡絶席を匡す、絶は密處の嗣曹學生の法嗣、癡絶道冲禪師なり。

④ 明明、斷續。一の句に癡絶の德光を嘆ず、言ふ意は始此明白なる故銘旌すべからずと、二の句は絶の説示を嘆ず、此の兩句は癡絶を稱贊するの蒙蒙なり。珠云く、「此の宗乘向上は明々としてどこをどうとおぼえしるしならぬ、地獄も明々録鬼も明々、此の曲調は斷つとも續うとも、此の道の妙音き、手がなぬ。」

⑤ 海上、山中。此れは正しく名を標す、言ふ意は天下唯だ癡絶のみありて、白丁は賤者の稱、言うは太

國譯虛堂和尚語錄 卷七

二二三

蛟幹虬巧作蟻 鱗鱗鬣鬣自生寒

臥間不致爲妖去 只就濤聲起處看

僧越に歸る

露激風搏岸艸秋 捲衣何處上蘭舟

無方始是知方者 莫傲支師泥沃洲

遠塵軒

開窓種脩竹 鑿石構方池 良夜月

來此 勞生幾箇知

金華の洞天に遊ぶ

颯颯崖溜靜邊聞 到此仙凡咫尺分

鶴駕朝眞何日返 洞門終日鎖寒雲

婺の守趙玉堂に寄す

儒釋同科到者稀 道融冰雪鑑精神

微 和平堂上公餘坐 靜看寒雲片片歸

ぎぬけよ、修行しぬいて無漏

の羅漢の果徳を得る處まで行

きぬけ、尊者の門は末後の半

圓じや。龍湫は鴈瀆にあり。

林屏怪松。臥牀の屏風に畫く

所なり。

蛟幹、鱗鱗。鱗あるを蛟龍と

いふ、角あるを虬龍といふ。

珠云く、「よくかいた、實に

生きた蛟龍が蟻つて居るやう

な。うろこほうひげいきく

して。

臥間、只就。牀屏の故に云ふ

珠云く、「暗に泉大道の事を

用ふ、此れは齋にかいたのじ

やのより、かいて現があるの

と、松はばけはせぬ、泉おぬ

しがばける、墨繪にかきし松

風の音をきくやうにせよ、松

濤を云ふのじや。」

僧歸越。越は即ち浙江の絶興

府なり。

驚激、捲衣。其の時を序づ、

寄婺守趙。趙は姓、玉堂は蓋し宮

中學士の直る所、趙必懸と云

ふ人か。

儒釋、道融。言ふ意は三聖の施設

する所、天性眞如、自然の教ぞ、

言異なりといへども、その理同じ、

珠云く、「眞箇到り得た時は儒釋

同じこと、しかし到るもの稀なり

道の根元を見敬ずれば、氷元より

水なり。

和平、靜看。趙は居る所の堂の名

公餘は公務の暇に、燕居無事の體

なり、向上無心の境界、却つて三

教を會し、卷いて一邊に抛つの機

なり。寒雲のひらりくくと山のあ

なたへ飯ることをながめをる。

題書畫什。書は能書、畫は名畫、

什は卷尾の義なり、十篇を一卷

となすこと、詩の鹿鳴之什などの

註にあり。

發揮、優彼。全篇書と畫との妙手

を嘆ず、此れは畫をいふ、二の白

は書をいふ、色絲とは絶の字、少

蘭舟は魚が斑木蘭を刻んで舟を爲

ると云ふ故事。珠云く、「露はひ

やつく、秋風はあらく、秋の野原

のなにとなくあはれなる景色、袈

裟も衣もひつからけて、どここの湊

から乗つて行つたぞ」と。捲は「か

まげる」なり。

無方、莫微。法身は自在無方の故

に、方所に滯泥なきを方を知るも

のとなす。珠云く、「法身の上は

は方處なし、まことの知音じや、

得法の人じや、沃洲山は紹興府に

あり、管の支道之に居る、今此の

僧は越に歸る、故に之を引いて以

て誠む、その意は越の一方に滯泥

するなかれ、宜しく此に再來すべ

しとなり。

遠塵軒。今隱棲の小堂に扁す。

開窓、鑿石。開は設なり、窓前脩

竹をうえ、石を穿鑿し方池を構ふ

と、これ隱者の説くべきところな

り。

良夜、勞生。此の兩句は遠塵離垢

書畫什後に題す

① 發揮多古跡、優彼色絲辭、逸少觀、神處、元暉、縱墨時、室虛蛟自觸、神久樹、生悲、得處何機感、尋披常爾思。

冬夜に俊侍者に示す

② 守得鳥薪暖氣回、夜深寒重易成灰、因思百丈重挑撥、轉使鴻山眼不開。

開

③ 靈竺の權衡之姿の守を訪ふて雙林に會す

④ 不將一字顯今宗、隨處溪山老眼中、想見金華舊知己、未容明月照歸蓬。

⑤ 西蜀の言道士、昔夏を嶽山に同じうす。三

十年後、僧伽犁を着けて復た雙林に會す。不拜星壇不步虛、裂冠來下死工夫。

女は妙の字なり。珠云く、「此の巻物をづらりと開いて見れば、詩は語ある書、書は語なき詩。」
⑥ 逸少、元暉。晉の王羲之、字は逸少、鵝を愛す、道徳經を寫すとき、鵝を愛す、米元暉友仁は元暉の子。珠云く、「書法を見ることは、いかに逸少が換鵝の妙、丹青の妙なる處は、實に元暉の繪を見る如し。」

⑦ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

⑧ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

⑨ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

⑩ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

⑪ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

⑫ 室虛、神久。室虛は書を云ふ、その筆勢譬へば室虛已に虚にして、蛟龍自ら觸破するが如し、神久は書をいふ、其の古跡多き中に、神廟の久しく廢して、槁樹生けるが如き悲しきものあり、此の兩句の故事未だ審ならずと。珠云く、「室虛は此の書軸を展るの處、草書の如き勢、蛟龍飛翔し、觸するやうに見える、自然に

神心悲愴を生じて、圓中の樹木悲風を生ずるやうに思ふ。得處、等披。言ふ意は何の神機妙感を得てか、感機に奇怪なるか、當に其の所得を尋思すべし、深く嘆ずる義なり。珠云く、「皆々書畫に妙を得たと云ふものはどうしたものであらうぞ、其の妙處書畫に發する故に、玩者の機を感動するなり、爾思とは古書古畫の人を指すなり。」

⑬ 冬夜示俊。俊は即ち師の門人寶林録の編者なり。

⑭ 守得、深夜。鳥薪は炭をいふ、珠云く、「仲冬嚴寒さむさもさむければ、炭を焼いてあたれば、暖氣春のやうな、夜が深けるに隨つて、炭は灰になり、寒はますます。」

⑮ 因思、轉使。傳燈錄鴻山祐の傳、一日百丈に侍立するの緣。珠云く、「因思とはそれにつ

⑯ 因思、轉使。傳燈錄鴻山祐の傳、一日百丈に侍立するの緣。珠云く、「因思とはそれにつ

⑰ 因思、轉使。傳燈錄鴻山祐の傳、一日百丈に侍立するの緣。珠云く、「因思とはそれにつ

⑱ 因思、轉使。傳燈錄鴻山祐の傳、一日百丈に侍立するの緣。珠云く、「因思とはそれにつ

書畫什後に題す

① 發揮多古跡、優彼色絲辭、逸少觀、神處、元暉、縱墨時、室虛蛟自觸、神久樹、生悲、得處何機感、尋披常爾思。

冬夜に俊侍者に示す

② 守得鳥薪暖氣回、夜深寒重易成灰、因思百丈重挑撥、轉使鴻山眼不開。

開

③ 靈竺の權衡之姿の守を訪ふて雙林に會す

④ 不將一字顯今宗、隨處溪山老眼中、想見金華舊知己、未容明月照歸蓬。

⑤ 西蜀の言道士、昔夏を嶽山に同じうす。三

十年後、僧伽犁を着けて復た雙林に會す。不拜星壇不步虛、裂冠來下死工夫。

書畫什後に題す

① 發揮多古跡、優彼色絲辭、逸少觀、神處、元暉、縱墨時、室虛蛟自觸、神久樹、生悲、得處何機感、尋披常爾思。

冬夜に俊侍者に示す

② 守得鳥薪暖氣回、夜深寒重易成灰、因思百丈重挑撥、轉使鴻山眼不開。

開

③ 靈竺の權衡之姿の守を訪ふて雙林に會す

④ 不將一字顯今宗、隨處溪山老眼中、想見金華舊知己、未容明月照歸蓬。

⑤ 西蜀の言道士、昔夏を嶽山に同じうす。三

十年後、僧伽犁を着けて復た雙林に會す。不拜星壇不步虛、裂冠來下死工夫。

は神妙の謂なり、口邊神妙を發す、故に其の瀆演の滯らざるはたとへば斷崖飛瀑の如しとなり。珠云く「不思議に古人の靈機を發顯して此の口びるでよくも、述ぶることじや、其の談說するありさまはさながら瀉水の如し。」

⑥ 若言、迦葉。迦葉門前刹竿とは、不傳の妙の證なり、一二の句は龍演、三四の句は所演を述ぶ、珠云く「列祖の大事、以心傳心の處をも、口でのべらしと思ふな、若し言說傳受があるならば、迦葉無因例刹竿じや、あだことならん容易に口を下すなとなり。」

⑦ 淵默、鈍根。淵は深なり、名を打す。語黙不二の境に於て、善く全機を發すとなり、鈍根とは師自ら謙下するなり、言は淵此の如く後快靈利の故に、予が如き鈍根の阿師、争か頂門の一椎を下すことを得んとなり。珠云く、「平生究め来り究め去る底、是れ淵默の

地爐深處燒紅葉、曾記三生舊話無、

僧史を演ぶる錢月林

淵默雷聲善發機、斷崖飛瀑逼人寒、

若言列祖有傳受、迦葉無因倒刹竿、

淵禪人乳峯に之く

淵默雷聲善發機、鈍根難下頂門椎、

青霜黃葉壓窮野、急急歸來見隱之、

羅漢樹

稽首如來種、悲生末世中、枝枝成小

果、葉葉現神通、海月分清影、天香逐曉

風、願惟迷已者、視此出樊籠、

四明の守黃侍郎に上つて、延福を辭す

雨化仁陶德愈馨、如春物物自生

成、昔年秀水曾觀政、却與鄞江一樣清、

石牀久矣臥雲林、六十銀絲雨髮侵、

續的、その處直に大機あり、

接得の善巧方便、全獲透脫せ

しむることは、虛堂此の方な

どのできることでない」と。

青霜、急々。青霜の故事は淮

南子の天文訓にあり、今送行

の時を序して、兼ねて淵禪修

行、霜露果熟す、宜しく頂門

の一椎を喫すべし、隱之は雪

寶の字なり、名は重巖、雲門

の中興と號す。此に滯ること

なかれとなり。珠云く、「夏

があいて、ゆくさき」どこ

もかもちたる秋の景、又宗

旨も秋の末になつたほどに今

ゆくものには急々とはなせ、

但し虛堂か雪寶かの句に參ぜ

よ、自己にたち俯つてと。」

羅漢樹。或は羅漢松と稱す、

天台山に多し、天台は乃ち五

百應眞の境なるが故に、此の

名あり、日本の「まき」なり

仙人相ともいふ、「いぬまき」

なり。

稽首、悲生。稽首は首地に至

ると、此れ即ち九拜の初拜な

りと周禮にあり、如來種は即

ち羅漢樹を標す、末世の衆

生を悲む、故に能く久住の法

を修して、今日に致つて現在

すとなり。珠云く、「はても

貴き此の樹かな、なぜ一草一

木、盡く如來種佛日所生の兒、

末世の衆生を利せんがためけ

ふの今日まで是の如く現在し

てまします。」

枝枝、葉々。此の樹、果小な

る故、羅漢樹と稱する乎、小

果神通みな羅漢の事、風にな

びいて動く處さながら遊戯神

通のありさま。

海月、天香。海月は天台の海

之を観る乎、或は隣境の故に、其の政を観るか、鄞江は寧波府にあり、言ふ意は其の政、鄞江秀水と一様し清しとなり。珠云く、「まへつかた國のをさめ方を見奉つた、隣境の鄞江までも同じやうによくをさまつた、鷹飛んで天に戻り、魚淵に躍ると云ふ如く、上下一様に。」

石牀、六十。雲林は山林をいふ、言ふ意は延福山林に住すること已久し、行年六十、白髮滿頭なり、珠云く、「さて延福の石牀に久しく年月をかさねて、いつのまにやら六十になつた、兩鬢具に白く成つた。」

海上、掬溪。言ふ意は、天下の名刹を歴遊するの心已に息む、只た黃公政治の下に於て、溪水を掬んで老を養ふとなり。棠陰は政治の下をいふ。珠云く、「うま／＼世界に出て、出世應世の念更になし、黃藥の如く杯を浮べて漳濱を渡る

らぬ、句がする、あさのあらしに吹きくる句。」

願惟、觀此。珠云く、「なにとぞどうぞ、末世の情愛妬害に迷つて居るやから、此の樹のありさまを見るにつけても、三毒五欲の樊籠纏結を離れせよと、羅漢の苦境に至れと。」

上四明守。寧波府を四明と爲す、この頃は兩篇なり、前篇は侍郎の仁澁物に及ぶことを讚美す、後篇は直に歸休の意を述べ、蓋し仁徳の故に自ら便を得せしむ。

雨化、如春。言ふ意は仁徳物を化成すること、譬へば甘雨鈞陶の化成するが如しと。春は人間に到つて弄物なきが故に、珠云く、「雨露の恩、民をあはれみ天下を治むる、自然に衆民善にうつる。」

「はえそだつ」なり。

昔年、却與。秀水は嘉興府にあり、蓋し黃公嘗て嘉興府に在りて政を布く、師、興聖報恩に住する時、

國譯虛堂和尚語錄 卷七

二一九

海上浮杯心已息 掬溪容我竊棠陰

寂照庵主に寄す

遠引高蹤繼覆盆 一龕枯寂是前身

秀峯影裏閑措眼 見盡深雲未到人

祖躬禪人に示す

祖意明在爾躬 際之不見用無窮

擬心更欲重提掇 一片驚秋葉

隨空

安座主衣を更ふ

良遂曾敲麻谷門 不相謾處主資分

子來親見虛堂叟 兩耳垂肩坐白雲

天竺にして僧の昌邑に之くを送る

肅然凝日引秋光 帆過東溟白鳥行

不即不離雖自肯 海山誰爲說經王

山をいふ、深の字流布は探に作るは訛なり」と思は、いへり。珠云く、「見盡は世間未開眼はうろつきまはるを見つくす未到未徹なり。」

祖意、際之。これは名を打していふ、珠云く、「祖意とは單傳心印の端的、日の如く月の如し、爾が鉢とは喫茶喫飯、厨屎送屎の上、何物ぞと思ふて眼をつけてみる」と。

擬心、一片。珠云く、「心に擬度をして、またしても如上の端的をとらへやうと思へ、見ようと思へば秋の木葉が落ちて庭のけがらゝ如く中々見えぬ。際之は念起、用は日用、提掇はこれが意をじや。

安座主更衣。講僧の衣を更へて。禪者の服を著くるなり。

良遂、不相。此の縁は顯孝録に出づ、今座主の故に拈合す、珠云く、「良遂は教家の關取

不相謾は兩回門を閉づ、是なり、師資眞誠の處、眼皮綻びてみれば、臨濟下四寶主も手に入るやうに成つた。

子來、兩耳。珠云く、「安座主親切に相見、磨谷が勸を把つて方丈に飯を、却つて門を閉づるの端的底、この虛堂門下は銀も荷はず、門も閉ぢずたゞ坐白雲じや。」麻谷は一向に把住し、師は一向に開放すとなり、要は空に作るべし。

天竺送僧。杭州府に上、中、下の三天竺寺あり、昌邑は四明の昌國縣にあり、本秦の句章縣の地。

肅然、凝日。嚴肅として目を凝せば、日光時に秋光を引くとなり、秋時僧の行を目送するの謂なり、惟ふに明州は即ち州の杭東南に當る、故に東溟といふ。珠云く、「秋氣肅々たる時に、目を凝して其方

動靜雙び照す

舉息冥方所 徒稱宋地僧 百年

應自擲一飯若爲憑 風暖闌山鶴

煙消露石稜 分甘雲水共 終

日任騰騰

物我兩ながら忘す

居常多不器 情謂盡方知 有眼挂空

壁無心合祖師 袈穿隨手補 客

至下階遲 或問虛堂叟 慫慂

慧禪人萬年に之く

鼠入錢筒伎已窮 十年蹤跡眼頭空

如今又問平田路 山舍半吹黃葉風

明禪者に示す

面壁風規久寂寥 兒孫旋旋立新條

に行く方をながむれば、秋の氣色ぞつと身にしみわたる、昌邑はあの帆のゆく方はるばる海の東、白鳥のつらなりて飛ぶが如し。」

不即、海山。言は此の僧不即不離中道の理に於て自肯承當すと雖も想ふに夫れ海山數千里の中誰ありて此の僧の爲めに宜しく眞詮を説いて證明すべきとなり、頌中本如經王の事を用て句草に因む。

動靜雙照。次の題とともに相對す、共に徹底無心の機を述べ、珠云く、「兩鏡相照して中に於て影像なし、明暗雙々底。」

舉息、徒稱。舉は動、息は靜、冥方所とは雙照すが故なり、珠云く、「世間差別の上に、是非喜惡、さつばりなき處、其の上又人は人、大は火、方所とは本分とも現成とも面目

とも眞如とも云ふ。」徹底無心の故に舉動息靜共に定方なし定所なし、是れ雙照して惑閉なきが爲めなり、然れども且く其の生成の方所に約して、徒に宋地の僧と稱するのみなり、此の兩句に頌し盡して、後面は此の意を廣む。珠云く「徑山の虛堂と云ふ、云へばいはせておくのみ、本來無名無相なり。」

百年、一飯。言ふ意は百年の壽齡、尙ほ爾り、況んや一飯の利養をやと。珠云く、「一生生涯、此の身で放擲してしまふた。」

風暖、無消。任運天眞の景象を述べ、此の篇、前虛後實の鉢なり。珠云く、「こんな句は音聲を止めねばむだこと、煙の雲が消えて見たれば、山の石のけはしき處がみえる、こりや隻手のすがたかなんじや

分計、終日。分計は白肯なり、肯
ふて風雲流水の僧と爲る故に、終
日騰々行運に任す。騰々とは蓋し
奔馳自在にして、制約に拘はらざ
るの義なり。珠云く、「虚堂も自
ら甘んじて、白雲流水と其の去留
を共にす。騰々は起きたりねたり、
動靜双照の處、此の二句、師の本
體正意。」傳燈三十に騰々和尚了元
歌あり。

物我兩忘。能所共に忘すで、權兵
衛が我が、我が權兵衛か。

居常、情謂。論語の爲政篇に「君
子は器ならず」と、註に「器は各
其の用に適ふて相通ずること能は
ず、成徳の士は轉具せざるること
なし、周からざるることなし、特に一
材一藝の爲めのみならず。」珠云
く、「この大道は悟を入れる入れ
物でもない、迷を入れる入れ物で
もない。」情謂は情塵言謂なり、自
他の情謂なり、珠云く、「分別の
ある内は見えぬ、隻手音聲をきく

と情謂がしれる、物我兩つながら
忘るゝ底は、此の兩句に斷盡した
れり矣。」

有眼、無心。所縁の色なきが故に
觸縁の心なきが故に、珠云く、「聞
いたことも見たこともない、目に
ひまをくれる、無心とは背觸の手
に入つに境。」

納穿、客至。上は自ら約して無心
受用を述べ、下は他に約して無心
應接を述べ。珠云く、「衣がやぶれ
りや、みごと手が縫ふ、下階運し
と、よちら〜といそぎもせぬ、
迎に出る。」

或問、懇懇。物我兩忘して憎愛な
きが故に、平等大慈自ら現前する
なり。珠云く、「もし和尚、ごき
げんは如何と問ふものもあれば隨
分まめでゐたが、此比はねうちも
ないと無心底じや。」

慧禪人之萬年。江湖集にも此の頌
を載す、その註に「萬年は天台に
在り、舊は平田寺と名づく、百丈

下の平田普岸の遺場なり」と。
鼠入、十年。老鼠入二牛角と一鼠、
并偷心死し盡して、大悟の端的を
表す。珠云く、「一旦此の處へ踏み
込まねば、文殊普賢と手を取り合
ふて行くことはならぬ、蹤跡とは
慧禪人十年已來、諸方參得底の行
蹤言跡、一時に掃ひ盡して、眼頭
却つて見るべきなり。迷悟凡聖天
堂地獄、一時にぶちやぶつてしま
ふ。」

如今、山舍。路上の山舍に黃葉の
風あらんとたり、外面送別の時節
を序して、底裡霜露果熟し、因縁
時至ることを述べ、これは秋葉黃
落、平田の端的面目じや、轉了ぜ
ば轉た參ぜよ、目前具體で別事は
ない。

示明禪者。後録の佛事、侍者慧明
編すと、蓋し其の人手乎。

而壁、兒孫。此當は全く少林の因
縁を舉示す、初祖九年面壁して大
乘根を攝得す、その風度規矩、

不知斷臂緣何事、血灑空庭雪未消

齊禪者道場に之く

峯從險處自孤起、石到虎邊飛冽泉

門戶既難子宜去、莫辭深雪立庭前

厲道人弗云と字す

身墮虚空一如夢覺、萬機截斷住天真

單單留得孃生口、箇事如何說向人

靈山の聽猿齋の祖首庭、無傳と號す

龍猛因緣會北齊、轟轟南嶽到荆溪

宏綱若謂無人舉、誰聽孤猿月下啼

覺如居士に酬ゆ

覺體如如不變時、能驅萬象入毫釐

耶城裏無人識、一默雷轟只自知

北山の庵居

國譯虛堂和尚語錄 卷七

今春として消息なし、故に久
寂寥と曰ふ。珠云く、「初祖
大師、孤危の眞風、高古の風
規、久しくたえてなくなつた」

法久しくして弊を成す、故に
兒孫旋新様の條章を立つ、祖
規によらず。珠云く、「いか
めしく少林の兒孫と云ふて、
次第に眞轉してめづらしき新
法のさとりをしへる。」

不知、血灑。此れは二祖を抑
揚す、言ふ意は斷臂却て因事
たとひ熱血空庭に灑ぐも、積
雪未だ消せざるなり、未悟解
の義を表す。珠云く、「不根器
のものばかり潭山にある。」

齊禪者之、通場。湖州道場、
護聖萬歲禪寺に雪峯閣、伏虎
道場、石山等の境致あり、開
山は如訥禪師、翠微學に嗣ぐ
運菴も此に住す。

峰從、石到。特に雪峰の境を
述べ、次の句は暗に伏虎の境

を述べ、此の兩句は道場山の
境致に寄せて、其の機鋒親近
し難きを表す。珠云く、「大
道も亦是の如し。」又云く、「虎
跑泉と云ふがあり、虎に似た
る石の邊より湧き出づるな
り。」冽ははげし。

門戶、莫辭。蓋し此の時運菴
師、道場に住する故、親しく
門戶の入り難きことを知る、
凡そ修行の要は、大活宗師を
擇ぶに在り、故に勸めて去ら
しむるなり、又四句は二祖求
法の事を引いて之を激勵す、
珠云く、「志願堅固ならでは
容易に運菴の門戶へ入得する
ことならぬ、又古人の願心を
ならへとなり。」

厲道人字弗云。弗は分忽切、
珠云く、「不道の意乎。」

身墮、萬機。上の句は放身捨
命の處、佛地論にある、能く
自ら開覺し、亦能く一切の有

二二三

情を開覺すること睡夢の覺むるが如くに、蓮の開くが如く、故に名づけて佛と爲すとあり。二の句は、永嘉の云く、「法身覺了すれば無一物、本源の自性は天眞佛」と已上は悟證の事を述す、藏頭の格なり。珠云く、「背觸をうちぬくと夢さめたやうな心地する、佛祖を見ず、地獄を見ずじや。」

① 單慢・簡事。正に佛云の義を頌す、珠云く、「單々はれ但といふが如し、それでも只だやつぱり母の生みつけた口はあるけれども、夢覺の端的、をんばにも語り知らせられぬ、語りても自ら知らぬものは、をや指じや。」

② 靈山聽猿。靈山は靈隱なり、聽猿齊は靈隱聽猿の題あり、江湖集介石の頌、祖首座は此頌に據らば蓋し台宗、首座は上座なり、要覽に講經論の首座より、この頌は祖々無傳の義を取る、
③ 龍猛、轟々。梵に那伽閉剎那此に

は龍猛と云ふ、北齊尊者慧文は龍猛を台宗の高祖として、文は第二祖、大智度論の中觀一品を讀んで立つところ、南嶽慧思は第三祖、荆溪は九祖。轟々は車の鳴るが如く繁昌するを云ふ。

④ 宏綱、誰聽。言ふは祖々皆無傳の心觀を以て展轉傳受す矣、上の宏綱の大宗をば、今日若し人の提舉するなしと謂はば、聽猿の祖公即ち是れ無傳の心觀を傳ふる底なり。珠云く、「此の祖首座こそ宏綱提舉の人、猿聲中夜に聞くとは、凡情つき切つて中道第一義諦の法門に入得するを云ふ。」

⑤ 覺體、能顯。覺如の字を打す、居士に開ゆる故に、全篇維摩の事を言ふ、言ふ意は如是能く萬象の火を顯つて、毫釐の小に入る底の不思議解脱の法は、本覺體如々不變の時より出でたり。珠云く、「覺體は背觸の端的、不變は全體空假不變如々は一切如々、如レ山如レ河如レ

男如レ女じや。第二句は隨緣眞如を述ぶ。第一句は不眞如を述ぶ。④ 毘耶、一默。猶ほ淵默雷轟くが如し此の理人の識るなし、居士自知すとなり。珠云く、「如上の端的をよく知りてゐるものは、維摩ばかりじや、だまつた中に、天地震動する場合があると、そりや誰れじや、只だ此の居士一人じや。」

⑤ 北山鹿居。北山は、靈隱なり、師費林に住すること五年、強寇の難に嬰りて松源塔下に歸す、此の時の作なり。

⑥ 祖擔、岳樓。言ふ意は世間に出得して祖道の重荷を荷負す、寔に以て堪へ難し、其の間、或は岳樓洞飲の者あり、我れ儘其の洞を攀ぐべしとなり。儘は「まゝにする。」なり。

⑦ 愛閑、遇興。これは人に約す。珠云く、「佛法の重荷をおろしたゆえ。」
⑧ 谷嘯。聰明。虎嘯き風生ず、又猿

① 祖擔終難、荷、岳樓儘可舉、愛閑嫌日短、遇興不知還、谷嘯風搏虎、聽明月啓關、餘生無異念、贏得放疎頑。

② 恭欽二禪人、長庚に之く、難兄難弟未、全知、毒種從來眼戴眉、若到鄧江有、雲處、九峯寒碧鎖清池、月上人の幽室を訪ふ

③ 竹裏池清雲屋深、萬機冥合道人、心有門不、是無人到、自是雲蹤不可尋

④ 東湖の薄侍者に寄す、聲前未舉已先知、曾用輪機陷國師、險處與誰分勝負、蘋花汀艸暗相宜

⑤ 秦梨園を送る、井梧初墮列芝園、櫻笠秋行過海邊

に約す珠云く、「谷の風のうなるは虎か嘯くかと思はれ應のあかりは月が出たなど知るぢや。」

⑦ 餘生、贏得。珠云く、「生涯ふかき望みなし、只だ、かゝつたことには(ました)ことに(ぶ)しやうやりはなしものになつたと。」

⑧ 恭欽二禪。此の二人は同じく一師に出づるならん時代を考ふるに、欽は雪岩、恭は自然か共に無事に嗣ぐ、長庚は大白天童なり。

⑨ 難兄、毒種。兄たり難く弟たり難く、恭欽の二人はどれが兄とも弟ともとも見わけられぬ、其の優劣を知るべからず、惟だ一般毒種惡芽、各々眼に眉をいたぐとなり。

珠云く、「親が親なら子も子じや、綿裏に針を包むの意、二人を稱譽すること太だ至れ

② 若到、九峰。鄧江は寧波府の城東にあり、又天童も同じ、有雲は山をいふ。九峯、双沼、萬工地、清園、翠錦亭等は天童山にあり、山主の峻機入りがたきを表す。珠云く、「峯影の碧色、池を鎖して湛へて流れず、すみ切つてみえる、これは法窟の爪牙奪命の神符がある。」

③ 竹裏、萬機。雲屋は洞房の謂ひ、その深幽の室見るべし、世縁を遠離する故に萬機皆其の心に冥合せずと云ふことなし。珠云く、「幽室をすつと望んだ處が、げに塵俗はなれた處じや、うきもつらきも消えはて、實に坐禪坊主の心地する。」

④ 有國、自是。言ふ意は門あり八字に打開すと雖も、敢て世人の到るものなし、自らは是れ

① 沙上有^レ人搏^レ律虎、謂^レ言^レ經^レ鈔^レ未^レ曾^レ詮^レ

② 涇^レ禪^レ者^レを^レ送^レる

③ 自^レ息^レ明^レ邊^レ秋^レ思^レ遠^レ、逢^レ人^レ未^レ語^レ齒^レ先^レ寒^レ

④ 他^レ年^レ祖^レ室^レ爭^レ頭^レ角^レ、雲^レ外^レ歸^レ來^レ略^レ借^レ看^レ

⑤ 薄^レ禪^レ人^レ、踈^レ山^レに^レ歸^レる

⑥ 故^レ山^レ臨^レ汝^レ夢^レ秋^レ江^レ、況^レ是^レ蛩^レ吟^レ月^レ到^レ臆^レ

⑦ 不^レ住^レ京^レ華^レ南^レ蕩^レ寺^レ、法^レ身^レ歸^レ去^レ問^レ枯^レ梅^レ

⑧ 立^レ禪^レ人^レ平^レ山

⑨ 依^レ依^レ遠^レ勢^レ接^レ雲^レ根^レ、有^レ路^レ何^レ曾^レ氣^レ急^レ人^レ

⑩ 澤^レ廣^レ既^レ知^レ藏^レ不^レ得^レ、異^レ花^レ靈^レ艸^レ自^レ生^レ春^レ

⑪ 宣^レ知^レ客^レ江^レ心^レに^レ歸^レる

⑫ 風^レ帽^レ雲^レ巾^レ歷^レ所^レ期^レ、問^レ津^レ何^レ似^レ到^レ家^レ時^レ

⑬ 曲^レ關^レ半^レ倚^レ垂^レ楊^レ外^レ、潮^レ落^レ潮^レ生^レ祇^レ自^レ知^レ

⑭ 節^レ維^レ那^レに^レ寄^レす

⑮ 幾^レ度^レ忘^レ言^レ話^レ、克^レ賓^レ叢^レ林^レ音^レ響^レ許^レ誰^レ聞^レ

上人靈妙の蹤跡、直に羚羊の角を挂くるが如し、故に尋ねべからずと、幽室の所以を述ぶ。

① 寄東湖溥侍者。台州府の東湖は府の城東にあり。

② 聲前、會用。侍者なれば忠國師三たび侍者を喚ぶの縁を用ふ言ふ意は國師未だ三たび喚ばざる已前、早く落處を知る其の三應は會て輪機を以て他を陷るが爲めなり、是れは應滅の法なり、今拈じ來りて溥公の靈利なるに比す。珠云く「一の句は山を隔て、煙を見て、早くこれすりばあなることを知る、侍者の伶俐を云ふ先づ箇の事を知るじや。」

③ 險處、蕪花。言ふ意は輪機が他を陷る底の險處、商畧すべきものなし、只だ東湖々邊、蕪花汀艸、現成、自然の境界夫の無功用道に於て相暗に宜

しとなり、溥公の機鋒適に類倫を絶すること見るべし。蕪は水中のうきぐさ、汀はなぎさ、平沙なり。

④ 送泰開梨。律家の僧なり、世間に超出したるもの。開梨のことは前にづ。

⑤ 井梧、樓笠。芝園は慶元府の端岩なり、初秋夏末送行の時なり。珠云く、「井梧は桐の未だ目に井の字の形の紋あるを云ふ、すげがさ一蓋。」

⑥ 沙上、謂言。律虎は隋の高僧法顯の故事、今泰開梨に比す作麼生とつきかゝつたならばと言ふは、海邊沙上行程人あり、泰律虎、今夏甚塵邊の事をか明らかと問せば、只だ他に對して謂言せよ、箇の事諸經諸鈔未だ曾て詮註し出さずと。珠云く、「神宗の旨は言語の外じや、經鈔等に依つたとじやない。」

① 送涇禪者。似涇禪者は育王錄の編者なり。

② 白鳥、蓬人。言ふは涇禪、夏了秋初、渺々たる海波白鳥明邊に向つて遠遊を思ふなり、其の預め未だ遠方風波の難を語らざるに商先づ寒しとなり。珠云く、「末語とははるるゆくかと思へば、身の毛もよだつやうにおもわれる。」秋思ははるるの舟路、白鳥はおきのかもめ。

③ 他年、雲外。言ふ意は他時活祖の室内に入りて、他と頭角を戦はずは、機鋒を交へ去らんも、たとひこれ遠方雲天の外に在りて、急に歸り來て、略我に借與して、頭角を看せしめよとなり。

④ 溥禪人歸踈山。東湖の溥侍者乎、踈山は金谿縣西北に在り、中和の間、始めて建つ、白雲禪寺開山は匡仁禪師、この頃は淨慈に在るときの作。

⑤ 故山、況是。臨水は撫州府にあり

⑥ 夢江水は府城の南三十里にあり、みな撫州にあり、江名に托していふ、蜚吟は感腸の切なるを述ぶ。珠云く、「故郷のことなれば、なつかしくて行かぬ、先きに夢にみる、まして秋の時節、きりり、すなどのなく月夜、夢に見るも道理」

⑦ 不住、法身。京華は臨安府にあり南蕩寺は淨慈寺なり、南山淨慈ともいふ、蕩は山の火にして廣平なるを云ふ、法身歸去とば會元に撫州踈山匡仁の章に問答あり、法身上の事、踈山曰く、「枯栢に非ず」と、商畧をせんとて販らる。

⑧ 立禪人平山。立禪は蓋し師の門人、前の眞譜の部に、本立藏主の語あり、今其の號を頌す。

⑨ 依々、有路。山をいふ、其の形容見るべし。珠云く、「一二の句は平山を云ふ、依々ば山の樹茂く盛なること、遠勢は山の連りなり、爪ききあがり、雲根は石なり、一條の活路あり、氣急は平山ゆえ。」

⑩ 澤廣、異花。莊子の大宗師に、「舟を壑に藏し山を澤に藏す」と、あり。尋常だと澤廣くして山を藏すも、今法界平等の山の故に、藏すこと得べからず、その内有るところの異花靈艸、自ら春色を生ずとなり。珠云く、「この平山は土でも金でも作つたものでもない、天は非想非々想、下は金輪奈落の底までもじや、無量無數の寶財は法門をたくはへる。」

⑪ 宣知客歸。名は可宜、無示と號す報恩錄の編者なり、江心寺は温州府城の北の江中に在り、建炎四年高宗皇帝是の寺に幸して、清暉、浴光二軒の名を御書す、又龍翔院ともいふ。

⑫ 風帽、問津。風帽雲巾は行脚の具なり、預め行かんと期する所、徧歴せずと云ふことなし。珠云く、「木綿頭巾に白手拭やれ江の鳥だの録倉だのとて。津を問ふとは從前遍歴の時をいふ、今は江心に歸るを

① 海山秋夜對孤月、應記北高峰頂雲

② 李新恩竹杖を恵むに酬ゆ

③ 一枝蒼玉寄霽人、遠勝邛州九節杖

④ 添得老來山水興、指空敲石看飛雲

⑤ 元藏主遊方す

⑥ 罵詈瞞曇說脫空、年來分外惡情悰

⑦ 吳山越水相逢著、放出蜂蟻咬大蟲

⑧ 得頤

⑨ 地窄天寬古所聞、誅茅分得半

⑩ 谿雲、有時夢覺羅牕底、懶聽前峯鹿叫羣

⑪ 冷泉に文禪者の天台に之くを送る

⑫ 慧理呼猿日、葛仙成道時、地勝人

⑬ 難到、去來誰得知

⑭ 信禪人を送る

在り、普説に見ゆ、蓋し師、靈隠の驚蟬菴に棲むときの作

なり。珠云く、「應記北高峰頂雲」とは、必ず此の様な話をしたことを忘れやるとなり。

① 李新恩、前の法語の部に、無波李新恩に示すとあり、茲に知んぬ、常に師資の縁あることを。

② 一枝、遠勝。蒼玉は竹の美なるをいふ、霽人は即ち小人、古字通用、虚堂自らをいふ、邛は當に邛に作るべし、九節は竹の節に九節あり、仙人の杖なり、邛州は四川の雅州なり、紫竹の名産地なり。

③ 添得、指空。此の杖を得る故に、ます／＼老後の興を一入をもしろうなり、指と敲とは杖の能なり、これは添得たりを述ぶ。「此れが富士山、此れが白山と云ふて、飛雲を見

いふ、其の優劣知るべし。」珠云く、「うきつらい旅路、それより我家に飯つて安樂に脚を伸べんには本分家郷安心の田地なり。」

④ 曲閣、潮落。歸家穩坐、逍遙自得の境界を述ぶ。江心に歸りて後、龍翔寺の曲閣に倚つて垂楊の風になびくを見て居ると、其の外潮落ち潮生するを見る境介、宣知密、指ををらでもとづくに合點、これが本分の家郷じや。

⑤ 幾度、叢林。維那の縁を引く、幾度か覺えずして克實維那の事を語る、此の公、叢林第一の音響の故に、轍く人の聞知することを許さずとなり、比況して節維那の聲價を稱嘆す。珠云く、「外に知り手はなけれども、節首座ばかりは知つてゐる。」

⑥ 海山、應記。北高峰は靈隠にてをる。それが杖を恵むを謝するになるか、おゝなるとも「／＼」と珠長老は書きそへてゐる。

⑦ 元藏主遊方。蓋し日本の鎌倉開覺の開山無學祖元なり、元享釋書祖元の章に時に、愚虚堂、驚蟬菴に棲む、元常に往來す」とあり。

⑧ 罵詈、年來。藏經を典る故に上の句はいふ、脱空とは小人形、はりぬきを小説空といひ、大を大脱空といふ、うそをつくと云ふこと、如來の一大藏經四十九年の説法、これは無學の號を諷して云ふ、分外は分量の外、感情悰は「こころばへあしき」なりで、わることんじやうなり。

⑨ 吳山、放水。言ふ意は諸方若し本分の宗師に逢はゞ、此の如く超師の作略を用ふべし。

⑩ 珠云く、「放出とは向上宗乘の些子、那箇か逢著した端的。」

⑪ 得頤。齋の偏なり、頤は養なり、住菴して徳を養ふことを得るの義なり。

⑫ 地窄、誅茅。溪下に卜居してあれば、地はすぼく天はひろし、誅茅は草茅を誅動し、以て力め耕やしの意なり、菴菴を建つるを多くいふ、已に建菴し了る、溪の半は雲が來つて菴内に入る、雲中間の意なり。

⑬ 有時、懶聽。獨處寂寞の情見るべし。珠云く、「有時ははからず、鹿の鳴くをきくに付けても善知識がないと思へば鹿のなくをきくがいやじや。」

⑭ 冷泉文禪。冷泉は靈隠にあり、前の法語の部に、「梓文禪人に示す」とあり、次の哀に北堂に臨むとは此の人乎。

⑮ 慧理、葛仙。慧理法師、呼猿

⑯ 誠信之言是道根、出門句子要區分

⑰ 溪山到眼知慚愧、莫學叢林飽見聞

⑱ 正禪者庵に歸る

⑲ 方廣靈蹤爲絕槩、到者紛紛殊不會

⑳ 亂雲深處着禪庵、孤猿啼在羅窓外

㉑ 文禪人哀に北堂に臨む

㉒ 捲衣東去淚沾巾、蘭谷風香二月春

㉓ 天地豁空舒笑眼、不知誰是報親人

㉔ 雪竇の足首座に寄す

㉕ 光鋸曾不著纖埃、拂拭磨鷲心已灰

㉖ 秋夜不禁猿嘯月、與誰同上妙高臺

㉗ 衍・鞏・珙三禪德、國清に之く

㉘ 誰知三隱寂寥中、因話尋盟別鷲峯

㉙ 相送當門有脩竹、爲君葉葉起清風

洞は飛來峯下靈隱にあり、今師の居處、葛仙は昔しこゝで台州府の葛仙翁は葛洪と云ふ仙人が、天台で得法せり、一の句は靈隱二の句は天台を云ふ。

誠信、出門。諺を打す、華嚴に云く、「信はこれ道の元、功徳の母一切諸の善根を長養す。出門の句」とは送行の儀を分付せんことを要須す」と。珠云く、「信は人間のくゝり、信の一字が肝要じや、五常も信がくゝり、四時の中土用が信じや、信禪人行くか、行くときは此の信の一字、能く合點せよ、信の一字をとくと辨別してゆけ。」

僧の嚴に之くを送る

對蒲方話羅臆底、又握山藤破曉煙、領取桐江到家句、子規啼在月明前、逢侍者を送る

銷鏢精微復見人、青鞋踏破幾重雲、鷲峯孤頂來辭我、祇有秋光可共分、本禪人爛柴

祇爲到頭乾不盡、縱使見火亦難吹、年來歲往消磨去、不許春風管帶伊

崖泉、虛室に應ず、天籟發中靜、峯高遠出雲、有來非眼聽、無處足心聞、蒲冷禪衣弊、應虛月影分、大功終不宰、縱爾自云

增長するを誡む。珠云く到る所の溪山みてきただけで、今まで他に向つて求めた元來本具なるをしると、博覽強記、名利の僧とならぬやうになれ」と。

正禪者歸庵。住庵して跡を晦すなり、蓋し庵は天台にあるか。方廣、到者。方廣寺は天台に在り五百應真の墟なれば、その靈蹤絶繁知るべし、世人の住庵の佳趣を知らざることを迷ぶ。珠云く、「行くもの、漸く羅漢に御目に掛つたの何のかのと。」

捲衣、關谷。母の裏に赴くの故にいふ、關谷は瑞巖をいふなり、峯下谷て紫芝を生ず、故に蓋し師、瑞巖に住するの目、此の頌を作る

たり、餘は行に臨むの時を序す。珠云く、「母の死と聞いて行く、文の郷里、東にあり、時節はいつなれば春關の香しき比。」

天地、不知。別に一機を示して哀を助くるなり。言ふ意は天地靈空の大活處に歸して、笑眼を舒ぶるときは、哀すべき親と及び報ずる人なけん」と。珠云く、「我れ知らず、大笑が出やう、虛堂はとんと合點はゆかぬ、親に報ずるものも報ぜらるゝものもない」と。

雪覆足。前法語の部に、「如足首座に示す」といふあり、蓋し此の人手。光鉞、拂拭。鉞は刀の端なり、今は智劍をいふなり、足首座智見を磨きぬいた。智劍出で來つて一物なき故に。珠云く、「煩惱も菩提もじや。」

壇致なり。珠云く、「脱洒自在の衲僧でもいともかなしく虚堂と足首座と雜居して居れば、向上の大事をはなす人もない。」

行鞏珠三禪德。行は石帆惟行師の法弟、鞏は石林行鞏、珠は横川行珠、此の二人は謬滅翁に嗣ぐ、昔松源の孫なり、因清は天台教忠禪寺、又は五峰山景德國清禪寺といふ。

誰知、因話。因清に三隱堂あり、豊干、寒山、拾得三聖の事跡なり、今三禪德が國清に之く、故に特地に三隱の境を用ふ、この跡は寂寥たり、故に人の知るなし、只だその事跡を語るに因つて、遂に其の境を思ふて、三禪約を定めて鷲峯に別れて彼に之く、師時に靈隱の鷲峰菴に在り。

相送、爲君。無心任運の送別、道理を作すべからず。無學祖

後、諸方に行聞するが如し、青鞋云云は遠方に徧遠するなり。珠云く、「古人の撥草騰風したる如くじや。」

① 驚拳、既。有。此の頌もまた前篇と同時の作なり、別に一法の分付すべきなきを云ふなり。珠云く、「一既一陣の月のみありて、汝に分付す有力量の侍者じや。」

② 本禪人。燭。號なり。

③ 祇爲、縱。言。言ふ意は此の榮從頭乾枯し盡さず、故に燭し難しとなり、此れは從前修行の不熟を述べ、見火云云は生枯なればじや。吹は「もゆる」と文選にあり。

④ 年來、不許。消磨は燭却をいふ、凡そ舞木花の開くること、おのづから春風の伊を管帶するあるが爲なり、今は燭枯柴の故に、春風の管帶を許さずとなり、此れば修行純熟して、人惑を受けざることをのぶ。管帶は「つかさどる」なり。⑤ 岸泉應虛室。崖泉は瀑布にあらず

只だ岸より滴るゝ泉聲のみ。ぼちり〜とおつる水の岸よりするを云ふ、蓋し閑坐寂寥の時此の題を説く。

① 天籟、峯高。天籟は莊子の聲物に出づ、今之を以れ崖泉に比す、言ふは天籟發動の中、特に此の聲靜なり、岸の水の落ちることなくを云ふ、二の句は崖泉の所出を述べ、遠方から流れてくる水を云ふことを知る。

② 有來、無所。岸に滴る泉聲の故に時に間斷あり、其の有聲の時に、直に耳を以つて聴く、眼處聴く底に非ずとなり。其の無聲の時亦常に之に慣ふ故、以て心聞するに足るとなり。珠云く、「山河大地ある處、假諦門轉木國土なき處、空諦門。

③ 蒲冷、應。崖泉の瀑深き故に、虛室屏障なき故。珠云く、「蒲に坐して水聲をきいてをれば、虛室の意のさきへ月の影がさしてゐる。」

④ 大功不宰。大功ありて萬物を宰制するの心なし、これ大無心の境界なり、平日の大無心の故に、崖泉の聲の自然に云云たるに任す。珠云く、「虛室、響を入れ月影を入れて、とんと功あらず、たとひ泉聲二六時中、言語の多き如くなるとも、本より宰せず云云はからずかざりなく、柳綠花紅。」

⑤ 題漁磯。この頌虛堂和尚の遺蹟は日本にも來りて、近來ある家より、賣品の中にあり、譯註者は其寫眞を見たり。

⑥ 秋竿、沙鳥。古來漁父の頌を述べ、皆秋の節を用ふ、蓋し宗師、化度門に出づ、必ず須らく學者の根器純熟の時なるべし、沙鳥とは近傍せざるなり。珠云く、「一人の漁翁、秋竿を把つてじや、あまり粉かなゆえ、人が人にあらざる手とうたがふ。」

漁磯に題す

秋竿倚石臺、沙鳥暗相猜、一草有時動、幾朝魚不來。

① 電雷相者

② 妙處未形三寸舌、神眸一燭更無餘。

③ 季咸退舍許負死、湖海識人方見渠。

④ 大義庵主

⑤ 山根旋縛尖頭屋、溪上新開數畝田。

⑥ 老矣不能重展手、倘筇疑目送寒煙。

⑦ 傳禪人空谷

⑧ 洞然非洞亦非盤、箇裏有神誰解看。

⑨ 未啓口前先應諾、聽時莫被耳根謾。

⑩ 小師無二が中川に回るを送る

⑪ 展江來訪竺山春、貴爾尋師已得人。

⑫ 莫學橫趨未歸客、至今塵土滿衣巾。

魚を英靈に比す。珠云く、「一舞動くゆえ、魚來ると思ひしに、魚來らず、空しく磯邊に數朝も立つてながめ居る。」

① 電雷相者。説相者、又は談命者等なり。

② 妙處、神眸。此の相者未だ言に形さず、一見して盡さずと云ふことなし、知人の妙鑿此の如し。珠云く、「妙處とは人の善天禍福なり、心に之を知り、切に言語に露さずとなり、開レ口非ニ舌頭上」と云ふ如く、一見辨見のこしはせぬ。」

③ 季咸、湖海。季咸は古の相者頌古に見ゆ、舍ば三十五里を一舍となす、左傳に「退くと三合して原降す。」許は可なり、死を負ふと命を負くと一般、當に須らく死を以て償ふべしとなり。言ふ意はたとひ季咸も此の電雷に對せば、退舍歸降して命を償べしとなり

④ 大義庵主。舊解に曰く、「大義はこれ菴號、即ち以て菴主の名となすものか。」

⑤ 山根、溪上。山根は麓なり、尖頭屋は二間四方位の小屋。

⑥ 老矣、倚筇。菴主に係けて言ふ、化度門を欠けて、日に雲霄を見、三世佛を吞却ず、兩手を展べて大義を説くこともならぬ、四の句は住菴化度の心なればなり、庵主に雲烟を送り、見林敬を爲すのみなり。

⑦ 傳禪人空谷。號なり。

⑧ 洞然、箇裏。洞は改なり、盤は谷なり、韓文の盤谷の序の事を用ふるとなり、空谷に託して本分を表す、空谷聲を傳

ふ、神ありと爲す所以なり、形を以て語るべからず、故に云ふ、誰か看ることを解すと。珠云く、各神はうづほの神、盤は兩山の間を環るをいふ、又盤旋の義なり、神は「こたま」なり。

未啓、聽時。空谷は物の聲に應ずる其の迅疾なること此の如し、夫の聲を聴く、流を成む。珠云く、「不似耳聞心聞好。」

小節無二。江心龍翔寺は温州永嘉縣蓋江の中間、中川孤嶼等の境致あり、この頌は江湖集にもあり。

盤江、貴爾。師、鷲峯菴に居るの日、小師來つて省觀するなり。人を得るとは中川の主を稱す、宜しく隨侍して蘊奥を究むべし、珠云く、「盤江の中間に中川あり、鷲峰松源塔上、天然の上方にあり、うれしいことには（貴）、その方がよき宗匠に隨身してをることじや。」

英學、至今。高亭、江を隔て、徳山に見えて、開悟横超して過ぐ、

更に江を渡らず、未歸客とは抑下の謂なり、所謂師を離ること早くして、未だ歸家大休歇に到らず故に之を引いて小師を戒む、四の句は深く其の過を呵す。珠云く、「世界の知識は是を賞ぶ、虛堂門下さうでない。」

此軒。如足首座の號なり舊解に此れは自己をさすと。忠曰く、「布袋契此翁と稱す、此の字の意此に同じ。」

一梁、綽々。此軒を述ぶ、軒は知るべし、此は只だ是而已にして餘蘊なし。忠曰く、「一二の句は軒を頌す、上梁正しく、下柱承當一差互なし。詩に云く、「綽々として裕ありと言ふは、一梁一柱のみにして、餘材なしと雖も、然も其の内寛裕にして、自ら横に布陳すとなり。」

誰擬、温然。此は此を述ぶ、此は彼の對、故に云ふ、誰か擬度し誰か即就すと、温は軒を述ぶ、その氣

温和にして故新なし、これなんの軒ぞや。忠曰く、「三四の句は此の字を頌す、言ふ意は此の自己攝り度るべからず、又眞性に即すべからず、若し眞に即すと爲すは、二物に合するなり、自己と爲す可からず。誰は自己じや、自己軒中と久遠劫來此の如し、なんぞ故新なからんやとなり。」

此軒

一梁對一柱、綽々自橫陳、

誰擬復誰即、温然無故新。

古梅

千年苦樹不成春、誰信幽香似玉魂、

霽雪滿林無月曬、點燈吹角做黄昏、

獨舫軒

踪跡渾如漾綠漪、畫橋曾不近漁磯、

有時夢落秋江去、短笛橫吹載月歸、

霞光亭

靈跡冥符豈易量、故應祥彩發天藏、

眞風不逐三韓去、直至如今艸木香、

泳侍者、青王の藏主を受けず

劫空田地自由身、眼綻無心曲一墳、

探討正音誰可擬、調高終是過行雲、

明ならず、恐らくは誤りて人の枝を折ることを、是に由つて燈を點じ角を吹いて、爲に昏夜の衛護を做すとなり。珠云く、「それでも雪の林に満らたるは花の聞く如く、殊に月の影もなり、故にきづかひに思へば、もしや人が此の梅の枝を折るまいと云へぬからそれ故點燈吹角、梅樹を黄昏の時守護するなり。」

獨舫軒。舫は舟なり。

踪跡、畫橋。軒所在の地、蓋し昔昔舟の轍溝に深ふが如し、畫橋とは軒の故に。珠云く、「一句は獨舫軒のようだし、畫橋は只だ船を云ふ、橋は船につきものなればなり、漁磯に漁多舟し、これに近づかね故、獨舫なり。」

有時、短笛。此の軒に臥すとその夢當に是の如し。珠云く「あるとき圓らず夢に獨舫に

のり、笛を吹き月を載せて歸つた。」

霞光亭。未だ且つて其の處を審にせず、舊説に明州開元寺に在りと。

靈跡、故應。冥は幽なり、符は信なり、應化の聖は靈跡を顯す、幽信を發す、人情を以て測量すべからず、祥彩は霞光を云ふ、天藏は天の秘藏、所謂靈跡冥符と云ふもの。珠云く、「靈跡は世界國土、觀音淨土無刹不現身、祥彩は大光明、天藏は凡下のしらぬ大慈大悲からかやき出る」

眞風、直至。これ眞風去らずの證なり、逐三韓とは東坡集の三に、高麗の使都下に在り餘境に至る毎に、圓高して以て歸る、今言ふは霞光の靈跡縱に看て寫し出すや、眞風は三韓を逐ふて去らずと、四の句義同じ。珠云く、「觀音の

⑦ 明知客、江心より竺峯を訪ふ

⑧ 歷盡風霜、貌不枯、獨體前下死工夫、

⑨ 梅林句子千鈞重、江上歸來記得無、

雪に對す

⑩ 郊郊寒翠濕、癡雲、暗剪水花、巧著春、

⑪ 多話風前初重竹、可思深夜立庭人、

⑫ 上竺池院より鷺峯庵に歸る

⑬ 鷺嶺心旌動、池邊影漸疎、一生無定力、

⑭ 七十尙移居、細雨洒松塢、涼風挽竹與、

⑮ 白雲相望處、跼跡自渠渠、

⑯ 白雲端和尚の韻を次いで、楊岐會禪師の

塔を禮す

⑰ 來拜東山祖、峯高日來尖、遐瞻

心已足、右繞與何長、啼鳥驚人去、

⑱ 飛花過水香、西河爪牙在、曾不媿汾陽、

を比すれば、則ち泳公の正音

とは受用する所、眞正擧揚の

處、高山とも流水とも擬すべ

き、奏音の悲歌の行雲を過む

如く。

⑦ 明知客江心、雪蓬明公なり、

公は師に兩處に従つて鷺峰に

在る時、明公特に江心の龍翔

寺より來つて相訪ふなり、竺

峯は靈隱の北、高峰上天竺の

上に在り。

⑩ 歷盡、獨體。珠云く、「此の

一大事の爲めに、霜辛雪苦、

而も病身にはなりはせぬ、佛

天の加護する故に、獨參苦辛

を喫して衰へざるなり、大死

一番底、痛切の死工夫を下す

到る處大無心の工夫を作す。

⑮ 梅林、江上。師、寶林に住す

の時、大法を提誨すとなり、

宗要向上の句子なり。四の句

は暫時在らざらんことを恐る

其の町噂の告戒見るべし。珠

云く、「汝さきだつて、寶林に於

て示す所の句子をわすれずにあた

かとなり。」

⑫ 郊々、暗剪。邑外を郊といふ、寒

翠はをぐろなる竹やぶなどの陰

晦をいふ、癡雲は雲の凝滯をいふ

雪花に因りて冬春の色を著くとな

り。

⑬ 細雨、涼風。此の腰聯に據つて知

ることを、松塢は上竺をいふ。珠

云く、「歸り路のありさま、竹與

に乗つてかへれば、涼風も袖を引

いてなごりをしう思ふやうな。」

⑮ 津文集に「南人は谷を言ふて場と

す。」

⑰ 白雲、跼跡。宋の孝宗淳熙三年三

月駕して上竺に幸し、香を炷いて

大士を禮敬し、詔して護國金光明

道場を建て、白雲堂の印を賜ふ云

云と、跼は通じて局に作る。渠々

は動なり。言ふ意は白雲堂前に到

り、怖畏動蕩して過ぐとなり。珠

云く、「ふりかへり池院の方をな

がめやり、せくせまり、ぬきあし

すおそれのよきつとめるなり。」

⑱ 白雲端和尚、白雲守端禪師は楊岐

方會に嗣ぐ、雲蓋會和尚の遺塔に

題すと(正燈錄)「五峯諸祖塔、我

祖據中央、山脈朝來正、溪光瀟去

長、僧移雲際樹、客厭海邊香。」

雲蓋は潭州に在り、此の頌典に次

頌は、禮祖塔に就するもの乎。

⑰ 來拜、峯高。東山演は白雲端に嗣

ぐ、端は楊岐に嗣ぐ、故に祖と稱

す、塔は雲蓋に在つて、峯高しと

日を遮るなり、その道望の高峻を

表す。

⑱ 遐瞻、右繞。年來の志願を満たす

故、「右繞は禮敬の式、面、西に

して北に轉ず、右の肩を祖き、侍

して佛に向ふて恭す」と、飯敬儀

にあり、圓覺經には「一頂禮佛足、

右繞三匝」と。珠云く、「まして

塔崗に到り得て、なにとなくうれ

しい、楊岐の霜辛雪苦を思ひやる。」

⑮ 啼鳥、飛花。常に人を見ること少

なる故に、此の兩句は塔下景物を

述ぶ、是れ前虛後實なり。珠云く

「是の如きの端的、楊岐の面目を

見るやうなり。」

⑱ 西河、曾不。汾陽の正脈、此の老

に歸す、故に西河師子の話は育王

道吾の雷遷塔を禮して、石霜に在り

祖師靈骨見應難、霹靂聲中過別山、

父子祇緣機不密、翻成千古是非關、

夢庵居士の性宗集を謝す

性本無宗夢亦非、萬機難透一真機、

有時暗與乾坤合、笑看春花秋葉飛、

崇福の源長老に寄す

一髮千鈞適此時、風前無語皺雙眉、

松源正脈將枯竭、潑發靈源復是誰、

愷藏主瘦嶺と號す

南宗北祖爭衣處、雨洗風磨石尚新、

靈跡豈知千載後、叢林猶有昔時人、

白糞を夢函に寄す

黃稀爛春如切玉、醉人風味忍

沾唇、火爐頭話煩君舉、莫作

但大師資一著を放過して機密

ならず、故に遷不遷あらん

やじや。

夢庵居士。蓋し夢庵、性宗集

を撰ぶ、而して師に寄す、師

偈を以て之を謝するなり。凡

そ性宗は眞空を明す、相宗は

妙有を談す、故に相宗は性相

染淨差別の義を明す、性宗は

生佛邪正一如の旨を談す、頌

意之を以て見るべし。「龍樹

は佛滅度十三世にして、始め

て文字を用て第一義諦を廣む

其の學を嗣ぐものを法性宗と

號す」と宋高僧傳六に出づ。

天台や花嚴は法性宗、法相俱

合は法相宗。

性本、萬機。性本宗なし、こ

れ眞空破相の義なり。理の本

源當に是の如くなるべし、只

だ宗無きを以て宗と爲す、之

を性宗といふ、居士深く此の

破相の旨を會し、夢を以て庵

列子仲尼の篇に「髮を以て千鈞を

引く」と、勢等しきに至ればなり

「白馬馬に非ず形名離るればなり」

と同書にあり、髮は輕し千鈞は重

しじや、佛祖の惠命一髮を以て千

鈞を引くが如し。言ふ意は其れ危

なり、源長老は即ち師の門下、故

に當時大法の下衰を嘆じて以て激

勵す。二の句は常に風物の前に在

りて、笑語無うして、眉を皺めて

法門の廢墮を傷痛すとたり。珠云

く、「大切な宗旨、今衰ふ、長老

よくきけ、次に向つてはなすこと

もない。」

松源、潑發。靈源は枯竭の字に應

ず、兼ねて名を打す、復是誰そと

は源公其人なり。珠云く、「此

の祖師の眞風、なにとぞ吹き起さ

ずにおくまいと、思ふ人は、たれ

であらうと。」

愷藏主。徑山前録を稱す。

南宗、雨洗。南宗の慧能、道、南

方に行はるゝ故に、南宗と稱す、

北祖は神秀、化、北地に施す故に

北祖と云ふ、衣を争ふは達磨所傳

の信衣を争ふなり、處は大庾嶺な

り、南安府なり。二の句は衣を擲

つた石は放鉢石なり、今に嚴然た

りと、曹溪五百の大衆、争ふて之

を取らんとす、追ふて大庾嶺に至

り、久立して渴を告ぐ、六祖錫杖

を拈じて石を點じて、泉湧清冷甘

美なり、衆駭きて退く、卓錫泉と

いふ。

靈跡、叢林。庾嶺は六祖に依つて

靈跡の稱を得たり、今又庾嶺と號

す、故に四の句は。珠云く、「六

祖よりの外はないと思ふたに、今

天下に愷藏主は、昔しの六祖の如

く大法荷擔の人ぢや。」

白糞寄夢函。祖師、油糞等の話あ

り、糞は恐らくは當に糞に作るべ

し、糞の字は稻餅なり、諸釋等に

作る、白餅なり、夢函は蓋し師の

門下か。

黃稀、醉人。「じゆつ」。「キビモ

に名づく、今本宗に據つて之を非

とす。珠云く、「見性端的、悟も

なく迷もない、さめたがなければ

夢もない。」二の句は萬生の心機道

の一眞機を透得し難きなり、一眞

機は眞空の性體なり、前には破し

了りて、此には顯示す。珠云く、

何を云ふもかを云ふも、たつた一

つ透りにくいことがある、自己本

有の一眞機じや。」

有時、笑看。此れは一眞機を透得

することを示す、蓋し萬機透り難

きことは、皆心に依つて差別の

境がある故なり。如來平等法身な

り、故に云ふ、乾坤と合すと。珠

云く、「大地漫々の處なんの沙汰

もない處で、千差萬別、それ〴〵分

ち行く、四の句は悟了後、現量の

飛花落葉を見る。」珠云く、「さう

してはどうじや、なんと面白いで

はあるまいか。」

崇福源長老。師の法嗣なり、興聖

錄の編者なり。

粘^レ方^レ綴^レ齒^レ人^一

淨髮の吳生

① 適意多^ニ雲水^一 尋^レ幽訪^レ所知^一 曾^レ於^レ竺

② 峯下^ニ會見^レ寶溪^一時^ニ巧理^レ數莖^一髮

③ 清點^ニ兩點^一眉^ニ忽忘^レ心手^一處

何謂^ニ不如^一斯

村樂の圖

④ 一年田地熟^ニ賦外樂^一天真^一 便不^レ打^レ鼓

⑤ 笛^ニ也是^レ太平^一人

⑥ 自ら息^レ咩^一を賦す

⑦ 葉深^ニ煙氣^一暖^ニ杭軟^一骨毛^一香^ニ巢^一

⑧ 許垂^ニ清節^一 臨^レ流^ニ不^レ爾^一忘

⑨ 鄱陽の復道者を送る

⑩ 相逢道人^ニ漆^一雙^一 衣衫^ニ零落^一迎^レ秋風^一

⑪ 甘將^ニ百骸^一作^レ泥^一上^ニ冷笑^一萬事^ニ如^レ展^一蓬

チ。儲春はよくついて、一とへぎく、白玉の如しじや。

二の句人を酔はしむるは酒をいふ僧家は禁酒なれども餅にした故、なんぼうくふてもあきはなひじや。

⑦ 火爐、莫作。珠云く、「これを食ふて茶話をなされて、よくやいて、粘牙殺齒は諸路溢泥の意なり、火爐頭の話は須らく脱洒なるべし、「言語泥滯を作すこととはかれ。」

⑧ 無言の人を表す言は火爐頭に此の白養を喫して、宜しく畢話すべし、徒に口を粘ずるの人と作るべからずとなり。

⑨ 淨髮吳生。人の鬘髮を剃るもの吳生は其の名なり。

⑩ 適意、尋幽。吳生が優遊するところの雲水、その意に適するもの多し、然れども舊知を訪ふて、吾が爾居に尋ね入る

となり。

⑫ 増於、會見。師、鷲峰に棲む時、師寶林に住する時、重ねて来るなり。會は「はからず」又この度なり。

⑬ 巧理、清分。師老いて髮衰ふ故に清分とは吳生が能事を遊ぶ。珠云く、「師は有髮、或は師の髮を梳るを云ふ。」

⑭ 忽忘、何謂。技は實に宜しく之を心に得て手に應ずべし、今日心手共忘る、其の技に約して悟入の路を示す、其の機斯の如し、人何ぞ疑はん。珠云く、「剃刀と我が手と頭とが、一つになつたたれが是をさうでないといふものがあらう。」

⑮ 村樂圖。農夫野老、意舞伴歌の村田樂を圖す。

⑯ 一年、賦外。豊年の故に、賦税の外各々任運天真の樂を致す、特に餅でもせい圓子もせ

便不^レ也^一。曉民瘵瘵の歌の如く

鼓や笛はふかぬ、自らこれ太平の象。宗師ならば大休歇無心の處。

② 自賦息^レ耕^一。師自ら息咩と稱す。今賦して其の志を顯はす。

③ 葉深、杭軟。葉深きは禾の繁茂を謂ふ、杭軟和なる故に、禾の骨毛香なり、是の如く、故に餅を息めて萬機休憩すと成り。杭は和名「うるしね」。珠云く、「秋の民色がよく、稻葉深茂る、稻を刈り收めて、食を見れば、身にしみ渡つてうまい。」

④ 巢許、懸流。言ふ意は巢父、許由の如きは、尙ほ未だ清節の名價を世に垂及することを忘れず、故に颯川の流に臨んで、其の心の潔清なることを示す、争か我が息咩して任運無心なるが如くならんと成り、巢許の事は報恩録に見ゆ。珠云く、「虚堂も出世邊の事を息めて、汝と清節の事を同しうす、我

れ今流にのぞんで耳を洗ひ、牛を牽いて歸るの事を思ふて、爾が巢許を忘れずとなり。東嶺云く、「生死流轉の衆生を濟度することを忘れぬとなり。」

⑤ 鄱陽復道者。江西饒州府鄱陽縣は鄱水の北に在り。或抄に云く、「初の四句は道者の家風を述ぶ、中ごろは佛法の衰へたるを云ふ、末には送行の願を云ふ」と、古説なり、然れども三首ならん乎、三處に眼あり。龍溪云く、「此頌は古詩の體にして換韻を用ふ」と。

⑥ 相逢、衣衫。靈利の眼目の相なり道者今行くに臨んでなり。珠云く復道者行くか、かひなくしく目もくろく」と、年久しく行脚して、衣衫もおちぶれてじや。」

⑦ 甘將、冷笑。百骸九竅、一身の謂なり、作泥土は換身なり、展蓬は猶ほ轉蓬のごとし、言ふは世間萬事、展轉反覆、展蓬の如しとなり。珠云く、「甘は俗語の「すき」なり、

法の爲に身を忘るゝなり、有爲轉變の世の中に。」

⑧ 當今、瓦缶。展轉衰替する此の如し、併は當に釜に作るべし、瓦器なり、酒甕を盛るものほどぎなり忠曰く、「わざとにこの字を用ふるなり、惡知識の高聲に説法するに比す。」

⑨ 正音、兩手。正音は邪説を揀ぶ、一線懸は斷えんと欲するをいふ、胸に枕んでこれは手の誤か、痛心甚だしきが故なり。或抄に「佛法祖道の正音、枕は當るなり。」

⑩ 行々、魔宮。已下送行の可憫なり言ふは法罪を顧みず、當に勇猛すべし、魔宮は邪師なり、虎穴は正師なり。珠云く、「行々は行脚を勤むるなり、格外の宗師の去處、佛界を出て、魔界に入る、常流を出て、奪命神符を具す。」

⑪ 山窮、伎倆。遊方の事に約して、心行處滅の持節を示す、伊れとは本分の面目を指す。珠云く、「萬仞

- ① 當今祖道薄如紙、瓦缶雷鳴聞人耳、正音却作一線懸、兩手枕胸淚如洗、
- ② 行行不借雨莖眉、魔宮虎穴俱探窺、
- ③ 山窮橋斷始得路、伎倆盡時方見伊、
- ④ 星婆の適莊居士に寄す、
- ⑤ 稽首毘耶金粟身、靜中多見閻中人、
- ⑥ 却將不二門頭事、時與虛空細講論、
- ⑦ 雪竇の性首座に寄す、
- ⑧ 祝融峯下燒紅葉、應夢山中看白雲、
- ⑨ 足跡未教容易見、誰知天外有人聞、
- ⑩ 茂侍者を送る、
- ⑪ 木葉辭柯霜氣清、虎頭戴角出禪局、
- ⑫ 東西南北無人處、急急歸來話此情、
- ⑬ 春日鏡に對す、
- ⑭ 不住復新新、來從幻裡真、舊髻皆變白、

展、進退究まる處、所謂路頭盡る處、初めて經過す、伎盡き詞極り、道亦窮るじや。」

② 星婆適莊居士。藝女は星の名なり、金華といふ地名あり。金星と藝女と、華(ひかり)を爭ふ、故に金華といふ。

③ 稽首、靜中。稽首は前に見ゆ、全く維摩居士の縁を用ふ、今栗如來の故に、此の歸敬を致す、頌古の外道問佛の下に見ゆ。珠云く、「今居士は安閑にして、世界の人を見てゐるよ。」

④ 却將、時與。不二門は維摩經の宗極なり、其の高遠の理、時輩の聞く所にあざればなり。珠云く、「世界にすぎと知音がなき故に、虚空のおやぢをあいてにして、此の居士は餘餘の知音はない。」

⑤ 祝融、應夢。性公南嶽、雲巖に在つて紅葉を燒き、白雲を

省る、皆猶光迹晦の事なり、應夢山は雲巖寺の山號、宋の淳祐中、無溪開のとき、宸翰の額を賜ふ。東嶽云く、「禪子の境界なり、世間をはなれ切つて、眼高うして白雲飛ぶを見る。」或抄に云く、「把住の檢を云ふ、目に雲霄を見、三世佛を吞却するの體。」

⑦ 足跡、誰知。聞く故にこの頌を寄す。珠云く、「性首座の平生の履踐、魔外も窺ひしれぬ外に知りてはない、此の虛堂があつてじや。」

⑩ 送茂侍者。石溪心月の法嗣に清涼南叟宗茂あり、蓋し其の人乎、此の眞蹟吾が朝にもありしも慶長の頃兵火、之を失す。

⑪ 木葉、虎頭。送行の時を序す、兼ねて霜露果熟し、意氣凛冽たるを表す、虎頭生角は、楊子曰く、「虎なる哉、虎なる哉

- ① 老眼尚精神、世事終難鑑、菱花亦有塵、
- ② 東風原上艸、不覺又生春、
- ③ 炳書記を送る、
- ④ 心鏡頻磨髮漸斑、照臨今古未嘗閑、
- ⑤ 己知所得離文字、此去禪棲必有山、
- ⑥ 法光藏主南徐に之く、
- ⑦ 三呼檣下愧靈樞、湖海叢林已徧尋、
- ⑧ 忘却飛猿舊時路、到頭曾不厭初心、
- ⑨ 實禪者歸省す、
- ⑩ 靈山禪起未溫席、却問潮陽過海船、
- ⑪ 咨省壽堂春日靜、究心應記白雲邊、
- ⑫ 環和尚、石庵と號す、
- ⑬ 空島爲屋薛蘿門、天巧渾無斧鑿痕、
- ⑭ 花鳥不來雲自合、堅拳消息與誰論、

角にして翼あり」と、その畏るべきを云ふ、十成裏楊の謂なり。出角異倫の衲僧を云ふ。

② 東西、念念。是れ什麼の處ぞ、言ふは本分の家山に歸りて、當に此旨を話すべしとなり。珠云く、「鋒に當る人はあるまい、虛堂が處へかへり來よ知音底の話をなせ。」

③ 不住、來從。楞嚴經に、「念念遷謝し、新に住まらず」と、今言ふは先陰遷流し、新に住らず、故に復た茲に春に逢ふなりと、眞相は遷變幻影從り來るとなり、暗に鏡を言ふ。珠云く、「人間無常、時々刻々、今此の鏡の影より來ること不實にして、幻中自り來る、然れども此の影象、鏡の本體に即して影象亦眞なり。」

④ 舊髻、老眼。光陰の遷流に隨つて、衰變す、所謂幻裡なり。鏡を見るものは衰變せず、所謂眞なり。珠云く、「算用してもわからぬものじや。」

⑤ 世事、菱花。菱花は魏の武帝の鏡の名なり、鏡も亦時に塵あり、故に終に鏡み難し。珠云く、「世間の事、有無定めなし、故は鏡中定め留められん、鏡の時にくもるが如し。」

⑥ 東風、不覺。言ふ意は只だ果風原上の艸のみあり、鑑覺分別せず、自然に春を生ずとなり。珠云く、「只だ相かはらぬものとは、今古の原上の艸なりと、遷に於て不遷流を述ぶ。」

⑩ 心鏡、照臨。これは炳の字に託して之を用ふ、炳は明なり、炳公修心鍊行頭切の故に、其の炳明鏡の如し、白頭に到る未だ曾て退屈せずとなり、二の句は炳明の心鏡を將て今古の邪正に照臨して、未だ閑然せず。珠云く、「古教照心

以心照古教也。」

⑤已知、此去。心鏡炳明を得る故に義において己に知る、文字を離るゝことを。四の句は送行の付屬なり、文字をはなるゝとは、書記のやくなれば、言説の相と名字の相とをはなれよと、汝いづくへ行くとも、すみかは澤山あるほどに、安心せよと、歸家穩坐底なり。

⑥法光藏主。法光は續編の編者なり南徐は鎮江府にあり。

⑦三呼、湖三。呼ば侍者の縁なり、橋下は寶林寺なり、故に續編の中寶林の遺録を拾ふもの多し、靈襟を愧づとば我れ師となつて、他の靈利の胸襟を愧づとなり。珠云くおれが處で侍者をして云ひたいやうに云ふたと思へば、其方の心ねがいかにとはらうることじや。」

⑧忘却、到頭。飛猿嶺は江西の建昌府にあり、光公は嶺南の生縁なり此の如く編參して歸郷の路を忘却するは、畢竟初發心の志願を退せざる故なり。東嶺云く、「十年不」

得歸、忘却來時路也、少を得て足れりとせず、果より因に歸し、因より果に歸し、骨ををる。」

⑨實禪者歸省。江湖集に四明虛菴實和尙の註に、虛菴に嗣ぐ、歸省とは郷里に歸りて親老に省親す。

⑩靈山、却問。靈山は師、鷲峰菴に住する時なり、禪は坐禪なり、未温席はその間いくばくもなくして早く禪席を起つとなり、潮陽は蓋しこの禪者の生縁か。

⑪吞省、究心。壽堂は母をいふ、或は北堂といふ、尊堂といふ、吞省は問候母の容貌を省親するなり。

⑫春日靜は、言ふ意は今去つて春に到りて、母の身體安靜ならんとなり。白雲の邊は遠程をいふ、至心に老僧が邊を記憶すべしとなり。珠云く、「母を見舞にゆくが、時節も永く禪定を修するに安靜なり、多年の願望成就して、此の上應に記すべし、自己も本來の父母に逢ふべしとなり。白雲邊は靈山の禪しや。」

⑬環和尚號石菴。環の音「えい」玉の光彩なり。

⑭空菴、天瓦。石菴當に是の如くなるべし、石菴は是れ人間の營造する所にあらざる故なり、空菴は石屋なり、天然と出来て、斧鑿の細工にてできたではない。

⑮花鳥、擊拳。此れは石をいふ、大功不幸の故に、花鳥不來じや、雲は石に觸れて生ず、膚寸にして合す、雲は自ら合す、故に百鳥花を獻し來らずとなり。珠云く、「此の和上の見地高き故なり、四の句は庵を云ふ、趙州因到一庵主處、問ふの語に因む。珠云く、「誰も知音があるまい、それは虛堂であらう。」

⑯可禪人歸江心。蓋し可禪人の師、江心に住す、今其の歸を送る。

⑰每思、孤嶼。可禪人毎に思ふ、その師拾得堅拂、我に於て微困深切なり、然れどもその恨み終に開い難し、孤嶼は江心龍翔の境致今開んが爲に江心に歸る時節秋月明歴なり。珠云く、「每度恩師を思ふて飯り度く思ふで恩を報ずることできなんだ、此の度飯るを得て、時節は八月ごろ。」

⑱堂上、題師。圓相を呈しとは代別の章、敬小師の機縁に見ゆ、本師へ相見してあらば、題師は禪人の師なり、師時に寶林に住す、故に雙橋を罵ると云ふ。題は付け字なり、堂上は師父の處、罵雙橋とはおれが接得ゆきと云ふと云ふ。」

⑳送僧省母。江湖集には僧を人に作る。

㉑十年、捫得。浙西八州、浙東七州、皆五十刹の所在地なり捫得はいたりおよぶなり、辛苦年老うることを極め得るなり。芫は頭髮の芫處なるをいふ。伏摩は額頂の骨相をいふ。此では遺骨にたとふ。此の兩句は、此の僧從前編歷飽參底の老成なるを述ぶ。

㉒因話、不禁。睦州陳尊宿、蒲鞋を織りて以て母を養ふ、高安の米山寺に住す。莎鷄は一名は促織、一名は蟋蟀。此の兩句は今飯郷省親の感を發するを述ぶ。

㉓寄郷省羅太尉。此の公、師の難を救ふ、育王錄に見ゆ。都省は尙書省なり、一人にして三公をかさねるの官。

㉔海涵、內相。涵は容なり。珠云く、「讀量寬大、海の萬流を容るが如し、山の草木を養ふが如し、其の氣溫和、陽春溫和をいふ。內相は大尉をいふ、聲華は名譽光華どこにも偏く聞ゆ。」

㉕綱紀、金瑤。瑤は耳の珠なり人主の寵渥を得て常に左右に

①可禪人江心に歸る

②每思、孤嶼、尋歸、月正、秋

③堂上若呈、圓相去、題師應、錯罵、雙橋

④僧の母を省するを送る

⑤十年來往、浙東西、捫得、頭荒、露伏

⑥因話、編蒲、米山老、不禁、秋夜聽、莎鷄

⑦都省の羅太尉に寄す

⑧海涵、山育、氣如春、內相聲華

⑨中外聞、綱紀禁庭、天龍密、金瑤長

染御爐熏

⑩淨覃藏主の遊方

⑪叢林荒落、水雲寒、風味辛酸、話轉難

⑫隱隱一枝、天外去、不如何地、擇人安

⑬德惟侍者、巡禮す

⑭巖桂初飄、好問津、軟風輕結、露華

べしとなり。白雲邊は靈山の禪しや。」

⑮環和尚號石菴。環の音「えい」玉の光彩なり。

⑯空菴、天瓦。石菴當に是の如くなるべし、石菴は是れ人間の營造する所にあらざる故なり、空菴は石屋なり、天然と出来て、斧鑿の細工にてできたではない。

⑰花鳥、擊拳。此れは石をいふ、大功不幸の故に、花鳥不來じや、雲は石に觸れて生ず、膚寸にして合す、雲は自ら合す、故に百鳥花を獻し來らずとなり。珠云く、「此の和上の見地高き故なり、四の句は庵を云ふ、趙州因到一庵主處、問ふの語に因む。珠云く、「誰も知音があるまい、それは虛堂であらう。」

⑱可禪人歸江心。蓋し可禪人の師、江心に住す、今其の歸を送る。

⑲每思、孤嶼。可禪人毎に思ふ、その師拾得堅拂、我に於て微困深切なり、然れどもその恨み終に開い難し、孤嶼は江心龍翔の境致今開んが爲に江心に歸る時節秋月明歴なり。珠云く、「每度恩師を思ふて飯り度く思ふで恩を報ずることできなんだ、此の度飯るを得て、時節は八月ごろ。」

⑳堂上、題師。圓相を呈しとは代別の章、敬小師の機縁に見ゆ、本師へ相見してあらば、題師は禪人の師なり、師時に寶林に住す、故に雙橋を罵ると云ふ。題は付け字なり、堂上は師父の處、罵雙橋とはおれが接得ゆきと云ふと云ふ。」

㉑送僧省母。江湖集には僧を人に作る。

㉒十年、捫得。浙西八州、浙東七州、皆五十刹の所在地なり捫得はいたりおよぶなり、辛苦年老うることを極め得るなり。芫は頭髮の芫處なるをいふ。伏摩は額頂の骨相をいふ。此では遺骨にたとふ。此の兩句は、此の僧從前編歷飽參底の老成なるを述ぶ。

㉓因話、不禁。睦州陳尊宿、蒲鞋を織りて以て母を養ふ、高安の米山寺に住す。莎鷄は一名は促織、一名は蟋蟀。此の兩句は今飯郷省親の感を發するを述ぶ。

㉔寄郷省羅太尉。此の公、師の難を救ふ、育王錄に見ゆ。都省は尙書省なり、一人にして三公をかさねるの官。

㉕海涵、內相。涵は容なり。珠云く、「讀量寬大、海の萬流を容るが如し、山の草木を養ふが如し、其の氣溫和、陽春溫和をいふ。內相は大尉をいふ、聲華は名譽光華どこにも偏く聞ゆ。」

㉖綱紀、金瑤。瑤は耳の珠なり人主の寵渥を得て常に左右に

侍するを云ふ。珠云く、「禁中の故事を主るゆえ、金璫は冠飾りなり、常に君の御そばに近きている故、御體の薫香に染む。」

②淨草藏主遊方。虛堂の法嗣、葛藤、單師師乎。

③叢林、風味。當時佛法の衰替を嘆ず、首ふ意は境荒れ人寒く、宗風法味其の辛酸談話を爲し難し、なんとものがたりはできぬとなり。

④隱々、不知。隱は微なり、一枝は一柱の杖杖を云ふ、これ同行底なきを表す、天外は遠程をいふ。隱々はみえつかくれつ。かゝるをりふし、遊方して出る。師を探んで當に杖杖を安置すべきなり、凡そ學道の要は、必ず先づ師を擇ぶにあり、須らく行脚の眼を具すべし。

⑤德惟侍者巡禮。師の門人、曾て育王錄を編せり、巡禮は諸方の佛前祖塔を巡禮するなり、遍參にはあらす。

⑥巖桂、軟風。巖桂は木犀、岩嶺の

間に生ずる故にいふ、問津は巡禮の意をいふ。風はやはらかなるゆえ、白露葉上に結ぶ、已上は發足の時節、天眞の風物を述ぶ。

⑦諸方、自有。師家から招かねども、愚者いろ／＼とたゞまはる、畢竟師家をよく尋て參ぜよとなり。

⑧通藏主之南國。護聖鐵騎法通ば、濟大川に關く、其の人乎、南國は南京なり、江湖集に此の頌を載す。

⑨春入、六朝。長淮は伊洛なり、南國の景象、此れは發足の時節をいふ、六朝は吳、晉、宋、齊、梁、陳なり、みな南京に都す。

⑩臨崖、大半。如是く世間無常なり。此當全く六朝代謝の跡を舉げて、人をして無常を痛念し、般若を激勵せしむ、人の過ぎ去つて以て無情なるを示すなり。

⑪立藏主之三衢。衢州府、又三衢と名づく。

⑫一會、寸心。師か驚峰菴に住する時、此の公來參するなり。忠曰く

「雪隱に住する時の作にあらず、育王に住する時の作なり」と。寸心は立道人の寸心、氣宇王の如し、鐵の如しとは其の心、堅固不變、遠天は其の鼻孔、通達無碍、天の廣遠なるが如し、遠は遠なり。」

⑬無端、話到。言ふ意は版りて三衢に到つて、從前靈山に在るときの事を思ばい、たとひ柯消し石穿たれども、也たかたり盡されじとなり。柯消等は衢州府の欄柯山の故事、珠云く、「無端はなにごともなく、聞らず、前事は雪隱に在るときの事。」

⑭端書記赴。白雲城云く、「台州にあり、群は君なり、府君の命に赴請するなり、端書記は松源下盧舟普度の法嗣、楚山法端乎。」

⑮不遊、芻艸。文苑は書記の役をいふ、祇園寺は芻州黃巖縣の南七十里にあり、五代の晉の天福中に建つ、芻艸は端書記に喩ふ、忠勳、此には乞士、又は比丘といふ、これ

新 臭人

諸方不用多招手 自有尋香逐

通藏主、南國に之く

春入、長淮、野燒青、六朝遺事、鏡中明、臨崖、細剝、苦紋、看、太半無人知、姓名

立藏主、三衢に之く

一會靈山已七年、寸心如鐵鼻、遠天、無端歸去思、前事、話到、柯消、石也

穿

端書記、雲城の辟命に赴く

不遊、文苑、入、祇園、芻艸、風香、春正、妍、要識、根莖、來、處、遠、葛仙丹、井、冷、雲、邊

慶藏主、南屏に之く

會向、殊方、典、竺、墳、叢林、有志、張、吾、軍、天寒、歲、晚、重、尋、舊、莫、負、青、鞋

國譯虛堂和尚語錄 卷七

西國の神名なり、出家の人の戒徳芬蘭して、衆の爲に開ゆ、德香時に薫發することを得となり。

①要識、葛仙。根莖は前の芻艸を便す。珠云く、「出處來山を識らんと要せば、忠勳の花を開いて台州に請ぜらる、來處遠しとは修行年久しきなり、煉丹井は天竺寺に在り、晉の葛洪、嘗て丹を此に煉る、今端公が辟命に應じて祇園に住するは、葛仙が仙道成就して登仙した如くじや。雲の冷きあたりなり。」

②慶藏主之南屏。虎丘雲谷懷慶は石溪月に嗣ぐ、松源の曾孫なり、南屏は淨慈なり。

③會向、叢林。殊方異域とは今は淨慈をさす、竺墳は佛書なり、此去つて其方の淨慈に藏主の職を領するなり。會は平昔を云ふ、二の句は天下の叢

林におし出して、慶公の志願力を嘆ずるなり。

④天寒、莫負。送行の時節今又南屏の舊知を尋ね、凍寒をふんで、吾が軍を張るの志をそむかぬやうにと、又此に飯り來るを期すとたり。

⑤隱侍者遊乳峰。隱公は師の門人、顯孝錄の編者なり、乳峰は即ち雪竇なり。

⑥寶深、雪岸。時に雪竇の字を打す。珠云く、「寶は深山の意、春になりても雪のみこのる故に古といふ。雪は雲霧、岸危巒はみなその高拔をへいふ天際なり。」

⑦到者、尋師。到るものとは二句を承くるなり、難披は山頂に到りがたきを云ふ、頂は草莽をひらくなり、大法の深にたとふ、近傍しがたきを云ふ。尋師は疎山の三千里外、布單を賣却すといふが如し、事は

二四七

踏凍雲

◎ 隱侍者、乳峯に遊ぶ

◎ 寶深惟古雪、霽岸列危巒、到者難

披頂、尋師多賣單、無時雲氣重

長帶瀑聲寒、挨得入門句、歸來似

我看

◎ 慈峯の故人に寄す

◎ 湖面春歸物理明、水花無數點青萍

◎ 因行若訪和菴主、未必孤蹤在二靈

無補侍者遊方

◎ 索索青鞋踏曉霜、逢人屈指問諸方

◎ 有無探討歸來日、糞火堆邊話短長

◎ 汚禪人、鴈蕩に之く

◎ 風高木落鴈山秋、鞭起無依穴鼻牛

◎ 村艸步頭攔不住、大方隨處有晴良

◎ 因行、未必。春興に乗じて遊

行せば、二靈山は東鏡湖(周

廻八十里の湖)中の一山、突

然たり、上に庵あり、知和菴

主は洞潭乾の法嗣なり、「竹

筧二三升野水、松隠七五片閑

雲、道人活計祇如此、留二與人

間一作見聞二の偏あり。唯だ

二虎其の右に侍すと、會元

出づ。珠云く、「和菴主必ず

二靈にありと思ふな、なぜな

れば、湖面の水花みな是れ菴

主の眞の面目。」

◎ 無補侍者遊方。師の門人なり、

前の眞識部に見ゆ。

◎ 索々、逢人。索々は不安の貌、

おそるゝこと、霜を踏んでゆ

く鞋のこゑをいふ、これ必ず

三冬の間にあびだちするな

り、諸方の宗匠を數へて之を

探ふ、珠云く、「行くさき行く

さきで、關東ではたれく、

あり、この頌江湖集に載す。

◎ 漢江、擁蜺。漢々は濟靜の貌、

珠云く、侍者今汚水の漢々の

處に向つて行く、こゝは昔し

岩頭が箇の勞波子を買ひて、

蜺を擁し蝦を撈し、且つ慙慙

に時を過すと云ふた、悟後休

歇の時に比するなり。」擁レ蝦

撈レ蜺とは化度利生をいふな

り。

◎ 蒲葉、子歸。これは送行の時

節の景象、著は到るなり、休

不休はなんと其の意であるか

定めて其の意であらう、汝と

は珠侍者も岩頭と同一三昧に

して、向上を守ることならず、

第二義度生と出かけだして見

れば、岩頭を嘲り笑ふことは

なるまい。

◎ 洪侍者、汚に之く

◎ 漢江漢漢、向東流、擁蜺撈蝦

◎ 休未休、休、蒲葉半凋秋着岸、子歸無

口笑岳頭

◎ 許居士に贈る

◎ 山儀不裏龐公帽、禪袖深藏傳老槌、敲

◎ 確諸方一應未已、眼頭乖角少人知

◎ 妙喜社の道友に贈る

◎ 斷來妙喜針鋒上、寒破虛空不礙空、

◎ 昔日維摩今社友、相逢箇箇有神通

◎ 日本智光禪人に示す

◎ 隱隱孤帆絕海來、虛空消殞鐵山摧

◎ 大唐國裏無知識、已眼當從何處開

◎ 永嘉の祖意禪人を送る

◎ 識得祖師端的意、迢々千里扣知音

彈に作るべし、垂下はだらりとなり、袖をたらして、傳大士善慧の門徒、寶林録に見ゆ。

① 敲磻、眼頭。敲磻の字は槌の字に應ず、乖は異なり、眼垂異にして角あり、寶利俊快の相なり、言うは語方に偏歴すれども、居士の如し此なるを知るもの少しなり、異相を云ふ。

② 妙喜社道友。社の所在の地を詳にせず、蓋し道友相聚りて社を結んで、維摩會を講する手、全篇維摩經見阿閼佛品の所説を用ふ。

③ 斷來、寔破。珠云く、「維摩昔し妙喜世界をひつつまんで、此の娑婆界へ入れた、廣ならず、狹ならず、又諸友妙喜社を結んで會す、昔しの如くじや、針鋒とは須彌を芥子に納る等、不可思議の境界。」昔日、省達。古今二路なき故なり珠云く、「これ〱妙喜社の道友昔の維摩ばかり神通あるではないぞ」と。

④ 日本智光未だ其の人を審にせず。

⑤ 虚々。虚空。絶は度なり。珠云く「大法の爲に軌影見えつかくれつ物影漸く遠く漸く隱る。」二の句は此の漢、大勇猛精進力此の如し、故に孤り洋海を絶り來る、霜雪雪苦、其の端なり、物の破るときのあらし機を云ふ。

⑥ 大崩、已眼。其の師に堪へたるなきを云ふ、汝が爲に師となるものなしと、無師無聖の消息を示す、頂上の一隻じや、黄葉の示衆にある、譯なしとは道はず、只だ此れ師なしの意。

⑦ 得、退退。祖意の字を打す。兩來意の端的なり。二の句、訪尋を謝す。珠云く、「遠方よりはるばる虚堂を尋ねて來たなり。」

⑧ 當機、歸興。珠云く、「虚堂一喝下た於て、盡情計誦盡きてしまふ。威雄十方に震ふ、そのありさまは、いき〱としてもどるとなり、虎

の林を出づるときやうに。」當機は相見をいふ。

⑨ 心侍者。珠云く、「虚堂の弟子にして、虚堂を歸者するなり。」

⑩ 露葉、秋來。その時節の風物を序す、八九月比の白露、木の葉に結んで、月影などもさえて。二の句は懷例の氣を感じて、老師の壽齡を思ふ故に、老人星は壽命星なり。一には南極と曰ふ。珠云く、「秋になれば老人星にもあらはれ見ゆる故、圓らす老師を思ふて省觀せんと欲するなり。」

⑪ 海山、終不。印渚は虹渚をいふ、即ち興聖寺を指す、吾處はその寺を云ふ。珠云く、「心侍者、此度の海山の印渚隱遁の處へ尋ね飯つた、嘉興府は深淵なる故、海山といふ心侍者が省觀して居れば、孤獨の獨り局を掩ふの身とならず、よろこばしう思うとなり、宜しく再來すべしと、深山に空しく獨居などするな」と。

① 當機一喝忘情謂歸興猶如虎出林

② 心侍者歸省す

③ 露葉蕭蕭月滿庭

④ 海山印渚知吾處

⑤ 就明に懷を書す

⑥ 流菜非深隱

⑦ 能忘影跡

⑧ 邊短、青燈話裏閑

⑨ 出松關

⑩ 海首座、怒濤と號す

⑪ 憂國憂民日夜驚

⑫ 子胥此去休煩惱

⑬ 天然の玉論師、覺海に赴く

⑭ 妙旨惟從句外求

⑮ 海山深處多麟鳳

歸興猶如虎出林

秋來多夢老人星

終不深雲獨掩局

那堪復故山

終是礙人間

江湖有新夢

未

何日

白髮吟

白雲先見室中籌

此去橫經一網收

① 就明書懷。就明は恐らくは靈隱の覺峰室の頼か、松關は松徑を稱するか。

② 流菜、那望。菜葉を流すは故事二三あり、略す。珠云く、「古人は菜を流してさへ深隱とはいはぬ、まして故郷へ飯

③ 能忘、終是。身を忘れざる故に世に拘繫せらる、人跡不到の處に到りたい、終には人の爲めに知られて、人にさへられて世に出ねばならぬ。

④ 白髮、清燈。老衰、清閑、皆退居の情を述ぶ。珠云く、「まう〱年よつた、燈影に並んで老衰の話のみして。」清は青の字として看よ。

① 江湖、何日。江湖に放浪たらんと思ひあり、故に夢魂に入るとなり。珠云く、「江湖は隱論の地をいふ、菴居した夢ばかりみて、出松關とはうるさいこの世界をいつ出るとぞ。」

② 海首座號怒濤。「全篇、伍子胥が靈怒濤と爲るの事を用ふ」と珠の説なり。

③ 憂國、擲天。此の篇、伍子胥が忠義を以て直諫を作して、その君聽かず、故に怒濤を發するの事を用ふ、史記、國語併に吳語等に見ゆ。珠云く、「憂國の怒の字、憂民は海の字を云ふ。」二の句、擲天は海の字、作雷鳴は怒の字をいふ、一の句は輪廻の苦を憂へ、二の句は苦衆生の爲に法理を説く、内と外となり。擲は當に處に作るべし、つまづくなり、擲につくるも好し、倒な

契師の庵居を賀す

正席雲山萬象回、道人青眼爲誰開、
呼童放竹澆花外、修整茶爐待客來、

揖讓の圖

行必有師、進之以禮、昭昭君子
對面風波起

山行して思程侍者に示す

春水綠浮影、山光瀉入懷、
思善牧者、隨分納些些、

雲谷術士

出則無心應有聲、眇然天地亥難銘、
可中別有通神處、見說年來分外靈、

鐫者任延

入石入木知分數、古篆今篆攻豈難、
祇因彫巧失眞體、不見全文在、

子胥、百谷。嘆怒の煩悩をいふ。珠云く、「子胥が怒りは呉の國を憂ふるばかりじや、今より已後、吐裏の迷悶心頭

の煩悩、さつぱりとつきてしまふ、百谷差別の波濤といへども、海に朝宗すれば別ち一様に清平なり。又事は無心を極とすることを示す、一切の諸法平等海に入る故に。」

玉論師。上天竺寺の玉は名、覺海は明州定海縣に在りといふ。

妙旨、白雲。講論の意を述ぶ。外者の及ぶことでない、上竺に住して早く大勢を接得せられた、白雲堂は上竺にあり、室中の器は度人の多きをいふ優婆塞多尊者、一人を度すること、一籌を石室に置く故事。

海山、此去。覺海には英靈の事。

玉などをえりをさむるなり。

祇因、不見。全文は鐫刻に涉らざる底なり。珠云く、「あんまり刻ることが巧なる故、文字の眞體なくなつてもふた、全文とは筆の彫に入らざるものなり、己に離り了る。眞の體を全うする文字は世間之を見ずとなり、世けんにあるはみなにせものなりと。」

剃髮林榮、理髮師なり、林は姓、榮は名。

衆技、養生。衆技各自に得たりとす、其の中生命を養生には、なにかいちばんよいぞ。

儻中、雲外。箱の中へはかみそりをいれてある、雲外は遠方の謂なり。

黑白、修治。言ふは黒髮白髮、各自に任運天真にして、幾許安排なし、今修治に依つて、却つて自然を失す。

畏寒、未愧。雪峰山下の菴主、多年剃頭せず、一の長柄の杓を畜へ

不善の者は之を改む。進退禮を以てするなり。

昭昭、對面。言ふ意は、君子の行と進と二つのもの皆法あり、其の心昭昭として惑ひなき、何に事ぞ、相逢ふて此の如し、風波の争あるに似たり。

山行。全體牧牛を以て頌す、禮は恐らくは牧に作るべきか、第三句を以て知るべし、誤りて普通をなすか、一山云く、「此の人早世なり」と。

春水、山光。山光水に浮ぶ、故に懷に入るなり、此れは自然の水神を示す、二句とも悉皆成佛の景、說體現成の意じや。」

因思、隨分。此の自然の境界に因つて、古の善く牧するもの、受用を思ふなり、此にて賦税を國王に納むる底なり、「南泉の示衆と一般じや」と或抄に見えたり、因思は南泉のことじや。

雲谷術士。雲谷は名なり、術は技

術、吉凶を占相し、盈虚を推歩する底なり。

出則、眇然。雲無心にして袖を出づる底、無心は雲、聲は谷、虚谷聲を傳ふの端的なり、眇然は遠きこと、凡心測りがしじや、雲は天に、谷に地に屬す、一二は雲谷の字を託して佛事をなす。

可中、見說。三四は術を云ふ、可の中は上の意、地を指す、蓋し術士の法、此の如く無心應緣、眇茫天地名貌すべからざる底にして、始めて能く神靈に通じて、他の吉凶を辨ずべしとなり。

鐫者任延。文字を鐫刻するものなり。

入石、古篆。文字を以て或は石に刻入し、或は木に刻入す、各々當に分量あるべし、鐵肥大小長短じや。篆は引書なり、古書に史籀は大篆を作り、秦の程邈は小篆を作る、攻は治なり、太だ易からんじや。攻は詩經に「みがく」とよむ、

世間

剃剪の林榮

衆技爾爲得、養生何所親、
三寸鐵、雲外一閑身、黑白己無幾、修
治轉失眞、畏寒宜少伐、未愧

爲深人、

箱光室

懶去裁花傍、竹籬旋收巖葉、
不知陸谷幾遷變、時見斷雲相逐歸

三友堂

清客蒼官會此君、歲寒不減舊精神、
有時品字論交態、各有丰標遠襲人

碧照軒

剪木依山巧、影池己知寫影到人
稀、一區寒玉坐來久、但見雙雙白鳥

溪に就いて水を取る、前の佛
事に見ゆ、今寒を畏れて剃頭
せず、故に未だ溪を首む人に
劣らずとなり。

箱光室。光をつゝみ徳をかく
して、これ静退の義なり、故
に頌中、無事の意を述ぶ。

懶去、旋收。一の句は年老い
てぶしやうに成るをいふ、二
の句はついで又しきりに(旋)
つづる(巻)じや。

不知、時見。陸は陵に作るべ
し、詩經小雅十月之交篇に「高
岸爲谷、深谷爲陵」とあり、
猶ほ大地山河といふがごとし
世間事を忘れて深隱するなり
この虚堂は世間の事には貪着
はせぬ、隱者の風致を云ふ。

三友堂。松竹梅之を三友とい
ふ。

清客、歲寒。清客は梅を稱す
その清潔、花中倫なき故なり
蒼官は松を稱す、此君は竹を

稱す、松竹の歲寒に逢ふて減
ぜざること知るべし。珠云く
「三人の一所により合ふて、
いかなる極寒にてもひるみは
せぬ。」

有時、各有。品字に交應は即
ち三友の謂なり、品字柴頭の
例の如し。珠云く、「三人よ
り合ふて交情の話をする。」手
は敷容切、豊満なり、三勝友
各々豊満たる風標、人に添襲
するが如しなり、其の清交益
あることをいふ。珠云く、「三
人の様子と云ふほどのこと、
自然の人の心に感ず。」

碧照軒。此の頌の意に據らば
軒下に池を開く、山水の碧、
池中に照映す、故に此の名を
安ず、只だ木影のみにして人
影なしとなり。

剪木、已知。邪魔になる木を
剪つてのけ。世上の人の影を
らつす、又山木碧影じや。

飛

荷衣沼

水面綠盤擎、雨出臨風幾度倚、
不知暖氣有多少、老子年年得禦寒

岳林の古渡

契翁來作濟人舟、兩岸青山浸碧流、
舞棹舷歌不到處、知心惟有老品頭

長汀の煙雨

漪漪遠水漾、明邊沙鷺風晴刷、
借使輞川收拾得、江湖莫作畫圖看

李寄軒に酬ゆ

寄傲知何所、行藏匪一軒、
別旨鳴道有來源、未話先通理

聲詩不在言、相期湖上寺、
猿

一區、但見。區は鏡のはこ、
寒玉は水、坐來は景象を愛す、
池成り白鳥來り止る、全篇閑
居の意を述ぶ。

荷衣沼。大梅山法常禪師、そ
の保福寺の前に荷衣沼あり、
一池荷葉の頰をよむ、その故
事によるならん。

水面、臨風。古句に「荷盡已
無、牽、雨蓋」浮び出たる荷葉
は雨珠を臨風は荷香を食り、
幾度か賞して闌干に倚るな
り。

不知、老子。珠云く、「この
荷にどれほどあたふまりがあ
ることじや、老子は大梅常禪
師を指す。一二は荷を、三四
は衣を述ぶ。」

岳林古渡。寧波府の岳林寺は
奉化縣の東北三里にあり、梁
の大同中建つと、古渡は蓋し
寺前にあり。珠云く、「蓋し
布袋、舟を掉して人を渡すの

圓ならん。」
契翁、兩岩。契翁は布袋和尚
自ら契此と曰ふ、常に二布囊
を杖のさきにひつかけて荷ふ
時に長汀すと號す、布袋師と
もいふ、岳林寺に示寂す、今
古渡に約して、布袋の出世し
來る、本度生の爲めなるを述
ぶ。彌勒の化身じやもの、二
の句は古渡を述ぶ、人を濟す
川流の處。

舞棹、知心。棹を舞はして舷
歌す、これ伴狂して衆に混す
る底の境界、庸流の能く到ら
ざる處、知心は心友なり、所
謂相識天下に滿つ、知心能く
幾く人ぞ、知音は惟にむかし
の嵩頭のみじやと。

長汀煙雨。布袋は長汀と號す
長汀は岳林寺の境なり、此の
頌と前の頌と兩幅なり。

漪々、沙鷺。漪々は水の文な
り、波の動くこと、明邊は白色

なり、一面まつ白くなつて、沙上の白鷺が羽を刷「なでそろへる」ふ。借使、江湖。借使は「もし」朝川は王維摩詰。別業の地、摩詰は畫を能くす、この煙雨を收拾し得てえがき出すも、江湖皆眞に逼る故、直に其の境に坐するの想を作すべしとなり。この處の景をよくかき得ることはならぬ、必ずよくかいたと云ふな。

酬李寄寓。李は姓、寄軒は蓋し隱棲に扁す。
寄傲、行藏。一の句は寄の字を打す、淵明は「南隱に倚つて以て寄傲す」と歸去來辭にあり。珠云く「李公はどこに寄傲するぞと、時に聖賢の場に遊ぶを言ふなり、二の句は軒の字を打す、行藏は進退の意、珠云く、「聖賢の樂地に遊ばば、こゝばかりではあまいと。」
光心、鳴道。唯一乗法の故に心源を究むるに儒釋皆同じ、道學を以て世に鳴るもの、其の學の來由

根源、余の人とは種がよい。
未詰、聲詩。先通理とは目擊道存す、虚堂、李公に對する時、聲詩は詩を調出すること、言語の間に在らずとなり、天然の妙をいふ言外に意ありじや。
相期、執手。湖上寺は靈隱をさす杭州西湖にあり、啼猿も靈隱なり。珠云く、「預め期す、なつかしいゆえ心にまづ李公なにとぞ靈隱へ隨進して、手を執つて靜に共にさるのなくをききたい。」聲は名あるを云ふ。

源脈、往來。滔々は周流の貌、曲江の源委を述す。珠云く、「此の曲江の源根水脈は靈山會上巖耳峰頭よりじや、古岸頭といふ、二の句は曲江の故にいふ。」珠云く、「學人の往來、江岸曲折してじや、惟侍者芻中圓鎖を設け、容易に人を透過せずじや」
無風、到海。八尺を尋といふ此の曲江風もなきに此の如く、「波浪

を激起す。珠云く、「爲人垂手無事に事を生ず。」四の句は寂滅海に到つて方に知る、從前これ滅流なる事を、此曲江の得意を嘆ず、謂ゆる萬派の聲は海上に歸して消する故なり、珠云く「元より太平無なれども、爲人垂手惡毒を施す底なり」
日本源侍者。源公は巨山と號す、虚堂に嗣ぐ、禪興（日本の關東十刹第二）の二代なり、又明月菴ともいふ智辨人に過ぐ不幸短命にして逝す。

師道、石機。應酬は侍者の職分なり、これ嚴師好弟子を出すの謂なり。珠云く、「師道は虚堂自ら稱す石機は天台にあり、龍湫は雁蕩にあり、みな前に見ゆ」
一花、是子。台山の童子笑つて曰く、「此の間一轉一木。文殊の境界に非ずと云ふことなしと人皆見る、中に源公獨り。機微を知りて領會するなり。珠云く一轉一花同じやうに見れども機微を知らず、只だ

惟侍者、曲江と號す

源脈滔滔古岸頭、往來終是礙行舟

無風激起千尋浪、到海方知是逆流

日本の源侍者、台鴈に遊ぶ

師道嚴明善應酬、石橋過了間龍湫

一花一草人皆見、是子知機獨點頭

内記の藻侍者に示す

當年濟北辭黃檗、索火之機屈未伸

今日子孫開活眼、老南元是讀書人

德信西に上る

出門溪葉亂紛紛、欲去重尋舊主人

碓下莫辭腰石冷、古菱花綻

不于春

壬戌に雪竇に登る

錦鏡

汝一人能く機を知りて自ら點頭せんと。」

内記藻侍者。内記は書狀侍者なり、五侍者の一、黄龍の南公より此の名著はる、前の相續錄は、此の人の手に出づる乎。

當年、索火。臨濟黄檗を辭するの因縁は本録に出づ、言はは臨濟の大活機當年未だ伸び施さず。火を索むるとは、珠云く、「禪版凡案を焚いて仕舞ふたら、臨濟の宗旨は今日まで相續すまいものを。」

今日、老南。臨濟の當年、屈する所の大活眼、今日、子孫の南書記に至りて開得すとなり、讀書とは同じ、書記の下に名を以て之を激して、兼ねて外典に通ぜしめ、其の法海の波瀾を助く。珠云く、「四の句は轉じて書狀の事に入る。活眼は是れ眼に一法を見ず、

しかも書を読み文を綴り、宗乘を舉揚した人じや。」

德信西上。德信は蓋し行者あんじや）なり西上とは德信の舊主人、西に在るなり、地西北に高し、故に西上といふ乎。

出門、欲去。其の時節を序す舊主人は受業師なり。

碓下、古菱。六祖の盧行者の縁を用ふ、版つて隨身するなら、辛苦を厭ふたと、鏡を菱花といふ、古菱は古鏡なり、明鏡亦非、臺と、覺華の開くこと春に干るべからず、今古不昧の上に目をつけよとなり。

壬戌雲竇。壬戌は宋の景定三年なり、行狀に「晩景に追り明覺の塔下に退閑して、終焉の計を爲す」と、この時、虚堂和尚は七十八歳なり。明覺は雪竇重顯禪師の塔處をいふ。

錦鏡。雪竇山に錦鏡池、妙高

池面溶溶水照空、春風花影落青銅、
倚欄擬作機頭看、已墮阿師圈縲中、

妙高

松枯石老凍雲垂、到此虛空漸覺低、

脚力盡時清興遠、與誰携手上天梯、

飛雪

黑風衰衰六花輕、天列陰崖勢欲傾、

到此只知膚粟冷、夜深誰聽瀑泉聲、

泉聲

水仙

芳心塵外潔、道韻雪中香、自是神仙骨、何勞更洗粧、

墨竹

毫端不_レ及處、精神殊可掬、

談玄、六月添_二重服_一、

峰、飛雪岩等の勝境あり、前に見ゆ。

池面、春風。溶々は水の盛なるなり、又安流なり、春風花影は錦を表す、落_二青銅_一は鏡なり池の面を云ふ、水面磨_二銅青_一と曾蒙が詩にあり。

倚欄、已墮。機は機具(はた)今は錦機をいふ。珠云く、「縲成十丈錦通紅じや、實に錦の機を見るときたらば。」阿師は開山常通禪師を指す、通は長沙峯に嗣ぐ、開機はわた、珠云く、「とづくに開山常通の輪の中に入りて、うごきはとれぬと云ふものじや、別に轉心してもあらんかと思ふて、機頭の者もなしがたい。」

妙高。寮なり。

松枯、到此。皆高寒の相を述ぶ。珠云く、「年ふりて松もかれ石もこけむして、峰高く雲垂る、故に却つて虚空の低

下するに似たり、あまり臺も高さ故。」

脚力、與誰。行いて絶頂に登る故、絶高の故に以て天に通すべしとなり。珠云く、「上りをほせて見れば、四百餘州遙かに見える、此の上又誰とともにかじや。」

飛雪。蓋し瀑泉に依つて名を得たり、謂ゆる瀑泉岩石に觸れて、碎けて白雪の飛ぶが如し。

黑風、天列。黑風は陰風を云ふ、衰々は阿曲なり、六花は雪回曲して雪花軽くとぶなり相繼いで絶えぬを衰々といふ。二の句は此れは岩を云ふ、九天の飛雪陰處の岩崖に列して降る、その勢天の傾くが如し一所になつてくづれかゝつてくるやうな。

到此、夜深。其の清冷に堪へず、故に肌膚粟の如しとなり

珠云く、「只ださむく成りて、身上粟粒を生ず、寒毛卓豎すじや、まつくらやみに人が来てみたらば、雪のふると思ふ瀑のおつるとは誰人もきくまいとなり。」已上の三頌句意巧妙にして、大に人意の表に出づ」と龍溪はいへり。

芳心、道韻。此の花の香潔を述す。芳心道韻、仙の字に託す。珠云く「さてもく清らかにさいたものぢや、凡俗をはなれて、殊に雪中寒氣にも調ます。」

自是、何勞。此の如く香潔、自ら是れ神仙の風骨たればなり、何ぞ更に洗粧に勞せんとなり、洗粧は水を迷ぶ、珠云く、「いかさまにも自然と湯あみに化粧するには及ばぬ。」

毫端、精神。妙手の故に毫端及ばざる處の精神あり、機に手を以て掬しつべしと、その能く眞に過るをいふ故に。珠云く、「畫工竹を繪くに直上拂去して竹頭を盡さず

雲烟に没するの狀を作す、直上拂ひ去るところ、大いに竹の精神あり、手にて掬しつべきが如し。」

藤々、六月。藤々は竹の假順の貌を表す、支を談すとは道生法師の云ふ、青々たる翠竹盡くこれ假如と云ふが如し、風になびく音と古松談_二般若_一の端的、六月の土用でも重ね着せねばならぬ、竹を見て清寒を生ずる故に。

浙江湖圖。杭州府浙江は府城東三里にあり、歙縣の玉山より出づ、その水建德を経て婺溪に合し、富春に過ぎて浙江と爲つて海に入る江口に山あり、江中に居れり、湖水山に投じ、十折して曲れり、故に浙江と曰ふ。

怒勢、靜心。擬は度なり。珠云く「此の怒濤の勢、世界の内に比擬するものはない、靜心の人でさへ此の如し、まして心闇の人はなほのこと。」

平生、今日。平生世路の風波を看

るに飽く故に。珠云く、「圖を言ふなり、虛堂自ら叙す、我れ平生世路の風波の險危を経て、之を見るに慣ふ、故に尋常に看做して以て事とせずと、平生は虛堂に係るをいふ。」

考牯牛圖。君孫觀左右帳の記下筆の部に、老融が牛を牧む。

純去、青糞。十牛圖の頌に「相將牧_二得純和_一也」珠云く、「牛よくなれて糞を放してしまつた、二の句は古來牛の圖には多く楊柳を畫く、綠楊陰裏藏糞牛の類なり。珠く、青糞を披たる牧童。」

不嗔、知是。三四の句は畫圖の意を述ぶ。珠云く、「他の苗稼を犯さずの意、自己水牯牛、千萬劫過ぎてても此の如し。」

桑柘忘機圖。梁楷は東不相義之が後、善く人物山水、釋道鬼神を畫く、賣師古を師とす。忘機は無心の謂なり、通士の忘機の狀を畫くなり。

④ 浙江の潮の圖

怒勢自驚殊莫擬、靜心人見骨毛寒、平生一對風波眼、今日晴窓不忍看。

⑤ 老融の牛の圖

純去自忘牧、青荈柳影中、不

⑥ 梁楷、機を忘るの圖

尋常忘物我、渾不涉希夷、

⑦ 常牧溪か猿の圖

霜墮群林空、一嘯千巖靜、耿耿殊有

⑧ 抱子攀流條、清興在高遠

心、業風吹不斷、

⑨ 荷鷺

尋常忘物。平常只だ物我の心機を忘る耳、渾べて不可開不可見の深坑に涉らず、希夷は玄妙の道理なり、老子曰く、「之をみるに見えず、名けて夷といふ、之を聴くに聞えず名けて希といふ。」

夢落從教。境は道士の天尊を祭りて設くる所なり。珠云く「壇は夢に係る、秋壇冷に非ずとなり、世俗の塵事を夢みず、故に夢も清冷なり。」斗柄は杓なり、杓はなほ標のことにし、北斗の柄第一星此を取りて名とす、星移り轉ずるも亦之を管せず、忘機の狀此の如しとなり。

常牧溪猿圖。僧法常、牧溪と號す、南宋の咸淳年間の人といふ、虛堂と同時代なり。

霜墮、一嘯。好箇の時節、好箇の消息。珠云く、「秋の木葉のちる時分、一聲なくと

身も世もあらねぬ。」

耿耿、勞生。耿耿は不安（うれ）れ（へなり、耿耿として寐ねずなどといふ、殊に情に切めるなり、勞生は塵勞の衆生なり、深省は甚深の省悟なり。珠云く、「此の猿の聲をきいて、世間の無常を省みるなり」

抱子、清興。惟ふに此の圖は前面に異なり、子を抱いて樹に上るの狀、興感高遠にあり、故に危き條をよづ、その子を愛するを以て樂と爲す。

一點、業風。鐘は「あつむる」なり、此の圖は子を抱いて愛惜する故に、鐘愛心甚だしきこと此の如し、惑業不斷知るべし。珠云く、「此の虛堂の一句子猿を成佛させた、業風吹不斷。」と蓋し上とともに二幅一對の讚なり。

荷鷺。此の頌、亦換韻に非ず兩幅の畫贊のみ。

① 涉荷波頭、枯荷影裡、清興忽來、一息千里、蒲葉吹秋、水天漠漠、斂影肅心、意不在啄。

① 涉荷、枯荷。涉荷は洲沙の角贅なり、枯荷はみな鷺の棲息する所なり。「珠云く、「沙贅は洲沙の盡くる處、狹尖にして鳥の贅の如し。」

② 清興、一息。蓋し鷺、空を仰ぐの圖なり。珠云く、「此の圖製をのべて飛ばんと欲するの狀なり、一息とはその勢あるに依りてなり。東嶺云く、「この虛堂和尚、一絲毫を添へず減ぜず底の頌じや。」

③ 蒲葉、水天。此の圖も前面に

異なり。珠云く、「霜に枯れたる節、漢々は澹靜の貌、鷺の宜しく棲理すべき處、そへこおりてきてじや。」

④ 斂影、意不。此の鷺の圖、蓋し此の如し。珠云く、「水邊に立つて魚を捕ふと云ふ念もなく。」東嶺云く、「此れ虛堂何の事でもじやる、此は法窟の爪牙、奪命の神符、象王の鼻の如く、大火聚の如く、鳩鳥の尾の如き句じや」と。

偈頌 終

國譯虛堂和尚語錄卷之八

虛堂和尚續輯

參學以文無補法光編

師、出世して初め嘉興府の興聖寺に住す。府の疏は已に前集に刊る、縣の疏は知府陸盤隱撰す。興聖の道場は、孝宗流虹の去處なり、靈隱の首座、丞相割命をもつて請じ來す。墻竹の陰を聯ることを喜して、敢て縣花の疏を後にせんや。伏して惟みれば新命、長老虛堂禪は、丘壑

①輯。香集、聚むるなり、以文等の門人、前の興聖、寶林等録中の遺落を拾ひて、之を續ぎ聚むるなり。珠云く「續輯の上に當に語録の二字あるべし。」
②以文。傳は後の眞讚の部にあり。
③無補。壞納と號す、虛堂に嗣ぐ、前の眞讚の部に傳あり。
④法光。舊解に晦叟と號す、師に嗣いで仰山に住す、後の眞讚にあり、ともにみな門人なり。

⑤前集。興聖錄をいふ。
⑥知府。知州知府に同じ。
⑦陸盤隱。陸は姓なり、宋末嘉興府の人物、陸徳興あり、文名あり、兩浙の知貢舉を歴、蓋しその族乎。
⑧興聖道場。隋の煬帝、僧寺を改めて道場となす、宋の寧宗嘉定の間、額を興聖院と賜ふ、理宗の御書「流虹聖地興聖之寺」の八字の碑刻尙ほ存す。
⑨孝宗流虹。已上は前篇に見ゆ、南宋の孝宗皇帝は太祖六世の孫なり。走處は舊身の義。流

を胸襟し、江湖を足跡にす、笑翁面裡に常に刀あり、豈に錚錚を斂むることを容さんや。別浦船上に背て攪載す、必ずしも水を帯び泥を拖かざれ。若し戯を把つて場に當らしめば、光前絶後を管取せん。願はくは衆の請に従つて、速に一來を恵め、帯を解いて元公に送す。自ら箭鋒の鈍きを笑ふと雖も、酒を沾ふて陶令を引く。詎ぞ敢て蓮社の盟を辭せんや。

樹頭を謝する上堂。僧問ふ、「栽松道者、路を周氏の家借つて、後來第五祖と爲る、此の意如何。」師云く、「燈籠壁に沿ふて天台に上る。」僧云く、「友直歳、二林の樹頭と爲る、何の福報をか獲る。」師云く、「偏に説向すること也。也た難からず。」僧云く、「恁麼ならば則ち

虹とは孝宗退育の地をいふ。雲隱首座。英聖録に「師昭定二年五月一日雲隱に在つて謂を受く」とあり。割命。丞相は史衛王なり、割子なり亦之を録子、又之を傍子といふ、釣旨を割子に書して、謂じ来る、表や狀などでなきものを云ふ。増竹之院。隣近の義なり、興聖寺は府治の東北にあり、本嘉興縣の承繼、故に爾か云ふ。取後關花。已に隣近の故、縣の疏なかるべからず、縣花は「蒲縣に桃李の花を種う」など云ふ古語あり。長老。阿含經に曰く、「外法性に達し、内智徳あるを、是れ長老と作す」と。胸襟丘。八字を以て其の量の寛庸を稱揚す。珠云く、「二句、世間の榮利を好まざるの意。」

笑翁面裏。翁は雲隱に住す、虎丘の舊職なるを以て、師に命じて再び藏事を尸らしむ、笑翁名は堪、無用全に嗣ぐ、大慧の孫なり。珠云く、「者の老賊笑裏に刀あり、虚堂面前錚錚を斂し錚錚を斂むることはならぬ、とつくに見てとる、吹嘘せらるゝの語なり。」別浦船上。攪ば攪持なり、纜を攪つて載するの謂なり、前に見ゆ、前の句は笑翁の笑に因つて刀の字を引出す、所謂笑中に刀ありなり。此の句は別浦の浦に因つて船の字を引出す、是れ文字の機變なり。肯は俚語の「がてんする」なり諸山の勸誘説、別浦法舟撰す。浦は空叟印に嗣ぐ、大惠四世の孫。必不帶水。避滯することなこれの謂なり、行履洒脫の謂なり。

樹上の鯉魚、口を開いて笑ひ。石龜眨眼して便ち隣を爲ん。師云く、「妄想すること莫れ」僧云く、「若し是の如くならば、甚の死急をか著たる。」師云く、「何ぞ必ずしも更に丁寧にせん。」僧云く、「學人も也た一片の樹を種ゑんことを要す、只だ是れ未だ人の鑿子を分付するあらず。」師云く、「何ぞ便ち領せざる。」僧云く、「和尚の鑿子を謝す」といつて、便ち禮拜す。師云く、「少を得で足れりと爲す。」師乃ち云く、「臨濟松を栽ゑる、老盧確を踏み仰山粟を奮にし、地藏田を種う。」一段。禧子の家風を顯して、叢林千古の標準と作す。二林。此に到つて、甚に因つてか顛毛卓豎する。拂子を撃つて、「曾て巴峽猿の啼く處を経て、鐵作の心肝も也た斷腸。」

若教把戲。戲は演法に喩へ、場は道場に喩ふ。珠云く、「上堂演法の時を云ふなり。」光前絶後。須らく古今に輝騰すべし。速惠一來。詩經二、邶風終風篇に曰く、「惠然として肯て來る」と、注に惠は順なり。解帶露元公。東坡が詩に「以玉帶施元長老」と佛印了禪師とは東坡居士との因縁なり、今は虚堂に比す、「人物は東坡に及ばざれども、取り持ち申すことは隨分との意なり」と珠長老いへり。活酒引陶令。これは廬山の惠遠法師、陶淵明と遊ぶ、常に酒を沾ひて飲ましむ、蓮社の事は偈頌の首に見ゆ。忠曰く「我れ機鈍しと雖も、若し方外の交を許さば、則ち道盟を辭すべからず」と、上の雖の字、此に到つて義をなす。溪云

く、「此れは師の容接を望む」謝樹頭上。堂實林の遺録、樹を種ゑる役位。栽松道者。佛祖語に見えたり。燈籠浴壁。東嶺云く、「法身邊の句」或抄に「畢竟は道者轉身の活處、燈籠は道者を指す、壁は周氏、天台は祖師の地位。」溪云く、「大人の生縁」と。二林。實林は雙林とも二林ともいふ、直歳は一切の作務を掌る、「清規には此の職なし」と溪抄にはあり。説向偏也。珠云く、「そちに云ふて聞かせることはむづかしい。」樹上鯉魚。上は法身の句に和して言ふた、眨眼は早速を言ふなり、爲隣は相親しきを云ふ。莫忘想。珠云く、「早のみこみ、よいかげんに莫忘想する

上堂、猫に敵血の功あり、虎に起屍の徳あり、彌陀子、恁麼に碑記を没することを得たり。南山雲起れば北山雨下ることは則ち且置く、什麼としてか、桃花は能く紅に、李花は能く白き。

上堂、擧す南泉、衆に示して云く、「王老師身を賣り去らん也、還つて人の買ふあり麼。」僧出でて云く、「某甲買はん。」泉云く、「貴と作さず賤と作さず、彌陀子買はん。」僧無語、趙州云く、「來年、和尚の與に一領の布衫を做らん。」師云く、「南泉、者の僧に一撈せられて、去死十分、趙州力を盡せども既に救ふ處なし、只だ哀を助くることを得たり。」佛生日上堂、僧問ふ、「無愛樹下に、獅子吼を作すことは固に之れあり、天を指し地

な」と。
●著甚死急。珠云く、「此の外に何がござる。」或抄に「某甲のいかやうの妄想が有つて、さやうにおほせらるゝぞとなり、死急は妄想をさす。」
●何必更丁寧。珠云く、「いやが上に、丁寧に云ふことがある、重言太だ過ぐ。」
●何不便領。珠云く、「鑿子早く兩手に分付し了れり、汝何ぞ領せざる。」
●得少爲足。未證已證證の機を抑す。珠云く、「やいとの蓋のやうな。」
●臨濟栽松。本録に見ゆ。
●老盧踏碓。佛祖贊に見ゆ。
●仰山會衆。寶果の解夏小參に見ゆ。
●地藏種田。徑山後錄に見ゆ。
●一段衲子。向上宗乘の大事、末世の法手本。
●到此因甚。珠云く、「此の事

を思ひ出せば、身の毛がなぜよだつ、只だ是れ容易の看すまい爲め。」願は頂なり頭毛倒に堅つたり、職果の義。
●會經巴峽。巴峽の峻險を以て祖宗門下を表す。珠云く、「上の苦勞から、宗風を吹き起すと云ふことを知り玉ふ故に。」
●上堂。珠云く、「あゝよいよい、上堂じゃ。」
●猫有敵血。猫は鼠の血をすゝつて餘瀝を遺さず、猛虎は伏肉を食はず。此の二句、業縣省の語、今二物を擧げて畜類尙ほ各々功德あるを示す。忠曰く、「此の語出據を見ず」と。
●没碑記。珠云く、「これがかうじやと云ふしはしない。」
●「今は參禪功德の記すべき没きを激勵す」と溪抄にいへり。
●南山起雲。一味相應なり、張公喫酒李公醉のるゝ。且置は

を指す。還つて端的なりや也た無や。師云く、「直中の直を信すること莫れ、須らく人の不仁を防ぐべし。」僧云く、「學人、欸に據つて案に結す、和尚何ぞ五逆雷を聞くことを得ん。」師云く、「賊は須らく賊捉ふべし。」僧云く、「與麼ならば則ち四月八日曾て生せず、二月十五日曾て滅せず。」師云く、「未だ梅則と爲す。」僧云く、「人天衆前、信受奉行。」師云く、「頭を斬つて活を覓む。」師乃ち擧す、曹山因に僧問ふ、「佛未だ出世せざる時如何。」山云く、「曹山如かす。」僧云く、「出世して後如何。」山云く、「曹山に如かじ。」師云く、「曹山、針孔裏に向つて活計を作す、黃面老子を見ること未だ盡さず。忽ち人ありて育王に問はば、只だ他に向つて道は

汝等其のことはしるまいと。
●桃花能紅。現成差別なり。
●王老師。南泉の姓は王氏。
●某甲買。珠云く、「躑躅了也是を拈泥と云ふ。」
●貴賤。價の高下を云ふ。
●竹作麼生買。只だ是れ南泉示衆のかんせいを見よ。
●來年與和尚。或抄に云く、「文字の途轍は、こなたの身がはりに、一領の布衫をつくつて進ぜんと、これ趙州、南泉の途轍をすきとみぬ。」
●者僧。某甲、買ふの處じや、去死十分は命がら〜。
●只得助哀。或抄に云く、「虛堂、趙州を扶起するなり、死後に行き、哀情の方つくすまでであるとなり、東家人死し、西家の人の哀を助く」と寒山子はいへり。
●佛生日上堂。育王遺錄。
●無愛樹下。阿輪過、此には無

憂華樹と謂す、因果經に「二月八日、夫人、毘藍尼園に往いて無愛樹を見る、右手を擧げて拈む、右脇よりして出づ。」作獅子吼。釋迦譜に云く、「菩薩自ら行くこと七歩、その右の手を擧げて獅子吼を作す、天上天下唯我獨尊と。」
●還端的也。好所問、此の處分明直下である。
●英信直中直。珠云く、「物見て主眼卓堅すじや」又云く、「巨靈劈開、華山底の腕力じや、かほつきはまっ正直のやうなれども、内心は大毒あり、人のしれぬ處に不仁不慈あるを防ぎ進ざくべし。」
●須防人不仁。直の至極なるものを信することなけれ、但だ須らく人の不正を防ぐべしとなり、人世に處するの法、當に此の如くなるべし。珠云く、「なまけないむごい心のある

ん、漆桶少間く浴佛せよ、牢く杓子を把れ。」

と。上堂、「纔に問著すれば、盡く道ふ、只だ是

れ者箇と。其の端由を詰るに及んで、十箇に

五雙あり、落處を知らず。育王。威光を抑

下して、汝が爲に頭より解註一編せん。」良久し

て云く、「好語説き盡すべからず。」

結夏小參、「缺齒老胡、十萬里より箇の沒滋味

を帯び得來りて、天下の叢林に流布して、一箇

箇をして面のあたりに厮ひ觀せざらしむ。長

期短期、只管捱めて、驀然として箇の無合煞

を打す。便乃ち佛を見ては佛を殺し、祖を見

ては祖を殺す、飛定慧を聞いては唾罵して已

ます。然も是の如くなりと雖も、育王今夏、

此の人あること莫し麼。」主丈を卓して、

「舌上の齶を柱ふ。」

上堂、佛の一字、吾れ聞くことを喜ばずとい

ふ、俗人酒三升を沽ふ。寧ろ洋銅を口に灌

ぐべくとも、信心の人の食を受けずと。此の

地に金二兩なし、會得すれば、兩雙と成ら

ず。然らずんば、花は須らく連夜に發く

べし、曉風の吹くを待つこと莫れ。

端午上堂、僧問ふ、「文殊、善財をして藥を

探らしむ。」財云く、「是れ藥ならざるものなし」

と、此の意如何。」師云く、「落風蓮を引き出

す。」僧云く、「善財草を拈じて文殊に度與す、

殊云く、「此の藥亦能く人を殺し、亦能く人を

活す」と、又作廢生。」師云く、「一人虚を傳

ふれば、萬人實を傳ふ。」僧云く、「學人通身是

れ病、作廢生か醫せん。」師云く、「佛手も也

人は、よくないものと答ふ。」

或抄に「不仁は天を指し地を

指す、不仁不祥の處あり、ま

つすぐと思ふな」と。

● 據款結案。唯だ佛の實狀の故

に、殊云く、「款は釋迦、正

直に白狀したまで。」

● 五逆罪。端的絶死の義、事

は瑞岩録に見ゆ、今の意は頓

悟の義を取る、學人主となる

和尚實となることを得たる。

和尚なせびくくする、こゝ

では賊とみる。

● 賊須賊捉。上の賊は佛なり、

下の賊は師、おれももも賊を

して食ふた、やはりせぬ。

● 不曾滅。此の意を會すとたり。

● 未爲種別。もそつと取つてお

きを出せ、不生不滅の擔子を

擔高す。

● 八天來前。和尚のかく仰せら

るゝを守りませう。

● 斬頭竟活。一死更に再活せず

實主互換の問答、あとでいき

たがつてもゆるしはせぬ、信

受奉行の跡々はらふ。

● 曹山。これは曹山寂の法嗣、傳

燈曹山慧霞大師了悟の傳に、

此の縁を載す。

● 佛未出世時。殊云く、「正位。」

● 曹山不如。偏位と見るべし。

● 出世せぬ處表だみごとたり。

● 不如曹山。不偏不正。一箇の

奴僕とも云はれやう。

● 向對孔裏。小見解。殊云く、

「身うごかしのならぬ處では

たらく。」

● 漆桶少間。殊云く、「人を罵

り呼ぶ辭、今は問諸底を呼ぶ」

或抄に「學者無分曉の鈍淺を

指す、出世未出世に拘はらず。

● 蕪直の指示なり、杓子は浴佛

に約を以て灌沐するなり。」

● 詰其端由。殊云く、「どこが

者箇となじれば、他の言端語

端に涉らず、之を者箇と云ふ」

● 打得する上に。」

● 此人。那箇のものを指す。

● 卓主丈。或抄に、「此の人を

指出す。」東嶺曰く、「虚堂全

提の處を此に見せた。」

● 舌柱上齶。無言の狀。或抄に

「説不得、虚堂も云ふことな

らぬ。」又云く、「柱杖子なり

此の人の境界。」東嶺云く、「鶴

林も求めておいた、此の語は

東山下の暗號と。」

● 佛之一字。類聚佛祖の部に、

た爾を醫すること得じ。」

師乃ち云く、「此の日、天中の節、好事説かざることを得じ。①缺齒の道士、②水を嘔いて符を書し、③斷臂の仙人、空を指して、④訣を捏る、⑤赤眼の麻豆、一時に⑥殄滅す。唯だ虚堂のみあつて、⑦七回八凸。」

上堂、⑧懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る、⑨天下醫人を覓めて、猪の左膊上に灸す。

杜順和尚、⑩鶴臭布衫、終竟に脱し難し、育王は⑪眉毛須彌を觸碎し、鼻孔大海を飲乾す。更に⑫一件の長處あり、人に逢ふて只だ是れ説かじ。」

上堂、⑬吨吨呀呀として、獅子兒の如くなるも我が者裡也。⑭須らく爾を勘すべし、⑮教教罕罕として、探竿影草に似たるもの我が者裏也。⑯

須らく爾を疑ふべし。然も菽麥分たすと雖も、

① 争奈せん鹽の醬裏に落つることを。

② 解夏上堂、主丈を拈じて云く、「所修の行願

所詮の法門、一に具足す、甚に因つてか入夏以來、③米裏に蟲あることを知らざる。若し一轉語を下し得ば、爾に許す。④和合僧を破り、佛身血を出すことを。然らずんば、主丈を卓して、⑤誰か知らん砧杵裏に、此の斷腸の人あることを。」

上堂、⑥盡く書を信するときは、書なきには如かじ、箇の字を識得するも、箇の字を忘却するには如かじ。⑦九經諸子、徒爾として藻飾す、⑧一大藏教、盡く是れ藥方。分明に⑨物に對して税を收む、何ぞ商量することを用ひん。⑩一葉扁舟に大唐を載す。

鴨す、故に此の地に藏金の事却つて已に敗露すと、二づの下語なり。

① 會得兩。以上の兩段の着語にして解すべし、一に多種あり二に兩服なし、二にに非ずの義、上の二段の意、畢竟一致の故。

② 不然。激勵しつべし。漢抄に「會せずんば急急に精彩を著くべし。」

③ 花須連夜。卓異記に、「武后萬月將遊上苑、詔を遣して曰く、明朝遊上苑、火急、報レ奉知、華須連夜發、莫レ待、曉風吹、凌晨に花神皆開き、神助ある若山。言ふ心は他により力を得ずとも、心花發明の時節あるならんとなり。」

④ 文殊善財。或抄に「端午には艾草を取りて疾を療す、故に藥の縁を用ひ。」

⑤ 引出落風蓮。傳説に落風蓮は鴨す、故に此の地に藏金の事却つて已に敗露すと、二づの下語なり。

曲の名、未だ所出を審にせず。今の意は、諸方の舊話を抑するなり。東嶺云く、「平生のはやり歌じや、もそつとめづらしいことを以て来い、古めかしい」と。

① 一人傳虚。以レ此爲ニ口實ニ故に。東嶺曰く、「虚堂、文殊を誘つたか譽めた乎。」

② 佛手也。珠云く、「一手握一手攝。」

③ 天中節。五月五日午時をいふ。

④ 缺齒道士。達磨をいふ。

⑤ 噴水書符。抱朴維應篇に「五兵を辟け、五月五日赤靈符を作つて、心を著はす。」

⑥ 斷臂仙人。慧可をいふ。

⑦ 捏訣。眞仙の秘訣、此の口藥物を收むるの節なり、故に道士仙人の事を設けて、祖師の物を教ふことを述ぶ。捏訣は「まじなひ」なり、印妙をむすんでなど。」

① 赤眼麻豆。「はしかうさう」童子などののどにかきあり。麻は麻疹、「はしか」、豆は痘疹「はうさう」なり。

② 殄。滅なり、平復なり。或抄に「祖宗門下のものをすくふうていをとりに出す。」

③ 七回八凸。凸は起、凹は陷、平復せざるなり、言ふ意は唯だ我れのみ諸聖の法教を受けずと。或抄に「服物を以て居るが、うんだりつぶれたり、いえぬと、畢竟虚堂他の力からぬを云ふ、好上堂なり。」

④ 懷州益州。河南の懷慶府、後魏と唐とに懷州を置く、又四川の成都府、舊は益州と名づく、河南は東にあり、四川は西にあり。古説に「彼此無差別、法身一枚を頌す」と、又云く、「一理齊平の義」と。

慈明録の杜順和尚の頌に注して曰く、「懷州牛喫禾(河沙

世界)、益州馬腹脹(燈暗筒遠)天下召三醫人(驢頭馬角)、灸猪左膊上(畫虎成狸)。」

② 天下覓醫人。言うは此の馬の腹の脹れるを療するが爲め、天下に名醫を覓む、名醫來りて猪の左膊上に灸して、即ち治するなり、是れ一味圓融の境界なり。

③ 杜順和尚。華嚴宗の初祖、終南の法順法師は萬年の杜氏、故に杜順と稱す、これは法身の偶なり。

④ 鶴臭布衫。或抄に「虚堂の目からは鶴臭布衫、けがらはし」となり。法身くさいとなり。」

⑤ 眉毛須彌。大機活脱の境界。或抄に「此の消息をよく人々工夫せよ。」

⑥ 更有一件長處。こればかりと思ふなと。

⑦ 吒吒呀々。口を開いてうなる學者の威雄是の如き者來るも

上堂、擧す、僧、雲居に問ふ、「山河大地何くよりしてか有なる。」居云く、「妄想よりして有なり。」僧云く、「某甲、一錠の金を想出し得てん麼。」居便ち休し去る。師云く、「雲居只だ簡れ、休し去る、者の僧、「身を藏すに地なし。」

中秋上堂、「一步を擧するときは、則ち光萬象を呑む、一毫を措くときは、則ち影千江に落つ。什麼としてか往々に、今霄天上を貪り觀る。」拂子を撃つて、「只だ分明に梅めんが爲めに翻つて所得をして遅からしむ。」

開爐上堂、寒を知り暖を知る、是れ 第二機。作麼生か是れ第一機。主丈を卓して、「動著することを得ざれ、動著すれば則ち而門を燎却す。」

敢て放過せずとなり。英靈の納子を云ふ。我者裏。珠云く、「木戸口たゞでは通さぬ、勘辨そのまゝではおかぬ。敦々宰々は俗語の「ぶらりしやらり、死郎當は「よろ／＼そらんばを引いて、控竿影脚とは身を斜にして他を看ればなり、「ねらひ足し」なり。

須疑隣。他を疑んぜざるの謂なり、オチ骨見ほさにや、此の漢を疑着するの心なり、容易にはおかぬ。教養不分別とは菽は大豆なり、豆と麥とは形を殊にす別ちやすし、故に痴者の候と爲す。或抄に「本分の處を疑過せん。」

爭奈。自然相應して、その跡を見ずとなり。珠云く、「しやうことのないことがある、ありながら分ちにくい、こゝに東山の風で微妙なことあり。」

解夏上堂。所修行願、所詮法門。十度等の行、四弘等の願。八萬四千の法門、一一とは人々、具足とば圓滿に。米裏有蟲。些子ばかりのものありじや。石霜慶諸と嵩山との因縁を云ふ、之を略す、佛燈にあり。

破和會僧。大活現成、軌則を存せざる底なり、此の説もと楞伽經の三に出づ。誰知枯朽。或抄に云く、「米裏有蟲の處、些子ばかりのものあり。」

信者。孟子盡心の下にあり簡の字は一簡の字。九經諸子。易、書、詩、周禮、禮記、三禮、春秋、三傳と、又孝經、論語、孟子、易書、詩、周禮、禮記、春秋、左氏傳とを九經となす、諸子は管、荀、楊等なり。

閏月旦、乗拂を謝す上堂、僧問ふ、「月の大小、歳の閏餘を知らず、是れ什麼人ぞ。」師云く、「第一等、不唧溜の漢。」僧云く、「且く道へ、今日是れ什麼の日ぞ。」師云く、「我れも也た知らず。」僧云く、「老和尚、也た使ひ得られて、七顛八倒す。」師云く、「爾も也た脱不得。」僧云く、「爭奈せん學人、者の保社に入らざることを。」師云く、「豈に退却することを容さんや。」僧云く、「玄沙嶺を出でず。保壽河を渡らず、雙林今夏、許多の漆桶を著けて作麼かせん。」師云く、「簡簡饑虎の厓に投するに似、人人、風の荷葉を擺ふが如し。」僧云く、「和尚の、手臂、終に外に向つて曲らす。」

文意を以て脩飾すとなり。對物收稅。應病與藥の意なり。一草扁舟。或抄に「本分一枚のところなり、又の此の處文字に落つる乎、維摩の芥子、須彌を容るゝに同じ、大小一致の境界。」

從忘想而有。俱舍、唯識、楞嚴、起信の説、皆此の如し、三界は想作意の所生に由る、故に説いて言ふ、三界虛妄なりと。一錠金得麼。錠は和語の「きを」「きを」はがねをながくのべるなり、調法な處のまがせの金を想ひ出さんとなりましやうかと。休去。本分一枚なり。無地藏身。身のおき所なきほど、たはごとを云ふてはづかしい。舉一步。珠云く、「えへんと云ふても」或抄に云く、「一步を進めて、そこへによつと出ると。」

し、利劍空に揮ふ、蹤を逃るゝに及ぶことなし、何ぞ 横に塵尾を拈じて、來機を抑挫するに似かん。 殺活殊なりと雖も、對揚準あり、什麼人か此の三昧を得たる。主丈を卓くて

「一二三、三二一。」
除夜小參、僧問ふ、「禪和 窮鬼子、朝思暮想、結交頭に到ることを得たり。北禪露地の白牛を烹る、雙林何を將つてか分歲せん。」師云く、「金剛栗蓬」僧云く、「他の北禪の家風に勝ること多し矣。」師云く、「作麼生か呑まん。」僧云く、「百雜碎。」師云く、「再犯容さす。」僧云く、「法昌又道く、「臘雪天に連つて白く、春風戸に逼つて寒じ」と、靈師云く、「也た 北禪の背後に在つて又手す」僧云く、「和尚、他の北禪の一句子を 出で

宋時代の俗語、大極上、大馬鹿じや。
師云我也。或抄に「賊意はたらしき。」
被使得。十二時に使ひまはして、乗拂を謝するなど、七顛八倒めさる。
脱不得。那箇の處を自分の處を云ふ、僧の問にかゝはることなかれ。
豈容退款。退いて白狀したはずとも、許しはせぬとなり。
玄沈不用。飛猿嶺を出でず。佛眼養に見ゆ、どこに出ても自分のけまはしと見れば、本郷を出でずなり。
保壽不渡河。賢と保と音通、臨濟の嗣實壽沼和上は、臨濟に參じて他游せず、寶壽第一世、河は河北の地。
雙林今夏。珠云く、「玄沙も保壽も處々たゞまはりはせぬ、然るに虛堂和尚いかいこ

とものものを、集めてなに、する。」
津桶。會中の大衆を云ふ。
箇々餓虎。珠云く、「おれが會下、どれも、餓虎のとは飯くふうことも忘れて精を出す。」
逸堂曰く、「扱は止まるなり。全體險峻底を云ふ、伎倆喪盡するを云ふ。」
如風擺荷葉。清淨無心、皆形容す、會中の衆の心行をば、珠云く、「とるものもないものと、本は何のやうの人。」
手臂終向外。珠云く、「いかさま、さうより外は云ひようはあるまい、定りのことじや。」
師乃云金。珠云く、「奪人不奪境じや。」南本の涅槃經人の如來性品に曰く、「善男子盲人あるが如し、目を治するが爲め、故に良醫に造詣す、是の時良醫即ち金篋を以て、其の眼膜を決す。」篋は竹器、

てより看ん。」師云く、「黄金に 自ら黄金の價あり。」僧云く、「也た是れ 帽を買ふに頭を相す。」師云く、「個驗し得て恰好なり。」師乃ち云く、「古佛の家風、恰好臘月三十夜、祖師の巴鼻、來日定んて是れ大年朝、屎腸を抖擻して、伊に説向す。玄妙機關、初めより密ならず、打透底は、貶眼すれば、歙州の米價を知る、惜憚底は 老棒打てども頭を回さす、行藏 二十四氣に推排せらる。有る時は一へに 大蟲の水磨を看るに似たり、我れ也た誰ぞ能く管得せん。從教あれ 日炙り風吹くことを、然も是の如くなりと雖も、且く時宜に涉らざる一句作麼生。」拂子を擧つて、「嶺梅先づ玉を破り、江柳未だ金を搖さす。」復た擧す、古徳因に僧問ふ、「年窮り歲盡る

鉢は箭鏃なり、共に義に非ず、只だ音を借る而已、當に證にるべし。膜は境じや。日不明なり。
自病難醫。義當に是の如くなるべし、他の醫を治して自らの醫を治するを得ず、言ふ意は他を掃蕩すと雖も自を掃蕩するを得ず。
利劍揮空。珠云く、「人境兩俱奪。快活底自身までも、跡はなきはづじや、それもなほ迷生ぜり。」
横拈塵尾。珠云く、「人境俱不奪。乗拂の首座、塵尾頭上、血と説き細と説き。學者をとりひじく。」
活殺難殊。珠云く或る時は須彌頂へ追ひ上せ、利劍金鏃と。
對揚有準。對答稱揚。此の三昧とは活殺對換の三昧。
一二三三二一。或抄に「逆順

縦横、此の乗拂の首座のみとなり。」
窮鬼子。ナリきり貧乏神。
朝思暮想。單々已事を究明す。
結交頭。舊新相ひ交代の時、いはゆる臘月三十日、靈勘定日じや。」
北禪。さきの興聖錄に見ゆ。虛堂は楊岐の子孫じや、これを以て諸人に與へん。至小と至辣となり。
作麼生吞。金剛栗蓬。
百雜碎。諸相の根本を破るなり。
再犯不容。珠云く、「始に他の北禪に勝ると云ひ、又雜碎と云ふ、再犯不レ容じや。」
法昌又道。感首座、法昌に問ふて曰く、「昔日北禪露地の白牛を烹る、今夜分歲、何の施設がある、臘雪連レ大白云云。」

時如何。德云く、「東村の 王老夜錢を焼く」
 師云く、「事上也た到り 理上也た到
 る、理事互融して 物我を會し盡す。山僧
 年來、水の木頭を浸すが如し、理事他を拘
 すること得ず。忽ち人ありて、年窮り歳盡くる
 時如何と問はゞ、聲に和して便ち打たん。何が
 故ぞ。一歳を添ふことも也た知らず。」
 佛生日上堂、僧問ふ、「二千年前、天
 下太平、二千年後、風波競ひ起る。雲門
 殺活の機ありと雖も、要且つ 彼の命根を
 斷すること得ず。今朝佛法、育王に付在す、
 未審し 如何が施設す。」師云く、「惡水劈
 頭に潑ぐ。」僧云く、「何ぞ諸方に異ならん。」
 師云く、「今日失利。」僧云く、「只だ四方を
 自顧するが如きんば、意作塵生。」師云く、「

① 王老夜錢に見ゆ。
 ② 北禪背後。圓鏡を出でぬよう
 ついてまはる、出格不得。
 ③ 出。超出なり。
 ④ 眞金自黃金。他力を假らず。
 ⑤ 山の不出と云ふことはない。
 ⑥ 買朝相頭。珠云く、「是れ合
 頭の語ではないかと、利口な
 やつじや。」
 ⑦ 願得恰好。さうもあるまいと
 思ふたれば、よく我れをみぬ
 いたと見え、此の僧を弄する
 なり。
 ⑧ 恰好臘月。珠云く、「古佛の
 家風の著語。」
 ⑨ 來月定是。珠云く、「祖師の
 巴鼻の著語。」
 ⑩ 玄妙機關。或抄に云く、「直
 下に會せよ、此の外別にかく
 すていのものはなし。脱體現
 成じや。」
 ⑪ 貶眼知歛州。歛州は徽州府の
 歙縣本歛州と爲す、貶眼は日

たゞきをする、はや那の事
 をしる、俗利の漢。」
 ⑦ 體底。省覺なき底、愚昧の
 漢といふこと。
 ⑧ 老棒打不回頭。古き棒なり。
 移らざる故なり。
 ⑨ 二十四氣。上の報恩錄に、七
 十二氣候の下に見ゆ。
 ⑩ 大蟲水磨。蓋管不得の義、下
 の句を以て知るべし、これは
 鈍漢、猫に小判じや。
 ⑪ 日炙風吹。みな任運の意。
 ⑫ 嶺梅先破玉。或抄に云く、「沙
 底に於て沙らざる底のものを
 示す、現成體直下を云ふ、臘
 底の意なり。
 ⑬ 古德。石門慧徹禪師、さきの
 寶林錄に見ゆ。
 ⑭ 王老燒錢。鬼叩を追除す、紙
 錢をやいて。
 ⑮ 事上也到。珠云く、「世法な
 り、徳の答話を稱義す。」或抄
 に云く、「現成底、除夜相應な

已に然燈の後に落ちん。」僧云く、「恁麼なら
 ば則ち黃面老子、背地に屈と叫ぶ。」師云く、
 「作麼。」僧云く、「氣急にして人を殺す。」
 師乃ち云く、「七步周行。猶ほ彷彿、天を指
 し地を指す分明ならず、是非既に傍人の耳に落
 つ、洗つて 驢年に到るとも也た清からじ。」
 上堂、擧す、僧、馬祖に問ふ、「如何なるか
 是れ佛。」祖云く、「即心是。」師云く、「馬大師
 一隻透心の箭子、中るもの消息を絶す。」
 今日看よ看よ、鋒稜盡ることを矣。」
 中秋無月、上堂、僧問ふ、「馬祖月を既ぶ、
 「正當恁麼の時如何。」西堂云く、「正好供養」
 と。此の意如何。」師云く、「地を掘つて深く埋
 まん。」僧云く、「百丈云く、「正好修行」
 と。」師云く、「好箇の繫驢橛。」僧云く、「南

① 理上も也到。珠云く、「佛法な
 り、托上なり。」
 ② 會盡物我。事理の上頭に到り
 得て、理事不二、物我一如の
 道を會し盡す。珠云く、「今
 時那邊、あざがきれて。」
 ③ 山僧年來。珠云く、「おらそ
 んなことはすかぬ、どうじや」
 ④ 如水浸木頭。木頭はきのきれ
 ばし、水中に木のきれをすつ
 るが如し。珠云く、「ものに
 しみが無い。或抄に云く、「水
 は理事、木頭は虛堂とみよ水
 はなか／＼木のきれをとらへ
 ることはならぬ、其の如く理
 事も虛堂を拘はらぬことはな
 らずとなり。」
 ⑤ 理事拘他。珠云く、「木頭知
 見を絶す、他は木頭なり。」
 ⑥ 添一歲也。只だ此の盡くるを
 知るのみの故に。珠云く、「馬
 鹿め、やがて正月の來るも知

らず。」東嶺曰く、「これが東
 山下の時號か。」
 ② 佛生日上堂。又育王の遺錄。
 ③ 二千年前。世尊未生已前。
 ④ 天下太平。雲門云く、「我れ
 當時若し見ば云云と、淨慈後
 錄に見ゆ。」珠云く、「佛法と
 も世法とも思はぬ。」
 ⑤ 二千年後。世尊降誕已後。
 ⑥ 風波競起。法出でて姦生ず故
 に。
 ⑦ 殺之機。珠云く、「打殺し
 て後、いき／＼としてくれる」
 ⑧ 斷他命根。珠云く、「口先ば
 かり、棒頭短しじや。」
 ⑨ 付在育王。當代法主の謂。
 ⑩ 如何施設。珠云く、「なんと
 差排する。」
 ⑪ 惡水劈頭。浴佛なり。這箇
 我が門の施設なり。
 ⑫ 何異諸方。珠云く、「誰れも
 することじや。」或抄に云く、
 「賊意、和尚の施設は諸方と

泉、拂袖して便ち行く。又作麼生。師云く、「一把の骨頭挑げ去つて後、知らず明月誰が家にか落つ。」僧云く、「祖云く、「經は藏に歸し禪は海に歸す、惟だ普願のみあつて獨り物外に超ゆ」と。」師云く、「路に遺せるを拾はず。」僧云く、「或る人あつて育王に問はゞ、又作麼生。」師云く、「揆せ看ん。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「光。玉宇を飛し、影秋江に落つ。是れ時の人有ることを知る。什麼に因つてか、寒山子、手を伸べて掌を見ざる。會得せば正當三五夜、何の處か嬋娟ならざらん。」佛涅槃上堂、僧問ふ、「釋迦老子。未だ兜率を離れず、已に王宮に降る、」什麼んとしてか却つて生滅ある。」師云く、「汝が間に因らすんば、大衆那ぞ知らん。」僧云く、「過ぎ去つ

はちがうなとなり。」
 ① 今日失利。珠云く、「汝吾が意を會せず、山僧今日失利。」
 ② 已落然燈後。珠云く、「然燈の沙汰じや、今時に落つ。」或抄に云く、「言語聲色邊に墮す。」曹山錄に出づ、三然燈三照の語を具すべし云云。
 ③ 慙慙則黃。或抄に「此の僧、不會にして聲色言語に、實におちたとみえる。」
 ④ 背地叫加。「わきへむいてじや、釋迦もこかげでこやとを云ふべい」と東嶺はいふ。珠云く、「是れは何んとも迷惑無理なことを云ふと。作麼そりやなぜ。」
 ⑤ 氣急殺人。珠云く、「はてさて、虛堂そなたは人をせがみころすやうな人じや。」或抄に「一はたらきはたらく。」
 ⑥ 騎彷彿。是れ相似底にして、正的に非ず。珠云く、「智若

手愚者乎、これ胡亂者じや、風來者じや。」かげばうしをとむるやうなり。
 ⑦ 龜年。未來永久のこと。
 ⑧ 上堂。珠云く、「好上堂、この語は那燈の七に出づ。」
 ⑨ 一隻透心箭子。珠云く、「肝のたばねを射落す矢。」或抄に「即心是の處。」
 ⑩ 中者經消息。東嶺云く、「地獄へ行つたか天堂へゆきしか一向しれん。」全體死漢となる。
 ⑪ 今日看看。珠云く、「今日に到つて即心是佛の語を聞いて悟り得るものなし、是れ箭鋒秃れ盡すとなり、なまじりくさつて豆腐に射透さぬ。」
 ⑫ 正好供養。珠云く、「あゝ面白い語。」
 ⑬ 掘地深埋。珠云く、「むさむさしい、きゝともない、西堂の脚下をみよ。」

て二千年、甚に因つてか。煒煒煌煌として尙ほ人間に在る。」師云く、「鹿を指して馬と爲す。」

師乃ち云く、「暫く。化機を戦めて、彼の波旬の請に徇ふ。再び方便を垂れて、示すに紫磨の軀を以てす。便ち見る、今日は即ち有、明日は即ち無といふことを。釋迦老子を見んと要す麼。」といつて、主丈を卓す。

上堂、僧問ふ、「玄沙甚に因つてか嶺を出でざる。」師云く、「賊を認めて子と爲す。」僧云く、「保壽甚に因つてか河を渡らざる。」師云く、「人は郷を離れて賤し。」僧云く、「玄沙保壽千里同風、和尙甚としてか、一人を肯ふて一人を肯はざる。」師云く、「胡人乳を飲む。」僧云く、「某甲今日、自ら敗鬪を納る。」師云く、

① 好箇聖體。珠云く、「あゝよくくられもの、驢馬をつなぐくひで、つまらぬ賤しきものじや」と。或抄に「正好修行の機を抑ふ。」
 ② 一把骨頭。一つまみのからだ南泉拂袖の處をいふ、没蹤跡にして、とめがたきと托上するなり、挑去は便ち行をいふ。
 ③ 不知明月。共に殺風景を抑ふ、珠云く、「南泉の働、面白い手、知音がない。」
 ④ 路不拾遺。太平の聖代此の如し、今の意は物は有主に歸す、各々理に於て奪ふべからずとなり。珠云く、「三人各封疆を守る、家を脩め業を樂む、太平世界の如し。」或抄に「就中、泉老太平なり。」
 ⑤ 換者。試に一換一抄して看よとなり、換は推なり、舊解に曰く、「月を換し出せよ看んなり、今夕無月、汝試みに月

を推し出せよ看ん。」
 ⑥ 玉宇。月中の有る所なり、東坡の中秋の歌に「瓊樓玉宇高處不勝寒」とあり。
 ⑦ 影落秋江。月のない水はない當年此の如し。是れ時の人あることを知るで、其れ常の故なり、又是れ之に託して佛事を作す。
 ⑧ 因什麼寒山子。此の人月を賞す、前に見ゆ、無月の當意黒漫々地なり、伸し手不見し掌と即今無月の故なり。會得せばと掌文を見るが如し。嬋娟は月のかほよきこと、明暗一枚にして陰晴に涉らざる底を云ふ。
 ⑨ 未離兜率。この語は涅槃經、又は寶積經百七大乘方便品の意、又類聚二に出づるの意。
 ⑩ 爲什麼。珠云く、「徧一切處の佛と見えたに。」
 ⑪ 不因汝問。珠云く、「いやは

「魚肥鳥背。」僧云く、「虚堂も也た須らく、
腦門地に著くべし。」師云く、「老僧修行力
なし。」

師乃ち云く、「佛法の混濫、今日より甚だしき
はなし、尋常 苦口に、只だ諸人の 謾を
受けざらんことを要す。萬が一も 鬪體裏に
入在せば、卒に得出し難からん。二林 與
廢の告報、口は是れ禍門。」

上堂、緊要あり、儘儘に背脊後に麗在す。
緊要なし、時時に鬪體前に 拈在す。如今、
合して一と爲す、之を混融無際と謂ふ。且つ
恁麼に看よ、然らずんば 滴水寸絲も、酬償
するに日あらん。

上堂僧問ふ、「徳山托鉢して方丈に歸る、意旨
如何。」師云く、「貴く買ふて賤く賣る。」僧云

く、「巖頭道く、「者の老漢、未だ最後の句を
會せざるに在り」と、又且つ如何。」師云く、
「關市裏に静槌を打す。」僧云く、「徳山、巖
頭に問ふ、「汝、老僧を肯はざる那」頭、密に
其の意を啓す、又作廢生。」師云く、「鬼搗穀、
佛跳牆。」僧云く、「徳山次の日陸堂、果して尋
常と同じからず、頭、掌を撫して大笑して道
く、「且喜すらくは老漢、最後の句を會せり」
と、又作廢生。」師云く、「刀瘡は没し易く、
惡語は消し難し。」僧云く、「作廢生か是れ最後
の句。」師云く、「爾、巖頭を勘辨するか。」老僧
を勘辨するか。」僧云く、「義鳥紙貴し、一
狀に領過す。」師云く、「怪力亂神。」
師乃ち云く、「沙を雕り玉を鏤ばめ、鐵を
截り釘を斬つて、點として冷地裏に向つて臥

や此の老漢の此の答へ。或抄
に「賊意大衆那ぞ知らんでぐ
わんぜなくて居るべしと僧を
弄す。」

佛の光明相好を表
す。或抄は「僧のふまへ處あ
りといふ。」珠云く、「塵を指
して馬となしたではないか。」
指鹿爲馬。僧の進語、皆聲聞
の曲見の故に、此の語は泰の
趙高の事なり、前に見ゆ。珠
云く、「尤の事だ、理事兼ね
て答へ、爲馬とは語に隨つて
解を生すじや。」或抄に「僧の
ふまへ處を掃蕩す。」

彼波句之謂。波句は此には惡
者と云ふ、天魔の別名なり、
涅槃二十五(北本)に云く、「波
旬往昔我を啓請して、涅槃に
入らしむる者は善男子、而も、
是れ魔王、眞實に涅槃の定相

べきなり、鈍痴漢としからる
なり。方語に反怪良醫と。
魚肥鳥背。其の多口を責む抑
下の托上納敗閑の處を云ふ。
鬪門着地。低頭歸降なり、拜
せよ、鳥背魚肥に違ふては、
頭は上るまいと。東嶺曰く、
「この僧、大抵のものではな
い、虚堂の暗號も、何もかも
知つてゐるやつじや。」
苦口。叮嚀のこと。
不受謾。珠云く、「學者をだ
まして、さうでもないことを
教へておく。」
入在鬪體裏。鬼窟に入りて死
工天を作す、耳に聞かした
ら。
卒難得出。珠云く、「やす悟
りが身にしむと、其の中を出
ることがしにくい。」
與廢告報。珠云く、「世間の
惡知識もがにくめども。」
口是禍門。上の叮嚀の處をは

を知らず云云。」
再垂方便。迦葉が来た故に、
金の精なるもの名づけて紫磨
と曰ふ。
今日即有。涅槃の後分の上に
「今日雖有、明且則無云云」と
この一縁、宗門の傳説すると
ころ、淨慈の後録の首に出づ。
上堂。寶林。
認賊爲子。抑下なり、自己を
とめてをるなり。龍溪曰く、
「玄沙の得意を抑する。」

人離郷賤。珠云く、「他國へ
行けば人が馬鹿にする。」抑下
なり、保壽は臨濟下に於て旨
を得他に遊ばず、郷を離るれ
ば則ち人識らずして、之を賤
む故に河を渡らずと。
一人。保壽と玄沙となり、強
ひて置く郷を離ると認賊と。
胡人飲乳。只だ自ら味を知る、
人に説示すること能はずと、
意に云く、肯不肯、自ら知す

らう、迹を拂ひ迹を滅す。
有緊要。珠云く、「向上補則
の處、大事の事がある。」麗在
は掃蕩。背後は背にかくめお
け。
無緊要。珠云く、「緊要もな
にもない時。」
拈在。建立有なれば背得に麗
げ、無なれば、面前に拈す、
共に其の本位を失す。
合而物一。緊要無緊要を合し
て、混融は強ひて他の爲に名
字を安ず。
滴水寸絲。些々の信施をいふ
酬報債債じや、身を復ふして
信施を還へす。
關市補靜。不恰好の義、靜槌
は禪宗の止靜板の如く、軍中
にもあるなり、聲を以て聲を
止む。
鬼搗佛跳牆。陰冥妖怪の事
なり、密啓の不正を抑下す、

す、何が故ぞ、太平の時代、人家の男女を鼓舞することを得ず。

佛涅槃上堂、僧問ふ、「法身無爲、諸數に墮せず、甚に因つてか、生あり滅ある。」師云く

「誰か便ち知らざらん。」僧云く、「若し色を以て我を見ば、塵の太虚に點するが如くならん。」師云く、「躑躅するに一任す。」僧云く

「釋迦老子に什麼の過あつてか、暗箇の消息を露さざる。」師云く、「明月夜光、多くは劍を按ずるに逢ふ。」僧云く、「只だ風の竹を度ることを聞いて、雪の山に漫たるを覺えず。」師云く、「過を知つては必ず改む。」

師乃ち云く、「黃面老子、毎日諸人と肩を挨し踵を接ぐ、未だ背て少しくも問てず、何ぞ今辰入滅と謂はん。倘若し見得分曉ならば、恩

を歸するに自あらん。然らずんば、佛殿裏に自ら起き自ら倒れん。」

執事を謝する上堂僧問ふ、「東邊にも也た人あり、西邊にも也た人あり、中間作麼生。」師云く、「一點黒うして漆の如し。」僧云く、「且喜すらくは、虚堂の傾話することを。」師云く、「老僧從來柳下惠。」僧云く、「忽ち箇の東西辨せず、南北分たざる底あらば、還つて他を用ひんや也た無や。」師云く、「安ぞ用ひざることを得ん。」僧云く、「他を用ひて什麼をか作ん。」師云く、「東籬を拆き西隣を補はん。」僧云く、「謂つべし是れ。」了事の衲僧と師云く、「衲僧を挿むことを得じ。」

師乃ち云く、「阿逸多、行道の日、他方の化佛、悉く來つて聚會す。虚堂薄縁にして、

握怪少からずじや。刀鋒易没。没は憶なり、感語とは且其老漢、會末後の句をいふ。

義鳥糞。二林は義鳥糞にあればなり、此の僧我を折つたこれまでをいつめた。

一狀領過。方語に衆人同罪也と、そこらうの坊主、皆領過するべし、或抄に「たかくあるほどに、紙一枚にとひ狀をかきもうさうとなり。」

惟力亂神。これは論語の語なり、忠曰く、「孔聖語らず、我れ亦語らず。」あやしいことを云ふとなり。

羅沙鑊玉。建立門なり。珠云く、「徳山底是れに少し云ひたいことがあるが。」諸方底を云ふ。忠曰く、「説法を云ふ。」

鐵錐斬釘。掃蕩門なり。珠云く、「巖頭底。」忠曰く、「喝棒を云ふ、盡く無事に事を生ずじや。」

點向冷地裏。點は慧なり、點は昏沈に非ず、臥は掉舉に非ず、已上は裁割動止の用心なり。珠云く、「虚堂底なり、二老の途轍に涉らず、佛見法を見て絶するの處、點は大智利根、こがしこう、老倒臥して青山に對す。」

太平時代。珠云く、「太平の世界、佛見法見を生じ、男女を鼓舞す、これ無事に事を生ずるなり、故に冷地裏に臥すに如かず。」鼓は舞ひはやしたてる、籠はおつとりこむる。

法身無爲。維摩弟子品に、法身を佛身に作る、五祖の演は摩尼珠に喩へて釋す、大惠武庫に詳なり。

有任有滅。出生入死、運數あるなり。

誰便不知。生滅諸數に墮せざる底の理、歴然分明の故。

若以色見我。金剛經の偈。兩點於太虚。小見の謂なり、是れ徳山の所謂一毫を太虚に置くが若くの類なり。

一任躑躅。うぬがしたいようにせよ。そんならよいとふりすつる。

明月夜光。あゝ尤もじや、茶處の分明、唯だ汝自ら不知音なり、手前にはとくにこたへたとたり。

只問風度竹。師の意を悟りて悔過す。或抄に茶處をやりずとしてあると、一邊を知りて一邊を知らずんば、見處全からざるなり。「知し過必改と、向後たしなめ。」

毎日與諸人。如來常住無有變易と。換肩接踵とは同行の謂なり。珠云く、「釋迦らだけじや。」

恩歸有自。自を一に由に作る、珠云く、「佛恩を報ずるに分

ありじや、開悟の時節をいふ佛殿裏に自ら起ち自ら倒れんとは佛殿は一眞法界、起倒は生滅、空しく禮拜するのみ。或抄に確頭の下上するが如きのみ。」珠又云く、「嬰兒が母の懷で恐ろしい夢を見て汗をかやうな。」

謝執事上堂。寶林の遺錄、執事は知事なり。

東邊兩邊。山門の兩序。

中間作麼生。珠云く、「兩班は不足はないが、中の小佛はどうでござる。」或抄に「虚堂底はどうじやとの意を含む。」

一點如黒漆。珠云く、「正位なり、暗に虚堂を抄問す。」或抄に、「中間底のものを答ふ。」

且善虚堂。或抄に「師を弄するの機あり」と。東嶺曰く、「和上を釣りにつり上げた。」

老僧從來。可もなく不可もなき底なり、前の顯孝録に見ゆ

を歸するに自あらん。然らずんば、佛殿裏に自ら起き自ら倒れん。」

道古に及ばず、自ら吹き自ら拍つて、分に随つて時を過す、過從する所の者、皆良輔に非ず、文殊の目を列り、普賢の脛を折り、維摩の座を碎き、迦葉の衣を焚く。是の如くの流輩、以て親近し難し。何ぞ也、只だ己に克ち人に従ふことを知つて、覺えず唇寒く齒冷じきことを。」

佛涅槃上堂、靈鷲山頽れ、毘嵐風起る、善類膺を撫つて涕を出し、魔軍足を頓てて歡喜す。之を愛するときは、其の生けらんことを欲し、之を惡むときは其の死せんことを欲す。豈に二千年前而已に止まらんや。野外春風花正に都なり、黃鶯枝上分明に語る。圓覺大師忌日の拈香、渡江の風蘆梢の碧に倚り、夜深けて金殿人相憶ふ。此土西天賣

不行、千古萬古狼藉を成す。良月、葉五葉を敷くの辰に當つて、孰か謂ふ、其の光を縉み其の跡を晦ますと。熏爐茗椀遺音を想ふ、分明に對面して相識らず。泉州崇福、源長老到る、上堂舉す、「楊岐和尚道く、「縮却項一暗嗟呵」と。白雲は則ち曰く、「大いに嫁に臨んで癢を醫するに似たり、卒に手脚を著け辨せず。」五祖又道く、「行くに歩を成さず語つて低聲、鼻孔依然として突兀」と。以て圓悟・虎丘・應庵・密庵・松源運庵、皆玉憂し金を鏗して、此の家法を擅にすることを致す。此の脈を踏得する底あることなし麼。主丈を卓して、「龍蛇は辨じ易く、衲子は設じ難し。」上堂、「一を丁て二を卓つ、無邊の刹境

珠云く、「よいと云つても喜ばず、わるいと云つても腹立たず。」東西不辨。或抄に「百不知百不會の境界の漢とは、此の漢じや。」拆東離西。知事の令する所なり、執事を罰するに當る。拆香「たく」裂なり。東嶺曰く、「それはしれたこと、木綿衣が穿ちたら、木綿を以て補へ。」了事納僧。珠云く、「東西を辨ぜざる底の人を稱ず、一切の事、うちあいたをいふ。」圓掃臂。多口を許さず。珠云く、「商の立つ老僧ではないはやれ。」或抄に「謂嘆し及ぼさるる故に。」阿逸多。此には無能勝と云ふ、彌勒の名なり、彌勒は慈氏と翻す、即ち阿逸多の姓なり、今は寶林の開山善惠大士を指す、彌勒の後身なり。

他方化佛。「七佛相隨ひ、釋迦前を引き、維摩後を接するを感ず」と傳燈の善惠大士の言に出づ。前の寶林錄に出づ。致吹自拍。唱和なき謂。珠云く、「歌ふも舞ふも唯だ唯だ獨り。」過後。珠云く、「此に過ぎて我れに従つて遊ぶもの、皆良輔に非ず」と、却つて「一惡辣手なることを謝す、今はなしじや、抑下托上か自負かなり。」劍文殊目。無師の智目。析普賢脛。無作の行履。碎維摩座。師子の座。快迦葉衣。上行の衣。難以親近。已下は師自ら檢點するなり。克己從人。執事の人を得るを貴んでいふ。唇寒。輔弼なきに比す。齒冷は自孤獨なるに比す、法を説

く上をいふ。靈鷲山頽。靈鷲は山の名、世尊化法の地、毘嵐は國名、世尊降生の地、山頽れ風起るは特に涅槃を表す。忠曰く、「毘嵐ば倒なり、猛迅の風を云ふ、劫末の大風なり。」善類撫膺。善類は三乘及び河沙の人天、最善の衆類をいふ。頓。止なり。忠曰く、「魔軍行を止めて、安息するなり。」欲其生。善類を纏ふ。欲其死。は魔軍の句を纏ふ。豈止乎二千年。已下は現成天眞涅槃の眞相を以て結ぶ。二千年前ではない、今日嚴然たりと。豈止は今尙ほ如此。野外春風。此は直下に涅槃底なり、都と語とは叶ふ歟。圓覺大師。達磨圓覺大師の忌日、十月五日の祭供に拈香供養せらるる語。渡江風倚。此の句は祖師の道

風、人の契ふものなきが故に、江を渡るを云ふ。梁の武帝、暗に達磨に契はざるを云ふ。此土西天賣。一法滯貨を成す、高直で買手が無い。夜深金殿。此の句は梁武帝の追憶するを述ぶ、雪寶の頽に「千古萬古空相憶」といふが如し。千古萬古。滯貨となつてとりみだす。又宗乘の發揚をさす。良月。十月の異名。豈は曉の時に生じた。瑞草の名、月の一月に一莢生じ、十六日一莢落つ、五日日なればなり。縉其光。嚴然拜すべし。熏爐茗椀。爐にはよき香をたいて、よき御茶をそなへ、御聽走を供して、祖師の遺音を想慕すれども、對面するに分明には不識と、これは押韻になりてある、飄らざる最も相親しじや。

一毫に收む。②兩を放ち三を拈ず、③萬仞峯頭獨足にして立つ。④言不及の處を以て、⑤魔王の鼻孔を穿透し、⑥食未到の口を以て、⑦衲子の咽喉を塞斷す。⑧燈籠露柱暗に眉を擡め、木馬石人顛倒して走る。⑨既に⑩是の如きの妙用、是の如きの奇特あり、則ち育王が門戸、未だ寂寥に到らず。何が故ぞ。⑪拂子を撃つて云く、⑫後代の兒孫、妄想することを休めよ、⑬鷓鴣の啼くことは春風の爲にせず。」

上堂、⑭鐘鼓の鳴るは、以て禮樂を節しつべし、⑮權衡の正しきは、以て錙銖を定めつべし、⑯我れ比丘、佛弟子として、⑰道あり徳あり、仁あり義あり。結夏已に一月、業識茫茫として、殊に已に在らず、良に悲みつべし也。⑱慕然として箇の牙、劔樹の如く、口、

①泉州崇福。「北宋の朝に建つ明の永樂の初重修す」と一統志七十五にあり。

②源長老。源は即ち師の門人、故に今從上相承底の宗師の家風を擧げて之を徴す。

③楊岐道。本傳に「楊岐乍住屋壁疎、蒲床蕪布、雪裏珠、霜中却項、暗嗟吁、良久曰、翻憶古人樹下居。新却項とかゝる寺を持つものかな、したがここに思の外のことがある。」

④白雲明曰。これは乍住の故に、白雲自ら謙下するを叙ぶ、今新命長老至る故に、古人初住の時のことを云ふ、意は「くびのこぶ」なり。

⑤行不成歩。徐行なり。「一たび足びを擧げるを跬となす、再び足をおぐるを歩となす」と珠は注せり。これは五祖録の病起の頌の中の末の句なり。「依然空突兀とは、上三箇の

事をあげ、佛法行住坐臥日用の上容易にしがたきと虛堂示すなり」と或抄に見ゆ。」

④憂玉鏗金。書經に鳴球を憂擊すと、之を擧るなり、鏗は撞なり。此の家法を擧にすることをと、説法の妙音、此の如き放なり、横説聖説を云ふ。

⑤踏得此脉底。源公は其の人なり、ふみしめて、のみこんだやうがあるか。

⑥龍蛇易辨。或抄に上件の事をつきうるは源長老。白隱禪師曰く、「おれも昔し美濃に安居して一首やつた、「忘れては寒しとぞ思ふ床の雪を、拂ふびまなき人もありしに」と。

⑦上堂。育王の遺録。

⑧丁一卓二。丁は物擬然成立の貌建立門なり。不二抄に曰く「算法の語なり。」忠曰く、「古解みな算法の語といふてその義を解せず、亦下落なし、石

血盆に似たるあつて、出で來つて便ち喝す、擬議すれば便ち掌せん。老僧道はん、①爾且く住みね、我れ今年七十七、爾也た。②我れに些子を饒せ、者の漢、頭を回して。③一覷して、冷笑して去らん。且く道へ、他箇の甚麼をか笑ふ。④主丈を卓して、⑤我れに投するに木桃を以てす、之に報ゆるに瓊瑤を以てせん。」

上堂、擧す、⑥興化未だ出世せざる時、常に云ふ、「我れ南方に在つて、行脚一遭す、主丈頭曾て箇の⑦佛法を會する人に撥著せず。大覺聞き得て云く、「何の時か業風に吹かれて、大覺が門下に入ることを得ん。」化一日、果して到る、大覺講じて院主に充つ、大覺一日院主と喚ぶ、「我れ聞く、爾道ふ、「南方に向つて行脚す、主丈頭、曾て箇の佛法を會する底の人に撥

溪録の蔣山録に曰く「有時丁一卓二有時放兩拋三」と、把住の義なること、此の語を以て知るべし。或抄に「わづかに一法か立する」と。珠云く、「二天作の五。」

③無邊利境。途中に在つて、家舍を離れず。」

④放雪拈三。拈は拈じて之を去るなり、一を去却し七を拈得するの例の如し。掃蕩門なり。珠云く、「二進一十じや。」

⑤拈却は下つてすつるなり。

⑥萬仞峯頭。家舍に在つて途中を離れず。或抄に云く、「向上峻峻にしてじや、即ち虛堂底なり。」

⑦意不及處。或抄に「ものゝ心にみよ。」

⑧魔王鼻孔。珠云く、「馬にして乗らうと、牛にしてのらうと、こつち次第。」

⑨以食未口到。珠云く、「めし一

粒くひをらぬ口じや、衲子の口じや。」塞斷は塞斷をしらねばいかぬ。

⑦燈籠露柱。珠云く、「此の端的に到つて。」或抄に「如上の機用、那箇の上の自由を云ふ。顛倒は肝をつぶすなり。」

⑧如是。珠云く、「祖師門下に是の如く。」育王など此の如く機用を具してをるゆえ、寂寥に到らずじや、さびしいことはない。

⑨後代兒孫。或抄に云く、「此の如く奇物はあれども、門下後代の兒孫。」

⑩鷓鴣啼。龍溪曰く、落句に到りて、自然任運の機を示す。」珠曰く、「上の風味はすつても見ることはならぬ、故こんなことを云ふておく、龍溪和尚が。」或抄に「未だ寂寥の消息は、この句に向つて見よ。」

⑪鐘鼓之鳴。珠云く、「世の禮樂

著せず」と、備什麼の眼をか具す。「化便ち喝す
大覺、棒を拈す、化、擬議す、覺便ち打つ、
化又喝す、覺又打つ。來日、化、法堂前從り過
ぐ、覺、院主と喚ぶ、「我れ直下に備を疑ふ、
昨日の者の兩喝、我が爲に説け看ん。」化云く
「我れ三聖の處に在つて、箇の賓主の句を得
たり、總に師兄に折倒し了らる、也た箇の安樂
の法門を乞ふ。」覺云く、「者の瞎漢、者裏に來つ
て、敗闕を納る」といつて、衲衣を脱下して
痛く打つこと一頓す。興化急ち大覺の棒下に
於て、頓悟して云く、我れ今日方に先師の黃檗
の處に在つて、棒を喫する底の意旨を知る」と。
師云く、百尺竿頭に歩を進むることは、未
だ之を驗と爲す、當時大覺の棒頭に、若し活眼
なくんば、興化、臨濟の悟處を見んと要すとも

を以て叢林の規矩に擬ふ、今
は結制安居の故にいふ、節し
つべしとはほどよく事をつも
りなり。
① 權衡之正。權は「おもり」衝
は秤桿「はかりさば」錙銖は
輕重なり。
② 我比丘。佛珠云く、「それだも
の、それで守るべき處は佛弟
子として。」
③ 有道有德。珠云く、「道の手入
るを有徳といふ、仁は常受用」
④ 茫茫。珠云く、「そこはかとな
くじや、殊に不在に已で、自
己半點の分なし、已身に行は
ずじや、良に悲しみつべしと
は、已に先佛の法則あり、又
各々徳義を具して、その身に
行はざることを嘆ずるなり。」
⑤ 驚然。珠云く、「此の時、か
るをりふし。」
⑥ 備且住。或抄に「令亂に行ぜ
ざれ」と。

二八八
① 備我些子。珠云く、「目長く見
てくれ。」
② 一戲冷笑。珠云く、「ひとた
びちらりとみて、にがわらひ
をして、何方へか去る、箇の
甚塵をか笑ふは、上の冷笑し
たる處、卓主文とは笑ふ底の
ものは、主丈を卓してみよ」
と。
③ 折我以木桃。此の兩句は詩の
衛風木瓜の篇に。珠云く、「木
桃は便ち掌す、瓊瑤は我今年
七十七」と或抄に冷笑のもの
を云ふ、瑤は美玉なり投「な
ぐる」、有狐三章の一章日なり
即レ報也永以爲好也とあり、
男女贈答するの辨、靜女の類
の如しと註にみゆ。
④ 興化。存慶禪師、初め臨濟に
參じ、發明して大覺か過り、
二十棒を打す。大覺は魏府の
大覺、共に臨濟に嗣ぐ。
⑤ 會佛法人。佛法をなめ知つた、

也た未だ得ざることを在らん。① 近日有等の瞎驢、
精麈を辨せず、只管に 胡喝亂喝す。②
上堂、③ 朝朝相似て、日日一般なり。④ 見成受
用、千難萬難。⑤ 因つて思ふ臨濟、黃檗を掌す
ることを。⑥ 何ぞ似かん華亭に釣竿を把るには。
⑦ 瑞嵩和尚を謝する上堂、⑧ 待に意あるときはは
來らず、⑨ 無心にして忽ち會面す。⑩ 頂髮絲を
垂れ、⑪ 眼光電の如し。⑫ 湖海の風波を説き盡
し、柴米の貴賤を論量す。⑬ 更に一處あり、人
の知ることを少なり。⑭ 拂子を擧つて、「也た是れ
重ねて眼上の眉を安す。」
上堂、徳山門に入れば便ち棒し、臨濟門に入れ
ば便ち喝す、虚堂門に入れば便ち罵る。徳山門
に入れば便ち棒す、喚んで棒と作し得てん麼、
臨濟門に入れば便ち喝す、喚んで喝と作し得て

撥著は。又拂著に作る。「ツツ
トウツ」
① 拈棒。打つ勢をなす。
② 疑。疑の字、珠云く、「釣竿手
に在りじや。」
③ 爲我。覺の勘辨なり。
④ 箇賓主句。傳燈には學得底と
あり。師兄は大覺なり。
⑤ 脫下。まつはだかにして。
⑥ 一頓。一次なりひとたびじや。
⑦ 百尺竿頭。珠云く、「興化竿
頭始めて歩を進めたから見
はし。」
⑧ 近日有等。珠云く、「かうした
ことをしらず、當時の弊。」
⑨ 胡喝亂喝。珠云く、「せう止の
ものじや。」
⑩ 朝々相似。珠云く、「來る日も
來る日も、同事短い、上堂な
れども月山などと云ふ如き名
作上堂じや。」
⑪ 見或受用。珠云く、「喫茶喫
飯、境に對し縁に觸れ、憎愛

二八九
揀擇、忽ち生ずる故、何のむ
だこと、たはいの皮じや。」
④ 因思臨濟。珠云く、「逆風で、
たそれたれめじや、惡辣の處却
つて入りやすし。」
⑤ 何似華亭。珠云く、「順水じ
や、くそたれか。」
⑥ 瑞嵩和尚。續傳燈の松源下に
少室光睦、雲集巖あり、二人
共に台州の瑞岩に住す、その
一人か。
⑦ 有意待。珠云く、「こいでく
と。」
⑧ 無微忽會面。珠云く、「心した
くもせぬをりから。羅摩の問
疾品に云く、「不來の相にして
來不見の相而見る」と。おも
いもよらぬ處で。
⑨ 頂髮垂絲。早や年がよられ
た、老成をいふ。
⑩ 眼光如電。活眼をいふ、眼光
てりかじやくばかり。
⑪ 湖海風波。互にかくすことな

ん麼、虚堂門に入れば便ち罵る。喚んで罵ると作し得てん麼。既に喚んで棒と作すこと得ず、又喚んで喝と作すこと得ず、又喚んで罵ると作すこと得ず、畢竟喚んで什麼とか作さん。拂子を撃つて、平生の肝膽人に向つて傾く、相識は猶ほ不相識の如し。

冬夜小參。翠陰剃盡して一陽生ず、又見る。東山水上に行くことを。冷笑す雲門多口の老却り來つて日午に三更を打す。若し恁麼に見得せば、皓老の布靴、是れ洗はざるにはあらず、替換を得ることなければなり。鏡清の臥單、是れ展べざるにはあらず、者の閑工夫なればなり、看よ古人。九九百百、艱難難難。什麼の面替をか成し得る。主丈を卓して、「一東二冬、又手當胸。」

上堂、擧す、雲峯の悦禪師、初め大愚に參す、衆に示して云く、「大家相聚つて、葦蕪を喫す若し、喚んで一葦蕪と作さば、地獄に入ること箭の射るが如くならん。」峯之を奇なりとして、參堂を求む、後方丈に詣して請益す。芝曰く、「佛法は爛却せんことを怕れず、我れ寒を忍ぶに暇あらず、何の暇あつてか汝が爲に佛法を説かん、且つ去つて炭を化せよ。」歸るに及んで再び請益す、芝曰く、「佛法は爛却を怕れず、我れ饑を忍ぶに暇あらず、何の暇あつてか汝が爲に佛法を説ん、更に去つて持鉢せよ。」歸る日又方丈に詣して請益す、芝曰く、「佛法は爛却を怕れず、堂司人を闕く、且つ我が爲に維那に充たり去れ。」忽ち一日僧堂の後架にして、桶籠の爆するを見て省あり、急に方丈に走る、芝

り、遺話を打す、うちあけ話のこを云ふ。
① 更有一處。密談がござる。
② 重安眼上眉。若しその道徳を講ずるときは、則ち眉上に眉を安ず。前の朝には一韻、此れは即ち換韻。眼上に又添へてかく云ふも、はやいやなりとなり。
③ 平生肝膽。従上來只だこれ心切、却つて不心切に似たり。或抄に上段このほとり、直下にとり出す、不相識のものが知音なり。
④ 翠陰剃盡。或抄に云く、「八角磨盤空裡走に同じ、蓬底のものを以て不蓬底を示す。」
⑤ 東山水上行。一陽生ずる時に當つて、請佛出身の縁を記す珠云く、「思ひだされた。」方語に衆所不レ到と。
⑥ 冷笑雲門。雲門の因に僧問ふ「如何なるか是れ諸佛出身處」

門云く、「東山水上行、」冷笑は雲門を戲し笑ふ。
⑦ 却來日午。不恰好の義時節にはおちぬぞ、又自由自在じや。ちもなない事する。どうじや東山水上行」と珠は注せり。
⑧ 若恁麼見得。諸人語に隨つて解を生ぜず。
⑨ 皓老布靴。玉泉承皓は北塔廣に闢ぐ、雲門五世なり。
⑩ 無得替換。きがへなし。此縁はこの縁の裡山後録書雲の夜參に出づ。
⑪ 無者閑工夫。全體臥單をつげず、日用工夫なり。閑工夫は「いたづら」なり。
⑫ 九九百百。九は數の極、百は數の成、鏡清鶴老の外、却つて従上幾計の古徳を括し来るなり。十人が十人、百人か百人といふこと。
⑬ 艱々難々。皆法に於て苦辛す。

① 什麼而驚。珠云へ、「猶ほ何の模樣を成し得ると言ふがごとし。」
② 一東二冬。東は餘處には冬に作るべし、一冬は冬十月十一月なり、言ふは別の面替なし只だ又手して冬月を過すとたり。逸堂云く、「平常無事なり。」
③ 雲峯悦。大愚守芝に闢ぐ、芝は汾陽に闢ぐ。
④ 大家。珠云く、「數義あり、今は諸人をさす。」
⑤ 葦蕪。菜肉離ゆるの通稱、こゝには野菜とみよ。
⑥ 喚作一葦。或抄に「無念無相にして食ふべし」
⑦ 不怕爛却。爛壞の物にあらざ、故に之を求むること遅からず、「くたばるときはくたばれの意」と珠云へり。
⑧ 化。動化。
⑨ 爲我。大愚はよい坊主だ」と

珠は云へり。
⑩ 桶蕪爆。をけのたがのはじくおと。
⑪ 無語擧出。本傳には「師再拜一辭を吐くに及ばずして去る」と。
⑫ 針砭。いしぱり砭石なり。
⑬ 起。平治の謂ひ、病より起つなり。
⑭ 後人指下。後來の師家、指を以て脈を診するも、疾を知らず、自ら眼明かならず、學者の病性を曉らざるを云ふ。脈のとりにやうさうでなしじや。
⑮ 藥病相治。大休歇なり、言ふは後人大愚の爲人の微困を辨せずして、只だ雲峯の情處に就いて辨ずとなり。或抄に云く、「雲峰のみを知つて大愚を知らず、」又云く、「悟れば一藥にして二段なし、一片の心なり。」
⑯ 師到孔峯。西江廣禪師の處、

迎へ笑つて曰く、「維那且喜すらくは大事了畢。」
再拜汗下る、無語にして趨り出づ。師拈じて
云く、「大愚、針砭を施さず、雲峯の疾を膏盲に
起す、後人指下明かならず、只管に藥病
相治の處に向つて看る。」

師乳峯に到る、衆、上堂を請ふ、「雪竇門下、
盡く是れ上根利器、之に親くときは則ち毛
髮悚然たり、之を望むときは則ち精神恍惚た
り、者裏に到つて、誰か敢て妄に消息を誦せ
ん。頼に堂上の西江老子、是れ家裏の人なる
に遇ふ、未だ免れず。風を借つて帆を揚ぐるこ
とを。所以に道ふ、路に道伴に逢ふて、肩を交
へて過ぎば、一生參學の事畢んぬと。然も是
の如くなりと雖も、且く參學の事畢る底の上根
利器、作麼生か相見せん。」主丈を卓して、錦

雪竇の住持圓悟派下なり。
毛髮悚然。悚懼して毛髮卓立
なり。身の毛もよだつあぐた
れもの。
恍惚。意を失するなり。
妄通消息。或抄に云く、「上堂
して佛法とさいことを説か
ん。」
西江老子。西江廣説は純庵淨
に嗣ぐ、圓悟六世、家裏人は
法縁の人なりといふ。
借風換帆。西江の餘風に據る
なり。
一生參學。長慶の語なり、延
師錄に見ゆ。
錦鏡亭前。任運の境界なり、
此れ則ち直下に現成底、上根
利器の餘風、錦鏡妙高は共に
雪竇の境致なり、偶頌に見
ゆ。
師參學。師の行狀を按ず
るに、師寶林に任ずること五
年にして、強寇の難に墮る、

松源の塔下に歸る、此の時な
り。
杜絕世諦。偶頌に、北山庵居
並に上竺の池院より、鶯蜂卷
に歸るの頌あり、皆世を遠ざ
くるの意を述ぶ。
已眼未明底。虚空を將つて布
一袴と作して著くとは、十分
暗昏々地、是れ誰か裁截せん。
或抄に云く、「自己の眼暗を
睛却して、眞箇の瞎漢と爲る
ときは、則ち本分暗昏々地の
境界を得る故、大虚堂を將つ
て一輛の布袴と作す、着くる
ことも亦便ち得たり。
割地牢爲底。是れ誰か透過せ
ざらん。或抄に云く、「割はも
と人の惡む所なり牢と畫かけ
るは入らざるを以て牢と爲
す、これ縁擇怖畏の心あるに
因つて、其の心なければ則ち
たとひ眞獄と雖も、透過し易
し、況んや畫牢に然てをや。

鏡亭前風凜凜、妙高孤頂雪漫漫。」

師、靈隱の鷲峯塔に在つて、世諦を杜絶す、褫子請益すれば、遂
に三問を立てて之に示して、各著語せしむ。
一には、已眼未だ明めざる底、甚に因つてか虚空を將つて布袴と作し
て著く。
二には、地を劃して牢と爲す底、甚に因つてか者箇を透り過ぎざる。
三には、海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を翹つ
る。

入海算沙底。翹足とは自由自
在なり。或抄に云く、「海に入
りて沙を算ふれば徒に力を費
し、區々として未だ塵埃に走
ることを免れず、今言ふ海に
入つて沙を算ふるが如き、數
へて無量に到る、伎倆已に盡
くれば則ち活脫自在の路を得
るなり、此の時に到つて針鋒
上に足を翹つる、未だ分外と
爲す、百尺竿頭に上ることも
亦得ん矣、如上の三條の註解、
之を名づけて邪解と言ふ參學
の人、寔に恐るべし、寔に恐
るべし、殊云く、「入海は文字
に縛せらるる鈍漢。」

續輯終

臨安府淨慈報恩光孝禪寺後錄

上堂、僧問ふ、「黄檗、臨濟を打つ時如何。」師云く、「生蠶を逼めて繭を作らしむ。」僧云く、「臨濟、黄檗を掌する時如何。」師云く、「冬、春の令を行す。」僧云く、「若し與麼ならば、黄檗臨濟二俱に瞎漢。」師云く、「許多の年の黄檗臨濟、今日、方に知音に遇ふ。」僧云く、「黄檗臨濟其麼の過かある。」師云く、「龜の鬪を負ふが如し。」僧云く、「中に於て還つて得失ありや也た無や。」師云く、「棒を喫せしめ了つて歎を聽す。」僧云く、「若し是の如くならば、和尚也た是れ箇の瞎漢」といつて、便ち禮拜す。師云く、「家に

① 後録傷頰部に、準侍者歸省並に賢侍者木翁と號する頰あり。壽會は所據なし、蓋し皆侍司中の人なり。
② 通生蠶作繭。舊解に曰く、「未熟の人を強ひて知識と爲す、又道理なきなり。」或抄に云く、「黄檗を抑下す臨濟にもかゝる。」
③ 冬行春令。舊解に曰く、「逆を謂ふなり、禮記二の月令に、一季冬の月春の令を行せば、則ち胎天傷れ多し、國凶疾多し之を命けて逆といふ」と或抄に「道境界なり」と。
④ 方週知音。珠云く、「そちがやうなよい知音。」

⑤ 龜負鬪。方語に「自ら身を喪ふの兆を取る」と或抄に「いはれぬことをするゆえ失命す。」
⑥ 喫棒了聽歎。珠云く「歎は白狀、棒を喫し了つて白狀させる。」或抄に「己に瞎漢と云つて、又得失を問はじ。」
⑦ 瞎漢。托上なり。
⑧ 家無小使。君子と成らず。東嶺曰く「牛は譽め牛は罵る語じや。」
⑨ 耳目之察。忠曰く「物理を分つことに須らく真心の惠光に據るべし、耳聞眼見の淺近の如きんば、以て物理を分つに足らず。」

參學 道準 禧會 紹賢 編

小使なし。」師乃ち云く、「耳目の察は、以て物理を分つに足らず、情識の論は、以て功助を定るに足らず。山僧進院してより以來、毎日、僕僕として尙ほ爾り、收息するに暇あらず又何の暇あつてか物理を分ち功助を定めん耶。」拂子を擧つて云く、「小自り持齋今已に老ゆ、人を見て禪牀を下るに力なし。」佛涅槃上堂、擧す、世尊入涅槃に臨んで、人天衆前に於て、手を以て胸を摩で、普く大衆に告げたまはく、汝等善く吾が紫磨金色の身を觀よ。今日は則ち有、明日は則ち無、瞻仰足ることを取れ、後悔せしむること母れ。」師云く、「山僧當時、若し會中に在らましかば、但々低低地にして道はん、世尊、簸箕を拈取して別處に春

① 情識之論。情識は計較安排なり、功助は修行所得底。
② 僕々。煩猥の貌、事の繁多なるをいふ。孟子にも僕々爾とあり、わづらはしきことを云ふ。
③ 收息不暇。入院以來、住持事繁ふして、收息安息するに暇あらず。珠云く「手前に勝手によいやうなことはない。」
④ 自小持齋。この語は趙州の傳に「眞定の師王公、諸子を携へて院に入る。師坐して問ふて曰く、大王會すや、王曰く不會。師曰く、自小自小持齋自己老、見人無力下禪牀。王尤も體重を加ふと、今之を用ひて無爲安住の義を述ぶ。珠云く、「景定五年正月十六日、淨慈に住す、八十歳なり、故に此の語を用ふ。」下るは接するなり。
⑤ 瞻仰。或抄に云く「瞻仰して

拜したきものは拜せよ。」
⑥ 低低地。頭を下げて。
⑦ 拈取簸箕。或抄に「簸箕は上下の唇を云ふ、別の處へ行きかくれよ。」珠云く「虚堂ばかり世界の惡毒を呑みこんだ故に云ふ」箕でひて白でつけ」のところより轉用す。
⑧ 鄭重。珠云く「して面倒な。」龍溪曰く「今日唇皮を舂いて慙慙に開説するを免れ得たりとなり。」鄭重は猶ほ煩煩と言ふが如し。
⑨ 識心達本。本則なり、人々が心を識るが元じや。
⑩ 坐井觀天。著語なり、禪宗向上の眼から見れば、そうせまい。
⑪ 窮理盡性。人々本分の理。
⑫ 水中撈摸。方語は「空費手脚」と、しちめんどろじや。
⑬ 抹過兩重關。珠云く「心を識ると理を窮るとの兩重關、抹

けと。若し者の一轉語を下し得ば、今日、鄭重なることを免れ得ん。

上堂、心を識つて本に達す、非に坐して天を觀る。理を窮め性を盡す、水中に月を撈ふ。兩重の關を抹過して、且つ行住坐臥の處に向つて、人の鼻孔を借つて氣を出さん。直

饒ひ與麼なるも、猶ほ圓覺の四病に墮在す、作麼生か獨脫無依なることを得去らん。主丈を卓して云く、「長憶江南三月裏、鷓鴣啼處

百花香。」

上堂、擧す、斷際禪師嘗て、異僧と天台に遊ぶ行くこと數日、江の漲るに値ふて濟ること能はず。杖を値つること久之、異僧笠を以て舟に當て、之に登つて浮び去る。斷際曰く、「我れ早く汝を知らば、定んで汝が脛を、捶折して乃

ち快らん也、異僧歎じて曰く、「道人猛利なり我が及ぶ所に非ず。」師云く、「道人猛利難親近、深、笠中流、驗、作家、憶昔高

人何處去、夜深和月過平沙。」

新承天和尙を謝する上堂、泰山頽る、巨靈託しつべし。絃音斷つ、鸞膠續ぐべし。玆の未運を顧みるに、正脈將に沈まんとす。豆冷灰に爆するに因らずんば、何ぞ雲峯の肉煖かなることを得ん。所以に松源師祖道く、敗壞す多年の茗帚椿、等閑に拈起して宗綱を定む、箇れ般の標格天然別なり、諸方の孟八郎に比せず」と。此れは是れ老子不平の氣なり。今人天衆前に對して、石帆和尚に、分付して、姑蘇城畔に於て、大に芳猷を闡かして、天下の衲僧をして、東山の正續あることを知

過はすりこえて。」
① 信人鼻孔。驗峻底なり、珠云く、「大休罷じや、人をたのんで息をしてもらうて、こちはかまはめてい。」
② 圓覺四病。作止任滅の四病、圓覺經普覺章に見ゆ、之を略す。
③ 長憶江南。風穴が語默離微に涉るの間に答ふ、さきの寶林錄中に見ゆ、これは獨脫無依の端的なり。
④ 異僧。羅漢なり。
⑤ 植杖。倚なり。
⑥ 捶折。捶は杖を以て撃つなり。
⑦ 師云。己下偈を述して拈を作す。
⑧ 道人猛利。羅漢黃檗をほめた。
⑨ 作家。黃檗なり。
⑩ 憶昔。これは虛堂にかゝる、高人ば異僧。

いて、雲峰は南岳の承天に住するなれども、こゝに用ひて。内熔は慧命不斷の義にたとへるなり、

① 敗壞多年。珠云く、「松源錄の送化主の偈なり、祖師傳來の交割物、茗帚椿はちびりばはき、宗綱は佛祖傳來の標格、標格は中々今時の輩の知つたことでない、此のちびりは、き。」
② 諸方孟八郎。珠云く、「さうでもない事をなすり付ける師を云ふ、孟八郎は杜撰、愚智識。孟浪は着實ならざるを云ふ。此是老子。松源、時の下衰を惡むと、その氣、不平なり、この偈は禪のおとりかへをなげく氣である。
③ 分付。松源の茗帚を付す、師と兄弟なればなり。
④ 姑蘇城畔。蘇州府、又姑蘇郡と名く。

⑤ 夜深。夜にげに過ぎたとなり。珠云く、「是れ又ぬしの腕力で、さて又いさい、今日の供養、平沙を過ぐは天然に至るはなり。」
⑥ 新承天。これは送行の上堂乎、蘇州府の承天寺石帆衍公。新に承天の請を受けて、來つて向訊す、故に之を謝す。
⑦ 泰山頽。珠云く、「如來の大法に喩ふ。」
⑧ 互靈可託。託は信任なり、雁山と首陽とはもと一山河神、互靈擊開して以て何流を通ず、故に掌跡存す、大法を扶擧するにたとふ。
⑨ 絃音斷響。祖師向上の秘曲なり。この事は頌古に見ゆ。
⑩ 末運。佛法の正脈。祖師の心切、大せつの風彩。
⑪ 豆爆冷灰。誦脫の義、頌古の五逆聞電の話に見ゆ。
⑫ 何得雲峰。これは雲峰偈を引

⑬ 大關芳猷。猷は道なり。珠云く、「隨分骨ををり、大死一番し來りて、祖先の風彩を縱横に取りまはすをいふ。」
⑭ 東山正續。東山は五祖演を指す、古風を引き起させやうと云ふ。
⑮ 送供靈山。珠云く、「供を送るの二字、諸傳になし、宗門統要、三未詳、嗣法の部に此の二字あり。文殊に供養するなり。」
⑯ 迎接。文殊翁牛を牽き來りて。
⑰ 住持。住持とは謂く、人に藉りてその法を持して、之をして永く住して混させらしむ、輔教篤廣原教に詳なり、住持三寶のことなり。とり行ふを云ふ。
⑱ 凡聖同居。珠云く、「此の凡聖和、盤托出。」
⑲ 一抄。或抄に云く、「前三々後

二九七

二九七

らしめん。

上堂、舉す、無著和尚、供を巖山に送つて、文殊に遇ふ、迎接して云く、「尊者何れの方よりしてか来る。」無著云く、「南方。」殊云く、「南方の佛法、如何が住持す。」著云く、「末法の比丘少しく戒律を奉く。」殊云く、「多少衆ぞ。」著云く、「或は三百、或は五百。」無著却つて問ふ、「和尚此間、如何が住持す。」殊云く、「凡聖同居、龍蛇混雜。」又問ふ、「多少衆ぞ。」殊云く、「前三三後三三。」師拈じて云く、「當時無著、好し、一撈を與へて、是れ多少ぞと道つて、他の擬議せんを待つて、便ち一喝を與ふるに、當時既に放過す、今は則ち翻つて不了と成る。忽ち人ありて、南山に如何が住持すと問はば、手を以て天を指して之に示さん。或は多少衆ぞと問

三々、

擬議。他は文殊をさす。
遊過。無著火いに放過す。
翻成不了。或抄に云く、「未了の公案となり、世間に流布す。」
南山。淨慧なり。
劍爲不平。珠云く、「劍は不祥の器なれども、或抄に云く、「言端語端に涉る故、いろいろ不平も病も生ず、直下に示すのはをしいとなり。」藥因に救病出、金瓶一と無爲ならば、則ち言句も施す所なしとなり。
半夜拾得錫。獨暗に歡喜す、人の證明を與ふるなしとなり。或抄に「銀に似たゆえ、錫を錯つて會す。」珠云く、「やみの夜に金ひらうた。」
賦佛不假。一語を以て深恩を報し得たり。珠云く、「そこばく供具をつらねやうよりは、只だ一句子でよいと云ふこと

二九八

或抄に「精撰な雲門の一棒、好供養。」
鳩羽落水。皆徹底の賊心なりと、此の注は不可なりと珠はいへり。
靜思動。珠云く、「ちつと出てさわぎたい、動ははたらく。」
嚴規。嚴肅の規矩。
要驗。求め要して驗得す、穿鑿して。
左顧右盼。珠云く、「四威儀に朝誦經夕思は正思惟だ道を思惟す。盼は當に盼はん」に作るべし、これは訛なり、碧岩の第三十四則の頌に、左顧右盼と曰ふ。
不動波。嚴肅安居なり。
表。表顯なり、行脚とは主丈を云ふ、從人は先軍にじや、徳とは自ら意に任せずとなり。
一一從之。主丈にじや。
把教定。儒主丈子も亦坐夏す

はゞ、手を以て地を指して之に示さん。他の擬議せんを待つて、亦一喝を與へん。何が故ぞ。」拂子を擧つて云く、「劍は不平の爲に寶匣を離れ、藥は病を救ふに因つて金瓶を出づ。」

佛生日上堂、「世尊初生下の時、手を分つて天地を指して道く、「天上天下惟我獨尊」と、也た是れ半夜に錫を拾ひ得たり。後來雲門大師道く、「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめん、貴ぶらくは天下太平を圖らん」と。佛に獻するに香の多きことを假らず、南山今日黃而老子の與に氣を出さんことを要す。」主丈を卓して云く、「鳩羽水に落ちて魚鼈死す。」

結夏上堂、主丈を拈じて云く、「主丈子、久しく靜にして動を思ふ。出で來つて古佛二千年前底の嚴規を發揮し、禪僧九十日の功用を要驗して左顧右盼、朝誦夕思、直に林に入つて艸を動せず、水に入つて波を動せず、以て行脚、人に從ふの徳を表せしめんことを欲す。」主丈を卓して「主丈子、儒從上所說底の法要、南山一一に之に從はん。九夏備底も也た把教定して始めて得ん。」

二九九

べしとなり。忠曰く、「教は即ち古佛の嚴規なり、言ふ意は汝既に他人の分上を點檢するなり、他を須らく自ら點檢して、始めて得べしとなり。」
中夏上堂。八月一日の上堂ならんか。
底沙。又は弗沙、亦是提會、此には說度といふ。四教儀に大施太子、海を拈んで並に七日足を翹だて、弗沙門を誦する。世尊因位の修行なり、婆沙論に出で。翹は擧すなり尙自不知とは本分を知らずなり。進の滿なり。
四祖大師。道信大師のこと。
何曾會去。已上は精進の滿を擧す、而も抑揚あり。珠云く、「此の事は精進苦行の到るところに非ずとなり。」
眼皮綻底。珠云く、「須彌を覆ふ底。」
賞券。解夏後一月を開するを

中夏上堂、拄杖を卓して、「底沙を賛して足を翹つること七日なるも、尙ほ自ら知らず、四祖大師、六十年脊席に着けざるも、何ぞ曾て會し去らん。見前の龍象、前四十五日、既に放過す、後四十五日、又作廢生。忽ち箇の眼皮綻ぶる底あつて、出で來つて道はん、乞ふ師、賞勞と、只だ他に向つて道はん、三貫の嚙錢、三味の食、相招いで手を携へて、高臺に上る。」

上堂、擧す、趙州僧に問ふ、「甚れの處よりか來る。」僧云く、「雪峯。」州云く、「雪峯近日何の言句あつてか徒に示す。」僧云く、「大師道く、盡大地是れ沙門の一隻眼、汝諸人甚れの處に向つてか同せんと。」州云く、「曾て人の下語するありや否や。」僧云く、「未だあらず、州云く、「汝若し嶺を過ぎば、我が與に箇の銀子を寄せ去れ」と。師云く、「趙州一顆の甜桃を將つて、箇の醋梨に換へ得たり。若し人あつて、淨慈に何の言句あつてか徒に示すと問はゞ、只だ他に向つて道はん、爾、好喝、我れに問著す、若し別人に問著せば、打つて、爾が袴をして采せしめんと。」

三〇〇
償勞月といふ、さきの寶林錄に見ゆ、是れ眼皮綻ぶる底は文殊の白槌の如しなり。
① 三味食。三貫の嚙錢と、これは賞勞の具なり、凡そ食には六味あり、甘辛鹹苦酸淡、今半をあぐ、嚙は梵語、此に財施といふ、嗟祭なり。
② 上高臺。賞勞のところなり、四方をうちながめる。
③ 趙州問僧。これは禪宗類聚十に出づ。
④ 大師。眞覺大師なり。
⑤ 與我寄箇。珠云く、「雪峯へもてゆけ」と。或抄に「遠方であれども、我がために下語せん、直下とみよ、亂に義解することなけれ。」
⑥ 換得箇醋梨。珠云く、「ざんねん。」
⑦ 好采、好い目をふり出したと云ふこと。忠曰く、「和語のよくこそその義、好風采なりかつなり。」

丈席を巻く意旨如何。」山云く、「龍袖拂開して全體現す。」陽云く、「意旨如何。」山云く、「象王行く處狐蹤を絶す。」陽此に於て大悟して云く、「萬古碧潭空界月、再三撈摭始應知」といつて、禮拜して退く、時に葉縣省和尚首座たり、問ふ、「昭兄汝適間に、箇の甚麼を見てか便ち禮拜せし。」陽云く、「正に是れ某甲放身捨命の處」と。師、主丈を卓して、鳳凰鸞鷲を生じ、獅子狡狴を産す。」

かうやうなり。」
① 問著我。珠云く、「實に雪峯と和し得てしたし。」
② 打教箇驚喝。口のなゝめにゆがむを喝と云ふ。
③ 百丈卷席。聯燈四、百丈章野鴨子の話の次、曰く、「馬大師次の日陞堂、衆繞に集る、師出で、席を巻却す云云。」と全體現。珠云く、「出現したととじや。」忠曰く、「龍雲霧を拂開すること、人の袖を揮ひ拂開るが如しとなり。」龍雲霧を拂開して、龍の全體露現するなり、全體は十分なり。
④ 萬古碧潭。珠云く、「始めて知る、元來天上に在ることを、再三撈摭始應知で、容易ではゆくことではない」と。或抄に「碧潭の月をひたとすくうてみれば、影であつた、本の月は天上にありの心なり、いくたびもすくうてしらんと

なり。」
① 葉縣省和尚。首山の旁出。
② 昭兄。汾陽善昭。
③ 正是某甲。徹底大悟の義。珠云く、「なにを云ひめさるおれは死に申したな。」
④ 鳳凰鸞鷲。嚴師は好弟子を出すの心なり。
⑤ 呼風嘯指。列子のぎよしんく人傳を引いて可なり、又後漢の趙炳、嘗て水に臨んで船人に從つて渡を乞ふ、船人許さず、炳乃ち蓋を張りて其の中に座し、長嘯して風を呼び、亂流して渡る。
⑥ 傍若無人。或抄に「自負の體なり」と。
⑦ 百數成羣。言ふの意は一會坐夏の僧、趙炳が風を呼ぶが如く、各々自由の分あつて、人に依頼することなし、衆中別に佛の條草あつて、王化に屬せずとなり。珠云く、「規範を須

踏殺すれば、便乃ち話頭聞ならず只だ西天の廣額屠兒が、屠刀を放下して、我れは是れ千佛の一數なりといふが如きんば、又作麼生。出で來つて一轉語を下し得て、別甌に香を炊ぐことを管取せよ。

復た擧す、五祖演和尚道く、「我が者裏は是れ皮栲栳の禪、虚空より撲下來して、也た跳幾か跳、諸方の琉璃甌子の禪に比せず」と。師云く、「五祖老手の舊乾膊、淨慈は鶏皮の鼓子重ねて撃つに勞せず、有る般の漢ならば、便ち道く、虚堂年老いて心孤なりと、殊に知らず。富んでは千口も少しと嫌ひ、貧うしては、一身も多しと恨むることを。」

ひす。及乎言賞勞。言遊も亦賞勞の謂也。暗中取物。無分別の義、其の取證分明ならざるに喩ふ。珠云く、「座頭の坊。」

今出來て、下語して。別甌炊香。宜しく賞勞すべきなり。或抄に、「轉語か虚堂が旨にかなうてあらば、別甌に炊いてふるまはんとなり。」

家法 森嚴なり、只だ是れ仰山不合にして、祖の諱を道著して、今に至るまで了せず、會得せば一夏亦虚しく過ぎず、然らずんば、路途嶮峻なり、各宜しく之を保つべし。新舊の執事監收を謝する上堂、進退常あり除擢特異なり、其の進む也、青山白雲の開遮自在なるが如く、其の退く也、巖壑の秋に生ずるが如く、濼靜困黙なり、進退一如なることを知らんと要せば、自然に和氣掬しつべし。只だ禾を刈る鎌子の如きんば、幾箇の祖師の頭をか刈り得たる。出で來つて箇の消息を露はせ看ん。

堅強の老拳を用ふと雖も、山僧を鼓撃するに堪へずとなりこれ皮栲栳の禪を肯はずとなり。年老心孤。心孤峻にして祖思に順せず。珠云く、「すねこくつといはん、年老いてあるゆえ。鶏皮の鼓子といはん。」

各宜保。之途中善爲の意なり用心せよとなり。執事。兩執事なり。常。常規なり。際擢特異。除は舊、擢は新、新官に進み擢れられ、舊職を退き除かるること。其進也。珠云く、「役を受取りても役にほこらぬ。」

知る麼。吾云く、「知らず。」僧云く、「什麼と爲てか知らざる。」吾云く、「去れ、汝我が語を會せず」と。師云く、「不知の二字、已に是れ者の僧の咽喉を鎖断す、端なく物の爲にすること傷慈にして、暗に圭角を露はす。忽ち、南山に無神通の菩薩、甚に因つてか蹤跡尋ね難きと問ふものあらば、主丈を拈じて便ち打たん。何が故ぞ。老僧曾て、人の閑事を管せず。中秋上堂、或は隱、或は顯、虧あり盈あり、天上無私の鑑として、實に人間、照夜の燈なり尋常多くは是れ三五を論ず。惟だ今宵のみあつて分外明かなり。然りと雖も、鼓山の道ふ底。

●無神通菩薩。珠云く、「諸佛の内證を知り、一切衆生の本性を知らば、放光飛行ほどの神通はない、蹤跡とは智者も愚者も。」
●同道者方知。同得同證、同知同見。
●吾云不知。無神通の端的、師云不知二字。不知の處、毒氣あるを云ふ。
●者僧。體官下雙楨玄眞禪師なり、傳燈の眞の傳に見ゆ、眞は當初契はず、故に頓斷咽喉といふ。
●傷慈。慈悲が仇になるを云ふ。
●暗雲圭角。英氣圭角などのいふ物のかどをだてるを云ふ。
●南山。淨慈報恩。
●不替閑事。「いはれぬ、尋ねがたくば、そのまゝおいたがよい」と或抄に云へり。
●隱は雲あり顯は雲なし、虧る

他日、盈は十五、天鑑私なし。
●照夜の燈。皆明月の相を形容す。
●鼓山道底。鼓山神晏なり、或抄に「月より別に明々たるものあり」と。
●船上無散工。工は船を行へる、工人で、損工なり、無測法の船頭、不器の篙師なり。
●駕御有方所。駕御は舟を行るなり、舟人皆好手、則ち之を駕御するにおのづから方所の據るべきあり。
●打篙底。これより不礙東西浦、までは執事の功益を述べ、韻を押す。
●火伴。或抄に「同道の知音を云ふ、」百丈清規に「知事都監寺の下、旨暮香火を勤事す云云」とあり。或抄に「同道の知音を得たゆえ、虚堂も自由に舟にのる。

搖す底は櫓を搖す。浪に觸れ風を迎へて天地寛し。去來東西の浦を礙へず何ぞ也。「拂子を撃つて云く、火伴人を得たり。」上堂、舉す、藥山、石頭に問ふ、「三乘十二分教は、某甲粗知る、嘗て聞く南方、直指人心、見性成佛と、實に未だ明ならず。伏して望むらくは和尚、慈悲指示せよ。頭云く、「與麼も也た得ず、不與麼も也た得ず、與麼不與麼總に得ず、汝作麼生。」山、佇思す、頭云く、「爾が因縁此に在らず江西に馬大師あり、爾彼に往け、應に爾が爲に説くべし。」山彼に至つて前問に準ず、馬祖云く、我れ有る時は伊をして揚眉瞬目せしむ、有る時は伊をして揚眉瞬目せしめず、有る時は伊をして揚眉瞬目せしむるは是、有る時は伊をして揚眉瞬目せしむるは不是。山是に於て省あり、便ち作禮す。馬祖曰く、「爾箇の什麼の道理をか見る。」山云く、「某甲石頭に在りし時、蚊子の鐵牛に上るが如く、師云く、泰山を挾んで北海を超ゆることは、以て難しと爲す、無味の談、人口を塞断することを難しとす。然りと雖も、藥山什麼に因つてか悟り去る」といつて、主丈を卓す。上堂、舉す、「雲門因に僧問ふ、「父を殺し母を殺しては、佛前に懺悔す。佛

●與麼也不得。珠云く、「さうでもない、かうでもない。そうでもからでもどうでもない。」
●佇思。うつとりとしてものおもひする。
●蚊子上鐵牛。鬚を下すところなけん。
●無味之談。なんのえときぞは喩を引いて答の意を嘆ず。
●挾泰山超北海。孟子の梁惠王章に出づ、能はずとは是れ爲ざるなり、能はざるにはあらずとなり。
●卓主丈。這裡に到つてみよ、みてあれば馬祖底をしらんとなり。
●露。方語に不曾識とあり、この露の字の下「師云」の二字を脱す。
●不放秤頭低。輕重優劣なきを云ふ、權はおもり衡ははかりさば。
●翻蓋。やねがへか、次の馬田

を殺し祖を殺しては、甚れの處に向つてか懺悔せん。門云く、「露」忽ち人ありて淨慈に問はゞ、只だ向つて道はん、「知」と。還つて相應することを得ん麼。」復た云く、「雲門の露、淨慈が知、權衡常に握に在り、秤頭の低るゝことを放さず。」

開爐上堂、錢を降賜して、僧堂を翻蓋することを謝す、翻鱗たる鴛瓦滲漏を枯木堂中に絶す。赫赫たる紅爐、煖律を衲僧衣下に回す、以て空劫を坐忘し、力めて心宗を究めつべし。從教あれ、黃葉の雲に堆きことを、霜風の曉を戒むることを致すことを免る。麗金昆王、九重より降る、坐臥經行、頭を擧して徳を戴く。

達磨大師忌の拈香、我れは天爾は狗、神機雄辨、以て其の鋒に嬰り難し、魏闕梁園、枯禪而壁、以て諸川を藏すことを得たり。西天無文の印を佩び、東土不傳の衣を行す、人を誤つて斷臂安心せしむ、遂に口門齒缺くることを致す。音容漸く遠く、諱日斯に臨む、末運正脈の將に沈まんとすることを嗟す。餘光を想ふて、聊か非供を陳す。時、良月に當つて、深く爐熏を炷く。

に見ゆ。鱗々鴛瓦。瓦のかきなりて魚鱗のやうに、鷲鷲の翅を交るに似たるをいふ。

枯木堂。淨慈の僧堂なり、已上は僧堂なり。赫赫たる紅爐。衲僧衣下までは開爐なり。以て空劫を坐忘。は也たこれ僧堂坐忘は坐禪を言ふ。麗金昆王。也たこれ開爐。淨自九重。今は公錢を表す。九重より降る。此の兩句は錢を降賜するを述ぶ。

坐臥經行。僧堂の内に在り。神機雄辨。謝意を述ぶ、天子の御目を蒙りたり。我天爾狗。此の語は第十五祖迦那提婆尊者、外道を屈折するの雄辨なり、提婆の傳、碧岩の三十の評等に見ゆ、達磨の六宗の邪を掃ふに比す。神機雄辨。竺上の事述を述

上堂、丁寧は君徳を損す、無言眞に功あり、任從あれ滄海は變ずとも、終に君が爲に通せず。好笑好笑、恁麼に泥に入り水に入ることを得たり。南山、口磔盤に似たり、諸人もた須らく薦取すべし。

田を賜ふことを謝する上堂、八家を井と爲して十字に圍を添ふ。人人靈苗異艸、地從り發生すと道ふことを知る。甚に因つてか匙を拈し筋を放つて、又却つて蹉過す。四郡九邑、惣て一處と作して、功を取る、別飯に香を炊がんよりは、只だ普同供養を要す、九重より旨を降すこと、闔國咸く知る、本色の衲僧、何を將つてか報を論せん、主丈を卓して、「行いては到る水の窮る處、坐しては看る雲の起る時。」

誰用。神通妙用じや。少林九年此の如くす、故に枯禪と稱す。遂に口門齒缺。流支光統等の妬に因つて毒せらる所、已上は震且の事跡を述す。音容漸遠。德音圓容、年代深遠。正脈將沈。見性の法門。陳非供。そゝうな供養を述す。良月。十月なり、音容已下は弔祭の儀を述す。丁寧損君徳。かけめがでけたがる。任從。たとひじや、全篇把住じや、慈明下の道吾眞の章に出づ、會元。好笑々々。やれおかしやく。入泥入水。把住即ち是れ放開の故なり。口似磔盤。口がひらかれぬを

賜田。行狀を按ずるに「理宗の景定五年、師年八十、皆ありて淨慈に住す、衲子奔り集る、堂單以て容るなし、半は堂外に居り、宸聽に上徹す、胡百疋、造帳米伍伯碩楮券十萬貫を賜ふ、是の年、秋又田參阡餘畝を賜ふ、即今の天錫莊これなり」とあり。

八家爲井。孟子的滕文公篇に「方里にして井し、井は九百畝。」蹉過。とりうしなふ、天恩を。四郡九邑。蓋し天錫莊の地なり、四井を九邑とす。取功。納穀なり、參千餘畝の成功。普同供養。大衆と。行到水窮處。此の兩句は唐の王維が詩なり、道遠任運無心の境界、深く三輪體空の機に契ふ。

上堂、舉す、魯祖、僧の來るを見て、便ち面壁して坐す、是は、則ち是、
 葫蘆を掛けざれども醋は越酸し、但だ未だ消息を絶するものあるこ
 とを見ず。南泉云く、「我れ尋常道ふ、佛未だ出世せざる時に向つて會取せ
 よと。尚ほ一箇半箇を得ず、他恁麼地ならば。臘年にし去らん。」師拈じて
 云く、仁者は之を見て之を仁と謂ひ、智者は之を見て之を智と謂ふ。」
 至節小參、今年の寒は去年の寒似りも勝れり、去年は氷なし、去年の
 寒は今年の寒似りも勝れり。今年には雪あり。去年の寒は十一月十二日、是
 れ書雲の日なり、今年の寒は十一月二十四日、是れ至節の朝なり。候
 候相護せず、物物還つて對偶す。禪僧家、有ひは二十四氣に推遷せら
 るゝことを被らざるものあり、水邊林底、虱を捫り喧を負ふ、有ひは二
 十四氣に管帶せらるゝことを被らざるものあり。家を抛ち業を失して
 久しく風埃を歴、還つて造化に關らざる底ありや。「拂子を擧つて、
 陽氣未だ回らざるに律珥を吹く、野梅先づ發く向南の枝。」
 復た舉す、資福和尚、因に僧問ふ、「古人拈槌堅拂、意旨如何。」資福云く
 「古人、與麼。」僧再び問ふ、資福喝して云く、「古人是れ、什麼の眼目ぞ。」

●不挂葫蘆。葫蘆はすやのかん
 ばん、魯祖に比す、面壁すと
 いへども、すいかからいか、
 いや／＼酸きことを知るとな
 り、越は過度なり。
 ●消息者。大死一番する底、
 かんばんを表せずとも、醋は
 すきときは之を求むる人、往
 來して音信を絶せずとなり。
 ●臘年去。猶日臘年は、なほ重
 角龜毛の終にあるべからずと
 いふが如し。
 ●仁者見之。智分相應の南泉で
 あるとなり、「此れは向上向下
 にもなると、虛堂の全提の拈
 語」と東嶺は云へり。
 ●至節。忠曰く、「これ冬夜の小
 參なり、冬至の前曉なり。」
 ●今年寒。珠云く、「ことしの寒
 の入りはじや、今年有雪は古
 來あり。
 ●書雲。冬至なり、故事あり、
 氣を望んでしるす。

師云く、「善く竊むものは、鬼神も其の由を測
 ること莫し、會するときは則ち便ち會す、然
 らずんば、來夜首座を請じて、諸人の爲に拈
 出せしめん。」
 次の日上堂、暑速推し移つて、日南長く至る
 東海の鯉魚、腮を鼓し鬣を振ふ。南山の鼈
 鼻、眉を伸べ氣を吐く、唯だ趙州老兒のみあ
 り、沒意智にして、箇の破席を拖いて日裏
 に睡る。淨慈路不平を見て、箇の蘇盧悉利
 を道ふ。何が故ぞ。恐らくは者の老子、背地
 裡に人の便宜を討ねん。
 臘八上堂、「萬乘の尊榮を棄て、六年の饑凍
 を受け、艸座を離れずして、等正覺を成す、美
 なることは則ち美なり矣。端なく臘月八夜に於
 て、忽ち明星を觀て、豁然大悟すと道ふて、

●候候。氣候次序七十二、各々
 明ありて違ふべからずなり。
 ●物運對偶。昔品を越えず、
 草木虫魚みな消長出發す。
 ●二十四氣。中節等なり。
 ●捫虱負喧。昔の王猛虱をひね
 つて當世の事を談じて、傍若
 無人、宋の田夫負喧の故事あ
 り。珠云く、「上佛を求めず下
 衆生を厭はず、頭天を戴かさ
 る底。」
 ●管帶。繫縛の義なり。
 ●抛ちじや。有功用の衲僧なり。
 ●久歷風埃。二十五有を輪廻し
 又出家遊方で、行脚底の衲僧。
 ●還造化。おれが會下には、造
 化とは二十四氣七十二候の天
 地の造化じや、これは會下に
 さしつけていふ。
 ●陽氣未回。未回は目にはさだ
 かに見えねども、霜は或は管
 に作る、前の報恩錄に見ゆ、

●遺箇消息現成なり。
 ●資福和尚。この語は雲門錄中
 に出づ。忠曰く、「古人是れ什
 麼の眼目ぞ、これ雲門の語、
 乃ち此の云の字の上に雲門の
 二字を脱す。資福の商量は喝
 に止まるのみと。」
 ●與麼。直説繁重なし「さうさ」
 なり。
 ●什麼眼目。これは雲門の語な
 り、なにが肝要ぞと。
 ●善竊者。これは資福と雲門と
 の二尊宿に係る。
 ●會則便會。或抄に「與麼那と
 云ふ處で、直下に會せよ、繁
 重なき故に。」
 ●來夜。珠云く、乗拂を請ふな
 り、冬夜の來夜は即ち冬至の
 夜なり。
 ●日南。孝經説に「斗、子を指
 すを冬至と爲す、至に三義あ
 り、一には陰極の至、二には
 陽氣始めて至る、三には日行

後代の兒孫をして、東にトし西にトせしむることを致す。淨慈與慶の告報、還つて黃面老子と相見の分あり慶。王丈を卓して、晴乾に雨露を開き、無事に曹司を設く。

上堂、舉す、趙州、僧堂後に、一僧に問ふ、「大衆、什麼の處に向てから去る。」僧云く、「山に上つて普請す。」趙州袖より一柄の刀を出して云く、「老僧、住持事繁し、請ふ上座命を斷却せよ。」僧刀子を抛下して走る、師云く、「趙州、過頭の丈子、到る處に、水を探る。當時者の僧、若し自分の艸料を與へば、別飯に香を炊ぐことを管取せん。」

南に至る、故に之を至といふ。東海鯉魚。珠云く、「輪崖機手、絶後再來の時節。伸眉吐氣。陽氣至る故に、萬物を感動するの意なり。沒意智、無分別のことばかりで分別なくて。拖、かたすみに、日に曬し睡るなり、唯趙州のみ沒意智たり、陽氣至ると雖も、感動せられず、用此の如し、誰か敢て便宜を討ねん。路見不平。珠云く、「これが中々見すて、おかれぬ。」蘇盧悉利。一道の眞言を念ず。老子背地裏。趙州そらねなむりのうちに、人の(虚堂)便宜を討るに、故にこの不可思議の眞言をいふとなり、無所得の説法に喩ふ。萬乘。珠云く、「これは天竺で王者にこの説はない。支那で

三二〇
は兵車萬乘などといふて、天子の方畿千里、提封百萬井、定田の賦六十四萬井、戎馬四萬匹、兵車萬乘を出す國なり。晴乾開雨路。雨路は水道なりひよりのよいにみぞをさらへる。珠云く、「たとひ相見の分あるも。」無事設曹司。曹司は日本でいふ奉行なり、獄をさむる役なり。これは太平に目付け、奉行をきびしくしておく。曹司は裁判官又は司法の官なりこの二句は悟のなんのと云ふはいらぬことと云ふ意。向什麼處去。知りながら勘辨なり。刀。小がたな。住持事繁。此の如く衆を勞す我れはまことに大罪人といふて命は我がいのちなり。探水。主丈は七尺より長きを頭に過ぐるをいふ。

す。僧云く、「某甲、話在。」門、兩手を展ぶ、僧無語、門便ち打つ。師拈じて云く、「電光石火の機は、則ち雲門になきにあらず、爭奈せん性命者の僧の手裏に落在することを。」上堂、舉す、夾山、京口の鶴林に住せしとき、僧問ふ、「如何なるかこれ法身。」山云く、「法身無相」如何なるか法眼。」山云く、「法眼無眼。」時に道吾、座下に在つて失笑す、夾山下座して、道吾を請じて問ふ、「某甲適來、者の僧に答ふる話、必ず不是の處あらん、望むらくは指教せよ。」吾云く、「一等に是れ出世の人、和尚未だ師あらざること有り。」夾山云く、「某甲が與に説き得てんや不や。」吾云く、「某甲説き得じ、此去つて華亭に船子和尙といふひとあり、却つて能く此れを明む。」遂に衆を散じて去ると云

過頭。勘辨の手を下すを云ふ。別飯炊香。よきふるまひのこと、珠云く、「學者に氣を付けて云ふ。」西禪。傳燈に南泉下に蘇州西禪和尚あり、又曹山下に蜀川西禪和尚あり、知らず何れか是か、この話は碧岩の五十四則にも見ゆ。話在。まだをはなし、たいことがあります。者僧手裏。雲門幾多の家事を放任して、者の僧に觀破せらる。珠云く、「この僧にしたゝか筋骨をぬかれた、虚堂は僧を扶起し門を抑下す。」一等出世人。珠云く、「世間一等に出世爲人、和尚も亦然り只だ和尚を見るに、未だ大善知識に見えざる故に、苔へ莽齒なり。」和尚未有師。珠云く、「和尚を

三二一
見るに、知識に見えざることあり。」某甲説不得。珠云く、「是れは兼ねて約束がある故。」散衆去。夾山大衆を分散して學者となり、華亭に行き去るなり。擔板漢。夾山を抑下す、道吾が云へばとて華亭に去るはじや。萬牛挽之不回。昔一向の義なり、拈語の意を推すに、問話の僧に代る、氣を出して夾山を罵るなり。珠云く、「後來依然として法身法眼に答へて、無相無報といふ、根性のづないやつであつた。」泉聲中夜。夜闌にして喧雜なき時、泉聲正に奇。山色の句同じ、或抄に「夾山未だ苔へず、船子へ參ぜざる已前の本分の體を云ふ。」愚慶會得。珠云く、「作麼此の

云。師拈して云く、「擔板漢、萬牛挽けども回らず、甚の法身無相、法眼無瑕とか説かんといつて、坐具を拈じて便ち打たば、惟だ道吉の舌頭を坐斷するのみにあらず、亦夾山水中に打落せらるることを免れん。會す

寢。「主丈を卓して、泉聲中夜の後、山色夕陽の時。」佛涅槃上堂、法身無爲、諸數に隨せず、什麼としてか却つて生滅ある。恁麼に會得せば、偏に許す毎日單を開き鉢を展べて、親しく釋迦老子を見

ることを。其れ或は未だ然らずんば、鐵を點じて化して金玉と成すことは易く人を勸めて是非を除却することは難し。上堂、擧す。梁山因に。園頭の僧問ふ。家賊防ぎ難き時如何。山云く

三二二 やうに老婆を説きなされども、づなはしはしらぬ。」又曰く、「只だ此れが參學の眼參究すべし。」
① 點鐵化成。圭峯の云く、「真理の一言、凡を轉じて聖となす。」
② 是非。「法身無爲をば即却することむづかしい」と或抄にいへり。
③ 梁山。名は義順、同安志に嗣法す、この縁は大惠武庫に出づ。
④ 園頭僧問。園頭は菜園奉行なり。珠云く、「こいつは丈夫なれども、曹洞宗の風影ぞ。」
⑤ 家賊難防。六識は六境を緣し種々の業を造る、眞如の寶財を劫む。
⑥ 既向無生國裏。既は請なり、念無生國じや。或抄に「知りて後はいらぬほどに、遠方へながしものにせんと。」

「識得すれば寃を爲さず。」僧云く、「識得して後如何。」山云く、「無生國裏に既向す。」僧云く、「便ち是れ。」他の安身立命の處なることなしや。山云く、「死水龍を藏さず。」僧云く、「如何なるか是れ活水裏の龍。」山云く、「波を興して浪を作さず。」僧云く、「忽然として。」湫を傾け嶽を倒し來らん時如何。梁山下座して、僧の手を握つて云く、「老僧が袈裟角を濕却せしむること莫れ。」師云く、「來るときは先鋒と爲り去るときは殿後と爲つて、

重圍を出さしむるに因らずんば、争か。艸賊大敗を見ん。然りと雖も、且く道へ、者の僧還つて甘ふや也た無や。」拂子を撃つ。
壽崇節の上堂。「至人化を垂れて。形儀あることを示す。滿月の奇姿を開き、中天の瑞相を蘊む。會す寢。」主丈を卓して、「只だ池上蟠桃の熟することを知つて、覺えず盡中日月の長きことを。」

上堂、擧す。「永嘉大師道く、一切の數句は數句にあらず、吾が靈覺と何ぞ交渉せん。」靈覺妙明、豈に是れ數句にあらずらんや。色聲香味觸法、豈に是れ數句にあらずらんや。毎日山鳴り谷應へ、風起り水湧く、豈に是れ數句にあらずらんや。然も是の如くなりと雖も、又置く、永嘉眞覺大師、何れの處にか在る。」主丈

三二一 就いて論ず。「悟れば如來藏となり、迷へば阿頼耶となる云云」と中峯はいへり。
① 重圍。重々の圍壘なり。珠云く、「八識田中に一刀を下す。」
② 艸賊大敗。艸賊は梁山を指す言るは此の僧、前後作家の漢にして、他の六賊の重々の圍績を出づるに因るが故に、梁山の敗走することを見る。珠云く、「梁山を下座させるやうなことはできぬ。」
③ 壽崇節。理宗皇帝の母なる皇太后の生日、謝氏といふ。四月八日乎。
④ 至人乗化。忠曰く、「至人は述なし、化は化迹なり謝后の世に出づるをいふ。」
⑤ 有形儀。形容は世尊の出現の如く、而は滿月の如く、目は青蓮の如し。
⑥ 中天瑞相。中天は釋迦誕生するとき、尊んでいふ、世尊に

① 他安身立命。珠云く、「よく抄するな、他は家賊なり、和尚こなたのをりどころでなきなり。」
② 死水不藏龍。死水は無心の深坑に喻ふ。或抄に「無生國裏には元來家賊はをらぬと。」
③ 與波作浪。應用無礙の故に白浪滔天回互じや。逸堂曰く、「隨縁の波を興して、騰浪を作さず。」浪は大浪なり。
④ 傾湫倒嶽。湫は池、又はふちじや、山がぐわらぐわつれかゝつてきたらば。大活龍の境界じや。
⑤ 梁山下座。箇の中の人なることを知つて、即ち下座して爾かいふ。
⑥ 永嘉先鋒。忠曰く、「此れは第八識を言ふ、今は家賊を言ふなり、六塵を緣するの家賊、是れ六識なりと雖も、第八識總報の主と爲る。故に第八に

帝都丁。」
を卓して、「唇上は畢班賓豹刹、舌頭は當的

上堂、金を鏗し玉を憂す、腐草螢と化す
井に坐して天を窺ふ、爛泥に刺あり、是は
則ち是、人の蔗を食ふが如きんば、中邊皆甜
し。甚麼に因つてか、天は西北に傾き、地
は東南に陥る。

壽崇節を滿散する上堂、僧問ふ、「城東の
聖母佛と同じく生じて、佛を見ることを願はざ
る時如何。」云く、「赤眼撞著す火柴頭。」僧云
く、「一日佛を見て、手を以て面を掩ふ、十指の
掌に於て、悉く皆佛を見ると又作麼生。」師
云く、「酒は知己に逢ふて飲み、詩は會する人
に向つて吟す。」僧云く、「只だ皇太后と佛と同
じく生ずるが如きんば、且く道へ、何の優劣か

擬していふ、尊號は佛菩薩に
過くるはなし、故に其の儀相
を引いて、祝講を致すなり。
只知池上。池上は瑤池をいふ
千歳の蟠桃花正に新なりなど
の句あり、王母の故事。
不覺壺中。費長房の事、育王
鉢に見ゆ、之もその壽域を視
す。
永嘉大師。名は支覺、六祖に
嗣ぐ。
一切數句。楞伽經通義一に曰
く、「百八句の中の語數は諸法
なり、數は空理なり。」忠曰
く、「數は乃ち法數、句は即ち
言數、此の靈覺の性は法相言
數の測るべきに非ず、亦非法
相言數の得べきに非ず。」
靈覺。妙覺、覺體、覺有の交
涉に非ず。
靈覺妙明。珠云く、「已下虛堂
の拈語、三界二十五有とりも
なほさずじや、當頭に靈覺の

三一四
跡を掃ふ。
唇上畢班。は「ハヒフヘホ」唇
音。珠云く、「是れ大師眞の面
目だ、又は安身立命の處だ。」
舌頭當的。「タチツテト」舌音
一切の數句は唇舌等の所成に
して、悉くこれ幻化なり。
經金曼土。説法の妙音を表す
珠云く、「出世爲人、奇言妙句
をいふ。」
腐草化レ螢。これは著語なり、
螢のしくの光るやうな、いき
だけのない眞箇のものにな
し、この下語は強を抑ふ。
坐井窟。天習定の小見を表す。
珠云く、「退位罷住じや、かた
はらにつんむいて、爲人をす
て、居るやつもこはいことが
ある。」
爛泥有刺。此の下語は弱を扶
く。
中邊皆甜。平等をいふ。
因甚。珠云く、けれども處堂

ある師云く、「毫末如りも軽く、山如り重も
し。」僧禮拜す。

師乃ち禪客の所問を擧して、城東の聖母と、佛
と同じく生じて、佛を見ることを願はず、佛の
來るを見る毎に、即便ち回避す。「一日回避
し及さず、乃ち手を以て面を掩ふ。十指の掌
に於て、悉く皆佛を見る。輒ち一頷を成す。」

城東聖母坐蓮臺、大地衆生正眼開
與佛同生、嫌見佛、一身難作二
如來。」

佛生日上堂、「二月十五に入寂し、四月八
日に復た生ず。虚空笑口を開き、大地人
行を絶す。恁麼に會得せば、何ぞ用ひん、九
龍水を吐いて、金軀を灌沐することを。其れ或
は未だ然らずんば、拂子を撃つて云く、「一人

にはどうも、こんな處に大事
がある。

天傾西北。珠云く、「此の端的
取りもなほさず、中邊みな甜
しじや、無差別じや。列子湯
問篇に「天傾西北、日月星辰
就レ焉。地不レ滿東南、故百川
水潦歸レ焉。」
滿散壽崇節。國母の壽崇節の
祈禱を滿散す、滿散は凡そ聖
節の祈禱は三十日看經す、今
滿限のときを云ふ。

城東聖母。今は皇太后の生日
なれば、聖母となすなり、類
聚尼女に「昔し城東に一老母
あり、佛と同じく生じて云
云。」この因縁を引く。
赤眼撞著。赤眼は金な火筋
（またぶり）、有るべき通りの
ことじやとなり、火柴頭（も
へくひ）あかきものがあかき
ものにつきあたる、不相應の
處、眞箇の相應じや。

酒逢知己。眞箇の知己じや、
そちらの知つたことでない。
輕如毫末。「兩箇無差別とみ
上」と或抄に出づ。
一日回避不及。途中に逢ふ
て。
城東聖母。珠云く、「直に聖
母を以て佛と爲す、故にいふ
今日一人も蓮に坐すべきもの
はない。」
大地衆生。聖母即ち是れ佛、
故に蓮臺座す、大地の衆生も
亦正眼開發すと、佛在に逢ふ
如くじや。
與佛同生。珠云く、「若し見
るものあらば、實の佛でない
五濁惡世皆佛。」
一身難作二如來。一身二佛な
し、元來佛であるゆえ、佛を
みるをいやる尤もでこそあ
れと。龍溪云く、「是れ全く
太后に比して、尊貴の賀を致
す。」

は畫樓沽酒の處に在り、相邀へて來つて喫す趙州の茶。

結夏小參、僧問ふ、「西天の舊令、東土共に遵ふ、諸方様に依つて葫蘆を畫く。淨慈甚に因つてか者の 保社に入らざる。」師云く、「

若し同牀に睡らずんば、焉ぞ被底の穿たることを知らん。」僧云く、「西天には 臘人を以て驗とす、東土は何を以て驗せん。」師云く「漆桶を驗とす。」僧云く、「如何が漆桶を以て

驗とする。」師云く、「漆桶に飯を盛り得て、人に與へて喫せしむ。」僧云く、「慙麼ならば則ち三十三天に 帝鐘を撲たん。」師云く、「老僧 關鑰嚴ならず。」僧禮拜す。

師乃ち云く、「胡言漢語、翻譯眞を失す。此土西天、遞に相狐魅す。」年年四月十五日、脚

近前し脚退後す、敢て條に違ひ制を越えず。子細に看來れば、冷汗雨の如し、直饒點頭を擧し得來るも、早く是れ 桑田海と變す。

淨慈門下、佛を誘り法を誘つて、衆數に入らず尙ほ且つ 一半を救ひ得ず。何に況んや、青山綠水、盡くこれ安居、花笑ひ鳥啼く、

禁足にあらすといふことなし。山僧今夜、牙關を咬定して、「線道を放す」といつて、主丈を卓す。

復た擧す、乾峯和尚、衆に示す、「法身に三種の病二種の光あり、須らくこれ一一に透得して始めて 穩坐を解すべし。雲門、衆を出で、云く、「菴内の人、甚麼としてか菴外の事を知らざる。」乾峯呵呵大笑す、雲門云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峯云く、「子是れ什麼の、

二月十五日入寂。或抄に云く、「今日日用遷流の上で云ふ。」復生。忠曰く、「一年の月の次第を以て之を觀れば、則ち滅後復た生ずるが如し。」龍溪云く、「縱横自在の説見るべし。」

虚堂笑曰。已上は語を押す。此の兩句は上の義を釋す、言ふ意は這箇出生入死情解を離れ、意路を絶す。珠云く、「此の端的虚空がなぜをかしい、かくみてあらば更に生滅の沙汰はない。」

九龍吐水。經に云く、「九龍空中より清淨水を吐き、一温一涼、太子の身に灌ぐ。」清淨本然造作を用ひずじや。人在畫樓。或抄に「畢竟差別ある如くにして、無差別なり入滅復生、畢竟平等、此の上よりなり。」

西天舊令。今に到りて佛の遺法に違つて坐夏する故。依樣畫葫蘆。珠云く、「如來の仕ておかれた手本の通り、いとこゝろやすいこと。」

保社。保伍同社、互に保護する團體をいふ。不同牀。僧の知己を許す。臘人。報恩錄に見ゆ、堅固に動むるか否やを驗するなり、東土の支那では此の一著子を透過し、透過せざるを驗とすると云つて問ふたなり。

漆桶盛飯。此の僧を大いに弄するなり。撲帝鐘。三十三天は切利天なり、第一、善法堂天は即ち帝釋第二、住天已下の三十三天は、皆輔臣なり、帝鐘は帝釋善法堂前の鐘なり、帝釋と阿修羅と戦はんと欲するの時、之を撲つて天衆を集むるなり、今の意は法戦一場に當るなり、或抄に「虚堂とつくと勸辨し

ぬいてあるところ。」關鑰不嚴。把定すること能はざる故に、人其の便を伺ふとなり。或抄に關鑰嚴ならざる故に、帝釋に家中を窺ひみぬかるとなり。」

胡言漢語。經論疏鈔、皆錯を將つて錯に就いて安居の法に據ればなり。過相狐魅。人を欺き誑して、本分を守らず、過にあやまる。近前。結制といふてさわぐ、退後解制といふてさわぐ、不取違し條越ち制。過退規矩に據るとなり。

冷汗如雨。はづかしくて慚愧の故に。擧得頭來。回心向大にて、箇の門中に入り來る、一機發轉し來つて働くも。桑田變海。理了の義。誘於佛。これは維摩の善吉草の意注に、四衆の數に入らず

となり。救不得一半。言ふ意は我が道裏佛見、法見衆生見を掃却するも、尙ほ一箇半箇の漢を教ふことを得ずとなり。珠云く「上の如く超脱の見を具するすら祖宗門下に於て少分を補ふことを得ず。」

青山綠水。森羅萬象、一法の印するところにして、他物に非らず、猶ほ翠竹の眞如黃花の般若の如し。珠云く、「是れ又會裡の類、空腹高心の徒、此の如く大言して、總に實行の者なし。」

咬定牙關。くやしくてならぬ故に、放二線道とは消滴を施さずと思へども、強ひて一線道を放すとなり。

穩坐。安穩に住む處。菴内人。向上の取りさばきのことじや。乾峯阿々。みぬかれてしよう

近前し脚退後す、敢て條に違ひ制を越えず。子細に看來れば、冷汗雨の如し、直饒點頭を擧し得來るも、早く是れ 桑田海と變す。

淨慈門下、佛を誘り法を誘つて、衆數に入らず尙ほ且つ 一半を救ひ得ず。何に況んや、青山綠水、盡くこれ安居、花笑ひ鳥啼く、

禁足にあらすといふことなし。山僧今夜、牙關を咬定して、「線道を放す」といつて、主丈を卓す。

-24 180 37 488" data-label="Text">

復た擧す、乾峯和尚、衆に示す、「法身に三種の病二種の光あり、須らくこれ一一に透得して始めて 穩坐を解すべし。雲門、衆を出で、云く、「菴内の人、甚麼としてか菴外の事を知らざる。」乾峯呵呵大笑す、雲門云く、「猶ほ是れ學人が疑處。」峯云く、「子是れ什麼の、

① 心行ぞ。門云く、「也た和尚の 委悉せんことを要す。」峯云く、「與廢にして始めて穩坐を解す。」師拈じて云く、「毘拍板、無孔笛、然も韻青霄を出づと、其れ音節 旨を失することを得ん、會得せば、一夏 容易に過ぐことを得ん。然らずんば來夜、首座を 請じて、衆の爲に拈出せしめん。」

② 乘拂を謝する夏齋の上堂、「寧ろ熱鐵を身に纏ふべくとも、信心の人の衣を受けじ、寧ろ洋銅を口に灌ぐべくとも、信心の人の食を受けじ。上座 若し能く是の如くならば、長河を攪いて酥酪と爲し、大地を變じて黄金と作して、上座に供養するも、未だ分外と爲す。只だ是れ 衣を受けず食を受けずんば、焉ぞ許多の殊勝あらん。忽ち若し人ありて法供養を修

もなく。② 心行。珠曰く、「そりや、なんのなりかばねじや、どんな心持か。」③ 委悉。自分で骨折つて知れといふことか。④ 毘拍板無。共に音韻なし、乾峯と雲門と同道唱和にたとふ世智辯ではゆかぬ。⑤ 失旨。わけもなきことなり、ひやうしを。⑥ 容易得過。得の下不の字を落す。夏を過ぐるをいふ。⑦ 請衆拈出。首座を請して首座の手をかりてさばいてもらはずはなるまい。⑧ 乘拂夏齋。結夏の乘拂に、都寺齋を辨ずるを夏齋と曰ふ、任持上堂して之を謝す、今頭首の乘拂を謝す、因に都寺の辨齋を謝す、兩頂一時に謝するなり。前首王條、又此の上堂あり。

三二八 ① 熱鐵纏身。これは梵網經の意なり、破戒にしては云云とあり、前後輯にも見ゆ。② 上座。今は頭首を指す。③ 若能如是。珠云く、「是れ師赤心片々の處、容易に見るべからず、金銀を湯水を使つやうにするを云ふ、これは雲峯悅小參の語。④ 不受衣食。珠云く衣食を受けずして、高く尊貴に居らば、則ち幾多の殊勝の事を缺くことあらん、許多とは佛事門中のあまたの功德なり。⑤ 忽若有入。珠云く、「上段一ことわりすんだ。」⑥ 生心受施。忠曰く、「心を生ずる者は施者あり、受者あり施物あるなり、乃ち三輪空ならず、是れ維摩の呵責する所なり、施受とも無心なるべしとの事なり、畢竟三輪空寂にしようけよ、淨名は維摩の彈呵

せば、又作麼生。」主丈を卓して、「生心受施は淨名の呵する所なり。」上堂、擧す 九峯の慈悲禪師、因に鴻山、衆に示して云く、「汝等諸人只だ大機を得て大用を得ず」と。慈悲 身を抽んで出て去る。鴻山之を招く、更に頭を回さず、鴻山云く、「此の子法器たるに堪へたり。」師拈じて云く、「九峯は見易く、鴻山は見難し。若し是れ淨慈ならば則ち然らず、他の喚べども頭を回らざるを待つて、急に 官楮一千を送つて之に與へん 何が故ぞ。 他を助けて草鞋を買つて行脚せしめん。」上堂、擧す 馬大師、因に僧問ふ、「四句を離れ百非を絶して、請ふ師西來意を直指せよ。」大師云く、「我れ今日勞倦す、汝が爲に説き得ること能はず、智藏に問取せよ。」僧、藏に問ふ、藏云く、「我れ今日頭疼く汝が爲に説き得ること能はず、海兄に問取せよ。」僧、海に問ふ、海云く、「我れ者裏に到つて却つて不會、和尚に問取せよ。」僧、大師に問ふ、大師云く、「藏頭白、海頭黒。」師拈じて云く、「盡く謂ふ、者の僧、馬大師の父子に鼻孔を穿却せらるゝと殊に知らず、馬大師の父子の鼻孔、者の僧に穿却せらるゝことを、會得せば藏頭白、海頭黒、優劣已に分たん。然ら

するところ、この事は、維摩經の善吉祥に見ゆ。② 九峯慈悲。鴻山靈祐に嗣ぐ、五燈會元の本傳に此の縁を收む。③ 抽身出去。或抄にこれほど大機も大用も具してをると云ふ機で。④ 官楮一千。政府の發行する紙幣二貫なり。⑤ 助他買紳鞋。抽身處寺じやによつてと、又曰く、「それじやまだたらぬゆゑ」と或抄にみゆ。⑥ 馬大師因僧問。鶴林曰く、「此の則は大切の則じや、老僧も漸く四十二歳の時、初めて此の則の大事をば知つたといはれたりと、東嶺和尚より大觀文殊和尚へいひ傳へらるゝと。⑦ 離四句絶百非。四句とは一異、俱不俱、有無非有非無、常無常、百非とは起信論疏の中に

ずんば、^①分ち易きは霜裏の粉、^②辨じ難きは雪中の梅。

中夏上堂、^③舉す、馬祖因に、^④龐居士問ふ、「^⑤不昧本來の人、請ふ師高
く眼を著けよ。」馬祖、^⑥直下に覷る、居士云く、「^⑦一種沒絃琴、^⑧唯だ師
のみ彈し得て妙なり。」馬祖直上に覷る、士禮拜す。祖方丈に歸る、士後に
隨つて云く、「^⑨巧を弄して拙と成す」と。師拈じて云く、「^⑩是れ誰か巧
を弄して拙と成す、若しこれ馬師巧を弄して拙と成さば、^⑪上半夏已に過
ぐ、若し是れ居士巧を弄して拙と成さば、猶ほ四十五日の在るあり。^⑫定
當して得出せば、^⑬爾に聽參を免す。」

上堂、尋常、^⑭苦口に、^⑮是れ説かざるにはあらず、^⑯只だ是れ、^⑰信不及
なり。是れ信不及なるにはあらず、^⑱只だ是れ些の隔礙あり。且く道へ、^⑲是
れ什麼の隔礙ぞ。」^⑳主丈を卓して、「^㉑信不及。」
上堂、^㉒舉す、馬大師陞座、因に龐居士問ふ、「^㉓萬法と偈たらざるものは是れ
什麼人ぞ。」大師云く、「^㉔汝が一口に、^㉕西江水を吸盡せんことを待つて、
即ち汝に向つて道はん。」師拈じて云く、「^㉖馬大師、^㉗八十四員の善知識を接
するには、^㉘門戸、^㉙稍峻なり、^㉚輕輕に龐公に一拶せられて、^㉛直に待たり

委しく出づ。
① 僧問。東嶺云く、「^①蹉過了也、戲言細語、飯第一義こと云へば此の僧は知らずして用ひ、^②藏も海も知つて之を用ふ。」
② 藏頭白。東嶺云く、「^③實に此れは明眼の納僧、會不得。」
③ 易分霜裏粉。東嶺曰く、「^④藏頭白、海頭黒のふときをするとして、此のやうなことを云つた。」

④ 龐居士問。珠云く、「^⑤うつかとすると、あげ足をとる。」
⑤ 不昧本來人。珠云く、「^⑥居士曰く、我れは本來を味まさむる人とじや。」
⑥ 一種沒絃琴。無語の曲。唯だ師のみ彈し得たり、唯だ居士のみ知音。
⑦ 直下覷。下をみる。直上はうへをみる。
⑧ 弄巧成拙。珠云く、「^⑨上手の細工が下手に見える、これは

① 肝を披き膽を露はすことを。或し人ありて、
淨慈に萬法と、偈たらざるもの、是れ什麼人ぞ
と問はゞ、^②主丈を拈じて便ち打たん。何が故ぞ
酒は知己に逢ふて飲み、^③詩は會する人に向つ
て吟す」

④ 監收を謝する上堂、「^⑤禾を刈る鎌子、^⑥未だ
鋒鋸を露さず、^⑦多少の祖師命を乞ふ。秤尺
斗量、^⑧權衡握に在り、^⑨目機鉢兩差ふことなし。
要は、^⑩兩處に功を收むることを知らんと要せ
ば、^⑪納僧の枵腹を塞斷せん。塞斷して後如
何。」^⑫主丈を卓して、「^⑬臨濟、^⑭黃檗を掌す。」
上堂、^⑮舉す、松源師祖示寂に臨んで、衆に告げ
て云く、「^⑯久參の兄弟、^⑰正路上に行くものあり
只だ、^⑱黑豆の法を用ふること能はず、^⑲臨濟の
道、^⑳將に泯絶して聞くこと無からんとす、^㉑傷し

馬師を抑下す。
① 上半夏已過。早く蹉過了也。
② 定當得出。珠云く、「^③如上を合點したら、^④舊參罷休の人と云はん。」
③ 免爾聽參。參學の事畢るなり、參をゆるすにも及ばぬなり。
④ 苦口。丁寧に。
⑤ 不説不説。十二時中、四威儀の中、如是。
⑥ 信不及。東嶺曰く、「^⑦此の信不及とばかりにかけてみよ、^⑧輕重を分ちて。」或抄に「^⑨信不及なるが大きなさはり。」
⑦ 吸盡西江水。珠云く、「^⑧一學解知解の西江水を呑み盡して。」
⑧ 稍峻。稍は漸なり、當に峻に作るべし。
⑨ 輕々。やす／＼。
⑩ 披肝露膽。珠云く、「^⑪五臟をまけ出しと、^⑫どこが五臟だ、^⑬放行してなり。」
⑪ 酒逢知己。賓主相應なり。

⑫ 監收。租を收むるの時の役僧今の副寺の役。
⑬ 刈禾鎌子。祖師の頭を刈らんと欲す、故に未だ鋒刃を露はさざる己前命を乞ふなり。
⑭ 多少祖師。前に見ゆ。珠云く、「^⑮明明たり百草頭の祖師意。」
⑮ 秤尺斗量。これ亦監收の職分。
⑯ 目機鉢兩。其の獲利を笑むとなり。
⑰ 兩處收功。兩處は世諦道諦。
⑱ 納僧枵腹。枵、音けふ、^⑲虚なり、^⑳空腹の義、^㉑ひだるくなるなり。
⑲ 臨濟掌黃檗。全體道境界はたらきをるとなり、^㉒臨濟の飯頭の縁を用ふ。
⑳ 黑豆法。黑豆文字を表す、本分無分曉の法を用ふること能はず、^㉓餘處に松源の黑豆といふ、^㉔前の寶林錄冬至小參に見ゆ。

い哉。師拈じて云く、「鷲峯老子、大ひに、杖に倚つて馬に騎るに似たり、僮仆の患なしと雖も、未だ傍觀のもの醜きことを免れず。」

解制小參、僧問ふ、「瀉山、仰山に問ふ、「子一夏上來せず、下面に在つて、箇の什麼をかせし得たる。」仰云く、「一片の傘を鋤き得、一籬の粟を種ゑ得たり。」瀉云く、「子虚しく一夏を過さず」と。師云く、「喬木を下つて幽谷に入る。」僧云く、「仰山云く、「和尚箇の什麼をかせし得たる。」瀉山云く、「日間一食、夜後一寢仰云く、「和尚亦虚しく一夏を過さず」と、此の意如何。」師云く、「父慈あらざれば子孝あらず。」僧云く、「仰山道了つて舌を吐く、瀉山云く、「子何ぞ自ら己命を傷ふこ

①鷲峯老子。松源の塔を鷲峯菴といふ。
②倚杖騎馬。あまり丁寧すぎた馬にのりながらつゝをつく、師を抑下す。
③未免傍觀。目のあいたやつが見れば、ちつともみたくないと、なるほど尤もじや。
④下喬木入幽谷。尊を降つて卑に就くの義、これ養子の後の放たり、第二義門と抑下す、報恩録に見ゆ。
⑤日間一食。珠云く、「上手と上手の出合ひ、先手を見こして互にとり合ふ。」
⑥和尚亦虚。こゝがこまたのせんさくだ、なるほど己命をそんじた處あり。
⑦父不慈。賓主相應。
⑧何傷己命。此の條は寶林録に見ゆ。東嶺云く、「こゝに瀉山宗の微細の工夫がある。」珠云く、「手前で手前の中からだ

三二二
をそこなふやう。」
⑨要且是五逆。臨濟下の端的、絶死の機に如かず、事は端巖録に見ゆ。珠云く、「なるほど丁寧のせんさく、げれども臨濟門下の一棒下にて、死か生か、さたのなには及はぬ。」
⑩經握僂人手。權柄手に在り、僂人を以て自らに比す。事は寶林録に見ゆ。或抄に云く、「わるくしたならば、きつてのけられんと。」
⑪卓錫無地。廓然虚露、豈に止だ大地寸土なし。
⑫空餘雙眼。氣佛祖を呑み、眼乾坤を蓋ふ。
⑬別有生涯。別生涯底の應下に在り。
⑭誰把寸陰。珠云く、「誰れありてか此の生涯を、光陰を送るを得る。」
⑮百二十日。長期は報恩録に見

とを得たる」と。師云く、「要且つ是れ五逆人の雷を聞くにあらず。」僧禮拜す、師云く、「劍は僂人の手に握る。」
師乃ち云く、「卓錫地なし、空しく雙眼を餘して乾坤を蓋ふ。別に生涯あり、誰か寸陰を把つて白日を消す。百二十日の長期、他を禁制し住めず、南は天台、北は五臺、八萬の細行、他を撈挽するに門なし。晝は兜率、夜は閻浮、衲僧。此を以て護生す、生、護せずといふことなし。此を以て禁足す、足踏せずといふことなし。主丈を。摩挲して西風を待つ、鉢盂鞋袋重ねて挑起す。前程に忽ち人あつて、聞く、南山一夏、靈雲兩處不若を以て、學者を煨煉すと問はゞ、個道ひ得るも也た未だし、脱し或は擬議せば、老僧が院

ゆ、他は即ち別生涯底。
①南天台北。此の句着語、安居の勝地を標す。
②八萬細行。善國の妙行威儀其の數此の如し。
③撈挽他門。法を以て約住すること能はず。
④晝兜率夜。又是れ著語、是の如く遊戯自在の故なり。これは本は無着菩薩の事なり。
⑤以此護生。此れは即ち別生涯底。
⑥生無不護。安居禁足もと虫蟻等の生命を護す。
⑦以此禁足。結跏趺坐、習禪成熟。
⑧摩挲主丈。解夏ゆゑ、行脚底に約して學者をかけてみる也
⑨鉢盂鞋袋。鉢袋を右の肩へ掛け、左の脇へ下になる様ひきまはし、鞋袋をば左の肩へ掛け、右の脇の下へまはすなり諸清規に委し。

三二三
⑩靈雲兩處。按ずるに行狀に、「二十年常に雲雲の兩處、不香を擧げて衲子を微問す、その意に契ふものあること少し、今此の夏も亦然り。」靈雲兩處不香は。聯燈十六靈雲草に出づ。
⑪老僧僂子。淨慈を指す。今日退くはずゆゑ、既に他人に屬すと。
⑫未免更。又あとから徑山へ來よやき、行狀に「景定甲子淨慈に住す、丁卯の秋徑山に還る。」蓋し此の秋夏了に徑山の命を受く、故に預め小參の次に於て爾いふのみ。
⑬秤錘捻得。珠云く、「參學骨を折つて、秤錘捻り得て汁出るほどはげむ。」これは虚堂に係る。
⑭石云喝得。學者も此の如く骨折つてなり、これは學者に係る。此の兩句は禪話沒巴鼻、

子、既に他人に屬す、未だ免れず更に徑山に上ること一遭し了ることを。」
衆を辭して徑山に赴く上堂、「秤鎚捻り得て汁出で、石人喝し得て汗流る。機に臨んで變に應じ、分に隨つて差を知る。時に乘じて五峯頭に推し上せらる。然も孤舟共に渡る雖も、尙ほ夙因あり、兩夏一冬、攀感なかるべけんや。」主丈を卓して、「但だ路の上るべきあれば、更に高きも人もた行く。」

惟るに上士の歴遷應變、不可思議なること、蓋し此の如し臨機應變。秤鎚の句、珠云く「さてそれから、三機に應じ」隨分知蓋。石人の句、珠云く「學者器量相應に得力。」
⑤ 乘時推上。徑山の境致なり、前録に見ゆ。珠云く、「此の時節、隨縁上三徑山しや、虚堂もなんぼう骨を折つても、今はじや。」
⑥ 雖然孤舟。淨慈徑山共に杭州に在り、蓋し其の間船路ある

三二四
み己下別を惜むの意を述ぶ。
③ 尙有夙因。應に下の兩句に在るべし、淨慈に夙因ありじや。
④ 兩夏一冬。淨慈の舊因を忘るべからず、なごりをしいと、師は景定五年甲子正月十六日淨慈に遷る、年八十なり明年咸淳元年乙丑八月廿五日徑山に遷る年八十一なり、蓋し子の春より丑の秋に及ぶ。
⑤ 但有路可。上峯に路あり、天目に通ず、故に徑山と名づり
⑥ 更高人也行。發行の意を述ぶ

淨慈寺後錄 終

國譯虛堂和尚語錄卷九

臨安府 徑山興 聖萬壽禪寺 後錄

參學 正一 淨喜 尙賢 編

上堂、開端令節、萬事新しきに從ふ。普賢墨を磨し、文殊筆を把つて、箇の事事大吉を書す。茲れ從り、常住寛餘にして、進積を掃除す。斗南長く見る老人星、五峯峨峨として空に倚つて碧なり。
知事を謝する上堂、楊岐、紙衾を挾んで庫司に出入すること三十年、力めて慈明を輔く用都寺、常住の油を點せず、大椀を買つて

① 徑山興聖。聖の字は欠字すべし、天朝の賜ふところの寺號なればなり。
② 後錄。前録に徑山云云は見ゆ。
③ 正一淨喜尙賢。三人とも考ふる所なし。
④ 開端。正月元日なり。
⑤ 萬事從新。一夜あければ日出度い。
⑥ 普賢磨墨。聖象化を助く、已下押韻。或抄に云く、「祖宗

門下春になり、新なる體を云ふ。
① 普賢事々大吉。珠云く、「虚空一ばいに書いた、山は山一ばい、川は川一ばい。」
② 常住寛餘。常住は寺の庫裏向きをいふ、富貴自在、寛裕にして餘財あり。
③ 進積。進は負と訓ず、言ふは他人の物を負ふて、年年積む所なり。煩惱忘想じや。
④ 斗南長見。吉星の名前に見ゆ
三二五

食を造つて、大衆に供養す、^①後亞世の命師、^②叢林の標準と爲る。況んや此の^③龍峯、名天下に満ちて、^④來るものは即ち凡木に非ず、居るものは盡くこれ棟材なるをや。玆れ從り日日、春風^⑤國師の元氣を挽回す。且く、^⑥股肱人を得るの一句作廢生。^⑦老僧八十間無數贏ち得たり山を看復た雲を看ることを。^⑧上堂、舉す、^⑨瀉山因に茶を摘む次で、仰山に謂ふて曰く、「終日茶を摘む、只だ子が聲を聞いて子が形を見ず。」仰茶樹を撼す、瀉云く、「子只だ其の用を得て、其の體を得ず。」仰云く、「未審し和尚如何。」瀉良久す、仰云く、「和尚其の體を得て、其の用を得ず。」瀉云く、「子に二十棒を放す。」拈じて云く、「瀉山、仰山の不在を恐れて、時時に^⑩管帶す。仰山、子は父の

北斗、人境の共に親す。師學共に長久を云ふ。^①五峯巖。この二句、祝語にして、福壽の二字を云ふ、五峯は徑山なり、其の高貴を仰瞻すべきなり、碧は飄雪の已に消するが爲なり。^②謝知事上堂。東嶺云く、「此れは隱德を以て示された。」^③楊岐挾紙。珠云く、「楊岐黃龍と五家七宗、燕尾の如く分れ、和尚の其なり立たり、楊岐縁に慈明南源に住す、師往いて參依す勤苦を憚らず、慈明、遺香、石霜に遷るに及んで、師皆輔佐す、俱に自ら請ふて監寺と作る、衆論雜然として善しと稱す、楮衾を挾んで入つて金鼓を典る、時々慈語を出して、以て慈明を摩拂す、諸方傳へて以て當れりとす、之に依ること久しと雖も、然も未だ省發あらず、香

參する毎に、明日く、庫司事繁し、且く去れと。〔挾紙衾〕とは我れを務むるに質朴なるをいふ。^④用都寺本。叢書第四卷の禪門寶訓下七七頁に、この因縁出づこゝに略す。婺州、雙林德用禪師は高菴悟に嗣ぐ、悟は佛眼遠に嗣ぐ。遠は五祖演に嗣ぐ。買の字は心なし。^⑤後亞世命師。亞は次なり、命は名なり、言ふ意は後來皆番番次第、出世の名師と爲るなり。東嶺云く、「如上の隱德をつまれた故。」或抄に「聖人千年一たび出づ、賢人五百年一たび出づ、之を亞世といふ相次で世に出づるなり、出世の祖師に次ぐなり。」^⑥叢林標準。榜標準則。^⑦龍峯。徑山は即ち神龍の據どころ、故にいふ、前録に見ゆ。^⑧來者即非凡木。交代新舊の知

業を承く、豈に^①敢て妄に爲さんや。若しこれ^②體用互換にして、^③杖子を放過せば、^④總に是れ第二月。

結夏小參、僧問ふ、「如來夏制、禁足護生、禘僧家、^⑤朝には西天に遊び、暮には東土に歸る作廢生か他を制得せん。」師云く、「只だ自可^⑥怡悅^⑦不堪^⑧持贈^⑨君。」僧云く「若し是の如くなるときは、^⑩則ち^⑪當處を離れず、常に湛然として、^⑫覓むれば、^⑬則ち知んぬ君が見るべからざることを。」師云く、「^⑭餓狗枯體を齧む。」僧問ふ、「^⑮只だ以大圓覺、爲我伽藍、身心安居、平等性智といふが如きんば、^⑯心は工伎兒の如く、^⑰意は和伎者に似たり。^⑱作廢生か身心安居を得去らん。」師云く、「^⑲人を見て空しく笑を解す、物を弄して名を知らず」

① 事を褒揚す。
② 國師元氣。國師は徑山開山國一禪師なり、再び少林花木の春を回へすの類なり。
③ 敢て得ん人。敢ての臣、元首の君を助くべし、徑山前録に見ゆ。珠云く、「我れを助くる知事を得るなり。」
④ 老僧八十。忠曰く、「扶助の人を得る故に、我れ間暇を得ること多きなり、數般の事なきなり、山を觀雲を看、從容自在を得るとなり。贏得はとりえなことはといふ意。」
⑤ 瀉山因摘茶。此の話は前の青王錄に出づ。
⑥ 瀉山恐仰山。主人公の不在を謂ふ、仰山の手前すであらんかと思ふなり。
⑦ 管帶。今は前意の義。ところらに隨て義別なり、あつちへつつかゝり。
⑧ 敢妄爲。茶樹を撼す。

① 體用互換。瀉仰互に體用の處を説く、實主互換。
② 放過杖子。珠云く、そんなことを云はずに、なぜ一棒せぬ、瀉山云く、放三子二十棒を指すなり。
③ 總是第二月。只だ第二頭の義、楞嚴二等に所謂第二月と意同じからず。我が向上宗乘に於ては、道ひ得るも三十棒道ひ得ざるも三十棒と云ふ、ひつこまれた。或抄に「二師共に第二第三におつ。」
④ 朝遊西天。「物表に亭々と骨を折つた、衲僧は他を制得せんと、釋迦でも達磨でも。」
⑤ 只可自悅怡。珠云く、「遺蓋自得の境界、此の兩句は古詩なり。」
⑥ 不離當處。これは永嘉の證道歌に出づ。或抄に云く、本分は當處を離れずして、湛然ぞ、意を起して覓めば見つけえま

僧云く、「某甲今夏、信受奉行し去らん也。」
 師云く、「釘筈鐵舌、人の憎を得たり。」
 師乃ち云く、「靈峯の勝境、神龍の變化
 出沒其の由を測り難し。物外の高人、崇
 岡峻嶺を憚らず、風を望んで至る。崑山に玉
 を採り、赤水に珠を求むることを爲さず、
 直教ひ腦を刺して膠盆に入るも、正に好し
 身を將つて白刃を挨す。時夏制に臨んで、意護
 生に在つて、性地塵を絶して、生の護すべ
 きなし。且つ九十日の内、梵行を精修して
 慧身を成就するの一句作廢生。」主丈を卓して、
 「雪後始めて知る松栢の操、事難うして方に
 見る丈夫の心。」
 復た擧す、睦州和尚因に西峯相訪ふ、茶菓を
 置いて道話する次で、州云く、「長老今夏、

① じぞと。 ② 銀狗齧枯骨。 ③ 崑山の滋味かある。 ④ 以大圓覺。これは興聖錄に見ゆ。 ⑤ 心如工技見。心は第八識工技兒はをどりこ。 ⑥ 意似和伎者。意ふは第六識、和伎者は三昧綿ひき、はやしかた。 ⑦ 見人解笑。東嶺云く。「やい、うぬは人を見て、ぢやらく、わらふ、物を弄し、不_レ知_レ名は、脱體無心の體、平等性智に安居して、この兩句も古句ならん。 ⑧ 信受奉行。無心を領受す。 ⑨ 釘筈鐵舌。惡口を抑ふとなり。 ⑩ 崑山。徑山に靈鷲塚あり、故に爾か云ふ乎、前錄に見ゆと溪抄にあれども、忠の曰く、「徑山を稱美して靈峯といふ

謂はゆる靈異の山なり、勝境に對しての語のみ」と。
 ① 神龍變化。此の兩句、境の美を揚ぐ。
 ② 出沒其由。珠云く、「應機自在。」
 ③ 物外高人。四來の衲子なり。已上は主をいふ、已下は學者を言ふ。此れは其の居人の勝を嘆ず。
 ④ 崇岡峻嶺。嶺は通じて領に作る、此れは來賓の英を褒む。
 ⑤ 珠云く、「崇岡云云は路の嶺、風は宗師の德風をいふ徑山の風なり。」
 ⑥ 崑山探玉。崑山には玉璞多し、頌古に見ゆ。珠云く、「虛堂來學を接して、向上奇特の商量を求めず。崑山は徑山を云ふ、不爲は有所得底をあらはす。
 ⑦ 赤水求珠。赤水支珠を索る。瑞岩錄に見ゆ。赤水は龍淵な

「何れの處に在つてか安居す。」峯云く、「蘭溪。」睦州云く、「多少衆ぞ。」峯云く、「七十餘僧。」睦州云く、「時中何を將つてか徒に示す。」峯云く、「柑子を拈起す、州云く、「甚の死急をか著たる。」拈じて云く、「睦州。雲門の脚を拶折する底の險機を用ひすと雖も、要且つ賓主歴然たり。忽ち徑山今夏、多少衆ぞと問ふものあらば、内外七百餘僧、忽ち又尋常何を將つてか徒に示すと問はば、聲に和して便ち喝せん。他の擬議せんを待つて則便ち道はん。徑山門下誰か敢て、虎鬚を持でんと。」
 ① 次の日上堂、「鵝護の雪、臘人の冰、諸方恐らくは之あらん。我が者裏、佛を毀り法を謗つて、衆數に入らざるも、尙は且つ一半を救ひ得ず。何に況んや、九十日の内、古

り、此く兩句は喩を設け言ふは、此れ箇の徑山法實足る、何ぞ別處に求めんとなり。
 ② 直教刺腦。無分曉なり、この處では本分の漢を云ふ、尋常は鈍漢に用ふ。忠曰く、「倒に頭顱を低れて膠器の中に刺し入る、不淨潔を謂ふなり、今は退歩確實の工夫を謂ふなり、空腹高心の輩を捉へて、向下實地の工夫を作さしむるなり、珠云く、「大死一番底聖凡辨じ難き底。」
 ③ 正好將身。喪身失命を避けず。此の兩句は來參底の様式なり。珠云く、將身は「まつはだかになつて、換は「すりつげる」忠曰く、「正好の二字は、上の不爲の字を照して、白刃に挨すは法戰を謂ふなり、言うは確實退歩を作して、一回得力の後、正に好し渾身を棄て、白刃を挨し法戰するな

り、此の時に當りて崑山に玉を採り、赤水に珠を求むべしなり。
 ① 性地。自性心地。
 ② 無生可護。實際理地、一塵を受けず、甚の護すべきあらん。
 ③ 成就慧身。華嚴經梵行品に、「一切の法即心自性なりと知りて、慧身を成就して、他に由つて悟らず」とあり。
 ④ 雪後始知。堅固修練の意を示す。珠云く、「參禪の進力利鈍、自然に露現して、松栢の雪後に調まざるが如し。」
 ⑤ 睦州和尚。傳燈十二卷に此の縁を載す。西峯は未だ審かならず。
 ⑥ 置。茶菓を設くるを云ふ。
 ⑦ 蘭溪。蘭溪で一夏を送る。未詳なり。
 ⑧ 時中。十二時中、尋常なり。
 ⑨ 柑子。即今そこにあるところ

塚を守る鬼の如くなるをや。作麼生か證入を得去らん。拂子を撃つて、「修心鍊行、三世佛の冤」

乘拂を謝する夏齋の上堂、齋粥の二時、地に下つて問訊す、進退揖讓、之を禮と謂ふ、鐘を撞き鼓を伐つ、之を樂と謂ふ、二つのもの既に備ふるときは、三徳六味、天よりして降る、棒鳴交馳、何くよりしてか起る。會するときは則ち、香風萎花を吹く、更に新好の者を雨す。然らずんば、丁寧は君徳を損す。上堂、「君、清涼を愛すること勿れ、清涼は火の如く沸湯の如し。君炎熱を惡むこと勿れ、炎熱は氷の如く積雪の如し。愛すること勿く亦惡むこと勿きも、未だ是れ逍遙の處にあらず。楊次公、天衣懷和尚に見えてより後、其の

の物。
●著其死念。死念は極めて忙しきなり、著忙する故に、死にいそぎをするとなり。
●抄折雲門脚底。事は如古に見ゆ。
●要且實主。珠云く、「要且は畢竟の義、上の雖の字に應ず、これは陸州を稱美してなり、兩人の間に於て實も主もじや。」
●内外。僧堂を内と爲す、外堂を外となす。
●徑山門下。或抄に、虛堂自己底で把住底であるゆゑ、中々うかやはれぬと云はんとなり。
●持虎。うかやいにくいなり。
●次日上堂。結夏のつぎの日。
●鷄譚。延福錄に見ゆ。臘人は報恩錄に見ゆ。
●念。けだしなり。珠曰く、「字

三三〇
書には疑なり、慮なり、愷度なり。
●我者裏。我が禪宗虛堂門下、不入家數、三寶に依らず。出格にして。
●尙且一半。珠曰く、「上之件の如くでさへ、宗門に於て牛分の補もない。」
●守古塚鬼。珠云く、「どうらちがあくものか、古塚を守る幽霊見たやうに。」
●終心鍊行。珠云く、「修心鍊行は佛を殺し祖を殺す故に。」或抄に云く、「日用死漢となり、工夫するともじや。」
●下地問訊。これは清規齋粥に赴く、下の略に云ふ「堂前の鳴鐘を待ちて、即ち入堂大眾ひとしく床を下りて、普同問訊して坐に就く云云。」珠云く「師學共に地に下りて普同問訊す。」
●進退揖讓。司馬光の云はれし

波辯を縦にして、諸方を品藻す、咸く謂ふ法藏比丘の後身と。獨り徑山のみ殊に未だ之を信せず、畢竟此れは是れ何人ぞ。主丈を卓して、「清朝の楊侍講、季世の佛牙郎。」上堂、鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲噪を作す。盡大地の人、孔竅を知らずと忽ちに箇の漢あつて出て來つて、大唐國裏人の在ありと道はゞ老僧覺えず、膝を屈し舌を吐かん。何が故ぞ將に謂へり人なしと。監收を謝する上堂、「禾子熟せり也、世間の好事人皆聽く。刈鎌一舉すれば、鉢盂無底虚空を貯ふ。古今差別の情通じては主丈頭邊路活す。且く道へ、往來の飽徳、主とする所のもの何人ぞ。」主丈を卓して、「家は海門の東に住す、樽桑最も先づ照す。」

三代の禮樂は緇衣の中に在りじや、伐は翠也叢林の禮樂を擧ぐ。
●三徳六味。禮樂の二つ者、まう備具するときは、三徳とは輕軟と淨潔と如法となり、六味とは甘、辛、鹹、苦、酸、淡なり。
●自天而降。自然成熟の義。珠云く、「徑山の寺諱は、此れ天子より降賜の故に云ふ。」
●棒鳴交馳。珠云く、「乗拂說法、夏齋は且くおこ、棒鳴の交馳は何づくよりしてか起る。」
●香風萎花。法華の化城喻品の偈、以て老衰強壯、共に財法の得益に喩ふ。好は「うるはしき」也。
●丁寧損君徳。住相財法生心の受施、共に益なき故に。珠云く、「云ふほどあし、せんさくするほど損はできる。」

三三一
●君。學者を云ふ。この語は楊傑の語なり。
●清涼。珠云く、「柳綠を失ひ花紅を失ふの意のみよ」と。こゝは地獄天堂體に一家とみよの見解なり、天堂極樂の樂底を云ふ、諸法實相底を云ふ、炎熱は地獄なり。
●勿愛亦忽惡。珠云く、「然るときは取らず捨てずとも、優游自在なり、二途ともに涉らざる底なり。」
●楊次公。禮部楊傑居士、字は次公、無爲と號す。立僧普說に見ゆ、天衣の懷に嗣ぐ、この公は二途共に涉らざるの見解を具す、故に此に用ふ。
●縱其波辯。珠云く、「眼高うして五家七宗の大事を評判した。」
●法藏比丘。彌陀の前身なり。
●獨標山。虛堂ばかりは合點せぬ。

解夏小參、大覺世尊よりして直下五十三世の嫡孫、比丘某甲、見住、徑山興聖、萬壽禪寺、佛の遺蔭を承けて、佛の制法に遵ふ。四月十五日に於て、行籌坐草を用ひず、四海の禪流と此の安居を同じうす。九十日の内に於て、四威儀の中、頃刻も雑用の身心なうして、此の阿羅漢果無漏の法身を證す。出生入死、大受用を得んこと、夫れ復た何の疑かあらん。忽ち箇の漢あつて出で來つて道く、老和尚畢竟、何の憑據かあると。山僧伊をして近前し來らしめて、低聲子にして他に向つて道く、爾穩便を把得し了れと。

復た擧す、鏡、清和尚、僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「三峯。」夏甚れの處にか在りし。僧云く、「五峯。」清云く、「子に三十

清朝楊侍講。太平の朝廷には、翰林院に侍講學士を置く。
 季世佛牙郎。牙郎は「やし」のことせりうりやのおやかたなり。「やすいやすいの現銀店の亭主なり」法のせりうりやうりやなりと、この上堂は眞俗不二の義、結涼熱一致の旨を擧するなり。
 龍吟。仰山の語詳には類案の飛走に載す。
 孔敦。肝要のこと、聲の出づるあななり、調敷なり。
 川膝吐舌。涎を吐するなり、吐舌は驚怖の貌。
 將謂無人。さてくめづらし知りてあるかと。
 禾子熟也。珠云く、「道業圓熟に比す、外面は謂はゆる稱禾熟し實る、これ世間第一の好事なり、諸人皆聞き知るところなり。」
 刈鎌一舉。艾る鎌なり、いね

三三二
 がみのつた故、かり初める。
 鉢盂無底。監收自己底、邊際なき米穀を云ふ、時至つて振起するときは、自分の家事充足すとなり。
 古今差別。子細に既味し活路通す、皆空腹ならざる故に。
 往來前德。往來とは學徒の出入を云ふ、德は龍參の碩德なり、徑山へ諸方から往來の人々なり。
 所主者何人。一家の食輪を轉するの本主は、即ち監收の故なり。
 家住海門東。家は監收の故郷なり、棒桑は日なり、自然に得、益の義なり、風穴の傳に出づ。珠云く、「日高山を照す。其の人を稱す。」
 承佛遺蔭。寶蔭の遺命なり、遺付の慈蔭。
 不用行籌坐草。此の四字未だ緣山を審にせず。蓋し行籌は

棒を放す。僧云く、「某甲什麼の過かある。」清云く、「蓋し汝一叢林を出で、一叢林に入ればなり。」拈じて云く、「絃を動すれば曲を別ち、葉落ちて秋を知る。山中に夏を散す、豈に裕子の東に去り西に去るなからんや。忽ち人あつて問はゞ、切に徑山に在つて夏を過すと道ふことを得ざれ、道著せば則ち爾が獨體を打破せん。何が故ぞ。」主丈を卓して、一酒は知己に逢ふて飲み、詩は會する人に向つて吟す。」

次の日上堂、頂上の笠、腰下の包、千里萬里路、岩堯、途中忽然として、定上座が輩に撞著せんに、趙州東壁に葫蘆を挂くる意作麼生と道はゞ、笠子を放下して、他に向つて道はん、我れ今夏徑山に在つて住して、曾て

化他の義。珠云く、「行籌は人と數を知るなりと。」天來いくたりとかぞへることもせぬとなり、籌を行くなり、人數を數へるなり、坐草は解夏の日來に示すに「かいげ草」と云ふをしくなり、今時は用ひずとなり、吉祥草とも名づく。
 雜川身心。趙州の所謂老僧打脚の時、二時の粥飯是れ雜用心の處を除く、外を除いて更に別の用心の處なし、若し是の如くならざれば大いに遠在すと。外の雜念なしとの意。
 何疑。これ一夏かうである。
 畢竟。九十日已下に當る。
 把得穩便了。珠云く、「強ひて憑據を問はず、自ら工夫して自知せよとなり。把住しえて、おだやかにたよれとなり。あまりに穿鑿せぬともよいかげんにして、おけとなり。」
 鏡清。龍閑道愆師は雪峯に

三三三
 嗣ぐ、聯燈二十四及び類聚十四等に此の緣を載す。
 出一叢林。東嶺云く、「これ何の事だか落處がしれん、なんの用もないに、一叢林を出て云云、此のとがで打たんとなり。」
 動鼓別曲。知音底を云ふ、鏡清家裏の秘曲じや、子に三十棒を放す、是れ鏡清下の古曲じや。淡曰く、「頓機靈利、能く龍蛇を定む。」
 打破爾獨體。其だ親切なり、これ則ちかく云ふは大爲人なり。
 酒逢知己飲。珠云く、「知音底でなくては、徑山に居たとは云れぬ。」
 次日上堂。東嶺曰く、「此の上堂は大用現前した上堂じや。」
 腰下包。複子をまとふて。
 岩堯。山の高くけはしきこと

虛堂和尚の説を見来る、且く我が思量せんを待つて看よと。他の擬議せんを待つて、欄胸に一拳して、笠を頂いて便ち行け。

書記、藏主、維那、知客、侍者を謝する上堂、

「禪樂の謙恭、進退の揖讓は叢林の標準、

後學の著龜なり、只だ夫子一字をも識らざるに因つて、他の老胡を帶累して、説き得盡さざらしむ、直饒ひ綱令清峻にして、人を驗むる眼高きも、之を一邊に置く。忽ち丹霞來つて國師を訪ふが若きんば、又作廢生」

主丈を卓して、「三應漏洩することを得ざれ。」

上堂、擧す、雲門、衆に示す、「三乘十二分教

達磨西來、放過せば則ち不可。」後來雪竇大師舉了つて、後に隨つて喝して云く、「大衆

好喝、什麼の處にか落在す、若し鼻孔遼天

ならんことを要せば、須らく是れ者の一喝を辨

取すべし。」拈じて云く、「二大士、家法を承

承す、殊に知らず、滲漏の處あることを。徑

山は則ち然らず、若し鼻孔遼天ならんことを

要せば、直に須らく此の一喝を去くべし。」

運庵和尚、忌日の拈香、昨啜吒、喇喝節、

地轉じ天回る、辨別し難し。松源の省數

錢を使はず、衲僧の鑽口訣を用ふるに慣つて

同死不同生、特地に途徹を成す。秋風影

の裏重ねて羅列す。義斷え情忘す四十年、

何れの時か龜を待ち得て鼈と成すことを。

上堂、「閑は靜に如かず、忙は閑に如かず、靜

閑俱に泯す、之を理を得。宗に歸して事理絶

すと謂ふ。日輪正に午に當る、又作廢生か高

三三四

帶累他老胡。これは藏主、釋迦四十九年一字不説。

綱令清峻。これは維那、宗綱法令清潔嚴峻。

驗人眼高。これは知客なり。置文一邊。已下單に侍者を謝せんことを要す。

丹霞來。この縁は頌古に見ゆ。

三應漏洩。三應又忠國師の侍者の機縁を用ふ、言ふ意は把住して言を閉づべしとなり。「珠云く、「三應は侍者の無名、侍者ぬかるなとなり。」

放過。放過は「やりすこす、數禪共に放過せば不可なり、一一に須らく生得斷、把得定すべしとなり。」

後來雪竇。「若し不放過不唱一喝と云ふ八字あり、許多の人の耳を鼻に入れて」と珠はいへり。

鼻孔遼天。抗顏自得の相、佛

祖を并吞すじや、洒落の境界に到らんと。

二大士家法。雪豆、雲門の二大士、雪峯、雲門、香林、智門、雪豆と是の如く家法相承す。

滲漏。ぬけめがあるとなり。要鼻孔遼天。はや雪豆一喝を下す處がいやじや。

昨啜吒。運庵一代の説法を直下にとり出す。寶樓閣經咒の略。

喇喝節。名義集に、此には杖といふ、然るに今は翻譯の義を取らず、運庵誰法の無所得を表す。

地轉天回。其所説全機大用は、地の轉するが如く、天の回るが如し。珠云く、「運庵の全身なり、佛祖といへども別ちがたし。

省數錢。虛堂下は事足りてあるゆゑ、みな足陌と云ふ。松

源下は事足らぬやうなとていふ。省數錢といふ。珠云く、「七十七、之を省數錢といふ、學者かんで吞ませぬを云ふ、點滴も施さず。」

衲僧鑽口訣。「さるべつわななり。衲僧の口門を鑽斷するの訣なり、人口を鑽却する底の秘訣なり、是れ長慶門下の宗唱なり、衲僧著説に見ゆ。

同死不同生。不使の句を結ぶ、忠曰く、運庵と松源と同じく並に八月四日遷化す、故に同死と云ふ、然れども松源省數錢を用ひず、故に生を同じうせずと云ふなり。蓋し此の句を言はんが爲に、前に虎丘を換へて松源と言ふのみなり。」

特地成途徹。慣用の句を結ぶ、別にこれ一家風じや、他の力をからぬ、本の止を云ふ。

秋風影裏。重ねてとは年々供養を仰ぶ、故に云ふ、同時

三三五

量せん。拂子を撃つて、向に道ふ、山下の路を行くこと莫れと、果然として猿叫ぶ斷腸の聲。

上堂 舉す、仰山坐する次で、忽ち異僧あり、空よりして至つて、作禮して庭に立つ。仰云く

「近離甚きの處ぞ。」僧云く、「今早西天を離る。」仰云く、「何ぞ來ること太だ遅き。」僧云く、

「游山翫水す。」仰云く、「神通妙用は則ち閑梨なきにあらす、佛法は須らく老僧に還すべし。」

僧云く、「特に 東土に來つて文珠を禮せんとす、却つて箇の小釋迦に遇著す。」括して云く、

「仰山 漫天の網を 集雲峯下に布いて、有知を 羅織す、端なく小果の聲聞に、冬瓜の印子を用つて、當頭に一搭せられ、却つて乃ち休し去る。若し徑山門下に到らば、更に須

に供物をそなへて。

義語情忘。師資の義も斷え追慕の情も亦忘ずること四十年。

何時待得ぬ。珠云く、「松源、運菴、虛堂の三人再會し胡亂に談論すべきなり。是れ追憶の情を迷ぶるなり。」

閑不如靜。閑は閑に通ず。さはがしきはひまなほどのことではない。

歸宗事理絕。歸宗より午に至るの兩句は、歸宗智常の頌なり。佛燈廿九に見ゆ、日輪正當年は十成全提の時節、是れ什麼ぞ。

向道山下路。靜閑は浪、事理は絶えよと云ふ、此の上ではや靜閑の上に落つとなり。

今早。けさよりなり。

游山翫水。みちぐさくふて。東土語交殊。支那太原府の五臺山は、即ち文殊示現の靈場

の故なり。

漫天網。漫は機に作る。幕なり。

集雲峯。仰山なり、袁州府にあり、絶高の處を云ふ、仰ぐべくして登るべからず、因つて山に名づく、歳早すれば人其の峰を望むに、雲雨忽ち至る。

羅織有知。羅織は籠罩の義、有知は有智の學者ども、羅織は上の網の字に應ず、今は衲子を鍛錬錯雜するをいふ。

無端。和語の「あじきなく」なり、大小の仰山であるが。

驗過。勘辨なり。

非玉帛。人は驗過にあらざれば誤らずの意、仰山が僧に脚下をみぬかれ、捏怪など抑す、畢竟師學相見の上では勘辨せいでとはなり。休去。そのままではじや。

心孤。こゝろぼそく。

らく 驗過して始めて得べし。何が故ぞ。拂子を撃つて、禮は玉帛に非ざれば表れず、樂は鐘鼓に非ざれば傳はらず。

開爐上堂 徑山年老いて 心孤なり。火爐頭の話の説かんことを要す。終に 東家の杓柄

は長く、西家の杓柄は短しと道はず、只だ毎日鉢盂兩度濕はんことを要す。忽然として坐して更の深くるに到つて、毛頭星現せん、各自

に眉毛を救取せよ。

達磨忌の拈香、般若多羅の 識に應じて、嫩桂差ふことなし、 流支三藏の 疑を破つて、

詞鋒峻烈なり、此れより 六宗影を斂め、正脈流通す。一華五葉、滿地に香を吹く

海豎山椒、咸く聖澤に沾ふ。月の良春の小、莫莢五敷す、此の 兜樓を炷いて、

東家杓柄長。爐話「せけんばなし」をいたしても、他人の長短を消はぬ。

鉢盂兩度。齋粥の二度。

毛頭星現。惡星なり、開爐ゆえに一星火の因縁となして用ふ、史記の天官史に鬚頭胡星といふ。

傷に云く、「路行踏水復逢羊、獨自悽悽啼渡江、日下可憐雙象馬、二株嫩桂久昌昌」と。

流支三藏。菩提流支、此には覺希となづく、碧岩一の評に見ゆ。

詞鋒。大辨才なり。

六宗斂影。寶林錄に見ゆ。

正脈流通。見性法門。

一華五葉。寶林錄に見ゆ。

海豎山椒。海中山上の謂なり、豎は貞なり、貞は中正の義、椒は通じて雌と作す、山のいたゞきを云ふ。

成法聖澤。達磨のおかげをかうむる。

月良春小。月の良は續辨に見ゆ、春の小は冬日暖にして春の如し、之を小春といふ、十月なり。

莫莢五敷。月の五日なり。

兜樓。兜樓は鬼神國より出づ、香草と翻す、舊には白茅香といふ、此の方のなきところ。

不審々々。或抄に云く、「虛堂たしかに達磨の應現をして、不審々々と云ふ、腕力なり、はいを目出度うさやうならおまめでなり。この香語。師の履痕、日本に渡來し、大徳寺の什寶として傳へたり。

廓侍者。興化に嗣ぐ、此縁は延福錄にあり。

作麼々々。なんとなく。

動點飛龍馬。珠云く、「いつも木刀が出なんだな、宗旨を

少しく攀慕を伸ぶ。且く道へ、大師還つて来るや也た無や。香を挿んで云く、不審不審。

上堂、擧す、徳山因に。廓侍者問ふ、「從上の諸聖、什麼の處に向つてか去る。」山云く、「作麼作麼。」廓云く、「飛龍馬を勅點すれば、跋鼈出頭し来る。」山休し去る。明日山、浴より出づ、廓、茶を度して山に與ふ、山廓が背を撫つこと一下して云く、「昨日の公案作麼生。」廓云く、「老漢今日方に始めて。警地。」山又休し去る。師拈じて云く、「盡く謂ふ、徳山兩處に休し去る、是れ養子の縁と、殊に知らず、闍市裏に靜槌を打し、死水裏に羈絆を設くることを。」

上堂、朝鐘暮鼓、晨粥午齋、一一見聞覺知、他を護すること一星子も得ず。他に、歸宗蛇を斬り、大隨龜を蓋ふことを問ふに及んで、便ち去ること得ず。且く道へ、障礙什麼の處にか在る。忽ち衆中、衣鉢の道友、本色の衲僧あつて、出で來つて、箇の消息を露して、大衆に供養せば、也た好箇の時節。

冬至小參、陰極つて陽生ず、理は事に隨つて變ず、是れ懶惰僧家の

かへずと、どせう骨をくぼむばとに。」

- ① 警地。ちらりとたり。
- ② 兩處休去。珠云く、「兩處に休し去つたは、休去の處に向つて合點せよとの意。」
- ③ 養子文像。世間でいふか中中さうでない。
- ④ 闍市裏云々。羈絆は「ともづな」今死水裏に豈に得べけんや、皆不相應の義。或抄に云く、「みなこれ無用處、廓侍者を扶起し、徳山を抑下す、畢竟此の兩句はわけもなきと云ふ心なり。」
- ⑤ 一一見聞覺知。歷々了々として自ら可憐生であざむかぬ。
- ⑥ 歸宗斬蛇。代別に見ゆ。
- ⑦ 大隨蓋龜。寶林錄の末に見ゆ。
- ⑧ 障礙什麼處。珠云く、「此に至りて自在に働くことならぬは。」
- ⑨ 衣鉢道友。黃梅夜中、傳衣得

家具子なり。若し能く一念歸を知つて、寒暑の所遷を被らずんば、自然に靈脈貫通し、暖氣相接せん。直饒ひ霞管灰を飛し、繡紋線を添ふるもの也た是れ什麼の閑絡索ぞ。忽然として傍に甘はざる底あり出で來つて、化機に涉らじ、乞ふ師指示せよと道はゞ、山僧只だ他に向つて道はん。胡地冬筍を抽んで、江南雪梅に亞すと。復た擧す、洛浦和尚、因に龐居士來參す、禮拜して起て云く、「孟夏漸熱、仲冬薄寒。」浦云く、「錯ることなかれ。」士云く、「龐公年老いたり。」浦云く、何ぞ寒には便ち寒と道ひ、熱には便ち熱と道はざる。士云く、「雙を患へて什麼せん。」浦云く、「儻に三十棒を放す。」士曰く、「我が口を噤却し、汝が耳を塞却す。」師

- ① 法の人、衣鉢を同しうするの道友と、師の謙辭なり。
- ② 本色衲僧。珠云く、「これはなんとしたこじや、著力の處なり。」
- ③ 箇消息。障礙の。
- ④ 好箇時節。猶ほ今正に是れ時なりと言ふがごとし、結構な面白き時にあはんとたり。
- ⑤ 陰極陽生。珠云く、「佛を殺し祖を殺し、州云く、「無と殺し絶後に再び甦るところ。」
- ⑥ 理隨事變。眞如は自性を守らず、縁に隨つて一切の事法を成就する故なり。珠云く、「陰陽本具に見徹し、佛に入り祖に入り、魔に入り應機はたらき。」
- ⑦ 家具子。是れ天眞任運の境界平日受用底の理、怪むに足らざるものなり、尋常の家具子じや。
- ⑧ 一念知歸。好箇の時節、者箇

- ① の上に於て一念眞に歸することを知る。珠云く、「悟もされぬ迷もされぬ、有も無も生も死も、虚空盡きはてた處で歸を知る。」
- ② 寒暑之所遷。珠云く、「柳緑を失ひ、花色を失す。」
- ③ 自然靈脈。歷代の祖師、所證底の眞脈法理塞からず、靈妙の血脈じや。
- ④ 暖氣相接。一陽生ずるに托し大法の和氣を表す、聲も啼き梅も開きて、底意は自己をいふ。
- ⑤ 霞管飛灰。報恩錄に見ゆ。
- ⑥ 閑絡索。閑は無用の義なり、猶ほ一段と言ふが如し、「へちまのだんぶくろ」なり。
- ⑦ 不甘底。虛堂如上底をうけがはずで。
- ⑧ 不淨化機。珠云く、「造化の機にじや、さま／＼如上のことには涉らず。」

拈じて云く、「洛浦」程を負ること太だ速なり、
 鳳樓を蹉過することを知らず、老龐、密に金針を用ふ、
 覺えず鋒頭已に露るることを、
 檢點し將ち來れば、
 二り俱に了せず、且く道へ、
 那裏か是れ他の了せざる底、
 來夜首座を請じて、
 衆の爲に「點破せしめん。」
 次の日上堂、
 一氣言はず、
 九困の底自ら發す、
 初爻象なし、
 肇めて萬化の宗爲り。
 舊に依つて雲物祥を呈し、
 山林觀を改む。
 忽ち箇の漢あつて、
 陰陽未判已前に向つて、
 漆桶を打破せば、
 又且つ如何。若し果して然らば、
 生鐵も也た須らく粉碎すべし。
 執事を謝する上堂、
 擧す、
 地藏道く、
 諸方浩浩として禪を説く、
 爭か我が者裏、
 田を種ゑて飯を博ふるに如かん。
 師拈じて云く、「盡く謂

① 胡地冬抽箭。北胡は寒地、然も冬箭を抽づるも則ち寒からず、江南は暖國なれば梅花の後に雪あり、則ち暖ならず、是れ一齊平等の境界、寒暑の化機に涉らざる底なり。亞梅は雪壓して梅枝傾斜するなり。康熙字典に「亞あふ」、通じて亞に作ると、水に亞して竹に亞するなど古人の詩句にあり「亞す」とよむが正當ならん。この句は陰陽推遷を被らざる底のものを云ふ。
 ② 孟夏漸熱。珠云く、「百二十斤の鐵鏈を打つて、どうじや」と云ふ如くじや。
 ③ 莫鎔。珠云く、「曉了なり、何とちがへた。」
 ④ 惡覺作麼。おぬしは、いかに耳とほい。
 ⑤ 三十棒。珠云く、「一扇棒扇棒。」
 ⑥ 啞却我口。東嶺云く、「此れで三十棒を行する處。」

拈云。舊本は「師拈云」とあり。漢抄には「拈云」とあり。己下皆同じ
 ① 貧程太速。みちいそぎするゆえなり、畢竟浦が士を勘辨せんとて眞箇のものをやりごすとなり。
 ② 蹉過風樓。風樓をみずして蹉過しとほる、老龐も亦把住過じや。五風樓は洛陽城内に在り、河南府なり洛陽に到らんと要するの人は、路を取ることに大だ急にして、覺えず都城を過ぎ越すとたり。
 ③ 不覺鋒頭。東嶺云く、「啞却我口。啞却汝耳」と云ふ處。「珠云く、「とんと針目が見えぬ。」又惡覺作麼せんといふ語の處。
 ④ 二俱不了。浦は士にとりまはさる、士は長だ把住しすくとたり。
 ⑤ 點破。供養せんとなり、來夜

ふ、地藏。一と坐せしめ七と走らしむ。殊に知らず、
 倒に麻鞋を著けて來ること去るに似たることを。徑山天文を窮め地理を究むれども、
 到底識らず、
 者箇畢竟是れ什麼ぞ「主丈を卓して、「一擧兩得」」
 上堂、擧す、
 乾峯和尚道く、「一を擧して二を擧することを得ず、
 一著を放過すれば、
 第二に落在す。」
 師拈じて云く、「乾峯は人の與に解註するに慣へり、
 徑山は則ち然らず、
 一を擧することを得ず、
 二を擧することを得ず、
 放過することを得ず、
 把住することを得ず、
 何が故ぞ。」
 主丈を卓して、「又一箇の解註を添ふ也。」
 除夜小參、「
 更籌臘を餞す、
 看す看す、
 結交頭に趕到す、
 斗柄春を回す、
 日日數へ來つて

とは若し不會の三字、心を以て入つてみよとは古人の説あり。
 ① 一氣不言。天元の一氣、どういふわけからいふわけと云ふことは云はねども、一陽來復。此の四句は前の興聖錄に用づ、冬至小參なり解は彼に見ゆ。
 ② 九困之底。至深黃泉の下。
 ③ 初文無。象未形の謂なり、最郡一念の願心どうかうのわけはなけれども、十一月復の卦に一陽生ずと雖も、象の見るべきなしと。一陽始めてきざす處を初爻と云ふ。
 ④ 萬化之宗。萬物の造化の宗本となりそだつる。
 ⑤ 依舊雲物。書雲の令節、次の冬至に見ゆ。なにもかもそろく、と春めき回へる、これは司天臺に上りていふ。
 ⑥ 山林改觀。世間の相を云ふ。

① 陰陽未判。一機未發なり。
 ② 打破漆桶。一念未起の時を表す。無分曉なり。
 ③ 果然。打破漆桶の當體なり。
 ④ 生鐵也須。「山鳴り谷應じ、勢つよきなり、それはまあ、たまるものではない、
 衲僧家ならば珍しくはない、
 御茶の子じや」と珠はいへり。
 ⑤ 種田傳飯。執事の故に此の縁を引く、
 緣は琛公の本傳に詳なり。
 ⑥ 坐一走七。往々一と七とを用ふることは、
 蓋し一は數の始め、
 七は數の極なり、
 所謂七鬼毛塵、
 七牛毛塵等是なり、
 故に雪竇の頌に云く、「一と去却し七と拈得す」と、
 今一とは少を云ふ、
 七とは多を謂ふ、
 言ふ意は無爲安坐の者は少く、
 營辦奔走の者は多し。忠曰く「此れは窟居士錄に出づ、
 余謂く、
 一の字は坐の相の如く

① 一歳を添ふ。② 一酌を加ふるときは則ち龐公
子が帽頭に著く、③ 一杯を減するときは則ち
李老君が醉眼曠を生ず。④ 從教あれ 臘雪天に
連ること、甚の 牛を宰て分蔵すとか説かんの
盡く是れ ⑤ 名あつて實なく、食を説いて饑
に充つ。徑山 ⑥ 別に條章あり、只だ時を知り
節を識らんことを要す。只だ ⑦ 篝燈遠く照し
て、靜に除夕を守るが如し。何を將つてか
管顧せん。主丈を卓して、⑧ 嫌ふこと莫れ老婦
盤釘なきことを、笑つて指す爐中芋栗の香し
きことを。」

七の字は走る勢の如し、故に
云ふ、言ふ意は諸方地藏を商
量するもの、盡く謂ふ、田を
種えて飯に博ふるは、是れ坐
一なり、諸方法々禪を説くは
是れ走七なり、自由自在なり
一と七とは別に心なし。

⑦ 倒著麻鞋。著忙の義、却つて地
藏の事繁きを抑ふ。珠云く、
「倒にとは尋常に非ず、來る
とは亦異常、禪を説くは佛法
を説くか、あとさきへじや、
こちへくれどもあとさきざり
をるに似た、甚だ不自在な
り。」

⑧ 到底不識。畢竟此の地藏が云
ふ處はとんとじや、自然の妙
理を説かんとことを要す。

⑨ 者箇、那一物。

⑩ 一舉兩得。或抄に卓主文の處
不識底のものをとり出し、執
事に當てわれ不識の處は此の
執事が知るであらんほどにと

なり、佛法も世法も兩得す。

① 拈云。淡抄け「拈云」とす。

② 與人解注。把住と解注がつい
た、峯の把住の處を、かなた
をかけてきようせられぬ、權
りに節目を立つるなり。

③ 一箇解注。也はおき字なり、
「自ら點檢す」、針峯頭上に鐵
を削る手段、此れまでなぞお
かね、此より下でぶつこはし
た」と珠はいへり、「この話
は三種病とになへば棒がをれ
る」と更鐵はいへり。

④ 更籌餘賊。籌は矢なり、更籌
は漏箭なり、言ふ意は漏箭殘
圓の行くを餓送して、忽ち結
算の時に到るとなり、書經に
「おくる」ともよむ、「はなむ
けす」ともよむ。

⑤ 趕到結交頭。「おいついてゆ
く」趕は走なり、迫なり。

⑥ 添一歳。斗稱寅を建す。又春
を回す、これより一歳を活ふ

「如何はるか是れ和尚一味の禪。」宗便ち打つ、
僧云く、「我れ會せり、我れ會せり。」宗云く、「道
ひ來れ看ん。」僧口を開かんと擬す、宗又打つ。
拈じて云く、「是は則ち是、劍刃上の事ならば
要且つ。① 法を盡せば民なし。徑山 ② 令一半
を行じて、曲げて今時の爲にす、若し ③ 依つ
て之を行せば、則ち惟だ ④ 法堂前艸深きこと
一丈なるのみにあらず、正に恐る人の天澤菴
を看するなからんことを。」

⑤ 正旦上堂、⑥ 鷲飛んで天に戻り。魚困に躍る
⑦ 四夷拜舞し、⑧ 八表宣傳す。笑つて看る紅
日の闌干に上ることを。且く道へ、歲旦 ⑨ 剛
辰、是れ何の祥瑞ぞ」主丈を卓して、「天子南
郊す。」

新舊の兩班を謝する ⑩ 上堂、「寶あり主あり

なり。

① 加一酌。忠曰く、「酒を謂ふな
り、言うは之を加ふれば則ち
稍落つ、之を減ずれば則ち醉
却つて生ず」或抄に「世間底を
云ふならば、龐公李老は張三
李四の心なり、あさくみよ。」

② 減一杯。李老は李太白を言ふ。
甚だ酒を好む故に一杯を減ず
るときは則ち曠を生ずとなり
分蔵の賀を致すか爲にかくい
ふ。

③ 臘雪連天。又是れ任運。

④ 半半分蔵。宰は烹なり、この
こと瑞岩寶林に見ゆ、北禪は
除夜に牛を烹、法昌は臘雪を
用つて分蔵す。

⑤ 有名無實。法昌北禪二人とも
に、臘雪連天だの、露地の白
牛だのと空名のみと抑下す。

⑥ 别有條章。家常底なり。

⑦ 篝燈遠照。篝は籠を以て火を
覆ふなり、「かこ」なり、「か々

り火」なり、今の「行燈ぼん
ぼり」の類、世間底の漢。

⑧ 管顧。管待の義、「とりまは
そう」いかんとも致し方ない
となり。

⑨ 莫嫌老婦。此の二句は古句か
らん、盤釘は食を盛るを盤釘
と曰ふ。冷淡を云ふ。

⑩ 笑指爐中。別の條章が是れ隨
分分蔵の具なり。自負を云ふ。

⑪ 五味。未だ審にせず、蓋し法
味禪味の言に約して、諸方の
宗師、差別の資糧あり、故に
五味と稱す、味に五種あれば
なり。

⑫ 是則是。なるほど、劍刃
上の事で一味の禪じや。

⑬ 盡法無民盡。大地の人、悉く
斬つて三段と爲すべきが故な
り、刑ばつあまりきびしくせ
ぬように、又飯宗の餘飯をみ
ぬいて、其の糠を奪つて掃蕩
するなり。

① 禮あり樂あり、之を 梅檀叢林と謂ふ。其の主也、心を正しうし意を誠にして、物を待たずること春の如し。其の賓也、後學に標準として、通變に權衡たり。忽ち若し賓主互融、禮樂一致ならば、又作麼生。主丈を卓して向に道ふ、是れ龍と剛ひて信せず、果然として錦標を奪ひ得て歸る。」

② 元霄上堂、朝家元日、郊禮、天地開泰す。聖天子、感じて、燈を一月に放つて、以て上帝に享す。葦穀の下、青紅碧綠、巷陌畫の如し。禪門の中にも亦五燈あり、傳燈廣燈、普燈、結燈、聯燈、燈燈相續いで循環して盡くることなし。且く道へ、徑山是れ什麼の燈ぞ。主丈を卓して、「墻壁に耳あり。」

① 令行平。併し法令少しなければならぬ、ぞんぶんにはおこなはぬ。

② 依而行之。令に依りて悉く行せばとなり、版宗の噴底に依つてなり。

③ 法堂前紳。長沙の言ふ所なり。東嶺云く、「向上宗乘の法令を急度行す」と。

④ 正恐人天澤。天澤庵は師の創建する所なり。行狀に詳なり。珠云く、「住持のものは勿論、香院のものもあるまいと。氣の毒。」

⑤ 晝展天。この兩句は詩の大雅中唐には此の詩を引いて以て化育流行上下昭著なること、此の理の用に非ずといふことなきことを明す、今用ふるところも此の意なり。

⑥ 四夷拜舞。四夷共に朝して、拜首舞踏す、四夷は夷、蠻、

三四四

戎狄なり。

⑦ 八表宣傳。宣命傳布で、旨を承けて王化に屬す、處としていたらずといふなし、八表は八極なり。

⑧ 笑看紅日。和氣を表す。已上は韻を押す。

⑨ 剛辰。禮記の曲禮に外事は剛日を以てし、内事は柔日を以てしと、註に「甲丙戊庚壬を剛とす、乙丁己辛癸を柔とす。」

⑩ 天子南郊。郊は祭の名、天地を祀る國の南北の郊に在り、故に郊と曰ふ、冬至には天を南郊に祀り、夏至には「地を北郊に祀る、左傳には啓蟄にして郊す」と注に「天を南郊に祀るは、蓋し孟春穀を祈るの祀なり」と。忠曰く、「此の上堂及び次の元霄の上堂は、皆度宗の咸淳三年に在り、下の所考の如し、その元年に處

堂は徑山に住す。

① 上堂。端午の上堂か。

② 賓主。西序と東序、又舊新。

③ 禮樂。進退揖讓、則ち叢林法度嚴令なり。

④ 梅檀叢林。梅檀圍繞等に四種あり有玉錄に見ゆ。

⑤ 正心誠意。大學の語なり。

⑥ 待物如春。温和なることをいふ。

⑦ 後學。頭首なり。

⑧ 通變。知事。みな更代には更代す一剛を守らぬを云ふ。

⑨ 向道是龍。此の數輩、皆英靈傑山の漢なることを讚美す。虛堂が詩に云ふ、これは龍渡といふて、舟くらへをする五月端午の戲なり、その舟楫は龍を彩す、錦標は「にしきのぼり」勝つものは之を奪ふ。忠曰く、「向の字は果然に應ず、故に先(さき)と調ずべからず、新舊兩班各英俊の氣あるなり、意は専ら舊兩班を謝するにあり。」

⑩ 郊禮。天子南郊。

① 天地開泰。三陽交泰和合するなり。

② 聖天子。度宗なり、咸淳三年。

③ 放燈。忠曰く、「或は十五日の前後各一日合して三日、或は十七十八を増して總べて五日、今天子地べて一ヶ月に到るか、放は縱なり、肆なり、ほしいままに燈を燒いて禁ぜざるなり、放は「ひとしうす」ともよむ。

④ 享上帝。享は獻なり、太乙を祠るなり。

⑤ 葦穀の下。京師をいふ。

⑥ 青紅碧綠。燈籠の紙飾。

⑦ 巷陌如畫。かるさじやどのまぢもひるのやうなあかるさじや。

⑧ 傳燈。道原の編するところ、天臺徳淵に嗣ぐ。

⑨ 廣燈。李遵勗が編するところ、石門慈總に嗣ぐ。普燈は、雷庵正受が編するところ、淨慈昌に嗣ぐ。

⑩ 續燈。佛國神僧惟白が編するところ、圓通秀に嗣ぐ。

三四五

① 聯燈。晦翁悟明が編するところ、木菴永に嗣ぐ、宋時代なり。

② 墻壁有耳。高聲に談ずべからず、大把握じやほどに、先づ燈のはなしはやめにせんとたり。

③ 再問。珠云く、「曉過了也」

④ 聖著。聖は普尼(しく)、塞なり、礎は石相擊こえなり、「けつちりかつちり」と譯す、物にゆきあたることなり。こゝでは「あちへべつたりこちへべつたり」の意なり。

⑤ 親見雪峰。保福は雪峰に嗣ぐ。

⑥ 未敢相許。註脚を下す故に。

⑦ 人以言試。人は言を以て試むて、大事のことじやに、照著確著といふは、慈悲すぐとなり。

⑧ 天不文。珠云く、「佛涅槃のことなれば日月明を失す。」

⑨ 地不理。理も亦文なり。珠云く、「山崩崩倒す、天地皆空諸法寂滅は、是れ涅槃の當位。」

⑩ 如月印水。初より來去の祖なし、

上堂、擧す、保福因に僧侍立する次で、福云く、「備忘廢に危心なることを得たり。」僧云く、「什麼の處か是れ某が危心。」福一塊の土を將つて度與して云く、外邊に抛向し著せよ。「其の僧抛ち了つて 兩び問ふ、福云く、「我れ備が 視著 確 著なることを見る、所以に備を危心と道ふ。師拈じて云く、前而は備に許す、親しく雪峯に見ゆることを、後而は 未だ敢て相許さず。何が故ぞ。」拂子を撃つて、「金は石を以て試み、人は言を以て試む。」

佛涅槃上堂、天文あらず、地理あらず、忽ち去り忽ち來る、月の水に印するが如し。歲月已に往んぬ分、波旬時を得たり。柳に雙趺を示す分、飲光喜を増す。悲兮喜兮、春風桃李、一以て貫之、曾子が曰く、唯。

上堂、擧す、「見を見るの時、見是れ見に非ず、見猶ほ見を離る、見も及ぶこと能はず。」拈じて云く、黃面老子、其の實は汝諸人の 方に執せずして、中道に歸せんことを要す、殊に知らず、砂を雕るに玉を鏤むの功なきことを。徑山口業を惜まず、今日 一句子と作てし、諸人の與に

珠云く、「去來生滅ともに也たこれまでは涅槃の當體を云ふ。」

①歲月已往。如來が爾來四十九年、歲月移り去つて、涅槃時至る故に、廢主時に遇ふことを得たり。

②飲光増喜。梵には迦葉といふ此には飲光といふ、如來雙足、千輪の相を現して楡外に出す、迦葉禮讚す、増喜とは之を見て、悲喜に堪へずとなり。

③悲兮喜兮。上は處業、下は波旬。

④春風桃李。の春風桃李の上に、直下にこれ畢竟歡喜ともにあとなきを云ふ、禪宗の大事はこゝにあるぞ。

⑤曾子曰唯。換圖の體なり、合點したもの合點する。

⑥見見之時。これは楞嚴第二の文なり。畢竟人人の見性は、

解註し去らん」といつて、拂子を撃つ。

上堂、擧す、長水、琅琊に問ふ、「清淨本然、云何忽生、山河大地。」瑯琊云く、「清淨本然、云何忽生、山河大地。」長水省あり、拈じて云く、「敢て諸人に問ふ、問處も一般、答も亦別ならず、長水甚に因つてか悟り去る。徑山更に諸人の與に解註一徧せんといつて、拂子を撃つて

「清淨本然、云何忽生、山河大地。」上堂、首夏清和、百昌敷茂す。四海の高人を會して、深く探り淺く究む、轟然として噴地一發すれば、百川を吸盡して、

水の一滴を除さず、須彌を燭盡して、火の一豆を消せず。誰か來由を辨へん、松は肥え竹は瘦す、直饒ひ七事身に隨ふも、徑山箇の未是と道ふ。何が故ぞ。拂子を撃つて

みんとしても見ることならぬと云ふを主とするなり、眞見を見るのときは妄見是れ見に非ず、上は川、下は體、見の體を見徹するときは、本有の眞見の體、而目能見所見を絶す、知見も及ぶものでない、うその皮のさたじや。

①不執方。方は即ち二邊、今は眞精を表す。珠云く、「あれがよいこれがよいと、方は藥方で、言句に比す。」

②歸中道。中道は眞見を表す、圓融無碍、言句に泥まらずや。

③雕砂鑿玉。陰下の觀行教外の正宗に如かず。珠云く、「砂石なり、言教に比す、言教は妙道を談ず、終に悟道の功なし。」

④作一句子。珠云く、「世尊の數語を以て、但だ一句子となし」と抑下す。

⑤擊拂子。東嶺曰く、「仁者は之

を見て仁と曰ひ、智者は之を見て智と曰ふと、眞見露出のところ。」

①長水。名は子璋、彌嚴宗の人なり、佛祖統記の立教志に此の兼并に師の傳を載す。

②清淨本然。楞嚴の四富樓那の問なり。

③擊拂子。東嶺云く、「これは瑯琊の語じや、いやさあ、一回擧著すれば、一回新なり、何に依つて長水は悟つたぞ。」

④百昌。昌は盛なり、百物昌然の謂なり、或人曰く、「百昌は萬物なり、敷茂はわかばもえいでてなり。」

⑤高人。學者なり。

⑥深探淺究。淺深疎密、商量體究す、「骨折り淵源を探り、淺究は不意に存じもよらぬをいふ」と珠の説なり。

⑦噴地一發。噴は鋪意普圓の二切、鼻を鼓す、「くしゃみ」こ

洞山佛光なし、韓信朝に臨む底。

結夏小參、西天の那蘭陀寺、曾て禁足せず、法令森嚴なり。

給孤園中、期限を立てず、得道の者多し。故に我が大覺世尊、眞の天眼、宿命通を具して、東土の兒孫、戒律受けざれば、心邪徑に遊ぶを觀はして、故に制を下して以て之を禁ず。其の九十日の内をして、速に道果を證せしむ。山僧聞き得て、覺えず。寒毛卓立す、敢て預め聞かず、何が故ぞ。拂子を擧げて、但だ鶏狗の戒を持して、祖師禪を學びず。

復た擧す、良遂座主、麻谷和尚に參す、來るを一見して、便ち鋤を携へて菜園に入る、略相顧みず、復た參する次で、谷便ち門を閉却す。遂門を扣く、谷云く、「誰ぞ。」遂應聲未だ絶えざ

るに、豁然大悟す。云く、「和尚、良遂を護すること莫くんば好し、若し來つて和尚に見えんば、幾ど經論に一生を誤却せられん。」後來衆に告て云く、「良遂が知處、諸人知らず、諸人の知處、良遂總に知ると。」頷して云く、「諸人知處良遂知、良遂知處人不知、因思、積雨、花狼藉、空寫愁腸、說向誰。」

次の日上堂、舉一明三、目機鋒兩、什麼としてか身を終るまで得ざる。雲山に放浪として、適もなく莫もなし。什麼としてか年を経て泰定する。且つ如來の制中、那一等の上科を合取してか、後人の法式とせん。

上堂、丁一卓二、未だ關を度ることを解せず、一と坐せしめ七と走らしむ、峯樓に近

れ大悟の端的なり、猶ほ因地と言ふがごとし、「はつ」と言ふ聲なり。

吸盡百川。珠云く、「是れ驚噴地一發したおかげで。」

燻盡須彌。須彌の如く、妄想煩惱。

豆。一豆の大きき火を用ひず。消ば盡なり、用ひ盡すの謂ひ豆は些子、大悟發明するときは則ち此の如く不思議妙用現前するなり。

辨來山。その根元は松は肥え、竹は瘦せ、皆自然任運故に、これが證據なり。

七事隨身。甲士隨身の兵具、都て七事あり、以て英靈底の機鋒兼ね備ふるに喩ふ、法師は三衣、鉢、香合、拂子、尼師壇紙被、浴具、碧岩十五則の評にも七事を具して身に隨ふとあり。

未是。珠云く、「我は云ふ、未

洞山佛無光。岩頭の語、代別の尾に詳なり、主位客位共に許さぬ。珠云く、「此の句は今岩頭の言ふ所と意別なり、今佛光なしとは、都て知見を絶す、虛堂面前に到つて一點使ひ得ずとなり。」

韓信臨朝。漢呂后人の韓信、反せんと欲すると告ぐるに因つて、后は蕭相國と許り謀りて、信に謂ふて曰く、「病といへども強ひて入つて賀すべし」と、信朝に臨む、呂后、武士をして信を縛して、之を長樂の鐘室に斬らしむ、云云。此の落句、主賓共に失するの義、上は主を失す、下は賓を失す、命を表する故に、方語に將身就死地。

結夏。珠云く、「許多の工夫親切あり。」

那蘭陀寺。唐には旋無厭とい

法がからになつて、正道を知らずして邪道に入る、故に眼を切つて禁足す。

寒毛卓立。毛が立つたり、教師を驚るを恐る。

不敢預聞。大勢と耳を同じらし容易にはきかぬなり。

鶏狗戒。少しの戒律なり、もこれ外道の戒で、非因計因なり、今は實は聲聞の二百五十戒にして、鶏狗の戒に非ず、但且く一心金剛寶戒より、身日七支の戒律を抑下して、以て鶏狗戒といふ、所謂見惑十使の中の戒禁取見なり、今祖師禪を學びずして九句の制禁を持して、當に文に比擬すべし、故に敢て預め聞かぬとなり。珠云く、「彼の輩、徒に事相の戒律を持して、禁足安居して聲聞の四果を證せんことを求め、祖師の禪を學ばず誠に之を聞いて怖畏すべし。」

三四九

國譯虛堂和尚語錄 卷九

ふ、周圍四十八里、九寺一門。

不曾禁足。在世には種々法令もなかつたれども、律行正修なり。

給孤園中。舍衛國に一の長者あり、須達拏と名づく、常に孤獨の貧に施す、故に給孤獨長者といふ云云。

不立期限。辨遺純一なるが故に。

天眼通。能く六道の衆生、死レ此生レ彼を見て、及び一切世間種種の形色を見る。

宿命通。能く過去一世二世百千萬世より、乃至八萬大劫宿命、及び所行の事を知り、亦能く六道の衆生、所有の宿命及び所行の事を知る、外魔も亦五通を得る故なり、世尊の在世には法令を立す、秘密なれどもじや。

心游邪經。世尊の滅後には佛

① 良座座主。經論家の大宗匠。
 ② 復參次。侍僧の人じや、是れは子細あらうと眼を付けた故、飯つて又參ず。
 ③ 良座知處。珠云く、「是れ魚化レ龍不レ改レ鱗じや、通身紅爛、やきほてらかしたは、麻谷の作す故じや。」
 ④ 諸人不知。珠云く、「佛祖所説を全體提起。」
 ⑤ 須。虛堂和尚が頌なり。
 ⑥ 積雨。麻谷にたとへる、心もなき積日の雨。
 ⑦ 花。良座にたとへる。
 ⑧ 空寫懸隔。珠云く、「此のあんばいでは誰と手を把つてほろりと涙をこぼさう、さなきだに春の名残り惜しきに、今のあはれは誰に話して知らさうぞ、今譯法衰へ、此のあはれを知り手がなないと、是れは何處のあはれか。」龍溪云く、「一二の句は文を撰す、三四の句は意を釋す、言ふ意は良座が知處、諸人

知らず、故に人に説向すべきなしとなり。
 ⑨ 舉一明三。齊一變して魯に到らんの境界、一をきいて三を悟るじや、鶴林は是れ一等聰明世智の部屬、これ只だ利を好み、智に傲る、大死一回を知らず、死に到るも祖師門下の事を徹了すること能はずと呵す。
 ⑩ 目機録兩。目機は目分量、一日にらんたら、直に何斤あると知る、録は兩の二十四分の一の重量。
 ⑪ 浪放雲山。魯一變して道に到らんの境界じや、「ありたまふ」を放浪といふ、逸遊自意にして檢束なきなり、鶴林は是れ一等の安閑無事を死守する底の流類なり、一生楷磨淨盡して、死に至るも祖師門下の事を知らずと呵し玉ふ。
 ⑫ 無過無莫。論語の里仁にも「君子の天下に於けるや、適もなく莫もなし」と、適は可なり莫は不可なり、「すききらい」なり取なく含な

しなり。
 ⑬ 爲什麼。無想袋、八識田、驢年に至つてもせわやくけれどまやまぬ。
 ⑭ 經年泰定。珠云く、「如石壓草、た々無事是れ貴人を守つて居るをいふ。言ふ意は年々安居を経て、心始めて泰定すとなり、上の所謂頓脱は終に得ざるなり、「やすらかにしてをる」じや。
 ⑮ 那一等上科。律文に合するなり、如上の一人をば此の外にじや。
 ⑯ 爲後人法式。皆愚を守るの謂なり。
 ⑰ 丁一卓二。「一」を丁て二を卓つ」とをますもあり、又算用の語、確定の義なり、建立の義なり、この解前の續輯に出づ、これは偏の位。
 ⑱ 未解度圓。實家或は建立といふけれども實は向上の圓を透過したてはない、これは抑下なり。
 ⑳ 坐一定七。坐は正位、走は驅りの

きに似たり。① 會得せば炎炎たる火聚も、清涼の寶所に入るが如く、會せざる時は則ち清涼の寶所も、火聚刀山に坐するが如し。② 須らく顔子が坐忘するが如くにして、始めて做工夫の分あることを要す。
 ③ 上堂、舉す。④ 朝奉。郭功甫、五祖の演和尚を請じて上堂せしむ。朝奉先づ法座前に於て、焼香して云く、「此の一瓣の香、爐中に熱向して、光明雲と爲して、徧く法界に満てしめて、我が堂頭師兄禪師に供養す。伏して願はくは、此の雲中、方廣座の上に於て、而門を擊開し、先師の形相を放出して、他の諸人の與に描遷せしめんことを、何を以てか此の如くなる。」
 ⑤ 白雲巖畔舊相逢、往日今朝事不同。夜靜水寒魚不食、一爐香散白蓮峯。祖乃

ける八識坐在して、のこり七識を忘却して居るは本色の衲僧に似た。
 ① 似近峯樓。峯樓は孟子の告子下に「峯樓より高からしむべし」とあり、註に「山の銳嶺なり」とあり、是れ未だ度を解すべからず、主家或云ふ、掃蕩と峯は山のするどき高き云ふ、こゝが佛身向上と云つて似たばかりで、眞實向上でない、畢竟躓過することのならぬを云ふ。
 ② 會得炎炎。上作の處を見破りてあらうならばなり、炎炎は萬本には炎天と作す。
 ③ 寶所。前に見ゆ。
 ④ 顔子坐忘。莊子の大宗師の篇に「顔回が曰く、回益せり、仲尼の曰く、何の謂ぞや、曰く、仁義を忘れたり、曰く、可なり、猶ほ未だしなり、曰く、日復た見えて曰く、回益せり

曰く、何の謂ぞや、曰く、回禮樂を忘れたり、曰く、可なり、猶ほ未だし、他日復た見えて曰く、回益せり、曰く、何の謂ぞや、曰く、回坐忘せり、仲尼見然として曰く、何をか坐忘と謂ふ、顔回が曰く、技藝を離(やぶ)る、聰明を黜して刑を離れ知を去けて大通に回する、此れを坐忘と謂ふ。」註に、「大通は大道なり、坐忘は知見都絶を謂ふなり。」
 ⑤ 二卓二、坐一定七のきれもない。
 ⑥ 做工夫分。所得の分を云ふ。
 ⑦ 朝奉。大夫は宋の官名、唐の朝議大夫を改めて、朝奉大夫とす。
 ⑧ 郭功甫。提刑敦正、字は功甫、淨空居士と號す、白雲巖に嗣ぐ、李白の後身なりといふ、母李白を夢みて生る、詩才あり宋史列傳二百三に載す。

ち云く、**巖**薩但多鉢羅野、**恁**麼も恁麼も、**幾**度白雲溪上望、**黃**梅花向雪中開、**不**恁麼不恁麼、**嫩**柳條金線、且要應時來、見すや、**龐**居士、**馬**大師に問うて云く、「**萬**法と侶たらざるもの、是れ什麼人ぞ。」**大**師云く、「**汝**が一口に**西**江水を吸盡せんを待つて、即ち**汝**に向つて道はんと。」**大**衆、一口吸盡**西**江水、**萬**丈深潭窮到底、**徠**約不**是**趙州橋、**明**月清風安可比、**拈**師じて云く、「**者**般の説話、甚の捉摸の處かあらん、盡く無依無欲の中より、此の三昧を流出す。或者は道ふ、**基**は敵手に逢ひ、**琴**は知音に遇ふと、誰か便ち與麼に道はざらん。」**虛**堂が骨頭を換却せんことを待つて、却つて偏に者の一轉語を許さん。

① 麁香云。珠云く、「是れが先づ虎踞龍蟠の中で、から云へるものか。」
 ② 爲光明雲。増一阿含經に云く「佛香を言ふて佛使と爲るが故に、須らく麁香して通く十方を請ず、戒香、定香、解脫香、光明雲臺世界に遍し、十方無量の佛に供養して、見聞普薫して寂滅を證す。」
 ③ 雲頭師見。五祖演禪師。
 ④ 方廣座上。華嚴善慶場の金剛座なり、光明雲臺、大方廣佛座。
 ⑤ 擊開面門。擊は劈の誤乎、白雲禪和尚の面門を劈破す、
 ⑥ 先師形影。白雲の眞面目を、
 ⑦ 與他諸人措意。隨類各得解、誌公指を以て面門を劈破して十二面觀音の相を出し、或は慈戒は威、僧懸竟に寫すこと能はざるの事を用ふ。
 ⑧ 白雲往日。舊は互の法友じゃ。

三五二
 相逢は心法を傳ふるなり。往日は白雲に在りて、今朝は五祖山の長老なり、一二の句は同參の好みを述ぶ、言うは往昔舒州白雲山禪和尚の會裡に在つて、同參相見の時と、今日蘇州五祖山に來つて、事事同じからず、當に知るべし、人は便ち別ならざることを。
 ⑨ 夜靜一爐。珠云く、「五祖の宗旨は高い故どこへ出てもはづかしいことはなけれども、惜しい事には知音がない、魚不食で、東山下の風味、中に知り手がな、魚は學者に、只だ香を焚いて追慕の情をのぶるまでなりと、三四の句は單に演公の要津を把定して、壁立萬仞なる故に、學者溘泊し難きことを嘆ず、言うは學者溘泊し難き故に、香氣徒らに白蓮峰に散ずるのみ。五祖山頂に池あり、蓮峰と名づく。

① 祖乃云。「こゝに上堂の二字を入れてみるべし」と珠は云へり。
 ② 巖薩但多鉢羅野。無所得の師子吼、義解すべからず、一道の眞言無義味なり。
 ③ 恁麼恁麼。珠云く、「一線道を放つ、五祖の自己禪和尚の形相を直下にとり出す、自ら稱するなり。」
 ④ 幾度白雲。珠云く、「端和上半身を現す。」
 ⑤ 黃梅花。黃梅は五祖山、此の間、寒酸寂寞の意を表す。
 ⑥ 不恁麼不。珠云く、「衆流截斷」これ他を稱す、郭功甫の境界大把握。
 ⑦ 嫩柳且要。嫩柳等は功甫の温和を表す、故に下に云ふ、來らんと要すと。珠云く、「把住の處、放行あり、下の句は端和上の應時來をいふ。已上は短長の句法韻を押す。」
 ⑧ 龐居士。居士の請の故に、此の縁を擧ぐ、これは郭功甫に比す。
 ⑨ 大衆。喚起して偈を述ぶ。

① 一口。萬丈。佛界の波瀾、一戒めに意してじや、大悟底じや、これは竟を釋す、是れ龐老の悟入深なきを以て郭功甫に比す。
 ② 徠約不**是**。徠約は當に略約に作るべし、獨木橋なり。
 ③ 明月清風。三四の句は五祖の境を述ぶ、言ふ意は我が境の略約は、趙州の石橋に比すべからず、夫れ趙州の橋は驢を渡し馬を渡す、我が略約は明月を渡し清風を渡す、其の尊卑比すべからずとなり、月明清風を以て功甫に比す、風標愛しつべし。
 ④ 捉摸處。變幻自在、捉摸すべからず、とりつきてかゝりなし。
 ⑤ 無依無欲。無量義處三昧は此の三昧則ち語言三昧を流出す、巖薩但多と云ふよりこのかた。
 ⑥ 榮達敬乎。五祖と功甫とじや。知音底と見ること、何ぞ以て誰からん乎。
 ⑦ 虛堂骨頭。重ねて生を轉じ來るの

義なり。此の生にはなされぬ程に他日異時なさんと。
 ⑧ 一轉語。一語を撥轉すること、俗に一言といふが如し。
 ⑨ 結集法藏。法藏は修多羅なり、僧祇律に(一部四十卷)、「如來滅後、鉢羅宮に於て三座の部主を立て結んで三藏となす、阿難は經藏を誦出し(定)、迦葉は論藏を誦出し(惠)、優波離は律藏を誦出し(戒)。」又智度論に「中夏定居に至つて、初十五日に迦葉千の羅漢とともに、王舍城に在りて、三藏を結集す。」
 ⑩ 先聖洪範。洪は大なり、範は法なり、書經の洪範一篇の如く、首尾都べて是れ皇極の上に歸し去る、佛も亦諸法の王となる故にいふ。
 ⑪ 慧命流通。末世の慧命を起さんため。
 ⑫ 在情量頓脫。情量は冥窟をいふ、頓悟解脫、徹底本來を見ぬいて。
 ⑬ 現大人相。諸佛の萬德具足と、即

解夏小參、^①「法藏を結集し、證を取り期を剋む、此は是れ^②先聖の洪範、法藏を結集するは、務めて^③慧命の流通せんことを要す、證を取り期を剋むるは、貴ぶらくは^④情量の頓脱するに在り。徑山今夏、一衆^⑤大人の相を現す、各相知らず、主賓彼此安を偷む、甚の^⑥明かに知つて故に犯すとか説かん。言薦賞勞に逗到するに及んで、直に是れ口を啓く處なし。且く道へ、是れ^⑦何等の叢林ぞ、主丈を卓して、^⑧韓幹が馬は芳艸の渡に嘶ひ、戴嵩が牛は綠楊の陰に臥す。」
 復た擧す、黃檗因に臨濟、山に上つて問訊す、住ること數日にして乃ち辭す。槩云く、「汝夏を破り來る、何ぞ夏を終へずして去る。」濟云く、「暫く來つて問訊す。」槩便ち打つて、其をして

今すつきとかはらぬ、又我に在る三昧、我れも也た知らず。
 ①主賓彼此。主賓は東序西序、偷安閑無事をこのむ、佛の法財に心をも掛けず、四弘願力菩薩の威儀と云ふこともしらぬ。
 ②明知故犯。徒に隠々たるのみ皆が安閑を好むからだ、只た骨を折れと。
 ③何等叢林。叢林に四種あり。
 ④韓幹馬芳。各々自得の境界じや、韓幹は長安の人、唐天寶の初、入つて供奉となる、戴嵩も唐時代の人、みな稱妙の漢、全體本分かと或る抄に見ゆ。
 ⑤疑其事。珠云く、「やあら、けしからぬ、打ちやうなとしよぼく、葦方に再び回るで、その夏を終る。」
 ⑥懸鼓待槌。向ひよりどでんと

打つてくるのを待つて居たなら。
 ⑦懸鼓待槌。相應の義、ごたまぜ、めつたなことをしても大事じや、かたちのみがたきを云ふ、黃檗のけんきを得て、飛びぬけぬを云ふ。
 ⑧將謂不然。當初將に謂へり、然らずと。忠曰く、不然は是くの如くならざるなり、夏を破つて來た端的、今は則ち果然として却回して夏を終ふる端的、阿呵々。」或抄に「からはあるまいと思ふたが、はたしてもどる」となり。
 ⑨秋風曉露。一一現成公案じや秋雨であらひながす。
 ⑩祖師門下。已上は古詩の體。
 ⑪金口木舌。異相僧の漢じや箭筈の眉納僧じや、論語の八份に「天將に天子を以て木鐸と爲んとす」と、註に「木鐸は金口木舌、政教を施すとき、

去らしむ。濟行くこと數里にして、^①其の事を疑ふて、再ぶ回つて夏を終ふ。師拈じて云く、「臨濟當時、若し一たび去つて回らずして、黃檗をして鼓を懸けて槌を待たしめば、方に些の禿僧の氣息あらん。端なく再び回つて夏を終ふ、舊に依つて^②鹽醬裏に落つ。且く道へ、諸訛什麼の處にか在る。」拂子を擧つて、^③將に謂へり然らずと、今は則ち果して然り。」次の日上堂、「^④秋風曉露を吹き、秋雨秋炎を送る。祖師門下の客、處として咨參せずといふことなし。前程忽ち箇の^⑤金口木舌の漢に撞著せば又作麼生。」主丈を卓して、「且喜するらくは^⑥大事了畢。」
 上堂、擧す、^⑦五祖戒和尚、僧に問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「東京。」祖云く、「曾て天子を見るや。」僧云く、「常年一度、^⑧金明池に出づ。」祖云く、「有禮恕すべし、^⑨無禮容し難し出で去れ。」師拈じて云く、「者の僧若し親しく^⑩京師より來らば、也た恐らくは他を護すること得じ。」
 中秋、^⑪鏡空西堂の^⑫三塔に赴くを送る上堂、「^⑬門古道に當り塔寒江を帶ぶ、須ひす^⑭手を招いで自ら來ることを、^⑮誰か敢て横趨して去らん景徳^⑯堂上鏡空禪師は、^⑰前輩の典刑を蘊み、^⑱尊宿の禮貌あり。」

振つて以て衆を警むところの者なり」とあり。
 ①大事了畢。一生參學の事畢ると、修行もおしまひじやと、且喜は「まあそれで」といふ意、許すの意を含む。
 ②五祖戒和尚。雙泉明覺師寬に嗣ぐ、雲門三世。
 ③金明池。五代の梁は此に都す號して東京と爲す、晉漢周皆東京開封府と爲す、宋之に因る、同處の金明池は府城の西に在り、周の世宗のとき鑿る。
 ④常年。毎年なり。
 ⑤無禮難容。「眞箇の天子に相見する底の手脚なきなり、これは雲門宗の一事あり」と古抄にいへり、天子に見ゆるときは有禮の者は罪ありとも、亦恕免すべし、無禮の者は罪なしといへども、亦允容し難し。
 ⑥京師。其處をか京師となす、

① 朝命を榮膺し、② 宗猷を光闡す、首を、③ 龍峯に聚む、④ 攀感なかるべけんや、⑤ 直に得たり、⑥ 寒山掌を拆ち拾得歡呼することぞ、何ぞや、⑦ 主丈を卓して、⑧ 此夜一輪滿、清光何處無し。

上堂、擧す、雪峯、洞山に在つて飯頭と作る、米を、陶る次で、山問うて云く、爲復た是れ沙を淘つて米を去るか、爲復た是れ米を淘つて沙を去るか。峯云く、「沙米一齊に去る。」山云く、「大衆箇の什麼をか喫せん。」峯、盆子を覆却す、山云く、「子が、緣法合に徳山に在るべし。」師拈じて云く、「季威、壺丘子林を相す、變に隨つて分たす、劔に仗つて之を逐ふ洞山謂く、「雪峯の縁徳山に在り」と、知らず是れ何の相法ぞ。峯後に果して徳山に嗣ぐ、此れ

他の天子を護せり、此の無禮の處、他とはこの僧を指す、此らばとは是れほど無調法ではあるまいとなり。
② 饒空西堂。西堂は「せいたう」と讀むべし、徑山前録に首座に請す。
③ 三塔。雲居山に在る處なり、西堂が三塔に請ぜられて赴くを送るなり、三塔の故事、木叢書卷二、林間錄上の六頁に出づ。
④ 門當古道。三塔の壇致、此の如し。
⑤ 不須招手。學者が得走手を招がざれども、皆來服す、これは徳山を云ふ、やれどざれ、と、ちよと招くと、來るやうな住持は不用じやと。
⑥ 龍政横趨。横趨は高亭を云ふ、饒空の徳を慕ひ來るもの。依附參隨して、高亭の扇招を見つて趨き去るが如くならず。

① 景徳。恐らくは三塔の寺號なり、三塔は山號。
② 堂上。堂頭なり、方丈を言ふ、前聖典刑。祖々傳來底、典は常、刑は法なり。
③ 榮膺朝命。古時宿の禮容あり、福智の二者兼ね備る故、榮膺は天子より請待される、朝命ははれなる詔に當る、應通して膺と作す、詔命に膺り入寺する故に榮と稱す。
④ 光闡宗猷。光は大、闡は開なり、智徳すぐれてある故。
⑤ 龍峰。徑山なり。
⑥ 可無攀感。交夢の情厚きなり、なごりをしくなつて、したい望み心に感ぜねばならぬ。
⑦ 直得。さぞうれしからう、已下は月に託す。
⑧ 寒山拆掌。中秋なればなり、拆は音策、又擊なり。二老は賞月の人、折掌等は感徳入寺を賀す。

又是の季威が徒に過ぎたる歎。」

開爐上堂、擧す、趙州の、火爐頭無賓主の話多年人の提撥するなしといふを擧す。徑山火爐頭無賓主の話又作麼生。毎日只管理論して、粥鍋を範し浴室を築き、法鼓を鞭り、江船を造る、且つ與麼に過ぐ、何の暇あつてか火爐頭の話を擧せん。來春又僧堂を架し、行堂を移し、行者の名次を立てんと要す。與麼の時節、方に、門を閉ちて作活すべし。達磨大師忌日の拈香、東震旦に、大乘の根器あることを觀て、海を逾え、漢を越えて來る。遠く梁朝の、丹闕に赴く、一言契合して春の如し。衣を卷いて、北に面ひ、葦を折つて津を問ふ、信に知んぬ、桂識人を誣ひざることを、嚴諱を追思して、黍を炊き芹を鱸に

① 此夜一輪滿。浦々島々、此の人の徳光いたらすと云ふ處なし、と是れは亦月に託して新命の徳輝を表す、法界に周遍することを。
② 陶。洗ふなり。
③ 一齊。一度に去る。
④ 覆却盆子。米の入れてある盆打ちあげた。
⑤ 子縁。山の綿蜜の、宗に違はぬ。
⑥ 緣法。嗣法の緣。
⑦ 季威。列子の黃帝駕に出づ、前の頌古に出づ。
⑧ 壺丘子林。鄭人道徳甚だ優なり、列子の師なり。
⑨ 隨變不分。事は頌古に見ゆ、壺丘子が相貌、種々に轉變する故に、分辨すること能はず故に、以つて季威を混ふと、仗は以の心なり。
⑩ 火爐頭無。禪門類聚の十四、水火門に出づ、趙州衆に示し

て云く、「老僧三十年前、南方に在りて火爐頭に箇の無賓主の話あり、直に如今に至りて人の擧著するなし」と。
① 毎日只管。普請最中なれば。
② 範粥鍋。粥鍋を摸鑄するなど珠云く、「火きなのを鑄させるつもり、理論する所の事を謂ふ、範は範と通ず、「いかた」規模を範と曰ふ、竹を以てするを範といふ、土は型、金は鋳、木は模と云ふ。
③ 輓法鼓。鼓皮を履んで鼓を張る者なり。
④ 造江船。徑山は江に近き故に江を度りて事を辨ずるの船を造る、杭州は錢塘江浙江等に在り、以て船にて往來すべき故に。
⑤ 行堂。行堂は賓單なり、珠云く、「行者の居る所の堂、其の基礎を別處に移すなり。行者。數種あり、所謂方丈、

す。流水の希聲絃斷えんと欲す、知らず底を將つてか芳塵を續がん。

上堂、舉す、風穴、衆に示して云く、「若し一塵を立すれば、家國興盛し、野老望望す、一塵を立せざれば家國喪亡し、野老安帖す。」師拈じて云く、「風穴、只だ箇の相似底を要す、殊に知らず、天は東南に傾き、地は西北に陥ることを會得せば日に、義皇上の人と大槐安國に游戲せん、其の間、得失榮辱、自ら能く之を知らん。」主丈を卓して云く、「參」上堂、「平生好んで禪病を攻む、知らず、病は是れ道の源なることを、道源の端的を知らんと要せば、直に須らく、陸地に船を行るべし。」因つて思ふ、大唐の裴相國、圓覺經の「序」を作る、一字一義、人天を發動することを。

あり。
①若立一塵。佛頂國師云く、「一塵を建立する時は法王の家國興盛にして、佛法の惠命も相絶するなり、立一塵一時は、是を論じ、非を論じ、邪を辨じ。正を辨じ、悟を立し、迷を立す、有問有答、爲人の手段をたれて、隨化門をひらき、或は泥泥滯水して、中下の根までも漏さず」と。或抄に「建立門も逆順自在實主も立す。」
②野老望望。野老は枯禪を守るやからじや、正位を守る輩はきらう、眉を擡めて迫痛するなり、野老は本分の衲僧を指す。
③不立一塵。佛頂國師云く、「一言一句説くべきこともなし、是非得失、邪正迷悟、打つて一塊となして放下し、只だ山は是れ山、水は是れ水と、現成一片の風光の中に着衣喫飯、行住坐臥す、此の處を至極と見て住なすれば法王の家國喪亡して、佛の惠命斷絶するなり、さ

子江津。

車司、堂司、客頭（かてう）供頭（くちう）、等の行者（あんじや）なり。
①與慶時節。正當與慶、如上の數事を了畢するの後、此れを與慶の時節と曰ふ。
②閉門作活。珠云く、「外邊作務畢る故に、安閑無事なり、天魔外道も窺ひ難き手段、これ即ち無賓主の話をとり用す、衲僧作活計、佛法を商量す。」
③大乘根器。二祖慧可大師。
④漢。流沙なり、之を望むに漢然なり。
⑤丹闕。宮門なり。
⑥一言契合。此れ祖師對御の和氣をいふ、體合の謂に非ず、武帝の不契一言だ、たて食ふ虫もすぎし。武帝と遺腹とは不知音なり、虛堂は不知の處、却て知音となり。
⑦北面。北の方魏に向ひ。
⑧折案問津。魏に赴くの體、楊

てよんで一塵となすに、大いに旨趣あり、直に諱を犯さず、是れも亦釣頭に互繫を釣らんとするの意あり、大道開通のものは、處に師家の擧着するをきいて、首下に懸を知る、更に疑せず、學語の者は、はや一塵といふ、塵の字に迷ふて、落處踏過するなり、又衲僧家、悟證の迷を忘せざれば猶ほ滯る處ありて自在ならず、道の本分の一着子を一塵と云ひくだす、大眼目を開かざれば理障の惑を免れがたし」と。珠云く、「把住するときは柳毬を失ふ底。」
⑨野老安帖。帖は託協切、靜なり、安なり。又貼に作る。珠云く、「大地寸土なき時をうれしがる。」
⑩要箇相似底。眞箇自在底の消息にあらざるなり。珠云く、「にせものがすきだ、佛に似たさうでもない眼に似たさうでない。」
⑪天傾東西。此れ則ち逆順自在の境界なり、なほこれ相似底じやとな

三

柱。祖庭事苑の議の辨に、「般若多羅の偈に、路行踏水忽逢羊、獨自棲棲踏渡江。目下可憐雙象馬、二株嫩柱久昌昌」と、此れ遺慶西來始終の事を議す、この註は雲門禪師がする註あり、畧之。
①飲黍論芹。黍は細く肉を切るなり、今は細に芹を切つて鱸の如くするなり。
②流水希聲。古句に白雲爲蓋流水爲琴、これは遺慶西來の一曲で、嘆息の辭、雅曲も衰へはてた處、見性の法門も衰へはてたとなり。
③將底勞塵。痛嘆するなり、連勝さんのおとづき、とんとなしじや、向上の一大事をばじや。
④風穴示衆。或抄に順逆自在の體を云ふ、碧岩六十一則にも

り。
①義皇上人。義皇は伏魔を謂ふなり、義皇の人とは伏魔己前の人なり、蓋し太古を憶ふなりと、上世の人の意なり。
②大槐安國。この故事は淳于棼が故事、醉夢に槐安國に遊ぶ云云。東嶺云く、「如上に能く透徹したらば如幻三昧游戲せん。」
③得失榮辱。世間の差別の境界、遊戲自在三昧、他人の知る所にあらず。
④平生好攻。この虛堂は常々我人衆生壽命の四相の禪に病を治平するとなり、これは圓覺の普覺章にいへり、又作止任滅の四病等を説き玉ふ。
⑤病是道源。別に異體あるにあらず。
⑥陸地行船。忠曰く、「病即ち是れ道なりと看破するなり。」珠云く、「邪解は不可なり、此の入路は情解の及ぶところに非ず、大力量の人に

思ふ 本朝の温國公、解禪の頌六篇を製す、一褒一貶、口業昭然たることを、伊自ら夙種を絶つにはあらず、佛も亦無縁を度せず。

冬夜小參、僧問ふ、瀉山、仰山に問ふ、「仲冬嚴寒年の事、暑運推し移る事若何」仰山又手近前して立つ。「師云く、父羊を攘めば子之を證す。」僧云く、「瀉山云く、情に知んぬ、子、者の話に答へ得ざることを」と。「師云く、「一家の父子和氣春の如し。」僧云く、「香嚴入り来る、瀉、前話を舉す、嚴云く、「某甲偏に者の話に答へ得ん。」瀉山復た舉す、嚴も亦又手近前して立つ、此の意如何。」師云く、「離婁行く處浪滔天。」僧云く、「瀉云く、頼に、寂子が會せざるに遇ふと。」師云く、「手背終に外に向つて曲らず。」僧云く、「今夜忽ち箇の漢あつて出で來つて、和

あらずんばじや。
因思。病即ち道源と會した證據に引くなり。
大唐聖相國。名は休、字は公美、黃髮に嗣ぐ、又圭峰禪師の著すところの禪源諸詮集と、原人論及び圓覺經疏注と法界觀とに皆序を作る。
本朝温國公。司馬光、字は君實宋の元祐の初、相に拜せらる年六十八にして薨す、大師を贈る、温國公に封ず、文正と諡す、涑水先生と號す。
解禪頌六篇。この偈禪林寶訓に出づ、畧之。
一褒一貶。「司馬光が傷は衰に似たり貶に似たり、口業を招くこと明なり」と球云へり。
佛亦無縁。これまで押韻。球云く、「佛はほめてもそしつても、夫れを縁として濟度したまふ、口業もまた因縁たるが

三六〇
故に、大乘の法門はそしつて罪を得ても、又菩提の縁となる。「夙種は善根、伊れは温國公をいふ。
父攘羊子。論語の子路篇に出づ、家醜外に向つて揚ぐじや、瀉山老賊であるゆえに、仰山も賊手段あり。
離婁行處。香嚴の機智あるを抑するなり、玉をとりえぬとなり。
寂子不會。仰山を許可するなり。
手背終外。理の當然なり、はてさてさう云はないで、なんとせう、此の言より外にてでたなし。
與麼答他。或解には他に答ふと點すべし、備聽く麼と一觀なりと、さうさうなり、八字は打開したるなり、全體が虛堂體なり。
畢竟作麼生答。僧不會にして

尚に仲冬嚴寒年の事、暑運推し移る事若何と問はゞ、作麼生か他に答へん。「師云く、「老僧也。」與麼に他に答へん。「僧云く、「畢竟作麼生か答へん。」師云く、「劍去つて久し矣。」僧禮拜す。
師乃ち云く、「山僧長老の名を得てより、已に四十年、四十年中に於て、十箇の院子に住す、其の間今を論じ古を考へ、東を説き西を語る、盡く是れ 門頭、戸底の設なり。其の緊切の處、曾て一字子を道著し得ず、今則ち時 亞歲に臨み、節書雲に屆る、反つて 四十年前未だ曾て口を啓かざる底の一句子の分曉なるに如かず、且く作麼生か是れ四十年前、未だ曾て口を啓かざる底の一句子ぞ。」主丈を卓して、「要且つ是れ這の一句子にあらず。」
復た舉す、瀉山一日臥す次で、仰山來る、瀉乃ち面を轉じて壁に向つて臥す、仰云く、「某甲は 是れ和尚の弟子、形迹を用ひざれ。」瀉起くる勢を作す、仰 便ち出づ。瀉召して云く、「寂子。」仰 仰る、瀉云く、「老僧が箇の夢を説くことを聽け。」仰 頭を低れて聽く勢を作す、瀉云く、「我が爲に 原あはせ看ん。」仰 一盆の水、一條の手巾を取る。瀉面を洗

じや。
禮拜。或解には會したつて、禮拜するか、會せずして禮拜するか。
十箇院子。與聖、報恩、顯孝、瑞岩、延福、寶林、育王、柏嵩、淨慈、徑山、子は助語なり。
門頭戸底。堂奥室内底の施設に非ず、さし口なり。
不會道者。云ひあてられぬ。
亞歲。冬至の稱、賀を受くを以て、因つて小會あり、其の儀歲朝に亞げり、沈約が宋書禮志にいづ。
書雲。雲物氣色災變なり、素より妖祥を察して、逆め之が備をなす、冬至の異名を書雲令辰といふ。
四十年前。未だ長老とならぬとき。
是這一句子。第一波羅察は即ち第一に非ずの意なり、口を

却して纒わづかに坐すす、香きやう嚴げん入いり來きたる。瀉あ云いく、「我われれ適てき來らい寂じやく子しと、一いち上じやうの神じん通つうを作つくす、小せう小せうに同どうじからず、嚴げん云いく、「某その甲けつ、下か面めんに在あつて、了りやう了りやうとして知ち得とくす。」瀉あ云いく、「子なん試せに道いへ看みん。」香きやう嚴げん乃すなはち、一いち椀わんの茶ちやを點てんじ來きたる、瀉あ云いく、「二に子しが智ち慧ゑ神じん通つう、鷲じゆ子し目め連れんに過すぎたり」と。師し拈ねんじて云いく、「瀉あ山さんの源げん脈みやく、五ご代だいの時ときに到いたつて浸ひたり微びなり、且しかく道いへ、甚たに因よつてか此この如ごとくなる。」主しゆ丈ぢやうを卓たくして、「過と目め連れん鷲じゆ子しに在あり。」

次つぎの日にち上じやう堂たう、一いち氣き潛せんに回かへつて百ひやく昌じやう崩ほう動どうす、君きん子の道みち長ぢやうす兮や、露ろう柱ちゆう咨し參さんす、小せう人じんの道みち消せうす兮や、燈とう籠ろう舞まひを作つくす。義ぎ豊ほう年ねんより出いでて道みち、太たい古こに復ふす、國こく師し愷かい喜きして如い何かと問とふ。冬とう至じ寒かん食しやく一いち百ひやく五ご。

開くことならぬ體のもの、これが眞箇のもの。
 ① 瀉山一日臥次、東嶺云く、「此の則は瀉仰宗の水も風ももらぬ綿密な處がある」と。
 ② 是和尚弟子、珠云く、「居たり起きたり、お氣をつかはしやるな、お心やすうなさりませ。」色相を以に勘檢すべからずじや。
 ③ 仰便出。おやすみなさる、じやまになると思ふてか。
 ④ 仰回。はいといふてあとがへる。
 ⑤ 老僧倚夢。前來の途微をかへて商量。
 ⑥ 原看。夢を推し原ぬるなり。
 ⑦ 一上。一回の義。
 ⑧ 不同小小。小果小神通を揀ぶ。
 ⑨ 在下面。下座則ち次の間で、委細承つた。
 ⑩ 點一椀茶。まあ御茶でも召し

三六二
 上れと。
 ① 源脈。佛法の源流。
 ② 五代。唐と宋との間に五代僭偽な國あり、瀉仰の化、唐の末にをこなはれて、五世にして承を失す。
 ③ 瀉山祐一仰山寂一南塔涌一芭蕉清一芭蕉徹一承天確
 ④ 過在日連鷲子。瀉山此の摩頂甚だ漏逗する故なり。忠曰く「理を露はすとは太だ過ぎたり。」
 ⑤ 君子道長。一陽來復の故なり、此の宗の冬至底はじや、陽なり。
 ⑥ 露柱次口參。着語なり、沒巴鼻。
 ⑦ 小人道消。共に報恩の冬至に見ゆ。消は減するなり、陰なり。
 ⑧ 燈籠作舞。沒巴鼻なり、ばけものづくし。
 ⑨ 義出豊年。亞歲を祝す、禮義

① 乘拂と冬齋とを謝する上堂、佛法の玄妙を以て、人に布施するは、雀の滄海を填るか如く醍醐の上味を以て、人に供養するは、密裡の砒霜の如し。是れ他の宿習因縁なり、佛も也た他を救ふこと得じ。徑山が明、業鏡の如し、這裏備が便宜を討ぬる處なし。正旦上堂、臘裏の三白、元正氣和す、天地開泰、萬物序を得、甚麼に因つてか、一年、兩箇の歳端ある。若し閏餘歳を成すと謂はゞ、阿誰か知らざらん。山僧尋常道ふ、天下の人安うして我れ始めて安しと。徑に通事舍人をして、子細に聽探せしむ、是れ何の氣數か是の如くなる。通事舍人、跬歩を移さず、四天下を繞つて打一遭す、事として知らずといふことなし、處として到らずと

は富足より生る故なり、世間底なり、底意は佛法なり。
 ② 道復太古。回復を祝す。
 ③ 國師愷喜。開山國一國師は日出たいと。
 ④ 冬至寒食。押韻、冬至より一百五日か、寒食の節に當る。現成底、天下無爲無事の冬至なりと云はんとなり、三十棒ぞ。
 ⑤ 謝乘拂冬。冬夜乘拂の謝の故に。
 ⑥ 布施於人。乘拂の法施。
 ⑦ 雀填滄海。填は滿なり、勞而無功、おほきなぬかつたせんさくじや。
 ⑧ 供養於人。冬齋の財施。
 ⑨ 密裡砒霜。自己佛身のありさまは、百味飲食にもかへられぬ、共に受食もたへられぬ、財法の二施共益なきを云ふ。
 ⑩ 宿習因縁。施あり、受あり。この上堂は古來の諸師、難解

三六三
 ① 佛也救他。釋迦彌勒は是れ他の奴と、他は乘拂の人。
 ② 業鏡。これは楞嚴の八は「訟習交誼云云、故に惡友業鏡、火珠宿業を披露す、對驗諸事あり」と。
 ③ 這裏備便宜。言盡明了の故に他の宿習を披露す、這裏とは乘拂人の自己底、備は諸人宿昔の罪を逃れんと欲する處なし。
 ④ 臘裏三白。臘月の中、三回雪ふるなり。
 ⑤ 元正氣和。豊年の故。
 ⑥ 天地開泰。三陽交つて地天泰なり。
 ⑦ 萬物得序。次第に發生す。
 ⑧ 兩箇歳端。次に閏正月朔の上堂あり。
 ⑨ 若聞錄成歲。珠云く、「殺活自在、横あり縦あり、轉碌々、阿碌々。」

いふことなし、歸り來つて踊躍歡喜して、果して豊年の兆ありといふ。山僧云く、「何を以てか據とせん。」通事舍人道く、「都城巷陌、市鄕邸店、村落郷坊、柴米蔬菜、百物廉平なり、二麥雪後鬱然として觀つんべし、是を豊年の兆となす。」山僧又問ふ、「此の外別に消息ありや否や。」他云く、「桑柘樹頭に布穀を聞き、春風影裏に耕牛を牧す。」山僧道く、「通事舍人、爾果然として名徳相孚へり、春に向つて老僧錢あらば、箇の油糍子を買つて爾に供養せん」と。他身を將て一旋して、掌を打つて大笑して去る、山僧惟だ切に之を疑ふ、然と雖も、且く道へ、他箇の甚麼をか笑ふ。閏正月の望、新慶遠長老の爲にする上堂、歳の餘閑を知らず、月の大小を知らず、

- ① 天下人安。世界不安なれば則ち僧人亦安穩なり。
- ② 通事舍人。事を通すと云ふに於いてとり出す、官名に托して佛事を作す。
- ③ 子細聽探。事を聞いて情實を探る。
- ④ 氣數。運氣運數。
- ⑤ 跣步。半歩なり。
- ⑥ 無事不知。事をいふ。
- ⑦ 無成不到。酒をいふ。
- ⑧ 巷陌。巷は甲中の道、陌は田間の道。
- ⑨ 市鄕邸店。邸店は遠旅なり。村落郷坊。落は居なり、人の聚り居るところ、故にいふ、坊は邑里の名。
- ⑩ 廉平。物價平直を云ふ。
- ⑪ 二步。大小なり。
- ⑫ 桑柘。季春のころなり、自然太平の家を云ふ。
- ⑬ 布穀。鳩なり、「ふんどり」といふ。

- ① 名徳相孚。能く事物の理に通ずればなり、孚は信驗の義。
- ② 一旋。一轉なり、他とは通事を云ふ。
- ③ 慶遠。寺名なり、俊長老を云ふ、師の法嗣。
- ④ 歲之餘閑。了元歌にあり、續緝に見ゆ。
- ⑤ 嚮々憧々。心亂れて無知の貌、今は大無知熱悶の境界を形容す。
- ⑥ 僅三十年。工夫長養の年數を舉す。
- ⑦ 朝旨踵門。奉詔出世。
- ⑧ 趣歸。趣は恐らくは轍の字か。
- ⑨ 誓行密用。陰徳なり。
- ⑩ 與慶豐驗。陽慶なり。
- ⑪ 上馬見路。分明の義、今上途に託して之を言ふ。
- ⑫ 江南春信早。萬物時を得て瑞世の徳の福きを述べていふ。
- ⑬ 乾坤之内。雲門示衆、碧岩六

情愴懂懂、是の如きもの

僅に三十年、一旦眼睛活す。便ち見る

十二評に詳なり。

朝旨門に踵つて、慶遠に趣歸することを。潜僧家、潜行密用、與廢に靈驗なることを得たり。且く馬に上つて路を見る、一句作廢生、主丈を卓して、江南春信早く、紫葳已に拳を伸ぶ。上堂、乾坤の内、宇宙の間、中に一寶あり、形山に秘在す。形山は即ち問はず、如何なるか是れ一寶、是れ上大人丘乙巳なることなしや廢や、咄、可知禮也。上堂、舉す、疎山、壽塔を造る次で、知事白して云く、「幾錢を將つてか。匠人に與へん。」山云く、「爲三文を將つて、匠人に與ふるが好き、爲兩文を將つて、匠人に與ふるが好き、爲一文を將つて、匠人に與ふるが好き。若し道ひ得ば、吾が與に親しく壽塔を造るなり。」其の僧茫然たり、後に僧あり、大嶺に舉似す、嶺云く、「還つて人の道ひ得るありや。」僧云く、「未だ人の道ひ得るあらず。」嶺云く、「爾歸つて和尚に舉似せよ、若し三文を將つて匠人に與へば、此の生決して塔を得ず、若し兩文を將つて匠人に與へば、和尚と匠人と、共に一隻手を出さん。若し一文を將つて匠

- ① 上大人丘乙巳。これは孔子が父に上る書なり、大人は叔梁紇、丘は孔子、乙巳三千化七十士余と、乙巳一と通ず言うは一身所化の士許の如し、小生八九子佳と、八九七十二の弟子、三千の中更に佳なりと「作レ仁可知レ禮也」と、作はなほ「爲」の如し、七十子、善く仁を爲し、其の體に於ける知るべし、めづらしいこととはない、三歳の兒童も解する、いろはにほへと「しやと」。
- ② 疎山壽塔。前の昔香普説の處に見ゆ、壽塔は生前に遊め師の無縫塔を造るなり、其の齡を祝す、故に壽と稱す。
- ③ 匠人。石工なり。
- ④ 大嶺。羅山道開禪師、時に大嶺に任す、岩頭に嗣ぐ。
- ⑤ 此生不得塔。大に子細ありと。
- ⑥ 一隻手。同得の義なりと、龍

人に與へば匠人を帶累して、眉鬚墮落せしめん。僧回つて疎山に舉似す疎山禮拜して云く、「大嶺の古佛光を放つて、射て此間に至る、然と雖も、也た是れ。臘月裏の蓮華。」大嶺聞き得て云く、「我れ與麼に道ふ、早く是れ。龜毛長きこと數尺。」師拈じて云く、「二大老、針頭上に向つて鐵を削る、太阿を鑄て、佛を殺し祖を殺さんと擬す、爭奈せん未だ人の横點頭だもするあらず、徑山が壽塔は、是れ崑山の薦嗣子の寶葉、造り來つて亦其の價直を知らず。且く道へ、大嶺の古佛光を放つて、射て此間に至る、相去ること多少ぞ。主丈を卓して、多年の曆日如し能く用ひば、巡官に指上を推さるゝことを免れん。」

上堂、舉す、徳山、龍潭に參す、纒に相見して便ち問ふ、「久しく龍潭と響く、到來するに及んで、潭も又見えす、龍も又現せず、潭云く、「子親しく龍潭に到れり。」夜に至つて侍立する次で、潭云く、「子何ぞ下り去らざる。」徳山即ち珍重して、簾を掲げて出づ、外面の黒きを見て、却回して云く、「外面黒し」と。潭、紙燭を點じて山に度與す、山接せんと擬す、潭即ち吹滅す、山此に於て大悟し、便ち作禮す。潭云く、「子箇の什麼の道

- ① 溪は注するも不可なり。
- ② 眉鬚墮落。同失の義なりとこれも不可なり。
- ③ 臘月裏蓮華。不實の義なりとこれも不可なり、無用處なりと。
- ④ 龜毛長數尺。はやあとがみえる。
- ⑤ 向針頭上。珠云く、「法理の至極をひどくせんさくした、惡辣の手段。」
- ⑥ 徑山壽塔。天澤菴なり。
- ⑦ 寶葉。名は道源、與衆錄に見ゆ。
- ⑧ 相去多少。一か二かと。
- ⑨ 多年曆日。「趙州の所謂汝等十二時をつかひ得たりと同じやうな」と東嶺和尚はいへり。
- ⑩ 巡官指上推。天下を巡官して人の善惡を記す、逸堂云く、巡官は大嶺を指す、指上推は點檢するをいふ。

理をか見る。」山云く、某甲今日より去つて、天下の老和尚の舌頭を疑はじ。」次の日潭、陸座して云く、「可の中箇の漢あり、牙劍樹の如く、口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回さず、他時異日、孤峯頂上に向つて、艸菴を盤結して、吾が道を立し去らん」と也。山疏鈔を取つて、法堂前に於て、一炬火を將つて、提起して云く、「諸の玄辯を窮むるも、一毫を太虚に置くが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投するに似たり」といつて、遂に之を焚く。師拈じて云く、「龍蛇を辨する眼、虎兒を擒ふる機、古より之れあり、只だ錯つて指陳を爲すに因つて、以て破家散宅を致す。還つて人の辨得出するありや。」喝一喝して下座。

海西堂至る上堂、天文を推め地理を窮む、陰陽の易數を將つて、著艸影邊に向つて、指頭子を點すること數過するに、一星子の漏落するなし、且く道へ、趙州東壁に葫蘆を掛く、什麼の數中にか在る。會得せば事一家に同じ、然らすんば、多くは洞庭の青艸岸に向へば、楚天空闊にして、師を知らず。

結夏小參、僧問ふ、「人皆苦炎熱、我愛夏日長。」

- ① 潭又不見。珠云く、「座上無老僧、日前無二鬚髮。」
- ② 親到龍潭。眞相を見る故に。
- ③ 山於此大悟。珠云く、「見解もなにもこつばざらへ。」
- ④ 取疏鈔。青龍法師の金剛經の疏鈔等なり。
- ⑤ 窮諸玄辯。實語は不誑語、不妄語疏鈔の玄辯、見來れば毫末の如し、太虚は大悟。
- ⑥ 竭世樞機。肝要の旨を謂ふ、巨壑は大悟、大觀面前當に是の如し。
- ⑦ 拈云。龍潭の許可を拈ず。
- ⑧ 只因錯指陳。錯は龍潭吹滅、指陳は證明注脚の心なり。
- ⑨ 破家散宅。抑下の托上なり、佛來也打、祖來也打と、將來許可の人を戒む。
- ⑩ 蓮人辨得。逸堂曰く、「破家散宅の處、是れ龍是れ蛇、辨じ難き故なり。」
- ⑪ 喝一喝。言端語端に涉らず、

風自南來、殿閣生微涼。此れは是れ古人の聯句
 大慧聞き得て、漆桶を打破す、且く道へ、節
 文甚麼の處にか在る。師云く、「甚れの處にか大
 慧を見る。」僧喝して云く、「也た是れ。泥裏に
 土塊を洗ふ。」師云く、「果然。」僧云く、「徳山小
 參答話せず、問話のものあらば三十棒と、此の
 意如何。」師云く、「醋酸くんば何ぞ必ずしも胡
 蘆を挂けん。」進んで云く、「僧あり出で、禮拜す
 徳山。便ち打す、又作麼生。」師云く、「鐵旗
 鐵鼓。」進んで云く、「僧云く、「某甲話も也た未だ
 問はず、什麼としてか某甲を打す。」又且つ如
 何。」師云く、「義は豊年より出づ。」進んで云く
 「山云く、「備は是れ何れの處の人ぞ。」僧云く、
 「新羅の人。」山云く、「未だ船般に跨らざるに
 好し三十棒を與ふるに、又作麼生。」師云く、「徳

徳山の意を直下に喝一場の下
 で見よとなり。
 ①海西家。傳不詳なり。
 ②推天文窮地理。推は窮話なり
 己下海公の周易を玩んでと
 策を善くするの藝能を賛す。
 ③易數。陰陽兩儀四象八卦、之
 を易數といふ。
 ④善舞。善舞を用つて卜筮す、
 上に善舞の解は見ゆ。
 ⑤點指頭子。指頭にて善舞の數
 を數へ卦を起す、占ひ幾く返
 しても。一星子はすこしばか
 りも、些の所失なしとなり。
 ⑥在什麼數中。海公易數に通ず
 る、故に此の抄あり。
 ⑦會得事同一家。同門を許す、
 佛法と周易と一理に歸す。
 ⑧多洞庭青神。五洞錄下に、古
 尊宿語錄廿二を引く、上の句
 は「秋雲秋水兩依依、寒雁聲
 々度。翠微と、これは下の句
 なり、忠曰く、「洞庭青神は世

間の技藝に比す、不知歸と
 は自分の家郷に飯らんと欲す
 るものなきなり、洞庭湖。青
 神湖は岳州府にあり、南北に
 連接す。
 ①楚天空闊。岳州府は楚に屬す。
 天涯萬里どつちがどうだかし
 れない、方所わかちがたし。
 ②人皆我愛。この上の二句に文
 宗の句、唐の天子の句。
 ③蕪風殿閣。この下の二句は柳
 公權が句なり、應制聯句、
 ④打破漆桶。大悟した。大慧は天
 寧の圓悟の處に在つて、雲門
 諸佛出身の話をば、天寧は即
 ち然らず、忽ち人あり。如何
 なるか是れ諸佛出身の處と問
 はす、只だ他に向つて道はん
 蕪風自南來云云、大慧言下に
 於て省あり、云云。
 ⑤泥裏洗土塊。無分曉なり、「か
 きにごして、まきらかすまい」
 といふこと。

山の性命、道の僧の手裏に落在す。進んで云
 く、「只だ徳山與麼の如きんば、爲復た是れ伊を
 賞するか伊を罰するか。」師云く、「劍は僧人の
 手に握る。進んで云く、「者の僧是れ箇の波を
 衝き浪に逆つて、潮頭を弄するに慣ふ底、甚に
 因つてか徳山他を觀ること不破なる。」師云く、
 「備却つて 諸人に觀破し了らる也。」僧云く
 「只だ今夜の如きんば、忽ち箇の漢あつて出で
 來つて、某甲話未だ問はざるに、什麼としてか
 某甲を打つと道はす、未審し和尚、作麼生か他
 に答へん。師云く、「我れ徳山の老婆心に似か
 ず。」僧云く、「明眼の宗師、天然として在ること
 あり。」師云く、「賊は是れ 家親。」
 師乃ち云く、「古篆文あらず、新條制あり、
 九旬禁足、瓮を割つて天を覓む、三月護生

①果然。大慧を見ざることを明
 し。
 ②箇僧何必。前の淨慈錄に見ゆ、
 すがすければかんばんは掛け
 ずとも買ひにくる。
 ③便打。知音はとづくに知てを
 る。
 ④鐵旗儀報。猛將の用ふる所、
 不詳の器なれども、兵具なれ
 ども、これは棒頭の機用にな
 とへる。
 ⑤義出豊年。此の僧、有徳の漢、
 始終徳山を見んと要す、故に
 手前が豊かさにいとくとく仁
 義立てをする。
 ⑥未防船。新羅をこへざる已
 前。
 ⑦道僧手裏。道の僧、技に到つ
 て徳山を見盡す故に。
 ⑧劍在僧人手。權柄は我が手に
 在るの義なり、寶林錄に見ゆ、
 珠云く、「賞罰我にありて、殺
 したければ殺す、生かしたけ

れば生かす。」
 ①衝波逆浪。水練の名人。
 ②被諸人觀破也。其方の語は
 諸人にはらわた見ぬかれた。
 ③我徳山老。實に奇妙希代。
 ④賊是家親。せりぬすみは、
 家の内のものがぬすみたがる
 抑下托上手。
 ⑤古篆不文。咸音那畔、無差別
 の中に九旬を立す、これ空語
 門なり。
 ⑥新條有制。釋迦文佛、出世新
 に夏制の條章を立す、世尊は
 古篆不文の處に向つて、新に
 安居の條制を立し玉ふ、これ
 假語門なり。
 ⑦九旬禁足。抑下なり、これは
 着語。
 ⑧割瓮覓天。瓮はな壘り、今は壘
 と作す、言ふ意は見るところ
 のもの小なり、禁足等の制法
 は大觀に非ざる故なり。珠云
 く、「ぞんじもよらぬ」といふ

① 琴を劈いて鶴を煮る。有志の士をして、舒伸する所なからしむることを致す、縦饒ひ別に生機あるも、未だ免れず伏して處分を聽くことを。老僧今夜。眉毛を惜まず、箇の方便を作して、現前の四衆をして、九夏虚棄の功なからしめん。還つて信得及すや、若し信得及せば、水邊林底、切磋琢磨、必ず修證の期あらん。其れ如し然らずんば、各請ふ收めて、上科に歸せよ。

復た擧す。涌泉因に雪峯訪ふ、乃ち門送す、峯橋に入り了る。泉云く、「者箇四人昇く、那箇幾人か昇く。」峯身を聳して云く、「甚麼と道ふぞ。」泉再び擧す、峯云く、「行け行け、他會せず」と。師拈じて云く、「電光石火の機大眼目を具するも、卒に湊泊し難からん。涌

ぬ、得道は禁足に非ず、其の愚なることは之にたとへる。」
 ② 劈琴煮鶴。これは抑下なり、昔し李義山が維基に謂く、「寂風景は清泉濯足、花上曬輝、背山起樓、燒琴煮鶴、對花吸茶、松下鳴道と、此の制高人の所然に非ずとなり」已上は四六文なり。
 ③ 無所舒伸。見性の法門に志あるの士をして、心まかせに自由にするがならぬとはなり。
 ④ 有生機。大活機用を具する底あるもじや。
 ⑤ 未免伏聽。自意に任すこと能はず、叢林に入つたならば、人次第にならねばならぬ。
 ⑥ 不惜眉毛。法罰の惡、癩病を感すと雖も、強ひて諸人の爲に開説すべしとなり。
 ⑦ 信得及麼。八字に開説し了る矣。

三七〇
 ① 歸上科。古語に三段不問、收歸上科と、凡そ序正法通の科段差別多しといへども、本一法に歸す、今上科の一法は、即ち安居把本の文なり、依レ舊安居を守れとなり。
 ② 涌泉。名は景欣、石霜慶諸に嗣ぐ、藥山四世、この語代別の部に見ゆ。
 ③ 翠身。聽く勢乎。
 ④ 道甚麼。幾人してかくと見たか。
 ⑤ 電光石火。涌泉の機録をいふ行け行けの處をいふ。
 ⑥ 卒難泊泊。珠云く、「雪峯が機足がふみたてられぬ。」
 ⑦ 危洩中。再問の處、抑下なり。
 ⑧ 失却手機。只だ奈何ともするなきことを得たりじや、棍も棒も失却す。
 ⑨ 過在後語。珠云く、「明德なれども、ぐぼい處がある、行け

泉 ① 危流の中にして、手機を失却す、雪峯過後語に在り、當時若し是れ徑山ならば、他の身を聳して甚麼と道ふぞと云ふを待つて、只だ他に向つて道はん、請ふ和尚穩に轎子に乗れと、惟だ雪峯の舌頭を坐斷するのみに非ず亦天下の人をして、針割不入ならしめん。」
 ② 次の日上堂。大覺世尊、二千年前、給孤園中にして、一千二百五十の比丘を聚めて、安居の日に至つて、模を起し様を講く。今に迫んで繩繩として未だ已まず、今日忽ち箇の漢あつて出で來りて、我が者裡は是れ。壺中の天地、別に日月あり、備が者の。保社に入らじと道はゞ、山僧只だ。明窓下に安排することを得ん。何が故ぞ、麒麟の上瑞、世を擧つて逢ふこと希なり。

行け、他不會の後語。
 ① 針割不入。少しもうかゞはれぬを云ふ、さてくさんねんの意なり。
 ② 一千二百五十人。三藏法數五十に曰く、「耶舍長者子の別黨五十人、優樓頭螺迦葉の師徒五百人、又那提迦葉の師徒二百五十人、伽耶迦葉の師徒二百五十人、舍利弗の師徒一百人、大目犍連の師徒一百人、一にの法會に常隨不捨なり、故に經の首に千二百五十人俱といふ。」
 ③ 起摸畫樣。規矩を立つるをいふ、あゝがよいか、かうがよいかと。
 ④ 繩繩。相續不斷貌。
 ⑤ 壺中天地。費長房が故事なり。
 ⑥ 保社。虛堂門下に。
 ⑦ 明窓下安排。高賓を以て待つが如し、御客あしらへにせん

と。
 ① 光首座。偶頰の部に法光藏主あり、蓋しその人乎、閩の人、晦叟と號す、師に嗣ぐ、福州は七閩の地なり。
 ② 蠱者最要通。蠱は閩中の蠱、毒を以て語を綴る、要通とは首座の毒手をいふ、僻雅に蠱は疑なり、蠱惑など、今は福州の人の故に、蠱に寄せて其の蠱變快活にして、近傍しがたきを褒美す。
 ③ 不期而會。不圖出會した互にじや、不レ約而同ずとは蠱通不測ニ鬼神ニ似たる故なり、蓋し今不意にして此に來るのみ。
 ④ 撈著岸崩。一換一撈の靈機なり、東嶺云く、「眞妙これ禪僧家、一箇の龜毒なり。」
 ⑤ 拋出金圈。珠云く、「かりそめに吐き出す句、なげ出す處、吞吐しがたしじや。」

福州の光首座の乗拂を謝する上堂、夫れ
蠱は最も靈通、期せずして會し、約せずし
て同す。撈著すれば崖崩れ石裂く、拋出す
れば金剛栗蓬、露柱驚倒し、燈籠を嚇驚す。
知らず何れの處の毒種ぞ、元來門裏に蠱あ
り。

上堂、排日治疊して、盡くをして一味に
休し去り歇し去り、茫然湛然にし去らしめて
之を得道の士と謂ふ。殊に知らず、未だ曾て口
を啓かず、先づ國の諱を犯すことを。只だ
言詮を離れ依倚を絶するが如きんば、諸方作
廢生か接納せん。
端午の日、嘉禾の報恩氷谷の遺書至る上堂、
「午に五を見る、之を天中の節と謂ふ。
陽德既に剛うして、元化以て治し、盡大地是

① 驚倒露柱。光首座の毒手段を
謂美す、嚇は怒なり。
② 門裏有蟲。閩人を指出す、毒
種は光公を謂す。
③ 排日治疊。排は列なり、排日
はなほ連日のごとし、治疊は
修治打疊するなり。忠曰く、
「此の一則甚だ看がたし、古
今解未だ至らず、排日とは結
夏、堂頭、庫司、首座等、某の
日に排當し、某の日に茶禮を
請ず、治疊は碗椽を治辨して
茶禮の茶菓に備ふるなり、禪
林の煎點の事なり、疊は椽な
り、淺抄は誤りなり」と。
④ 盡一味休去。珠云く「諸方の
師家、結夏の煎點訖つて、大
衆をして坐禪工夫一向ならし
むるをいふ、他途に涉らずじ
や。」
⑤ 茫然湛然。上は廣大の貌、心
に境界なし、下は澄湛の貌、心
に動波なきを云ふ。珠云く

れ藥に非ざるものなきも、要且つ無病の人を療
じ得ず、且く道へ、那箇か是れ無病の人、主丈
を卓して、「氷谷老子に問取せよ。」
中夏上堂、擧す、趙州、南泉に問ふ、「如何なる
か是れ道。」泉云く、「平常心是れ道。」州云く、
「還つて、趣向を假るや否や。」泉云く、「之を
擬すれば則ち乖く。」州云く、「擬せずんば又争か
是れ道なることを知らん。」泉云く、「道は知に屬
せず、不知に屬せず、知は是れ。妄覺、不知
は是れ無記、若し眞に、不疑の道に達すれば
豁として太虚の若し、豈強ひて是非すべけん
耶。」趙州禮拜す、師拈じて云く、「一夏九十日、
已に四十五日を過ぎて、此れは是れ四十五日已
前の語か、四十五日已後の語か、若し是れ四十
五日已前の語ならば、焦埴打著す連底の凍、

① 盡大地是。此の時に到つて一
草一木もじや。これは善財の
因縁なり、文殊の機を奪ふ底
を云ふて、自負せられたが、虚
堂門下は左様なことはない。
② 假趣向。心を將つて、之に趣
向して道を得べけんや、擬は
度なり。
③ 妄覺。善惡の心、一切の妄心
は善惡の心、一切の妄心は、
善惡無記の三種に過ぎず。
④ 不疑之地。擬に作るべし、上
の不疑の語を承く、
⑤ 豁。盡大地、天地沙門の一雙
眼。
⑥ 焦埴打著。埴は甎なり、瓦の
生なるは堅と爲す、燒熱する
ものは塼となす、合體相應を
云ふ、連底に打ちつけてとろ
りととけた。
⑦ 項主丈子。行脚參尋の謂。
⑧ 單拆交重。一伏兩仰、又は兩
伏一仰、三仰三伏じや、單は

「かた」、折は「なめ」、きらり
と古因あらはれ、背面共に是
なりと。

⑨ 三伏。夏至の後、第三の庚を
初伏と爲す、四庚は中伏、立
秋の後の初庚を末伏と爲す。
秋は金を以て火に代る、金は
火を畏る、故に庚の日に至つ
て必ず伏す。
⑩ 擧。まろめてなり、虚堂に存
分のふるまひ、この語は解脫
自在三昧をいふ、維摩の不思
議品に出づ、苦樂一枚になり
えた人を云ふ、象外に擧ふは
大神通力をいふ。
⑪ 死而無悔。道に處するの要を
擧ぐ。
⑫ 照用一時行。臨濟下の宗唱な
り、前報云く、「照は勘辨、用
は志多多奉留。」
⑬ 突吉羅罪。華には惡作等と翻
す、一百種あり、都べて小
罪。

若し是れ四十五日已後の語ならば、老僧説かざることを得ず、若し説かす
んば、又恐る諸人の疑却して、主丈子を煩すことを見んことを。子細
に分つて看よ。」主丈を卓して、「單拆交重。」

上堂、炎威、三伏苦とせず、涼風四來樂とせず、樂中に苦あり、人知ら
ず、苦中に樂あり、人會せず、虚空を、搏つて象外に揮ふ、擔板一生、
死すとも而も悔なけん。

上堂、一喝賓主を分つて、照用一時に行ず、且く道へ、賓主作廢生か分た
ん、若し分ち得ば、突吉羅罪を犯す。若し分ち得ずんば、背地裏に
心を捫たん。

上堂、舉す、興化衆に示して云く、「今日如何若何といふを用ひざれ、便ち
請ふ單刀直入せよ、興化汝が與に證據せん。」時に、曼德長老いふものあ
り、出で、禮拜して、起つて便ち喝す、化も亦喝す、德又喝す、化亦喝す
德禮拜して衆に歸す。興化云く、「若し是れ別人ならば、三十棒、一棒も也
た較くこと得じ、何が故ぞ。蓋し他の曼德の一喝、一喝の用を作さず」と
いつて、便ち下座、師拈じて云く、漢の高祖、韓信を給いて之を殺す、

身死すと雖も、其の心果して死なんや。興化、曼德長老に三十棒を放す、
和氣春の如く、之を賓主相見に較ぶれば、則ち、遠うして遠し
矣。」

解夏小參、僧問ふ、「初秋夏末、布袋頭開く、時節因縁、請ふ師開示。」師云
く、「若不得流水、還應過別山。」僧云く、「學人此に到つて、何ぞ問
はざるの好きに似かん。」師云く、「可憐は君徳を損す。」僧云く、「馬大師因
に僧問ふ、「四句を離れ百非を絶す、請ふ師、西來意を直指せよ。」此の意如
何。」師云く、「身を棄て、虎穴に入る。」僧云く、「馬師云く、「我れ今日勞倦
す、汝が爲に説くこと能はず、知識に問取せよ」と、又作廢生。」師云く、
「程を貪ること太だ速にして、覺えず艸に落つることを。」僧云く、「僧
藏に問ふ、藏云く、「我れ今日頭疼し、汝が爲に説くこと能はず、海兄に問
取せよ」と、此の意如何。」師云く、「神號き鬼哭して、禍私門に及ぶ。」
僧云く、「僧、海に問ふ、海云く、「我れ者裏に到つて却つて不會」と、又作
廢生。」師云く、「無生國裏に眩向す。」僧云く、「馬大師の父子、各病痛あり、
還つて人の醫し得るあらんや否や。」師云く、「先づ懶を醫し得ば、方に他

① 謂心。珠云く、「背地裏にと、
くらがりむいてきをもむな
り。」
② 曼德長老。廬州澄心院に住す
魏府の大覺の法嗣、臨濟の三
世。
③ 漢高祖。韓信兩度反す、兩度
あごむいて執らる、今之を用
ひて、相反の譬と爲す。
④ 和氣春。興化の心は長老を
そだてる、春の如きなり。
⑤ 較之賓主。若し眞言臨濟下の
調べならば、賓主互換の謂な
り。
⑥ 遠之遺矣。底裡優劣あり譬へ
ば韓信の事の如きなり、強ひ
て賓主を分つ知るべし。
⑦ 若不得流水。自恣分散の時節
途中の事を示す、これは親切
示衆じや、流水の邊を行くに
は、別山を過ぎて行くべし。
⑧ 忠曰く、「此れは洞山が隱山を
訪ふの事を用ふ、葉葉を流す

を見る人あることを知る、深
く尋ねて隱山に逢ふことを得
る、これに比す。」

① 何似不問好。珠云く、「それで
は學人問はぬがましであつた
な、別の長處はない」と。
② 馬大師。この因縁は淨慈後錄
に見ゆ。
③ 擲身入虎穴。この僧身を捨て
て問ふた。
④ 貪程太速。説くこと能はず、
即ち八字に開説す。
⑤ 神號鬼哭。禍の先兆あらおそ
ろしや、極妙究玄の處に至つ
ては、神鬼の二字、馬祖と知
藏に充て、みよとなり。
⑥ 禍及私門。大小の禍事、賊家
の門に及ぶ。
⑦ 無生國裏。賊を捉へて無生國
裏に眩向すとなり、眩向は流
しものなり。
⑧ 先醫得懶。そなたの病から、
まず療治せよ。

を醫し得ん」僧云く、「學人病なし、何ぞ必ずしも醫を求めん」師云く、「通身是れ癩、肯て承當せず」僧禮拜して云く、「師の答語を謝す」師云く、「過を知つては必ず改む」

師乃ち云く、「清泉白石、月に偃し雲に枕す、竹屋茅堂、神を怡はしめ意に適ふ、謂つべし頓に身世を忘るる。絶俗の幽緇と。端なく禁足安居、佛法朝朝己に在り、剋期取證、功行時時心に上す。只だ知る規矩の人に襲くことを、安ぞ得ん流を入して所を忘るることを。稍僧家、作得主し、把得定して、人の謾を被らず、且く、功を取る底の句作麼生」主丈を卓して、「一把の香芻拈するに未だ暇あらず六環の、金錫遙空に響く。」

- ① 不肯承當。手前では自身の病が如れぬ。
- ② 知過改。其の過利を美む、あやまちほしれにくいに、さう知つてあらばよいとなり。
- ③ 清泉白石。珠云く、「清泉の邊石壁に葉を煮て、遁世閑閑の風影をいふ、佛の言く佛道を學ばんと欲せば、先づ須らく遁世を學ぶべし、第一に名利を忘すべし」と。
- ④ 絶俗幽緇。閑閑の緇僧なり。
- ⑤ 無病。如上世間を忘れた身なれども、隨規守矩、朝々在己と起つても居ても偃し、食ふも茶を飲むも、己見未だ忘する能はず。
- ⑥ 功行時時。日日時時、本持して間斷なし。珠云く、「得力の處を心頭に掲在し、功勳未だ忘せず」
- ⑦ 只知規矩。思曰く、「夏中の遁規矩、人を掩ひ襲い來るなり。

り、襲は及なり。」珠云く、「一切を打ち捨て、忘れて、純一にならんと思へども、兎角規矩が身についてまはると云ふ。」

- ⑧ 安得入流。楞嚴觀音の圓通に云く、「初於二聞中、入レ流忘レ所と、入流はなほ流を返すの如し、返照離縁、前塵の流離起滅に隨はざるをいふ。珠云く、「それではふつゝり、能縁の流注を入れて、所縁の塵を忘る。」眞箇の境界に到るなり、今は反してみよ。
- ⑨ 作得主。珠云く、「主心を辨得して主となり得る、儒にも云へり、驚飛亂りに起るは、主心定らざるが故なり。」或抄に云く、「全體主位になりぢつと守るべきをとりしめるなり。」
- ⑩ 不被人謾。珠云く、「前塵をばじや、煩惱菩提を取らずじや。

兄弟家、東に去り、西に去る、直に須く、萬里無寸艸の處に向つて去るべし」と傳へて。瀏陽菴主に到る、菴主云く、「何ぞ門を出づれば便ち是れ艸と道はざる。」此れに因つて機感相投じて、道寰中に播る。徑山は則ち然らず、忽ち僧あつて出で、辭せば、只だ他に向つて道はん、秋暑尙ほ炎せり、包笠を整へんと擬すと。何ぞ此の如くの速なりや。且く道へ二大長老と相去ること多少ぞ。」拂子を撃つて、「醜婦眉を鬚む。」次の日上堂、主丈を卓すること一下して云く、「笠を頂き包を挈けて雲外に去る、者回終に。龍峯に上らず。」又卓一下して、「途中忽然として。定上座に撞著して、他に當頭に箇の不審と道はるれば、偏作麼生か他に祇對せん。」又卓一下して、「須ひす頻に酒を勸むることを、自ら愁を解く人あり。」又卓一下。

- ⑪ 取功。九句の功なり。
- ⑫ 一把香。芻香芻は草座なり、前の坐草の處に出づ、夏中の説戒草を以て地に布いて坐す拈は草座を拈起して坐するなり、未暇は此の處安居未レ後、忽ち錫を振つて起ち去るなり。
- ⑬ 金錫響空。珠云く、「脚跟高いと云ふこと、皆是れ頓脱の境界、自便の故なり。」
- ⑭ 洞山。良价。
- ⑮ 東去西去。ゆきたい方へ往くな。
- ⑯ 萬里無寸。珠云く、「天堂地獄が、一なめもないじや。」本分の正位なり。
- ⑰ 瀏陽菴主。石霜慶諸をいふ、道吾圓智に嗣ぐ、瀏陽の陶家坊に居る、しばらくの遁世。
- ⑱ 道播寰中。洞山石霜の二師、一味投合して、大道を播揚す。

國師門戸の冷じきことを、老來爲に三呼するに力なし。」

上堂、擧す、石霜の 普會遷化す、衆、首座を請じて住持せしめんとす、度侍者云く、「先師道く、休し去り歇し去れ、一條の白練にし去れ、一念萬年にし去れ、甚麼邊の事をか明す、若し會得せば則ち住持せよ、若し會せずんば則ち不可。」座云く、「一色邊の事を明す。」度云く、「未だ先師の意を會せざること有り。」座云く、「香を裝み來れ。香煙斷ゆる處、若し去ること得ざれば、則ち先師の意を會せざること有らん、香煙未だ斷えざるに、首座脱去す。」度首座の背を拊つて云く、「坐脱立亡は則ち無きにあらず、先師の意を會せんと要せば、猶ほ未在と。」師拈じて云く、「一人は 高高たる峯頂に

醜態擧眉。二大老の擧に効ふと、莊子天運篇に西施心を病む云云。或抄に云く、「かく去つた上は、二大老のあとを學ぶとなり、去りながら似るは似たが、似たものがあるとの自負なり。」
不上龍峰。徑山を離るが故に珠云く、「徑山寺にくるはきたが、つひに徑山寺へ上つたこととはないと、こりやどうじや。」
撞著定上座。普初岩頭、雪峰欽山、途中に者の漢に撞著す。
不須頻酒。のまねども愁なき漢あり、愁にからげられぬなり。
狹紙衾。楊岐の故事なり、楊岐慈明の爲に監院となる。
慈明其責。其の就責の功至る故に、怎麼の人を得たり。己上は都監寺、責は「つかさ」と

調す。
韻律復。追放して諸山を游歴せしむ、是れ克賓の故事なり、饋は羹を飯に和す、「さふする」なり、忠曰く、「游山は彼の出院を請ふ、出院の語は諱む所あり、游山を以て換ふ。」
興化求賢。克賓終に興化に嗣ぐ。已上は維那、求賢はよき人をこしらえたがつてなり、今此の維那も此の如く責に違ふたなり。
不舉先知。靈利の知客。
趙州繞禪床。これは藏主の緣轉經の故事なり、一婆子あり、人をして錢を造つて請ふて、藏經を轉ぜしむ、師施利を受け了つて、却つて禪牀を下つて、一匝して乃ち曰く、「婆に傳語せよと藏經を轉じ已に竟んぬ、その人回つて婆に舉似す、婆曰く、比來全藏を轉ぜ

立ち、一人は深深たる海底に行く、是れ人と共に住し難きにあらず。大都ね細素分明ならんことを要す、作麼生か是れ分明底の事」といつて、主丈を卓す。

中秋上堂、僧問ふ、「寒山子今夜月を見る、甚に因つてか掌を拊つて大笑す。」師云く、「眼裏に沙を著くること得ず、耳裏に水を著くること得ず。」僧云く、「今夜還つて人の笑を發するありや也た無や。」師云く、「直饒ひ 笑裡に刀あるも、也た順らく勘過すべし。」僧云く、「記得す馬大師、月を 翫ぶ次で云く、「正 與麼の時如何。」西堂云く、「正 好供養」と、此の意如何。」師云く、「寸丁木に入る。」僧云く、「百丈云く、正 好修行」と、又作麼生。」師云く、「地獄門前の鬼脫卵。」僧云く、「南泉拂袖して使ち行く

んことを請ふ、如何ぞ祇だ牛藏を轉ずることを爲ると、趙州の傳に載す。
國師門戸。これは忠國師の縁を用ふ、侍者。珠云く、「我れ老いて人を接するに力なし、故に門庭冷々寂寥なり、國師は南陽忠なり、虛堂自ら比す。」
普會。石霜諸、光啓四年示寂動して普會禪師と證す、道普智に嗣ぐ。
度侍者。九峰道虔は石霜諸に嗣ぐ、福州の人なり。
休去歇去。珠云く、「佛祖を殺し、煩惱妄想出したい、ぶつきり。」
一條白練去。思想淨盡、さつぱりとした境界。
一念萬年去。一念萬劫、古今不變の境界。
一色邊事。珠云く、「果然として野干鳴なさない。」

裝香來。裝は齋なり。珠云く「はて、此の僧は人を疑ふな。」
香煙斷處。珠云く、「第二重の敗圍。」
要會先師。珠云く、「宗門の一著の分明など云ふはかうしたもので、先師門下の事はすつても見ない。」
高々峰頂立。深々海底行、珠云く、「一人は侍者なり、萬仞崖じゃ、今首座と度侍者と、趣向此の如く大に別なり。」
大都細素。祖師門下佛に代りて化を揚ぐるには、分明ならでは、去りながら、諸人はじゃ。
寒山子。我心似秋月の緣。
眼裏著沙。まじりはな、三味ばかりじゃ、耳裏著水不レ得と、絶々瀟瀟法爾現成の境界。
笑裡有力。倚天長劍の如くな

此の意如何、師云く、「只だ步驟太だ過ぐるに縁つて、覺えず通身泥水なることを。」僧云く、「且く道へ、三大老の下語、還つて優劣ありや也た無や。」師云く、「馬師を。」
① 厭彩すること多
少ぞ。僧云く、「馬師又道く、「經は藏に歸し禪は海に歸す、惟だ普願のみありて獨り物外に超ゆ」と、又作麼生。」師云く、「巖下風生じて虎、兒を弄す。」僧禮拜す、師云く、「禮拜は則ち可なり。」

師廻ち云く、「玉宇澄肅にして、衆星耀を掩ふ、尋常多くは是れ三五を論ず。惟だ今宵のみあつて分外に明かなり。」馬箴箕を引き得て兒を呼び子を喚んで、縦に之を翫ばしむ。直饒ひ各危機を逞しうするも、畢竟他の影子をいづること得ず、他の影子を出づる底あ

ることなしや。出で來つて一轉語を下して、大衆に供養せよ、然らずんば、山僧自ら道ひ去らん也。」

上堂、舉す、鴻山和尚、仰山に問ふ、「臨濟道く、「石火も及ぶことなく、電光も追ふこと罔し」と、從上の諸聖、何の法を以てか人に示す。」仰山云く、「和尚作麼生。」鴻云く、「凡そ言説あるは皆實義に非ず。」仰云く、「官には針をも容れず、私に車馬を通す。」鴻云く、「如是如是」と。師拈じて云く、「是は則ち是、父子機を投すること。水の水に入るが如し、惟だ恐らくは歲月已に過ぐ、久しうして弊を成すことを。此の弊を救ひ得るものあることなしや」といつて、主丈を卓す。
上堂、未だ舉せざるに先づ知り、未だ話らざ

るあるとも、須期過とは容易に證據すべからず、穿さくせねばならぬ、虚堂は容易に許さぬ。

① 正好供養。東嶺云く、「漸く半分見た、半分にもたらぬ。」

② 寸方入木。丁は當に釘に作るべし、小機を抑ふ、或は出期なきの義。忠曰く、「正好供養の寔相に落ちて、抜き出すべからず。」

③ 正好修行。此も半分。修行の成就のありさま、みぎきぬいた。

④ 地獄門前。死即當の謂なり、寶林錄に見ゆ、正好修行の機を奪ふ、活處なき漢なり。卯は衆なり。阿彌の帳はづれじや。忠曰く、「人死して鬼と成る、地獄門前に到りて已が名を書せずして去る、正好修行正與麼の時を把握せず。」

⑤ 只縁歩驟。珠云く、「あまりは

たらき過ぎた故、おぼえず泥へつづばまつた、把住却つて放行。」

① 厭彩。忠曰く、「掩彩に同じ、前の寶林錄に出づ、曾ふ意は三大老馬師の面目を厭飾すること多少ぞとなり。多少は但だ是れ多なり、急を言つて疑急と爲すが如し、詳を言つて詳略と爲す等なり、潤色をばいふなり。」

② 虎弄兒。摩頂受記なり。虎が兒子をてうらかしあそぶ、すさまじき體なり。

③ 玉宇澄肅。玉宇は月なり、清明の夜には。

④ 衆星耀。法爾なり。

⑤ 馬箴箕。馬氏の小わつば、小僧なり、正宗贊馬祖の傳に出づ。翫之までは問禪の話を提ぐるなり。

⑥ 危機。峻機と一般なり。

⑦ 他影子。月の影ばうしの外を

じや、月に託して佛事を作す故に皆光影邊に在りといふ。

① 自道去也。道ふてしもうと。

② 臨濟道。臨濟錄に曰く、「鳳林に到る云云、師乃ち頌あり、大道絶前、任前西東、石火莫及、電光罔通云云。」

③ 以何法示人。知見解會もと、かぬ。

④ 凡有言説。楞嚴三に云く、但だ言説のみあり、都べて實義なし、臨濟の機を播高す、實義は石火や電火の如し、不可説の故に。」

⑤ 官不容針。把住即ち是れ放行、珠云く、「これ又よく見よ、鴻仰の風影がある、無言説の處で石火も及ぶことなし等の義を通すと、蓋し此の語は隋唐世の話なり。」

⑥ 如水入水。如是は許すが故に。

① 成弊。爲仰の宗派、衰弊して聞くことなし、山僧のこの虚堂でなくば、此の弊を救ふことはならぬとなり。

② 未舉先知。俊快靈利。

③ 天台五臺。天台は浙江の台州府にあり、故に南といふ、五臺は山西の太原府にあり、故に北といふ、或抄に云く、「高下を語せず、直下に會す。」

④ 九疑。湖廣の永州府にあり。

⑤ 秦華。これは泰山華山にはあらず、太華なり、前の寶林錄にも見ゆ。

⑥ 朝山暮水。朝には山を看、暮には水を看る、遊山と翫水と。

⑦ 滿眼塞耳。山と水と。

⑧ 佛法玄妙。文殊は常に目に觸れ、觀音は耳根に塞る故なり。

⑨ 朝華暮草。珠云く、「悟つても元のつら、逢ふても元のつら

るに先づ領す。南は 天台北は五臺といふは
 則ち可なり、若し更に 九疑 泰華相高き
 こと殊なることありと説かば、則ち未可なり。
 納僧家、朝山暮水、滿眼塞耳、什麼の
 佛法の玄妙をか覓めん。然らずんば、朝茅暮
 茅、喜怒爾にあり。

圓覺大師 第十二忌拈香、西天の末葉、
 東土の初枝、梁魏に趙起して分、形影
 相吊す、嵩少に冷坐して分、路徑委蛇た
 り。將に謂へり、單傳直指と、誰か知らん
 一握の亂絲なることを。罵る底あり恨むる底
 あり、患人の師と爲るにあり。今は則ち枝
 枯れ葉隕つ、敷茂何ぞ期せん。屈あり明
 として雪むる處なし、風に臨んで只だ自ら嘘
 戲すべし。聊か非供を陳す、來つて分 諸を

朝三暮四といへば腹をたつ、
 朝四暮三といへば悦ぶ。華は
 山菜、一名は豫子(とち)、名
 は三と四となり、實は通じて
 六の数なり、名實未だ嘗て變
 ぜず、但だ朝暮を移し易へて
 衆狙の喜怒、之を聞ふ、此れ
 は是非の名異なりといへども
 理の實は則ち同じきに喩ふ、
 此には學者の名實に迷ふて喜
 怒するに一任するなり。

圓覺大師。達磨を云ふ。
 第十二忌。この例は寶林にあ
 り、施主あり、徑山に於て達
 磨忌を修するなり。
 西天末葉。四七の末、
 東土初枝。二三の初。
 趙起梁魏。趙起は趙りて進ま
 ざること、足をふみかけては
 ひき、ふみかけてはひきな
 り。

形影相吊。獨り自ら棲棲し
 て伴侶なきの謂なり、知り手

がないよりつかぬゆえなり。
 嵩少。嵩山は五嶽の中巖
 たり、東を大室、西を少室と
 いふ、嵩はその總名、同じく
 少林寺は少室山の北麓にあり
 後魏の時に建つ、冷坐はすこ
 としてじや。

路徑委蛇。委蛇は委曲の貌、
 まがれるなり、意は正道に非
 ざることを抑するなり、問ひ
 手がなない、直指の法門、どう
 もまはり遠くてひろまらぬ。
 一握亂絲。珠云く、達磨の胸
 中の絲の亂れて、ときわける
 れぬ如く。

罵底恨底。菩提流支等の禪天
 魔など、これ亂絲なり。孔子
 曰く一人の患は好んで人の師
 と爲るにあり。

枝枯葉隕。初冬の時節に約し
 て、兒孫の衰微を嘆ず。
 敷茂何期。少林花木の春を回
 し難しとなり、これは見性の

鑿したまへ。

開爐、衆僧の單鉢を移して、千僧閣に歸せ
 しむる上堂、大夏を建つことは、鉅材に非
 ざれば以て重責に任じ難し、廣衆を安すること
 は、海量に非ざれば以て衆流を納れ難し。
 頭より改作して、赤手にして變通す。大覺
 寮、案牘を重鑰することを許さず、千僧閣只
 だ三百餘單を排す、但だ爐中の火に 種ある
 ことを得ば、自然に暖氣相治し、既に是れ千
 僧閣、甚に因つてか只だ三百單を「安す」とい
 つて、主丈を卓す。

書雲の夜參、僧問ふ、北禪、露地の白牛を烹じ
 洞山、泰首座の果卓を撤退す、此の意如何。師
 云く、「貧を闢はしめて富を闢はしめず。」僧云
 く、「還つて優劣ありや也た無や。」師云く、「優

法門が衰へるをなげくなり。
 有加明明。已下は虛堂の分上
 雪は洗なり。

臨風只自。祖師の威風にあふ
 ては、嗚嗚は氣息を吐いて、
 悲歎するなりあじや。

諸。恐らくは富ならん諸は支
 の頭に叶はず。

彩衆僧單。忠曰く、今新僧堂
 を建つ、その間衆僧は暫く別
 家に遷り居る、今造替異なるの
 故衆僧の名、單衣鉢を僧堂に
 移す。

千僧閣。これは徑山の大悲禪
 師、之を建つ、五十三歳のと
 き宋の紹興十一年なり、虛堂
 は景定丁卯秋、徑山に遷る冬
 十月なり僧堂を一新す、次に
 千僧堂は戊辰の秋着工、己巳
 六月十日落成す、此の歲十月
 朔冬安居の前に於て單鉢を移
 す。

大夏。香夏、又は沙。大屋。

海量。廣大の德量をいふ。
 從頭改作。あたまからたてか
 へる。

赤手變通。巧匠斤斧を借らず、
 而も變通自在なり。

大覺寮。徑山の衆寮の名、後
 面の解夏の夜參にも見ゆ。

重鑰案牘。普請中は大覺寮に
 入れをる、成就して千僧閣に
 飯を云ふ、衆寮には則ち案
 牘を設け、藥石を喫す、又櫃は
 櫃なり、僧堂には兩櫃と名づ
 く、衆寮には細櫃と名づく。
 重平に呼ぶ、重重封鎖なり。
 忠曰く、今言ふ意は徑山大衆
 七百人にして、千僧閣に三百
 人を移す、なほ餘衆四百人あ
 り、故に衆寮の案牘を封鎖し
 て、之を用ひざることを得ず
 となり。

有種。勢つゞくだけは佛法の
 せわをやくと。

自然暖氣。開爐に約して衆の

は則ち同じく優劣は則ち同じく劣。僧云く、「只だ徑山の如きんば、今冬果子貴し、什麼を將つてか諸人と分冬せん。」師云く、「鐵酸(てつさん)嫌(きら)む。」僧云く、「慙(そん)麼(ま)ならば則ち他の北禪(きたぜん)洞山(どうざん)に勝れること多し矣。」師云く、「狗口(かうこう)を合取(あひとり)せよ。」僧云く、「學人(がくじん)來夜(らいや)、果子(くわんじ)還つて分ありや也た無や。」師云く、「獨り(ひとり)偏(ひと)のみあつて分なし。」僧云く、「和尚(わしやう)の果子(くわんじ)を謝(しや)す。」師云く、「家賊(かざく)防(ぼ)ぎ難(がた)し。」

師乃ち云く、「六爻(りくごう)未だ動せず、一氣(いつき)潛(ひそ)かに回(ま)る。不萌(ふもう)枝(えだ)上(じやう)、條(じょう)を抽(ひ)んでんと擬(な)し、無影(むえい)樹頭(じゆとう)先づ(まづ)夢(ゆめ)を破(やぶ)る。壺(か)中日(ちゆうじつ)暖(ぬか)にして、虛室(きよしつ)白(しろ)を生(な)す、佛法(ぶつぽふ)鼻尖(びせん)頭(とう)に撥(は)す。流水(りゆうすい)誰(たれ)あつてか古調(こてう)を彈(は)せん。此(こ)れは是(こ)れ時節(じせつ)因緣(いんねん)なり、只だ凡聖(ぼんじやう)を指呼(ししよ)し、人天(じんてん)を號令(ごうれい)して

① 溫和を斷る。
 ② 安。學者の一機發轉を望むなり。
 ③ 北禪。洞山たり、この縁報恩に見ゆ。
 ④ 圓首不圓宮。二老の家風豊ならず、石崇王凱が富を肥はしむるに如かず。珠云く、「すりきり切つて、智恵も器量も佛法も世法もすりきり切つて。」
 ⑤ 優劣。珠云く、「貴ぶときは須彌頂へあけても不足はない、賤おとすときは奈落へおとしてもおきはない。」
 ⑥ 鐵酸。與聖錄に見ゆ。鐵の饑頭といふこと、滋味のないこと、尚のたゞ、穢穢子(せいせいこ)をいふ。
 ⑦ 合取。狗口。餘計なことをいふなり。
 ⑧ 果子還有分。果子をたべても大事ござりませぬか。
 ⑨ 家賊難防。早ぬすみぐらひを

するか。
 ⑩ 六爻未動。坤を地と爲す。一氣潛回。地雷・復となる。珠云く、「人しらずに立ち飯る端(たん)的、どうじや、立白に花がさくじや群陰(ぐんいん)そのまゝありとなり。」
 ⑪ 壺中日暖。別世界、十方法界一壺の中。
 ⑫ 虛室生白。人に自己の眞鉢、萬徳圓滿、佛智を具足す、これは莊子の人間世の篇に出づる語、言ふ意は一氣潛に回るに出つて、本地の花開き日暖にして、圓天明白を發生すとなり。
 ⑬ 鼻尖頭。目前に在るの謂なり。
 ⑭ 流水有誰。知管なきの謂なり、舉足下足、皆古調佛の家風なり。
 ⑮ 時節因緣。推し遷る底なり。
 ⑯ 指呼凡聖。軍の將帥、指を鳴

大方(だいほう)に獨歩(どくぽ)して、世(よ)の眼目(げんもく)たるが如(ごと)きんば、還(かへ)つて遷變(せんぺん)ありや也た無(な)や、主丈(しゆぢやう)を卓(た)して、夜半(やはん)起き來(きた)つて、膝(ひざ)を屈(ま)して坐(ざ)す、毛頭(もうとう)星現(せいげん)す(袂(たもと)の前(まえ))。

復(たが)た擧(あ)げず、玉泉(ぎよくせん)皓(こう)和尚(わしやう)、衆(しゆ)に示(し)す、「仲冬(ちゆうとう)嚴寒(げんぱん)、布衲(ふなつ)赫赤(かくしやく)、是(こ)れ洗(あら)はざるにはあらず、替換(たひかん)を得(え)ることなければなり。」拈(ねん)じて云(い)く、「皓(こう)布衲(ふなつ)、久(ひさ)貧(ひん)乍(また)ち富(と)む、蠶(さ)蠟(ろう)眼(がん)裏(ら)に向(む)つて、世界(せかい)を開張(かいぢやう)して、出(い)で來(きた)つて、三叉路(さんしやくろ)口(ぐち)に、大(おほ)いに叫(こゑ)ぶこと一聲(いっせい)して道(みち)く、「土噴(つちふ)れ人(ひと)稀(まれ)にして、相逢(あひあ)ふもの少(すく)なり」と、會(あ)ひ得(と)くせば笑(わら)つて領取(りやうしゆ)し去(い)らん。然(しか)らずんば、來夜(らいや)首座(しゆざ)を請(まを)じて諸人(しよじん)の爲(ため)に、品題(ひんだい)せん。」

上堂(じやうだう)、無(な)中に有(あ)りを取(と)る、短處(たんじよ)に長(なが)を求(もと)む、是(こ)れ彌(や)拈(ねん)拈(ねん)僧(そう)、針孔(せんこう)線(せん)踐邊(せんせん)の事(こと)、彌(や)若(じやく)し、人(ひと)の謾(まん)を受けずんば、一機(いつき)を縱(ゆる)すときは、則(すなは)ち須彌(しゆみ)發業(はつごう)、一境(いつきやう)を奪(うば)ふときは、則(すなは)ち海水(かいすい)波(なみ)を騰(たか)げん。直饒(ぢくじやく)ひ縱(ゆる)奪(うば)観(かん)つんべきも、猶(なほ)は是(こ)れ諸(しよ)方牌(ほうはい)を撥(は)けて交割(かうかく)する底(そこ)なり。徑山(きやうざん)久默(きうもく)斯(し)要(やう)、敢(あ)て預(よ)め聞(き)かず。

上堂(じやうだう)、舉(あ)げす、芭蕉(ばしやう)和尚(わしやう)、衆(しゆ)に示(し)して云(い)く、「彌(や)に主丈(しゆぢやう)子(こ)あらば、我(わ)れ彌(や)に

らして兵を呼ぶをいふて指呼といふ。珠云く、「釋迦彌勒(しやくぢやあみりやく)は是れ伊(い)が奴(やつ)。」

① 大方。太虚なり。
 ② 爲世眼目。大活現成の宗師底なり、如來の境界じや。
 ③ 遷變。陰陽あづかるか、上の手段の如き、時に隨つて變ずべからず。
 ④ 屈膝坐。跏趺習定。
 ⑤ 毛頭星現。兵を主る懸星。これに逢へば、皆命をとられる、これは發明の機を拈ず。拈僧の前に現じたならば、これこそ不遷底なり。
 ⑥ 玉泉皓。宗派は皓緝に見ゆ。
 ⑦ 皓布衲。此の稱、報恩錄に見ゆ。
 ⑧ 久貧乍富。得意の義、東嶺云く、「空劫の無明つきはて、」
 ⑨ 蠶蠟。如蟲なり。
 ⑩ 三叉路口。溪邊古路三叉口、獨立斜陽數過人、と東坡集